大宰府史跡

平成4年度発掘調査概報

平成5年3月

九州歴史資料館

大宰府史跡

平成4年度発掘調査概報

平成5年3月

九州歴史資料館

序

本年度は大宰府史跡第５次５ケ年計画の第１年次にあたる。第５次計画は特別史跡水城跡の諸施設の解明・特別史跡大宰府跡政庁正殿部分の発掘調査と政庁地区の報告書の刊行を目標としている。

しかしながら本年度事業の実施状況は、第４次計画（史跡観世音寺境内および子院地区の調査）の締め括りの調査および大宰府政庁跡南側の官衙推定地区（観世音寺地区区画整理事業地）の住宅建設に伴う調査件数の増加から当初計画で目標とした水城跡の発掘調査は着手したばかりの状況となった。

従って本書では、第４次計画の最終調査として実施した観世音寺境内地の調査結果と大宰府政庁跡南側の官衙推定地区の緊急調査の概要を報告する。

第４次計画では、当初に予定した子院地区の調査の大半は今後に残したものの観世音寺境内で講堂跡・塔跡・南門跡・回廊跡・築地跡などの発掘調査が実施できた。調査によって得られた資料が今後とも『延喜五年観世音寺資財帳』の記載内容との比較研究はもとより、観世音寺境内地での整備・復興事業等の基本資料となることを願うものである。

西海道第一の大寺と仰がれ千余年の法灯を今日に伝える観世音寺の発掘調査をここまで実施出来たことは、住職石田琳圓氏はじめ関係者のご理解によるところが大きい。ここに感謝申し上げるとともに観世音寺の今後の繁栄を祈念するしだいである。

発掘調査にあたっては、大宰府史跡調査研究指導委員会の委員各位・文化庁の関係者各位には様々な御指導・御援助を頂いた。また、太宰府市教育委員会をはじめ、地元観世音寺地区・坂本地区の方々には種々の御協力を頂いた。ここに深甚の謝意を表するしだいである。

平成５年３月31日

九州歴史資料館長　吉　久　勝　美

例　言

1．本概報は平成４年度に福岡県が国庫補助を受けて九州歴史資料館が実施した大宰府史跡発掘調査の概報である。ただし第130・137～139次調査は平成３年度に実施した調査であるが、未報告であるので報告する。また、第143・145・148・149次調査については顕著な遺構が検出されなかったので報告は割愛した。

　さらに、第147次については現在整理中であるので、報告については次年度にゆずる。

2．遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系をもとに基準点を設けて作成した（昭和51年度発掘調査概報参照）。

3．検出遺構および出土遺物については大宰府史跡調査研究指導委員の御指導と御教示を得た。

4．第137次調査出土の柱根の樹種鑑定は奈良国立文化財研究所の光谷拓実氏の御教示を受け、また、出土した近世陶磁器については、九州陶磁文化館大橋康二氏の御教示を得た。

5．本文中の挿図は土器・陶磁器類は３分の１、瓦塼類は４分の１の大きさを原則としている。

6．遺構・遺物の写真はすべて学芸第一課の石丸洋の撮影による。

7．本概報の執筆・編集は調査課の栗原和彦、橋口達也、横田賢次郎、小田和利、吉村靖徳が行なった。そして遺構・遺物の実測・製図については齋部麻矢の助力を得た。また遺物の整理については田崎道子、大田千賀子、小西恵子の協力を得た。

目　次

I　はじめに……1
　1　調査計画……1
　2　調査経過……2
II　発掘調査……6
　1　第130次調査……6
　　検出遺構……7
　　出土遺物……20
　　小　結……87
　　結　語……90
　2　第137次調査……96
　　検出遺構……96
　　出土遺物……100
　　小　結……104
　3　第138次調査……105
　　検出遺構……105
　　出土遺物……108
　　小　結……121
　4　第139次調査……122
　　検出遺構……122
　　出土遺物……123
　5　第140次調査……125
　　検出遺構……125
　　出土遺物……127
　　小　結……128
　6　第141次調査……129
　　検出遺構……129
　　出土遺物……129
　7　第142次調査……131
　　検出遺構……131

出土遺物 ……134
小　結 ……136
8　第144次調査……139
検出遺構 ……140
出土遺物 ……140
小　結 ……144
9　第146次調査……145
検出遺構 ……145
出土遺物 ……145

挿 図 目 次

第１図　大宰府史跡発掘調査地域図……折込
第２図　第130次調査遺構配置図 ……折込
第３図　土層模式図……7
第４図　南門東南地域の南壁土層断面図……9
第５図　埋甕・桶埋設遺構実測図……11
第６図　南門跡礎石実測図……12
第７図　南門跡遺構配置図……折込
第８図　南門・築地跡トレンチ配置図……13
第９図　築地跡遺構実測図……14
第10図　築地跡東壁断面図……14
第11図　回廊跡遺構配置図……15
第12図　回廊・塔跡トレンチ配置図……16
第13図　第130次調査塔跡遺構配置図 ……折込
第14図　塔心礎実測図……18
第15図　塔基壇断面・側柱礎石および塔周辺の礎石実測図……折込
第16図　SD3840（墨書木札共伴層）出土土器・陶磁器実測図(1) ……21
第17図　SD3840（墨書木札共伴層）出土土器・陶磁器実測図(2) ……22
第18図　SD3840上層出土土器・陶磁器実測図(3) ……23
第19図　SD3840上層出土土器・陶磁器実測図(4) ……24
第20図　SD3840下層・最下層出土土器・陶磁器実測図(5) ……26
第21図　SD3840・3844、SX3875出土鍋・擂鉢実測図 ……27
第22図　SD3842・3844出土土器・陶磁器実測図 ……29
第23図　SD3846・3860出土土器・陶磁器実測図 ……30
第24図　SD3865出土陶磁器実測図(1) ……31
第25図　SD3865出土陶磁器実測図(2) ……33
第26図　SK3863出土土器・陶磁器・土製品実測図 ……34
第27図　SX3841、黄褐色土層出土土器実測図 ……36
第28図　SX3864・3867・3872埋甕実測図 ……37
第29図　SX3866埋甕実測図 ……39

第30図　SX3868埋甕実測図 ……40
第31図　暗茶色土層、黒褐色土層出土土器・陶磁器実測図……42
第32図　茶褐色土層出土土器・陶磁器実測図……44
第33図　層位出土鉢・鍋・茶釜実測図……46
第34図　瓦質土器実測図(1)……48
第35図　瓦質土器実測図(2)……49
第36図　軒丸瓦拓影(1)……51
第37図　軒丸瓦拓影(2)……52
第38図　軒丸瓦拓影(3)……53
第39図　軒丸瓦拓影(4)……54
第40図　軒平瓦拓影(1)……56
第41図　軒平瓦拓影(2)……57
第42図　軒平瓦拓影(3)……59
第43図　軒平瓦拓影(4)……60
第44図　南門トレンチ出土軒瓦拓影……61
第45図　SD3840出土墨書木札実測図 ……62
第46図　SD3840（墨書木札共伴層）出土木製品実測図(1) ……64
第47図　SD3840（墨書木札共伴層）出土木製品実測図(2) ……66
第48図　SD3840（墨書木札共伴層）出土木製品実測図(3) ……67
第49図　SD3840（墨書木札共伴層）出土木製品実測図(4) ……68
第50図　SD3840下層出土木製品実測図(5) ……69
第51図　SD3840下層出土木製品実測図(6) ……70
第52図　SD3840上層出土木製品実測図(7) ……72
第53図　SD3855、SK3863出土木製品実測図 ……73
第54図　銅銭拓影……74
第55図　瓦経拓影・実測図……75
第56図　出土石製品実測図……77
第57図　出土石製品・土製品実測図……78
第58図　鞴羽口実測図……79
第59図　築地跡・回廊跡・塔跡出土土器・石製品実測図……80
第60図　築地跡トレンチ出土軒瓦拓影……80
第61図　鋳型実測図……81
第62図　塔跡出土軒瓦拓影……83

第63図　埼・瓦質製品拓影・実測図……83
第64図　塔跡出土軒瓦拓影……83
第65図　南門跡出土文字瓦拓影……86
第66図　回廊跡出土文字瓦拓影……86
第67図　検出溝期別模式図……88
第68図　観世音寺伽藍配置関係図……89
第69図　第137次調査遺構配置図……97
第70図　SB3940・3945・3950柱掘形断面図……99
第71図　SE3955実測図……100
第72図　SB3940・3945出土土器実測図……101
第73図　暗褐色土層、SD3939・3941、SE3955、SK3942、SX3957・3958出土土器・土製品実測図……102
第74図　第138次調査遺構配置図……106
第75図　SE3960・3965実測図……107
第76図　SE3970実測図……107
第77図　SE3975実測図……108
第78図　SD3962・3963出土土器実測図……109
第79図　SE3960出土土器実測図……110
第80図　SE3970出土土器・陶磁器実測図(1)……112
第81図　SE3970出土土器・陶磁器実測図(2)……113
第82図　SE3970出土土器・陶磁器実測図(3)……115
第83図　SE3965、SK3961、SX3969・3972・3973出土土器実測図……117
第84図　茶褐色土層出土土器・陶磁器実測図……118
第85図　出土軒瓦拓影……120
第86図　土錘実測図……121
第87図　第139次調査遺構配置図……122
第88図　SD3935、SK3976、黒褐色土層出土土器・陶磁器実測図……124
第89図　第140次調査遺構配置図……125
第90図　SB3990柱掘形断面図……126
第91図　軒瓦拓影……127
第92図　第81・86・140次調査建物模式図……128
第93図　第141次調査遺構配置図……129
第94図　黄褐色土層、黒色砂質土層出土土器・陶磁器実測図……130
第95図　第142次調査遺構配置図……132

第96図　SB4000柱掘形断面図……133
第97図　SB3996・3997・4000、SD4005、SK4006、SX4003・4004出土土器・瓦玉実測図 ……134
第98図　文字瓦拓影 ……135
第99図　第96・142次調査遺構概念図……137
第100図　第144次調査遺構配置図……139
第101図　SK4011、赤褐色土層出土土器・陶磁器・瓦質土器・瓦玉・石製品実測図……141
第102図　出土軒瓦拓影 ……142
第103図　五輪塔実測図 ……143
第104図　第146次調査遺構配置図……145
第105図　SK4020・4028、SX4029、茶褐色土層、黒褐色土層出土土器実測図 ……145
第106図　軒瓦拓影 ……147

図　版　目　次

図版 1　　第130次調査区全景（空中写真）
図版 2　（上）　第130次調査　南門東南地域全景（南から）
　　（下）　第130次調査　南門東南地域全景（東から）
図版 3　（上）　粘土採掘穴SX3856（南から）
　　（下）　自然流路SX3841（南から）
図版 4　（上）　発掘区の南半部　溝SD3840と護岸施設（西から）
　　（中）　溝SD3840の護岸施設（南西から）
　　（下）　溝SD3840の護岸施設の近景
図版 5　（上）　発掘区の東半部及び溝SD3843・3844・3846・3847とSD3842（南から）
　　（下）　発掘区の北半部及び溝SD3855とSD3860（東から）
図版 6　（上）　溝SD3840における笊出土状況
　　（中）　溝SD3840における笊出土状況
　　（下）　粘土採掘穴SX3856における蓆出土状況
図版 7　（上）　埋甕遺構SX3864
　　（中）　埋甕遺構SX3868
　　（下）　埋甕遺構SX3872
図版 8　（上）　第130次調査　南門跡全景（南から）
　　（下）　南門跡発掘区の西半部（南東から）
図版 9　（上）　南門跡発掘区の西半部（南から）

（下）　南門跡発掘区の西半部（北から）
図版10　（上）　南門跡発掘区西半部検出の礎石群
（中）　南門跡発掘区西半部検出の礎石群
（下）　南門跡発掘区東半部検出の礎石群
図版11　（上）　南門跡発掘区の東半部（北から）
（下）　南門跡発掘区の東半部（南から）
図版12　（上）　第130次調査　築地跡発掘区全景（南から）
（下）　築地跡の断面近景（南西から）
図版13　（上）　第130次調査　回廊跡Aトレンチ全景（南から）
（下）　回廊跡Cトレンチ全景（南から）
図版14　（上）　回廊跡Bトレンチ全景　土壙SK3887とSK3888（北から）
（下）　回廊跡　土壙SK3888（西から）
図版15　（上）　回廊跡Bトレンチ拡張後全景　土壙SK3888（西から）
（中）　回廊跡　土壙SK3889鋳型出土状況（北から）
（下）　回廊跡　土壙SK3889完掘後（西から）
図版16　（上）　第130次調査　塔跡SB3850全景（北から）
（下）　塔跡Aトレンチ（北から）
図版17　（上）　第130次調査　塔跡SB3850全景（西から）
（下）　塔跡SB3850基壇西側地覆石（北から）
図版18　（上）　塔跡SB3850全景（南から）
（中）　塔跡SB3850基壇南側地覆石（南から）
（下）　塔跡Cトレンチ基壇積土近景（南西から）
図版19　（上）　塔跡SB3850全景（東から）
（下）　塔跡Dトレンチ全景（南から）
図版20　（上）　塔心礎・四天柱礎石（西から）
（下）　塔心礎（上から）
図版21　（上）　塔跡西側柱礎石（南から）
（中）　塔跡東南隅柱礎石（北から）
（下）　塔跡周辺の礎石(6)
図版22　（上）　塔跡周辺の礎石(3)
（中）　塔跡周辺の礎石(4)
（下）　塔跡周辺の礎石(5)
図版23　（上）　第137次調査区全景（北から）

（下）　第137次調査区全景（北東から）
図版24　（上）　第137次調査区東半部（北から）
（下）　掘立柱建物SB3940・3945、溝SD3939、井戸SE3955（北から）
図版25　掘立柱建物SB3940・3945・3950柱掘形
図版26　掘立柱建物SB3940・3945・3950柱掘形
図版27　（上）　井戸SE3955（南から）
（下）　井戸SE3955近景（南から）
図版28　第138次調査区全景（空中写真）
図版29　（上）　第138次調査区全景（西から）
（下）　第138次調査区全景（北から）
図版30　（上）　井戸SE3960（北から）
（下）　井戸SE3960近景（西から）
図版31　（上）　井戸SE3960（南から）
（中）　井戸SE3965（南から）
（下）　井戸SE3975（東から）
図版32　（上）　第139次調査区全景（空中写真）
（下）　第139次調査区全景（東から）
図版33　（上）　第140次調査区全景（空中写真）
（下）　第140次調査区全景（西から）
図版34　（上）　掘立柱建物SB3990、溝SD3986（南から）
（下右）　溝SD3986（北から）
（下左）　溝SD3987（南から）
図版35　掘立柱建物SB3990柱掘形
図版36　（上）　第141次調査区全景（北東から）
（下）　第141次調査区北半部（西から）
図版37　（上）　第142次調査区全景（空中写真）
（下）　第142次調査区全景（南から）
図版38　（上）　掘立柱建物SB4000（南から）
（下）　掘立柱建物SB4000柱掘形
図版39　（上）　掘立柱建物SB3996・3997（南から）
（下）　掘立柱建物SB3998・3999（南から）
図版40　（上）　第144次調査区　上層遺構全景（東から）
（下）　第144次調査区　下層遺構全景（東から）

図版41 （上） 第146次調査区東半部（西から）
（下） 第146次調査区西半部（東から）
図版42 第130次調査 SD3840（墨書木札共伴層）出土土器(1)
図版43 第130次調査 SD3840（墨書木札共伴層）出土土器・陶磁器(2)
図版44 第130次調査 SD3840上層出土土器(3)
図版45 第130次調査 SD3840上層出土土器・陶磁器(4)
図版46 第130次調査 SD3840下層・最下層出土土器(5)
図版47 第130次調査 SD3842・3844・3846・3860出土土器・陶磁器
図版48 第130次調査 SD3865出土陶磁器(1)
図版49 第130次調査 SD3865出土陶磁器(2)
図版50 第130次調査 SD3865出土陶磁器(3)
図版51 第130次調査 SK3863出土土器・陶磁器
図版52 第130次調査 出土埋甕SX3864・3867・3872・3866・3868
図版53 第130次調査 SX3841、暗茶色土層出土土器
図版54 第130次調査 暗茶色土層、黒褐色土層出土土器
図版55 第130次調査 茶褐色土層出土土器
図版56 第130次調査 その他の遺構出土陶磁器
図版57 第130次調査 SD3843、暗茶色土層、茶褐色土層出土瓦質土器
図版58 第130次調査 出土軒丸瓦(1)
図版59 第130次調査 出土軒丸瓦(2)
図版60 第130次調査 出土軒丸瓦(3)
図版61 第130次調査 出土軒丸瓦(4)
図版62 第130次調査 出土軒平瓦(1)
図版63 第130次調査 出土軒平瓦(2)
図版64 第130次調査 出土軒平瓦(3)
図版65 第130次調査 出土軒平瓦(4)
図版66 第130次調査 出土軒平瓦(5)
図版67 第130次調査 出土文字瓦・刻印(1)
図版68 （上） 第130次調査 出土文字瓦・刻印(2)
（下） 第130次調査 南門跡西半部出土文字瓦・回廊跡出土文字瓦
図版69 第130次調査 出土鬼瓦・塼など
図版70 第130次調査 SD3840出土墨書木札
図版71 第130次調査 SD3840（墨書木札共伴層）出土木製品(1)

図版72　第130次調査　SD3840（墨書木札共伴層）出土木製品(2)
図版73　第130次調査　SD3840（墨書木札共伴層）出土木製品(3)
図版74　第130次調査　SD3840下層出土木製品(4)
図版75　第130次調査　SD3840下層出土木製品(5)
図版76　第130次調査　SD3840上層・SD3855・SK3863出土木製品(6)
図版77　第130次調査　SD3860出土瓦経・五輪塔
図版78　第130次調査　出土石製品・土製品(1)
図版79　第130次調査　出土石製品・土製品(2)
図版80　第130次調査　SA3880、SB3850、SC3890出土土器・石鍋・軒瓦
図版81　第130次調査　出土鋳型
図版82　第137次調査　SB3940、SD3939、SE3955、SK3942、SX3944・3957出土土器・土製品
図版83　第138次調査　SD3962、SE3960・3970出土土器・陶磁器
図版84　第138次調査　SE3970出土土器・陶磁器
図版85　第138次調査　SE3965・3970、SX3969、茶褐色土層出土土器・陶磁器・土製品・軒瓦
図版86　第139・140次調査　SD3987、SK3976、黒褐色土層出土陶磁器・軒瓦
図版87　第141・142次調査　出土土器・陶磁器・平瓦・銅銭
図版88　第144次調査　赤褐色土下層、赤褐色土層、茶褐色土層出土陶磁器・軒瓦
図版89　第144・146次調査　SK4010、赤褐色土下層、黒褐色土層出土土器・土製品・石製品・軒瓦

第1図　大宰府史跡発掘調査地域図

Ⅰ はじめに

1．調査計画

本年度は第５次５ケ年計画の初年度にあたる。第５次計画の目標は　1）　特別史跡大宰府政庁地区・正殿の調査と報告書の刊行　2）　特別史跡水城跡の諸施設の解明に置いている。

第５次計画の初年度の計画調査として、昨年度の大宰府史跡調査研究指導委員会の指導にもとづき、まず特別史跡水城跡の調査を太宰府市国分地区で２ケ所を立案した。ただし、立案の段階ですでに史跡推定地内の現状変更申請に伴う発掘調査２件、大宰府政庁南側の官衙推定地（未指定地で観世音寺地区区画整理事業の終了地）の未調査地区の調査５件が見込まれていた。さらに平成２年度（第４次計画第４年次）に大宰府史跡調査研究指導委員会で史跡観世音寺の伽藍全体像の把握（講堂跡・金堂跡・塔跡・南門跡・回廊跡・築地跡等の実態解明の調査）をするよう指導を受け、南門跡付近の発掘調査を継続中であった。伽藍調査のうち、講堂跡・大房跡・小子房・客房跡の調査は終了していたものの、築地跡や回廊跡についての全体像をつかむまでにはいたっていない状況のうえ、塔跡・金堂跡については未着手の状況であった。ために、調査計画はより多くなるものの、塔跡・金堂跡・回廊跡・築地跡などについて今年度調査実施可能な限り行なうこととした。従って当初計画（下表）の段階ですでに当該年度の事業がどこまで実施可能であるかの問題があったが、これを努力目標として大宰府史跡調査研究指導委員会に諮問することとした。

平成４年度の大宰府史跡調査研究指導委員会は５月28・29日の両日九州歴史資料館で開催した。会議では第５次計画の初年度の事業として特別史跡水城跡の発掘調査に重点を置くよう強い意見が出されたが、調査計画そのものについては承認を頂いている。また、水城跡の調査の方法について数々の有益な御助言を頂いており、発掘調査の進捗と合わせて実行したいものと考えている。

	区分	場所	面積	地番	備考
①	水城跡	大宰府側基本底部	2,000㎡	太宰府市大字国分226付近	11月頃着手
②		瓦窯跡および大宰府側基底部	1,000	〃　〃　235付近	
③	大宰府跡	坂本地区	200	〃　大字坂本265-5	現状変更
④	政庁前面官衙域	不丁地区	459	〃　大字観世音寺字不丁282-2	緊急調査
⑤		日吉地区	330	〃　〃　字日吉272-9	〃
⑥		広丸地区	506	〃　〃　字広丸352-1	〃
⑦		不丁地区	1,300	〃　〃　字不丁323-1・2	〃
⑧		広丸地区	1,227	〃　〃　字広丸356-4・6	〃

	区　分	場　所	面　積	地　番			備　考
⑨	観世音寺	南門跡他	600	〃	〃	字堂廻182	第４次計画残
⑩	および子院地区	山ノ井地区	344	〃	〃	字山ノ井862-1	現状変更

2．調査経過

平成４年度の調査は第４次計画の継続事業[1]（観世音寺境内、第130次調査）から始まった。

第130次調査は、観世音寺南門跡の一部を含む参道東側で、第122次調査区（1990年調査）の西側にあたる。この調査は南門跡および南面築地跡を調査することを当初の目的にしていた。調査では、第109・111次調査（1988年調査）で認められた南北溝SD3200と伽藍中軸線を対称軸とする位置に南北溝SD3840が検出された。この溝からはSD3200とほぼ同様中世の遺物が多く出土していることから、現在の観世音寺の参道の祖形が中世に出来ていたと想定される。また、この溝からは「元亨三年（1323年）」銘の墨書木札が出土した。

政庁前面官衙域（観世音寺区画整理事業地内）の調査は４月から準備を進めていたが、５月に入って着手出来た。最初に発掘調査した第140次調査は大宰府政庁中軸線と天平期の木簡を出土した南北溝SD2340との間にある。この場所は大宰府政庁の第II期には広場として利用されたと推定されている。ここで四面廂を持つ南北棟建物SB3990を検出した。この建物は建て替えが認められるが奈良時代後半期のものである。この調査区の北、第81次調査（1982年調査）で南北棟四面廂建物・第86次調査（1983年調査）で東西棟建物の一部を検出している。建物遺構相互の関係については時期差もあり今後の検討課題として残る。この第140次調査の間に指導委員会を迎え、今年度の調査計画について承認して頂いた。

指導委員会で観世音寺境内地の発掘調査についても了承を頂いたことで、南門跡参道西側・回廊跡東南隅推定地付近・塔跡なども第130次調査の一部として順次トレンチ調査を行なうこととした。

観世音寺の調査を継続する一方で、第140次調査に引き続き、現状変更申請に対し発掘調査を実施するよう文化庁からの指示のあった大宰府政庁跡西北部の民家敷地内の発掘調査を行なった。第141次調査である。この調査では中世末の遺物の出土する遺構が検出された程度で顕著な遺構はみつかっていない。

第142次調査は観世音寺地区区画整理事業地内で、学業院中学校と県道を挟んで南側の地点である。第96次調査区（1985年調査）の西側にあたる。第96次調査で南北方向の玉石敷の溝SD2480が検出され、これを一応広丸地区官人居住域の西を限る遺構と推定してきた。今回の調査区はSD2840に隣接した地点となる。ここでも重複関係のある建物を含めて数棟の建物遺構の検出があった。学業院中学校付近を筑前国衙跡と推定する説や軍団印の出土地点と近いことなどを考

慮に入れると、建物遺構の性格を考えるうえで単純に官人居住域がSD2840をこえて西に広がっていたものとばかり理解するわけにはいかない。今後周辺の調査区の発掘結果と合わせて解釈する必要があろう。

第142次調査中に字日吉地区の家屋新築計画地の調査を実施した。第80次調査区(1982年調査)の南にあたる。第80次調査は日吉地区官衙域を推定する根拠となった調査である。その南辺部は御笠川の氾濫によって削り取られたことはわかってはいたが、区画整理事業により大きく地形が変っている。調査区の東西2ケ所にバックフォーでトレンチを入れた結果、西トレンチでは深さ3mを越えて地山に達し、東トレンチでは1.8mで地山に達した。東から西へかけて傾斜する谷地形と理解され、東トレンチでも遺構が残っている可能性はないものと判断出来た。これを第143次調査とした。

第144次調査は観世音寺の北、日吉神社の東側で住宅建設に伴った調査で現状変更申請に対する文化庁の指示を受けて実施した調査である。この調査は盆休みを挟み9月まで続いた。調査では顕著な遺構の検出はなかったが14～15世紀の遺物を伴った遺構が検出されている。遺構からは明確に理解出来ないものの出土遺物からは観世音寺の子院が東側に広がっていたことを考えさせる調査であった。

第145次調査は第32次調査（1974年調査)、第80次調査（1982年調査）の東南にあたる。住宅新築に伴う事前調査である。第143次調査同様区画整理事業により地形が大きく変わり、旧地形図からは日吉地区官衙域東辺部の遺構が残っている可能性があった。バックフォーにより南北にトレンチを入れた結果、地表下2.8mで砂礫層に達した。御笠川の氾濫により遺構は消失したものと理解された。

9月に入って第146次調査を実施した。第146次調査は、大字観世音寺字大楠の民家の増築計画の事前調査である。第139次調査区（1991年調査、今年度報告）の東側隣接地である。検出された遺構には奈良時代後半期のものもあるが、第139次調査との遺構相互の関係などについては調査面積が狭いこともあって今後の検討課題として残る。

これまでの間、観世音寺境内地では南北溝SD3840などの調査を終了し、南門跡周辺・回廊東南隅付近・塔跡へと発掘調査を進めていた。南門跡周辺の調査では現在残っている礎石の据え付け痕跡や南門基壇の検出につとめた。結果として南門に関する基壇化粧や礎石の据え付け痕跡・築地の積土などについて明瞭にそれと認め得る遺構は検出されていない。ただ、礎石の存在や後世の土盛状の積土の存在からその位置を推定出来る状況証拠を得たに留っている。

塔跡周辺は、現講堂が建つ基壇から1.4mほど低くなっていることから、基壇積土はすでに流失しているものと考えていた。ただ、心礎だけは創建講堂の礎石のレベルとほぼ同じであることから動いていない可能性を考えていた。発掘調査を行なってみると、西側・南側で自然石の石列が一部分残っていること、基壇積土も40cmほどの厚さで残っていること、心礎下にも積土

が残っており心礎は動いていないことなどがわかった。心礎と基壇地覆と推定した石列からおよそ一辺15mほどの規模の基壇であったことなどがわかった。

回廊跡の調査は『資財帳』の記載と第126次調査（1991年調査）で調査した回廊東北隅の位置から回廊東南隅を推定した。ただ、その場所が観光客の誘導路となっていたため、その西側隣接部分の発掘調査を実施した。回廊の礎石や基壇はすでに消失していて、回廊推定部分で中世の土壙が検出され鉄釜の鋳型が出土するといった状況であった。回廊の存続期間を推定し得る資料等はほとんどみつかっていない。観世音寺境内地の調査の主要な調査は11月中に終了したが、埋め戻し作業が最終的に終ったのは12月後半である。

第146次の調査終了後、10月からは第147次調査として不丁地区官衙推定地で、第98次調査区（1986年調査）・第85次調査区（1983年調査）の西側隣接地の調査を行なった。一筆の水田で1300㎡弱のまとまった発掘調査を当初計画したが、区画整理事業による盛土が厚いうえに、土置場の確保が出来ないことから東半部をまず調査することとし、第147－１次調査と呼ぶこととした。不丁官衙城推定地のなかでは僅かに残っていた未調査地であり、官衙関連の遺構が検出されるものと予想していた。調査では建物遺構の一部（奈良時代後半）・南北に流れる浅い自然の流路・東西方向の道路敷遺構（奈良時代後半）などが検出されただけで、官衙に関連する顕著な遺構はなかった。

第147－１次調査と平行して筑前国分寺講堂北側で環境整備事業の一環として発掘調査を実施した。僧房跡の推定場所であったが、それに相当しそうな遺構は残っておらず検出された土壙やピットの多くが中世以降のものであった（筑前国分寺第16次調査）。

12月後半に入って住宅建設計画の事前調査として大字観世音寺字広丸で予備調査を実施した。昨年度実施した第132次調査区の北にあたる。バックフォーを使って敷地全体を「コ」字形にトレンチ調査した。結果として北東から南西の御笠川にかけて大きく地形が傾斜していることが判明したが、御笠川氾濫原の一部であり遺構は検出されていない。第148次調査とした。

１月に観世音寺子院地区の字今光寺で現状変更申請に伴っての発掘調査を実施した。観世団地造成事業による盛土も含めて現地表下２mにピットや土器溜（14世紀頃）などが調査され観世音寺子院金光寺の遺構が連続する部分の南端を予想させた。遺構検出面が深く、確認しただけに留っている。第149次調査である。

２月には、第148次調査区北側隣接地で家屋新築計画地の予備調査を実施した。ここでは東半部を中心に遺構が残っており、平成５年度に改めて全面調査を実施する予定である。

これらの発掘調査を終了し、３月ようやく水城跡の発掘調査に着手した。水城跡第24次調査である。

以上が平成４年度の発掘調査の経過である。

本書では、第130次調査を中心として平成４年度に発掘調査を実施したが整理の都合上今年度

に概要報告を延期していた第137・138・139次調査、今年度事業のうち第140～142次・第144次・第146次調査の概要報告を行なう。経過報告のなかで報告したとおり第143・145・148次調査では、遺構がなかったことから省略している。また、第149次調査についても、遺構が残っている状況を確認したのに留めているため概要報告から省略する。

また、第147－1次調査については、第147－2次調査と合わせて、さらに昨年度実施した水城跡第20次調査についても、来年度概要報告する水城跡第24次調査の結果と合わせて行ないたい。

なお、本年8月からは当館調査課の執務場所を大宰府政庁跡裏のプレハブ事務所から本館に移し、プレハブ事務所については整理・収蔵および現場事務所として使用している。

調査次数	調査地区	地区面積(㎡)	調査期間	備　考	※
130	6 KKZ-B-O	684	910401～921222	観世音寺南門・塔・回廊・築地跡等	⑨
140	6 AYM-A-S	200	920502～920614	政庁前面官衙域	④
141	6 AYT-A	42	920609～920618	政庁西北部	③
142	6 AYQ-A-W	488	920615～920727	官人居住域推定地	⑥
143		15	920618	政庁前面官衙域	
144	6 KKZ-D-H	59	920728～920907	観世音寺子院山ノ井地区	⑩
145		14	920731	政庁前面官衙域	
146	6 AYM-C-P	41	920908～920924	官人居住推定地	
147-1	6 AYM-B-Q	495	921007～930212	政庁前面官衙域	⑦
-2	6 AYM-B-Q	—	9304～	政庁前面官衙域	
148		88	921222	官人居住域推定地	⑧
149	9 KKK	34	930126	観世音寺子院今光寺地区	
筑前国分寺16次	6 KTK	340	921005～921023	筑前国分寺	
水城24次	6 AMK	—	930311～	大宰府側基底部	

※は前掲表の番号に対応する

II 発 掘 調 査

1．第130次調査

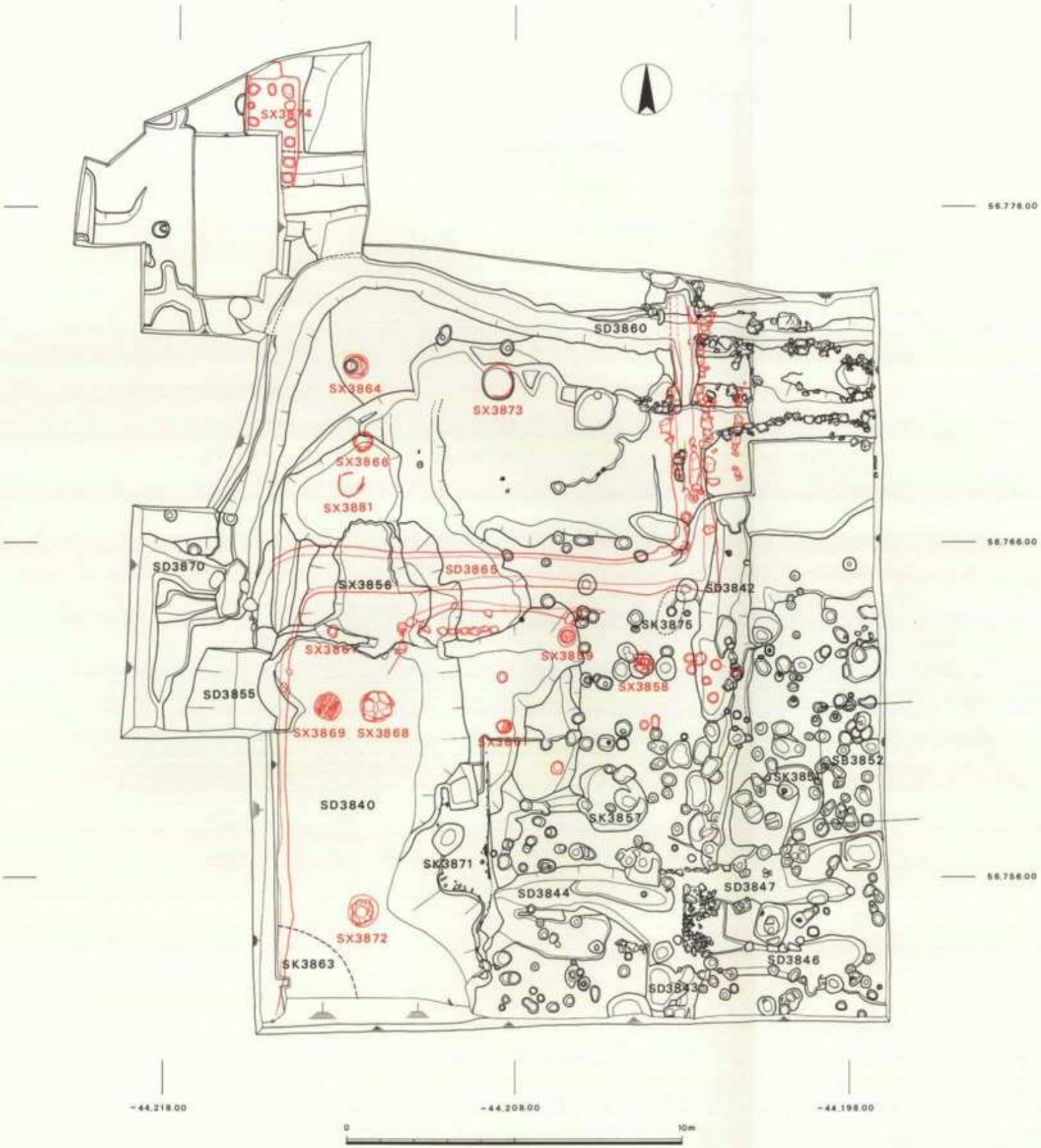
本次調査は観世音寺の南門跡・南門から東西に延びる築地および南門東南部地域・南面回廊跡・塔跡の確認を主たる目的として実施した。南門跡・塔跡については今回が初めての調査である。回廊跡については昭和32年に仏像収蔵庫（宝蔵）を建設するのに伴って事前調査が実施されている。しかし、この時の調査では南面回廊については明瞭な痕跡も残っておらず、また調査範囲の制約や時間的な制限等から、回廊の規模等については明らかになっていない。そして、南門から東西に延びる築地については第122次調査で一部トレンチ調査を実施しているが、削平されていたため、その規模等を明らかにすることはできなかった。

今回、実施した５か所の調査では南門・築地・回廊についてはその規模等を確定するまでには至らなかったが、塔については予期以上の成果を得ることができた。現在、塔跡には心礎と四天柱礎石１個・側柱礎石２個が残存しているが、基壇の高まりは失われ完全に露出している状況である。その現況からの判断では基壇の痕跡も残存している可能性は少ないとみていた。調査の結果、西側と南側で基壇地覆石の一部と積み土が残存しており、これまで全く不明であった塔の基壇規模・構造等を明らかにすることが出来たことは大きな成果であった。

調査は平成３年４月１日に開始したが、政庁前面域の緊急調査が出てきたため、表土除去作業を終了したところで一旦休止した。そして、再開したのは翌年の１月９日であった。さらに諸般の事情により２月期を一時休止し、本格的に作業を開始したのは３月２日からである。５月中旬にはほぼ上層遺構を検出したが、南門および築地の確認のため推定位置部分にトレンチを拡張設定し調査した。推定位置には樹木があり制約を受けたが、可能な限り調査を行なった。６月中旬には一応遺構検出を終了し、写真撮影を行なった後、６月下旬から実測を開始した。

そして、９月16日から参道の西側の南門西半部の調査を開始した。９月末には南門の遺構検出をほぼ終了し、10月１日から南門の西方の築地推定位置にトレンチを設定し調査した。さらに継続して回廊推定位置の調査を開始した。10月５日には回廊の調査と併行しながら塔跡の調査を開始した。10月下旬には写真撮影を終了し、実測を継続し行なった。南門跡・南門東南地域・築地跡・回廊跡・塔跡の調査が完全に終了したのは11月30日で、12月１日から部分的に埋め戻しを開始した。

調査地の地番は南門跡および東南地域が太宰府市大字観世音寺182－64番地、調査面積538㎡。築地跡が同182番地、調査面積22㎡。回廊跡が同182番地、調査面積48㎡。塔跡が同182番地、調査面積77㎡である。



第２図　第130次調査遺構配置図

検出遺構

今回の調査はその対象地が広範囲にわたっているので、以下、各々の地域ごとにのべる。

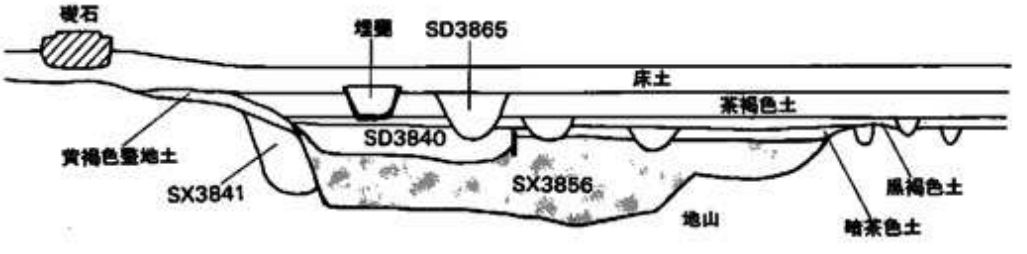
南門跡・南門東南地域における層位の関係

南門跡の推定地には現在、参道を挟んで7個の礎石が点在している。このうちの1個はほぼ水平に据わっているが、他はいずれも裏返しや傾斜しており原位置を保っていない。現存する7個の礎石は1個を除いていずれも柱座を有しており南門の礎石として使用された可能性は大きく、従来から南門の位置推定の大きな根拠の一つとなっていた。

南門跡についてはこれまで発掘調査は行なわれておらず、今回が初めてであることは先述したとおりである。南門の位置を探る手掛かりの一つとして、水平を保っている礎石が原位置であるのか、それとも後世に移動されて現在の位置に置かれたのかを確認する必要があった。参道の西側には一部高まりがあり基壇の名残とも考えられたが、調査の結果は後世に盛られたものであり、原位置を保っているとみられた礎石も最下部まで近世の攪乱があり、近世以降に現在の位置に据えられたものであることが判明した。礎石の下部には根石等は残存せず攪乱土が入っている。この礎石が位置する部分には積土は残存していないが地山は周囲よりも高くなっている。

発掘区の大部分を占める東南部地域は南門部より地山は0.9m（発掘区東端）程低く、発掘区東側から西側に向かって地山は下がり、発掘地区西端いわゆる現参道付近では高くなる。検出した遺構は層位の関係と遺構の切り合い関係からⅠ～Ⅴ期に分けることができる。

遺構の全体を茶褐色土層が覆っており、その層を切り込む形でⅤ期の鍵形の溝SD3865や埋甕遺構SX3864・3866・3867・3868・3872や石組みと桶を組み合わせた水溜遺構SX3858、それに埋桶遺構SX3869等がある。そして茶褐色土層を除去するとSD3843・3846・3847・3855・3860等が検出されるが、SD3855と3860とは層位的にSD3860が古く、SD3843・3846・3847と前者の溝とは層位的に直接的な先後関係は明らかでない。SD3873（Ⅳ期）と同時と考えられる。さらに下層にⅢ期遺構があり、その主要な遺構としてSD3860・3870がある。この溝はⅤ期のSD3865によって切られ、さらにSD3855より層位的には古いものである。この溝に伴うほかの遺構について



第3図　土層模式図

は明確でない。

II期遺構SD3842は南北方向の溝で、層位的にSD3846・3847・3855・3860より古いが、北辺および南辺については明らかでない。発掘区の東南部、SD3842より東側は地山面が高いが、この溝を境に西側は地山がやや下がり黒褐色土層が残る。この黒褐色土層を除去すると暗茶色土層が現れる。この層はI期の溝SD3840の護岸施設付近ではやや厚くなり、溝上ではさらに厚く堆積する（暗茶色土下層）。

また、溝SD3840の下底には粘土採掘穴がある。これはかなり広範囲に広がっており、大規模なものである。この中に若干の遺物が含まれるが、時期的にはこの溝とさほど変わらない。

そして、北辺部の南門付近では境内北方からの自然流路であるSX3841がある。これは観世音寺創建以前のものであり、造営に際して整地された黄褐色土層がこの溝の上層にある。しかしながら、この整地面上では、創建に関わるような遺構は既に削平され残っていなかった。

1．南門東南部地域

I期以前の遺構

自然流路

SX3841　発掘区の北辺部で検出した自然流路である。幅5.0m前後、深さ1.2m前後、長さ18m分を検出した。蛇行しており人為的なものではなく、自然流路と考えられる。これは発掘区外の北方から流れてくる谷状のものである。このような自然流路は過去に行なった第109・111次調査（昭和63年度）や今回実施した南門西方の築地推定地の調査においても確認された。流れの最下層は砂と腐植土層が互層になっており、この層には若干であるが遺物が含まれている。その遺物の年代からするとこの自然流路は6世紀後半代のものとみられる。観世音寺の造営に際してはこれらの自然流路を赤褐色ないし黄褐色土で埋め厚く整地している。この整地層中には7世紀後半代の遺物が含まれている。

南門推定位置の部分は地山が高くその東・西はこのような自然流路や谷状の地形を示し、東・西方へ向かってなだらかに傾斜している。すなわち、伽藍の中心部が最も高く、尾根筋上にあたっている。このことは現在、観世音寺の背後にある小丘陵の延長上に主要な建物である講堂や南門推定地があることからも旧地形を復原想定することができよう。

粘土採掘穴

SX3856　I期遺構が形成される以前に大規模な粘土採掘が行なわれている。その範囲はSD3840底面の全域と一部トレンチによる確認であり、明確に捉えていないが、それは発掘区の約50パーセントに及んでいる。粘土採掘がなされていないのは、東辺部、すなわちSD3842より東側とSD3855より北側の部分である。SD3842の底面ではスコップ様の掘削具の痕跡が鋸歯状に残っている。また、掘削後埋め戻した土の中に、運搬に用いたと思われる蓆が幅0.80m、長さ1.30mほど残存していた。

Ⅰ期遺構

溝

SD3840　発掘区の東側にある幅8.5m、深さ0.7mの南北溝である。溝の東肩には護岸施設が残存している。この施設は幅20.0cm、厚さ1.0cmの板を径5.0cm前後の杭で留めた簡単なもので、長さ5.0mが残存している。この溝は発掘区の北側近くで始まり、溝の北端近くでは墨書木札3点を含む木製品や漆器の椀それに土師器の杯が集中して出土した。これが溝の単なる溜まりであるのか、それとも池状のものであったのかは遺構検出の時点では明確にし得なかったが、墨書木札のうち1点には「元亨三年」(1332年)銘をもつものがあり、溝の年代を知りうる貴重な資料となった。過去に実施した第109・111次（1988年）の調査により、参道の西側でそれに並行に流れる南北溝SD3200を検出し、ここからは「嘉元二年」(1304年)銘の墨書木札が出土しており、今回のSD3840と年代的にも近く両溝は参道を挟んで側溝的な役割があったものと考えられるようになった。

Ⅱ期遺構

掘立柱建物

SB3852　SD3842の東側で検出した建物である。南北2間、東西1間分を検出したが、さらに発掘区外の東へ延びるのかどうかについては定かでない。柱間寸法は東西2.40m、南北1.90m等間である。柱痕2個が残存している。この建物がどの時期に属するかはあきらかではないが一応この期にいれた。

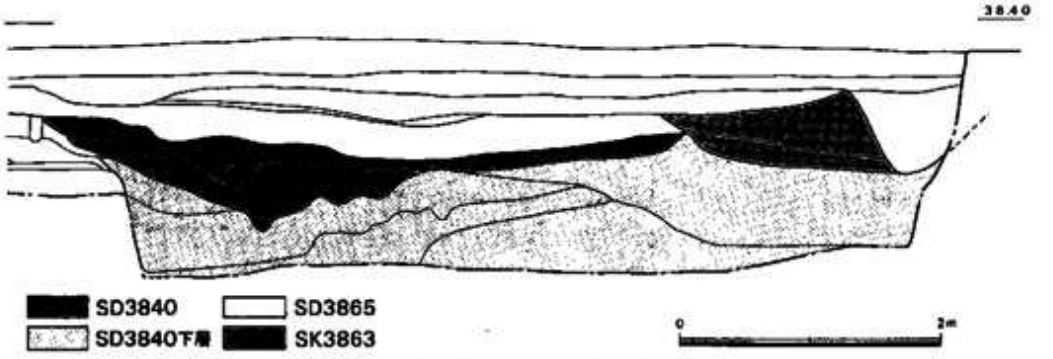
溝

SD3842　発掘区の東側に位置する南北方向の溝である。幅1.40m、深さ0.10mで、長さ11m分について検出した。溝の南端部は浅く細くなっている。東西溝で切られており、先後関係はSD3847より古期になる。溝はピットおよび小土壙により切られプランとしては明瞭さを欠く。

Ⅲ期遺構

溝

SD3855　溝SD3860とほぼ同一の流路をとる溝である。溝は東側の発掘区外へ延びており東側



第4図　南門東南地域の南壁土層断面図

では石組みがある程度残存しているが、西側では石組みも全く残っておらず、その流路の痕跡も明瞭ではない。溝はカーブして南へ流路をとるが、その部分では辛うじて痕跡を留めている。溝幅は残存状況の良好な東端部で幅0.40m、深さ0.35m前後である。

SD3860・3870　この溝は一連の溝で、発掘区の北端部を東西に走り、南門推定部分を避けるように南に折れ鍵形に巡る。幅は東端部付近で側石が残っており、そこでは幅0.30m、深さ0.3m前後である。南門の項で後述するように築地推定線の南側を東西に走り、南門推定部分を避ける形になっている。この溝の南門位置側は地山が一段高くなっており、あたかも基壇状を呈している。年代としては近世のものである。

土壙

SK3851　南北溝SD3842の東に接してある隅丸長方形の土壙である。長径1.20m、短径1.80m、深さ1.00m。しっかりした掘形を有しており、井戸の掘形とも考えられるが井戸枠は全く残存せず、その痕跡を裏づけるものはなかった。遺物も土器の小片が数片出土したのみである。遺構の性格については不明である。

SK3857　SD3840の護岸施設の東側にある円形の土壙である。径2.00m、深さ0.30m。

SK3871　発掘区の西南部にある不整円形の土壙である。径0.90m、深さ0.55m。土壙内から曲物が出土した。III期かIV期か明確ではない。

IV期遺構

溝

SD3843・3844　発掘区の南辺部で検出した直角に折れ曲がる溝である。SD3843は発掘区の南側へのびており、SD3844は西側では明瞭ではない。幅1.40～1.60m、深さ0.20mである。

SD3846・3847　SD3843・3844と同一時期のものと考えられる。「⊏」形になっており端部は10cm前後の自然石を組んで護岸としている。SD3846は幅0.80m前後、深さ0.15m前後。一部側石が残っている。北側のSD3847は幅0.50m前後、深さ0.25m前後で前者同様、一部側石が残存する。SD3846も南肩の側石が残っていないが、0.50m前後のものであろう。

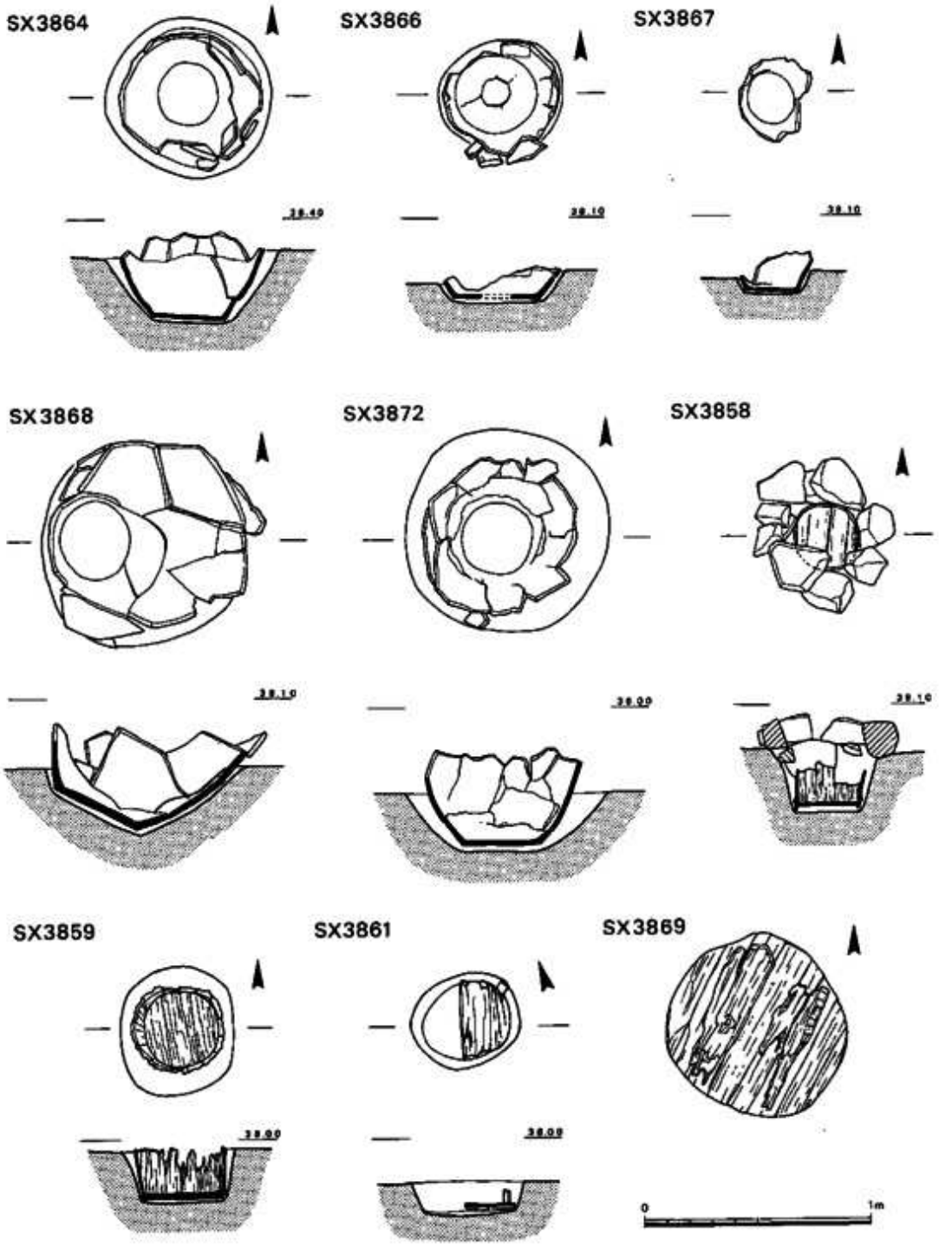
V期遺構

溝

SD3865　鍵形に巡る溝である。この溝はSD3842・3855・3860を切っている。このことから最も新期に属する溝である。発掘区外の北方へ延びている。溝の北方部分では護岸の石組みが比較的残っているが他は残存せず溝の平面も明瞭でない。北側で幅1.0m、深さ0.5mをはかる。溝が西へ折れ曲がり東西方向の溝には護岸のためか竹を突き立てている。

埋甕遺構

SX3864・3866・3867・3868・3872　発掘区の西辺部で検出した埋甕遺構である。小形のSX3867を除いた4個は南北方向にほぼ同一線上に埋置されている。いずれも上半部は後世の攪乱によ



第5図　埋甕・桶埋設遺構実測図

り破砕され下半部の３分の１程が残存する。これらはほぼ原位置を保っているものと考えられる。SX3868は傾いているが、本来斜位に据えられたものかどうか不明である。同一線上に並ぶ４個の甕はSX3868が若干大きいが、いずれも大きさはほぼ同じである。SD3865によって２つのグループに分けられる。SD3865は２つの建物を区画する機能があったとみられるが、そのように考えるとある一定の企画性を窺うことができるようである。SX3868とSX3872の距離は約6.2m、SX3864とSX3866の距離は2.20mである。

桶埋設遺構

SX3858　SX3858は石組みと桶を組合せた水溜様の遺構である。径0.30m、高さ0.20m強の桶の上部に石組みを設ける。自然石を用いた石組みは桶の口縁に合わせるように底板が残り木口を合わせている。現存する深さは約0.45mである。

SX3859　SX3859はSX3858の西側2.5mの位置にある。径0.36m、高さ0.20mが残る。厚さ１cm前後、幅10cm前後の板を４枚合わせ底板としている。

SX3861　残存状態が悪く、底板２枚と枠板が若干残るだけである。復原すると径0.40m前後で掘形の深さは約0.15mである。

SX3869　腐植が著しく底板がかろうじて残っているだけであるが、それから径を復原すると0.80mの桶が復原できる。

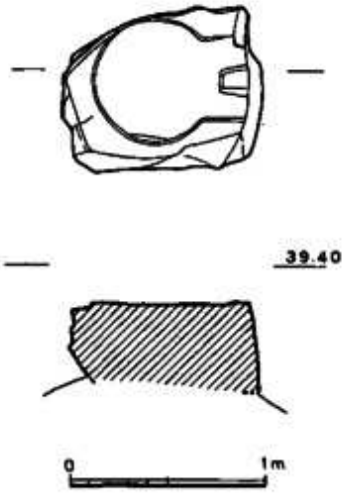
SX3873・3881　この他に桶のタガのみ残存するSX3873・3881がある。竹タガからSX3873は径0.95mの桶が復原できる。先述のSX3858・3859等より一回り大きい桶である。

防空壕

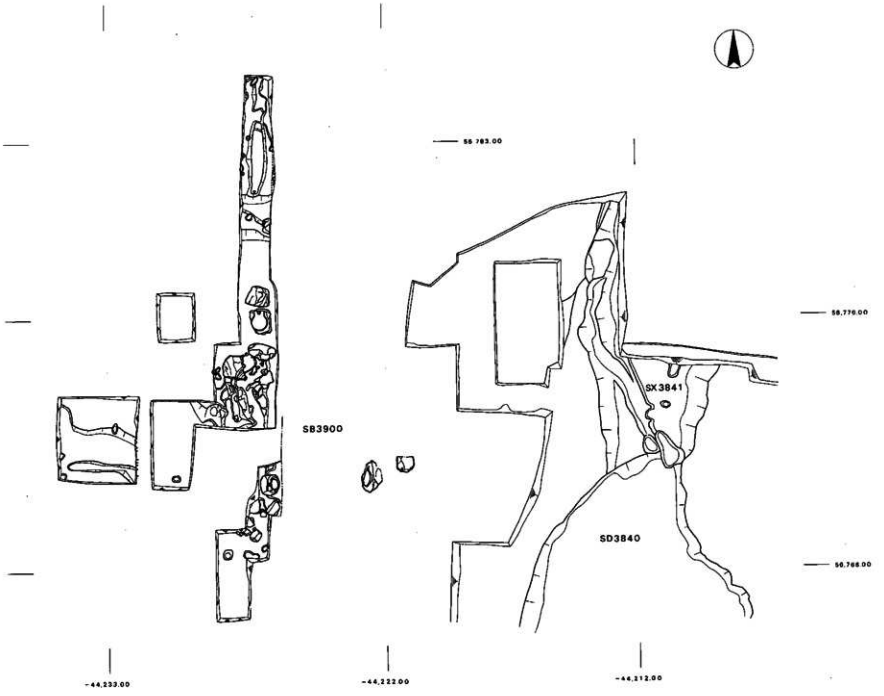
SX3874　発掘区北端で検出した幅1.50m、長さ3.20m、深さ0.5m前後の掘り込みである。北側に階段状のものを設ける。底面の周囲には径0.25m前後、深さ0.10mの柱穴を巡らせる。間隔は0.50m前後である。おそらく壁に柱を立てて簡単な屋根をかけたものと思われる。壕内上層から一銭硬貨（昭和15年）と五銭硬貨出土。第二次大戦時のものであろう。

３．南門跡

SB3900　調査の結果、南門推定位置においては後世の攪乱が著しく南門を確定し得る様な遺構は検出できなかった。これまで南門の位置を推定する有力な根拠となっていた礎石群も全て原位置から移動したものであった。現在参道を挟んで両側に礎石が傾斜ないし裏返しの状態で７個点在しているが、うち１個は柱座を有していないことが今回確認できた（もう１個は楠の根に埋没し柱座が存在するかどう



第６図　南門跡礎石実測図



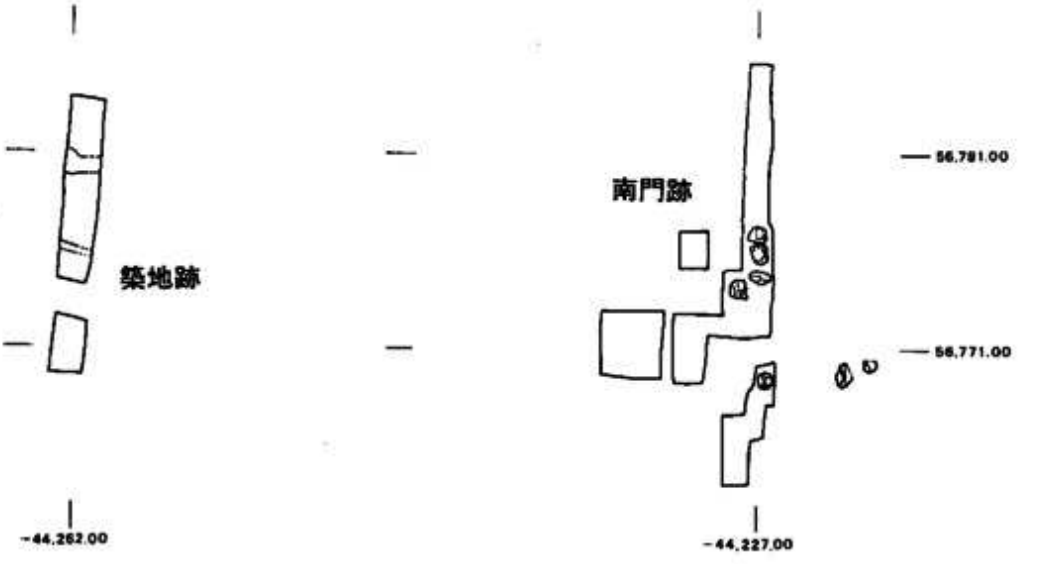
第７図　南門跡遺構配置図

かは不明である)。7個のうち5個についてはおそらく南門の礎石として使用されていた可能性が大きいと思われる。しかし原位置を保つものはなく、柱間等その規模を窺うことはできない。南端に位置する参道両側の礎石は傾斜しているもののほぼ同一線上にある。しかしこの2個の礎石が原位置近くのものかどうかについては、木の株によって根石等の確認が不可能であり確定し得なかった。しかしながら、直接的な根拠とはならないが、東南部地域で検出した鍵形に巡る溝SD3860・3870は年代的には新しいが、築地想定位置のすぐ南側を東西に流れ、南門推定地を避ける形になり南へ流れる。このことは、かなり新しい時期までこの部分に門的な施設があったため、何らかの制約があったと理解できる。そして、現状以上に礎石等がこの部分に原位置に近い状況にあった可能性も考えることができる。

4．築地跡

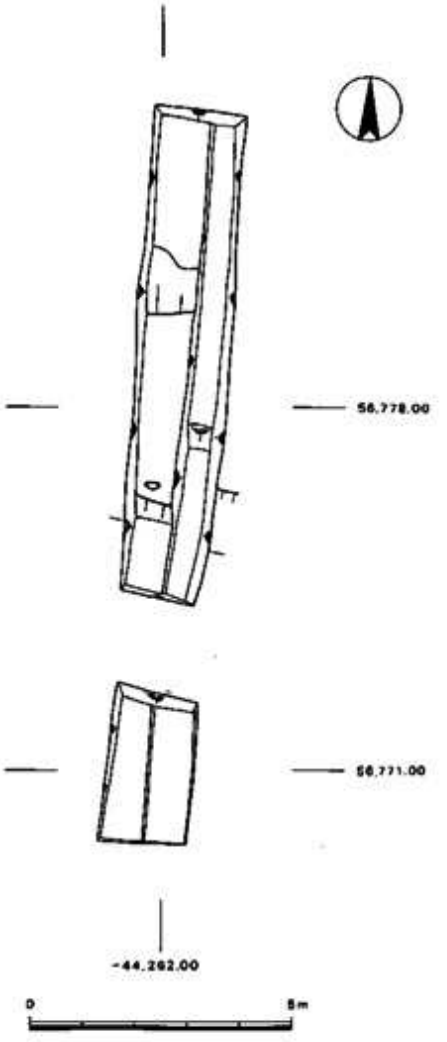
SA3880　現在、南門推定地の東西方向に延びる比高1m前後の土塁状の高まりがある。この高まりは現戒壇院の土壁とほぼ同一線上にある。これまでこの高まりを南面築地の痕跡ではないかとの見方がされていた。今回、この高まりの実態を究明するため調査を実施した。しかしながら現在この部分には樹木が繁茂し限られた面積しか調査できなかった。

調査地点は現参道の中心(推定中軸線付近)から約37.0m西方に、高まりを縦断する形で幅1.8m、長さ14mの南北トレンチを設定し調査した。調査は土層の断面観察を主眼とし、表土を除去した段階でトレンチの半分の幅0.90mで地山まで掘り下げていくことにした。最終的には最頂部より約2.0mまで掘り下げた。地山は表土下1.60mである。調査の結果、築地を確定しうる版築等をここでは見ることができなかった。層位の状況は第10図に示したが、若干南へ向かって



第8図　南門・築地跡トレンチ配置図

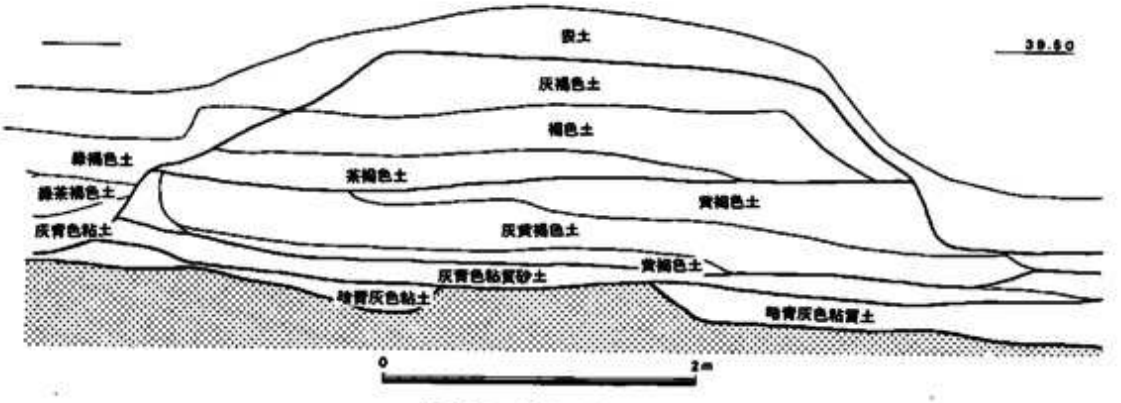
傾斜気味になっているが、層位は単純でほぼ平行な層序をなしている。大きく上下２層に分けられ、上層ではさらに灰褐色土・褐色土・茶褐色土の３層に細分される。最上位の灰褐色土層は0.30mほどでやや粘性をおびており、この中には瓦片を含んでいる。褐色土層は締りがあり遺物の出土は少ないが、糸切りを有する土師器の杯・皿を含んでいる。下層は厚さ60cmで上層とは明瞭に識別しうる。下層は全体的に粘性が強く、細分すれば３層に分かれる（黄褐色・灰黄褐色・黄褐色）。この層中には若干であるが瓦片が含まれている。この瓦片はいずれも奈良期のもので、それ以降のものは含まれていない。出土遺物からみれば奈良期の整地もしくは盛土と考えられる。この層は幅５mほどで両端は高まりの傾斜に沿って後世の攪乱によって切られており連続しない。この層が本来ここだけになされた整地であるのか、両端が後世の攪乱のために切断されたものかは調査範囲内では確定できなかった。この高まりの中心線を東の南門推定地にまで延長すると最北端の礎石から２m北側の位置にくる。



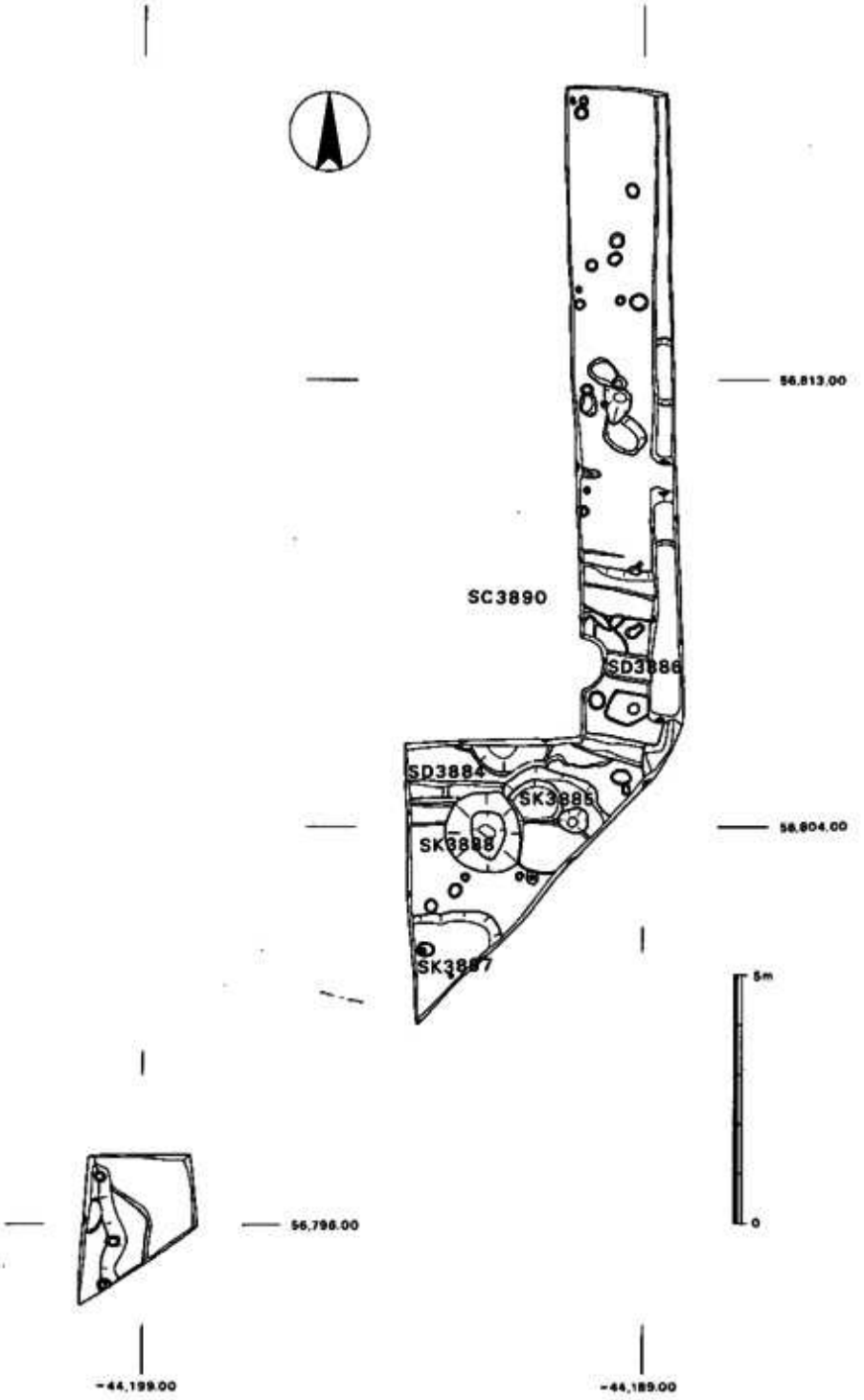
第９図　築地跡遺構実測図

５．回廊跡

SC3890　回廊推定地に幅2.0m、長さ13.0mの南北トレンチ（Aトレンチ）と南端部で連続させる形で東西幅4.0m、南北６mの三角形状のトレンチ（Bトレンチ）、さ



第10図　築地跡東壁断面図



第11図　回廊跡遺構配置図

らに5m西側にCトレンチを設定した。南面回廊については昭和32年に講堂および北面回廊等の調査と併行して一部調査が行われている。今回設定したAトレンチの東側で、部分的に前回のトレンチと重複している箇所がある。このときの調査では回廊の推定線上付近で瓦が散布している部分としていない部分が明瞭に分かれ、東西の直線となる。このような瓦の散布状況から回廊との関連が示唆されていたが、時間的な都合や、調査範囲の制約などから回廊との確定をし得るまでには至っていなかった。今回、その確認を含め再調査を実施した。

Aトレンチでは表土直下に地山が露出し、遺物の包含層らしきものはまったくみられない。地山は南に向かってゆるやかに傾斜し、Aトレンチ内では溝SD3886以外には顕著な遺構は見られず、小ピット群を検出したのみである。Aトレンチ東側にほぼ沿った形で昭和32年調査時のトレンチが幅0.60mで検出された。Bトレンチでは溝1条・土壙3基を検出した。

溝

SD3884　SK3888を切る東西溝である。幅0.80m、深さ0.05m前後の浅い溝である。

SD3886　Aトレンチ南端近くで検出した幅0.40m、深さ0.10m前後の浅い溝である。幅1.0mを検出したのみであるがさらに東西に延びている。

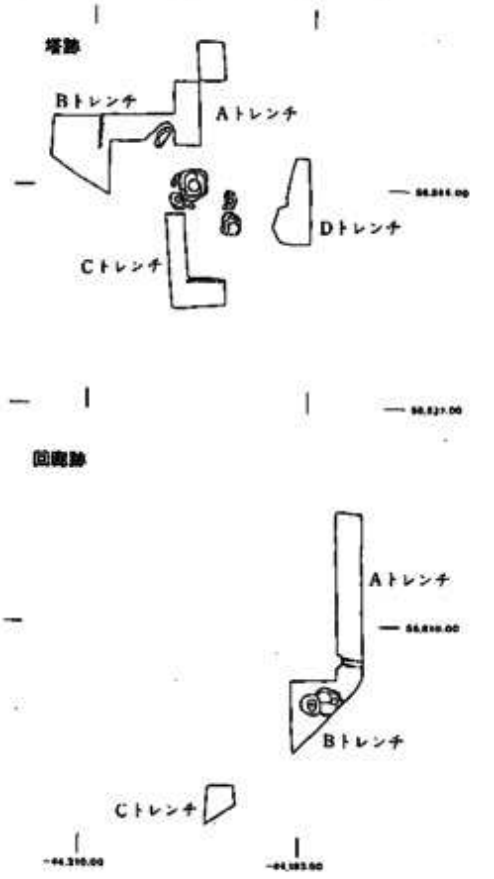
『観世音寺資財帳』記載の回廊規模を見ると南北長は弐拾陸丈肆尺(79.2m)で、平成3年度に実施した北面回廊からこの距離をとるとこの溝の北肩付近にくる点が注意される。

土壙

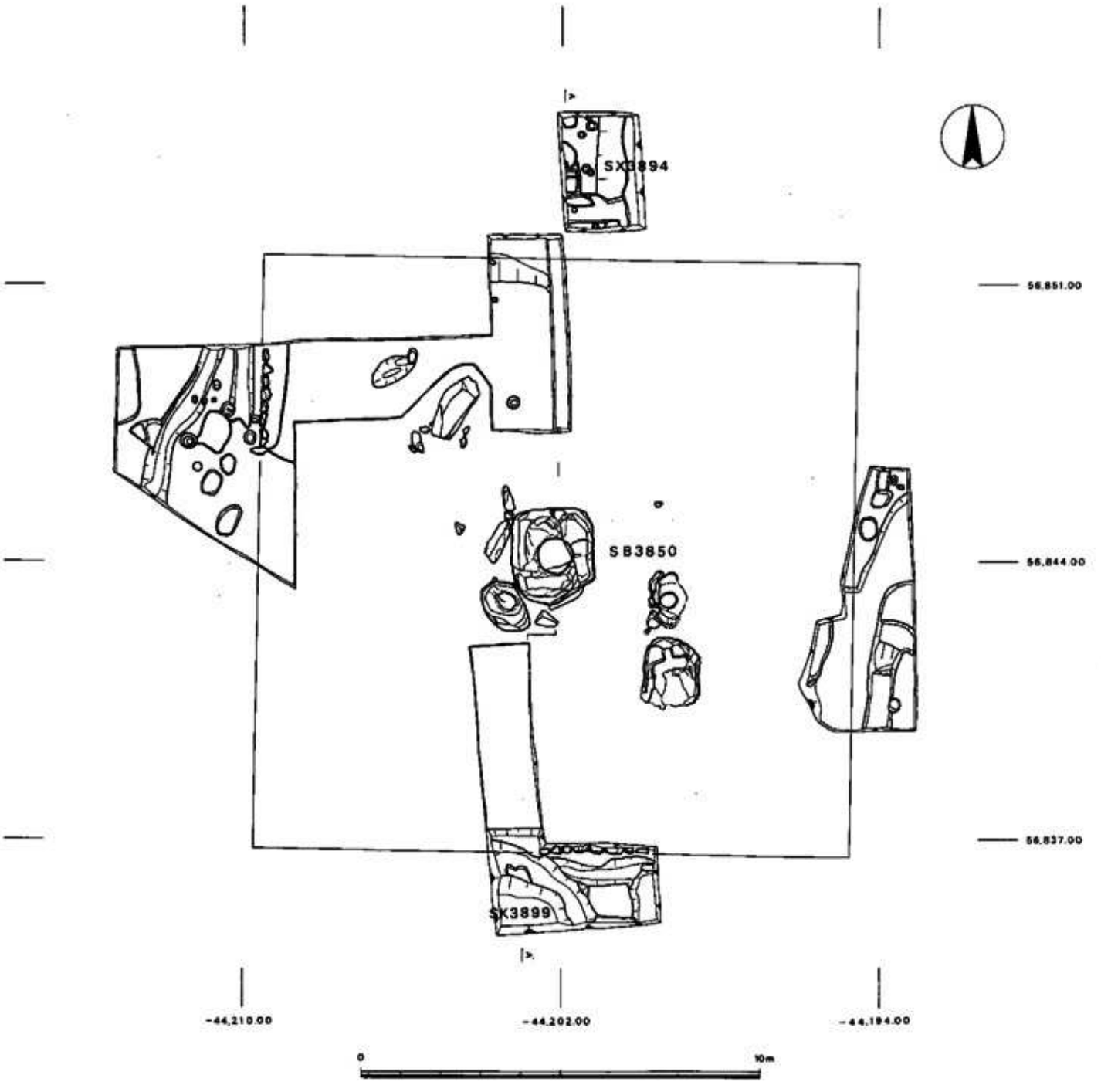
SK3885　SK3888と連続する土壙で深さ0.3mで、部分的に0.5m前後の穴が数箇所みられる。土壙中からは多量の鋳型片が出土した。SK3888とは切り合いがなく、同一時期のものと考えられる。

SK3887　Bトレンチの南端でその一部を検出した。深さ0.2m前後の浅い土壙である。土壙上層には瓦を含んでいる。昭和32年時に検出された瓦群と一連のものである。その時の調査では瓦は取り上げられておらず、回廊の屋根瓦が落下した状況ではないかとの見方もされていたが、今回調査した結果では土壙内に埋められた瓦であることが明かとなった。

SK3888　径1.60m、深さ1.0mの土壙である。底部は0.2mと狭くなり、逆截頭円錐形状を呈する。



第12図　回廊・塔トレンチ配置図



第13図　第130次調査塔遺構配置図

土壙中からは鋳型の破片と加熱を受けて赤化ないし黒化している人頭大の自然石が出土している。この土壙の性格については明かでないが、井戸の掘形の可能性も考えられるが、井戸枠らしきものの痕跡もなく、掘形底部の径が小さいことなどからみて鋳造に関連するものと考えた方が妥当であろう。

6．塔跡

SB3850　現在、塔跡には心礎と礎石３個（四天柱礎石１、側柱礎石２）がほぼ原位置を保つ形である。また、その西南方の一角に６個の礎石が散在している。塔心礎をはじめ礎石は全て完全に露出し、現地表から浮き上がった感じである。このことから基壇はもちろんのこと積土なども痕跡をとどめていないのではないかとの意見が多かった。塔跡についての発掘調査は今回が初めてであるが、前述したような残存状況の中で、掘り込み地業等の痕跡が残っているのではないかとのかすかな望みをもって、心礎を中心にトレンチを設定し調査した。調査の結果、最初に設定したAトレンチで厚さ0.40mの基壇版築を確認し、予想に反して基壇積土が残存していることが判明した。そこで四方に順次トレンチを設定し、基壇規模を確認していくことにした。その結果、BトレンチとCトレンチで基壇地覆石の一部を検出し、これまで不明であった塔基壇規模を復原しうる貴重な成果を得ることができた。

調査地は若干の表土（黒色土）を除去すると版築面が露出する。遺構面がすでに露出している状況であった。遺物は若干ではあるが、この黒色土層とBトレンチの基壇外の包含層である黄褐色土層から出土している。なお、地覆石のレベル差は北と南では約30cmで南へ傾斜する。

心礎を中心に基壇規模確認のため、四方にA～Dの各トレンチを設定し調査した。

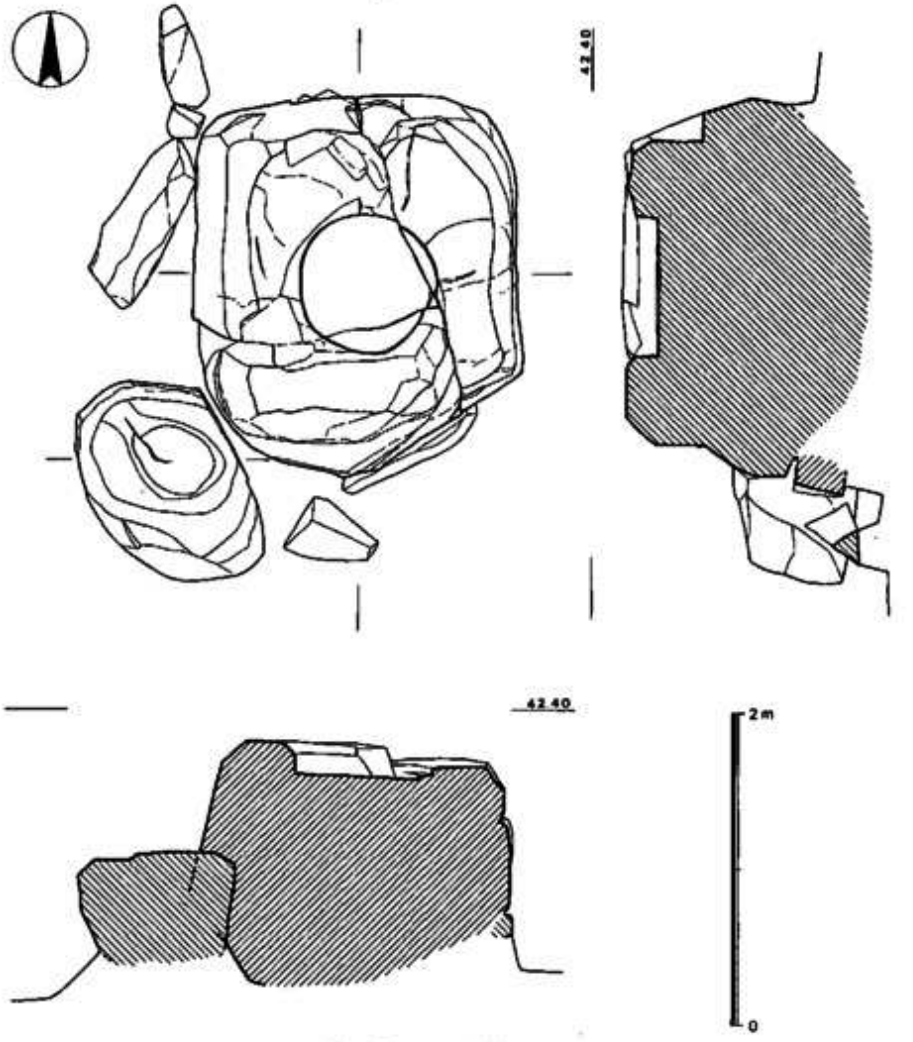
Aトレンチ　心礎の北側に幅2.0m、長さ8.0m（樹木の関係で北側３m分を東へずらす）を設定。約0.05m程削平した段階で、トレンチ南端から3.80mのところで後世の攪乱による浅い落ちを検出した。しかしながら削平面では顕著な遺構が見られないため、トレンチの東側を幅0.40mの厚さで更に掘り下げ断面観察を行なうことにした。その結果、約0.4mの厚さで長さ3.0m分の版築を確認した。北側のトレンチでは南北方向の溝状の落ちSX3894（深さ0.80m前後）と柱穴様の掘形・小ピットを検出したが、その性格については明らかにできなかった。版築は0.20mごとに厚さ0.01mの赤褐色粘質土を積み丁寧な地業を行なっている。

Bトレンチ　Aトレンチ南端から直交する形でBトレンチを設定した。トレンチ西辺部付近で南北方向の石列を長さ2.60m分検出した。この石列は心礎の中心から約7.5mの所に西側に面を合わせ並んでいる。石列の南端の石１個が縦に直角になっており、階段部の地覆石と考えられたため、拡張し調査したが明瞭な結論を得るまでにはいたらなかった。

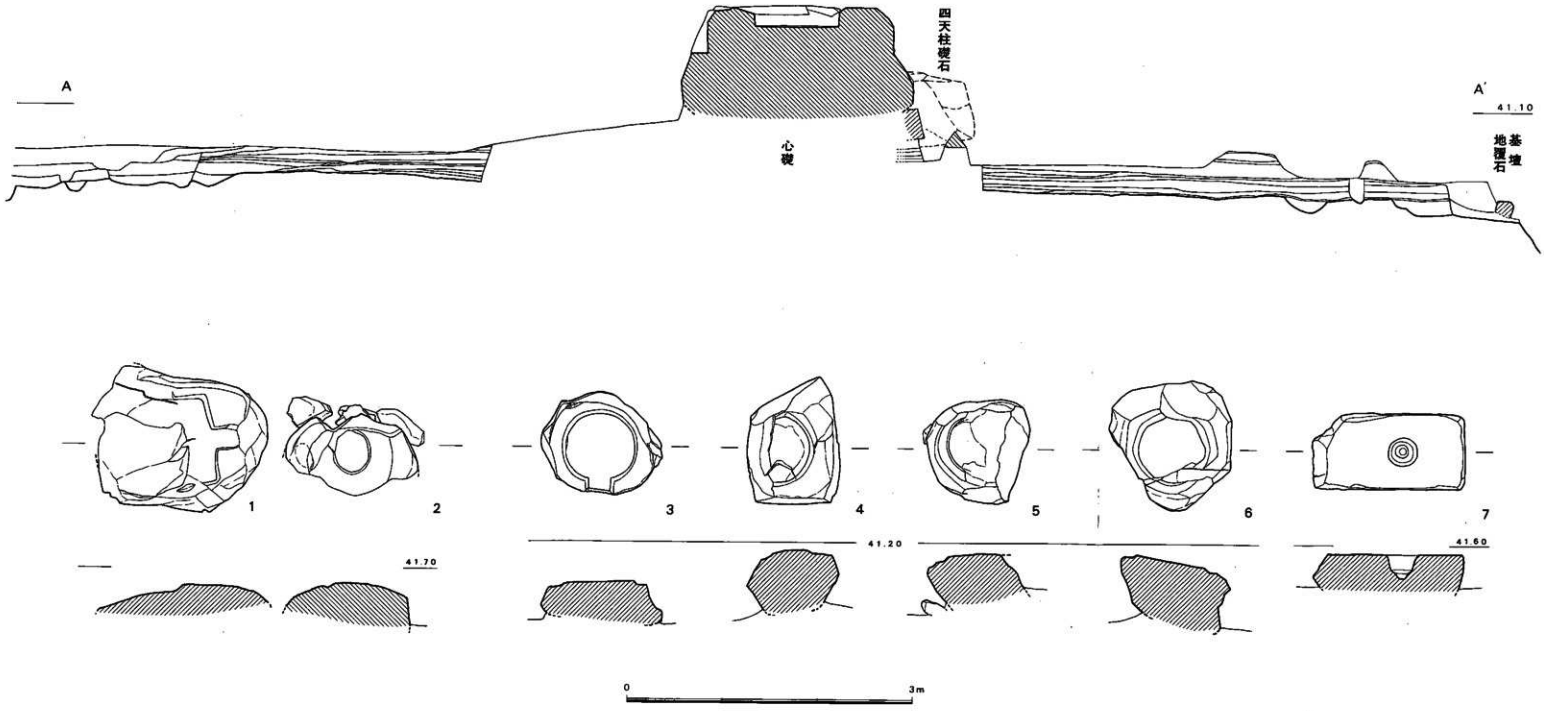
Cトレンチ　Aトレンチの南の延長上にCトレンチを設定した。Cトレンチ南辺部で石列を検出したがこれは心礎の中心から約7.5mの所にある。東西方向の長さにして３m分を検出している。この石列はBトレンチで検出した石列と心礎からの距離は全く同じであり、石の大きさ等も

同じで一連のものとみられ、このことから基壇地覆石と判断した。この地覆石の外側は現代の土壙SK3899によって攪乱されている。深さは約0.8m前後。版築はAトレンチと同じく残存状況は良好である。厚さ0.50m（一部）程が残存する。版築は地覆石列から0.7m内側に入ったところで地覆の石列掘形に切られている。

Dトレンチ　心礎の東側の基壇石列推定線上に長さ6.70m、幅3.0～1.0mの南北トレンチを設定した。調査の結果、現地表下0.5m前後で現代の攪乱によって削平され、その痕跡は見られなかった。



第14図　塔心礎実測図



第15図　塔基壇断面・側柱礎石および塔周辺の礎石実測図

心礎および礎石

心礎　心礎は2.00m×2.30mの花崗岩である。現地表面と心礎上面との高低差は約1.60mで完全に地表面に露出する。心柱の刳り込みはほぼ正円で、径0.90m（3尺）、深さ0.20mである。東側3分の1の所に南北のひび割れが生じており、心柱の刳り込みにも及んでいる。そのため3㎝前後下がりずれている。心柱の刳り込みはこの割れの部分を除けばほぼ水平である。底面には根石もあり、現状では後世移動された痕跡もないので当初の位置を動いていないものとみられる。

四天柱礎石（第14図、図版20）心礎が大きいためほぼそれに接するようにある。柱座は風化のため明瞭でないが上面が径0.5m前後の不整円形となっている。心柱刳り込みの底面とのレベル差は約0.48mと低くなっている。

側柱礎石（第15図、図版21）側柱礎石2個が残存している。東南の隅柱礎石は方形の柱座を有し、地覆座がある。これまでこの礎石上には石仏とその台座がのっていたために、この柱座があるのには誰も気付かなかったようである。柱座の約半分ほどを造り出しているが、他は加工をしていない。柱座の幅0.90m、地覆座の幅0.20m、高さ0.04～0.05m。地覆座の方位は西へかなり振れており、基壇地覆石列線から復原した塔の軸線の方位とは大きくずれる。現在、観世音寺境内にある礎石で方形の柱座を有するものはこれが唯一である。礎石のレベルは四天柱礎石とほぼ同じである。（第15図－1）

脇間の礎石は比較的柱座が明瞭で、径0.35～0.40mのやや不整円形を呈する。礎石は水平である。礎石レベルは先述の四天柱・隅柱礎石より0.04mほど低い。礎石の下面には根石状のものが露出している。（第15図－2）

塔跡の周辺にある礎石について（第15図、図版21・22）現在、心礎の西南部の一角に6個の礎石がある。これらの礎石は柱座を上にし、ほぼ水平になっているものもあるが、原位置ではなく後世になって、この位置に集め置かれたものであることは一見して判断し得る。3は最も保存状況の良好なもので、柱座と地覆座を有する。柱座は径0.70mでほぼ正円である。地覆座の幅0.22m。4は割れて約半分が欠失している。柱座の径は0.7m前後。5は柱座の径については確かではない。6の柱座はやや不正円形であるが、径0.7m前後を測る。7は幅0.38m、長さ0.72m、厚さ0.4m前後の長方形を呈する礎石である。ほぼ中央に径0.15m、深さ0.26mの漏斗状の穴を穿っている。この礎石は鏡山猛著『大宰府都城の研究』によれば北門推定地にある民家の建て替えの際に発見されたものである。これらは、いずれも花崗岩である。

出土遺物

SD3840出土土器・陶磁器（第16～21図、図版42～46　別表）

この溝からは多量の遺物が出土しているが、特に溝の北端部で「元亨三年」の紀年銘をもつ墨書木札と共伴して出土した。一種の溜り状の層の周辺から墨書木札とともにまとまって出土したものを第16図と第17図に示した。また溝埋土により、上・下・最下層として層位的に分類して図示した。しかし、明瞭に判別できない所もあり、必ずしも時間差を示すものではないことを付け加えておく。

墨書木札共伴層（第16・17図、図版42・43　別表）

土師器

皿ａ（１～16）口径6.6～8.4cm、器高1.2～1.8cm、底径4.6～6.8cm。底部は全て糸切り。４・６・８をのぞいて板状圧痕を有する。

杯ａ（17～62）17･18は小形で口径9.2～10.0cm、器高3.0～3.1cm、底径5.6～5.7cm。19～61は口径11.8～13.3cm、器高2.5～3.2cm、底径7.2～10.0cm。62は大形で口径16.0cm、器高3.3cm、底径11.6cmである。全て糸切りで22・35・40・48・54・60を除いて板状圧痕を有する。

ミニチェア土器（63）口径2.4cm、器高2.4cm。杯形を呈する手捏ねのミニチェア土器である。

須恵質土器

鉢（67）口縁部の小片である。復原口径27.4cmをはかる。

中国陶磁器

白磁

椀（64・65）64は白磁椀Ⅶ類の高台部片である。外面下位は露胎となる。内面見込みは段状になる。65はＶ類で口縁部を玉縁とする。

陶器

壺（66）口径7.0cmをはかる長胴の壺である。ほぼ直線的な体部で口縁部を肥厚させる。口縁端部は平坦とする。体部下位と底部は欠失し不明であるが、内外面に黄緑ないし黄褐色釉が薄めに施釉されている。胎土には黒色粒子が混じる。また口縁端には重ねの目跡を有する。

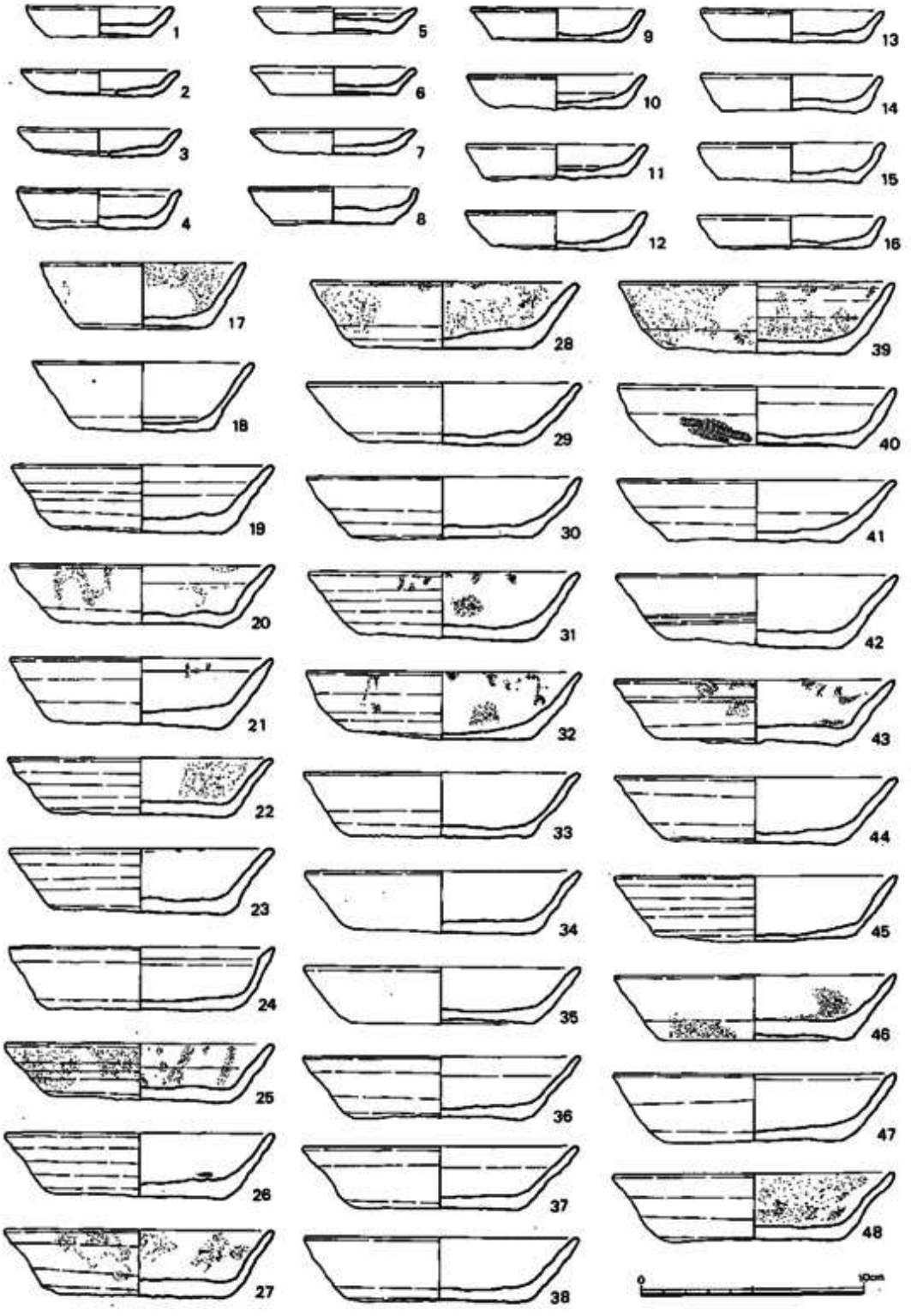
上層（第18・19・21図、図版44・45　別表）

土師器

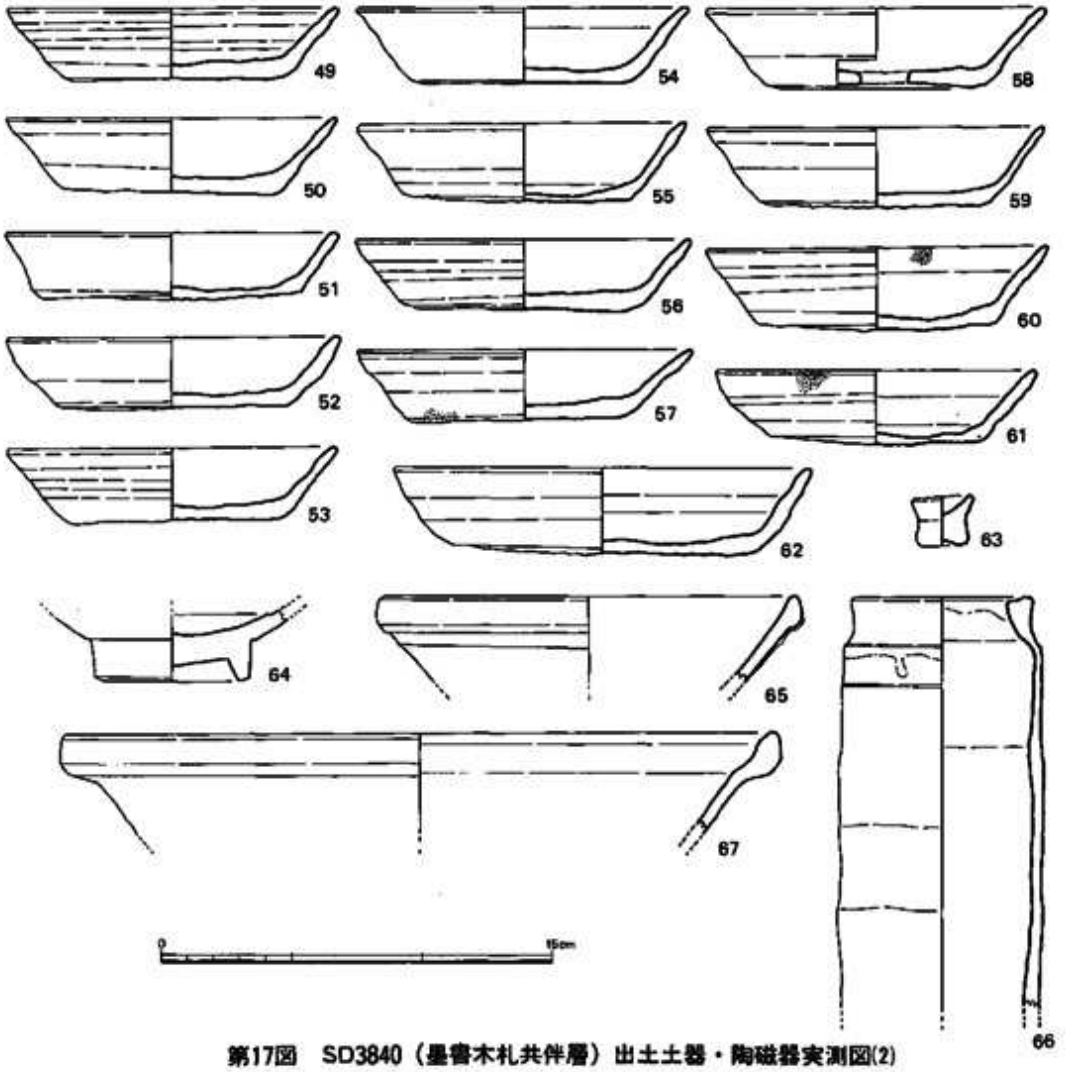
皿a（75～99）口径7.0～8.4cm、器高0.9～1.6cm、底径4.8～6.6cm。全て糸切り。板状圧痕を有する。

皿ｂ（68～74）口径6.4～6.9cm、器高1.5～1.7cm、底径4.0～5.0cm。全て糸切り。70を除いて板状圧痕を有する。

皿ｃ（100・101）口径8.0～8.1cm、器高1.8～2.4cm。



第16図　SD3840（墨書木札共伴層）出土土器・陶磁器実測図(1)

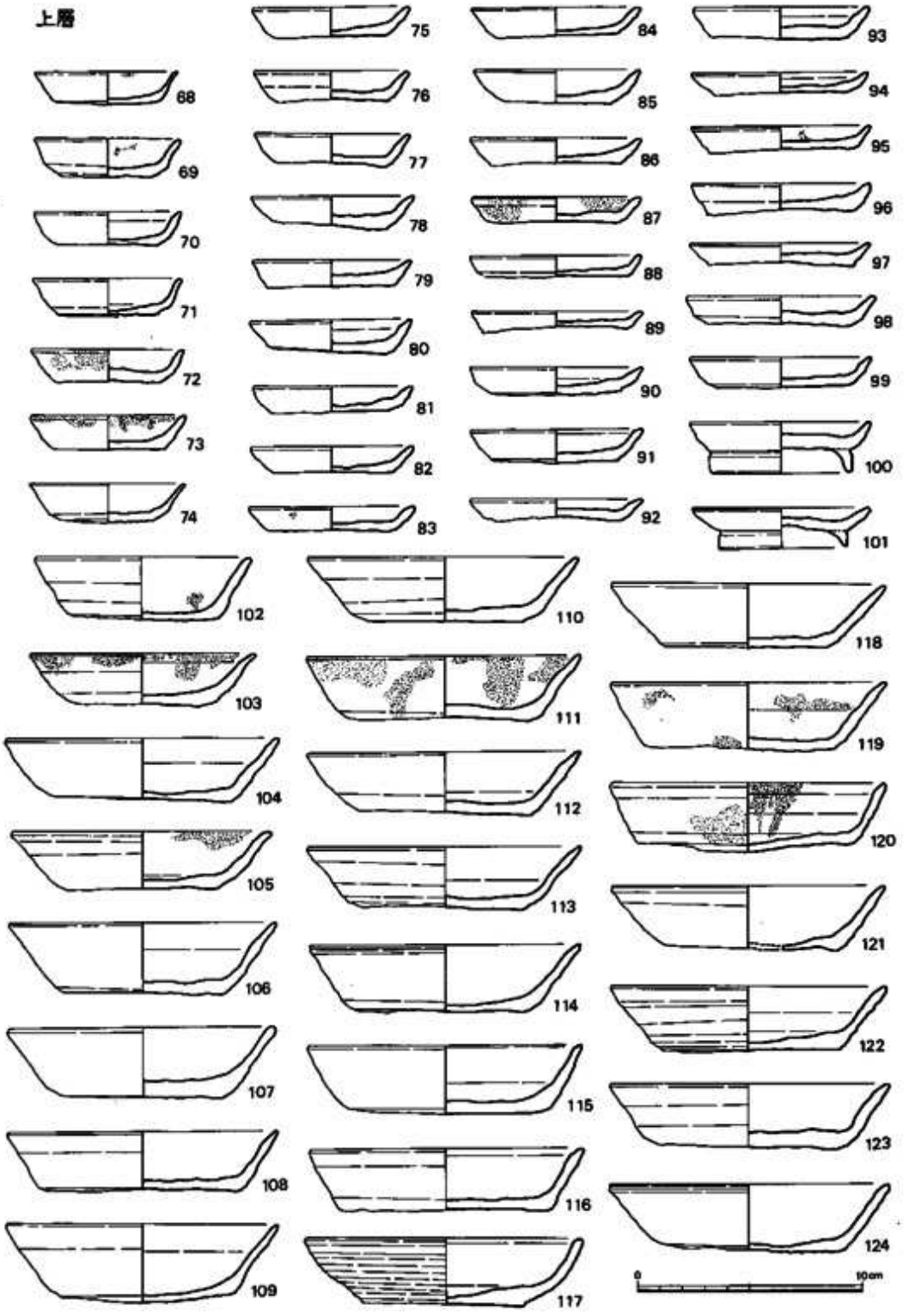


第17図　SD3840（墨書木札共伴層）出土土器・陶磁器実測図(2)

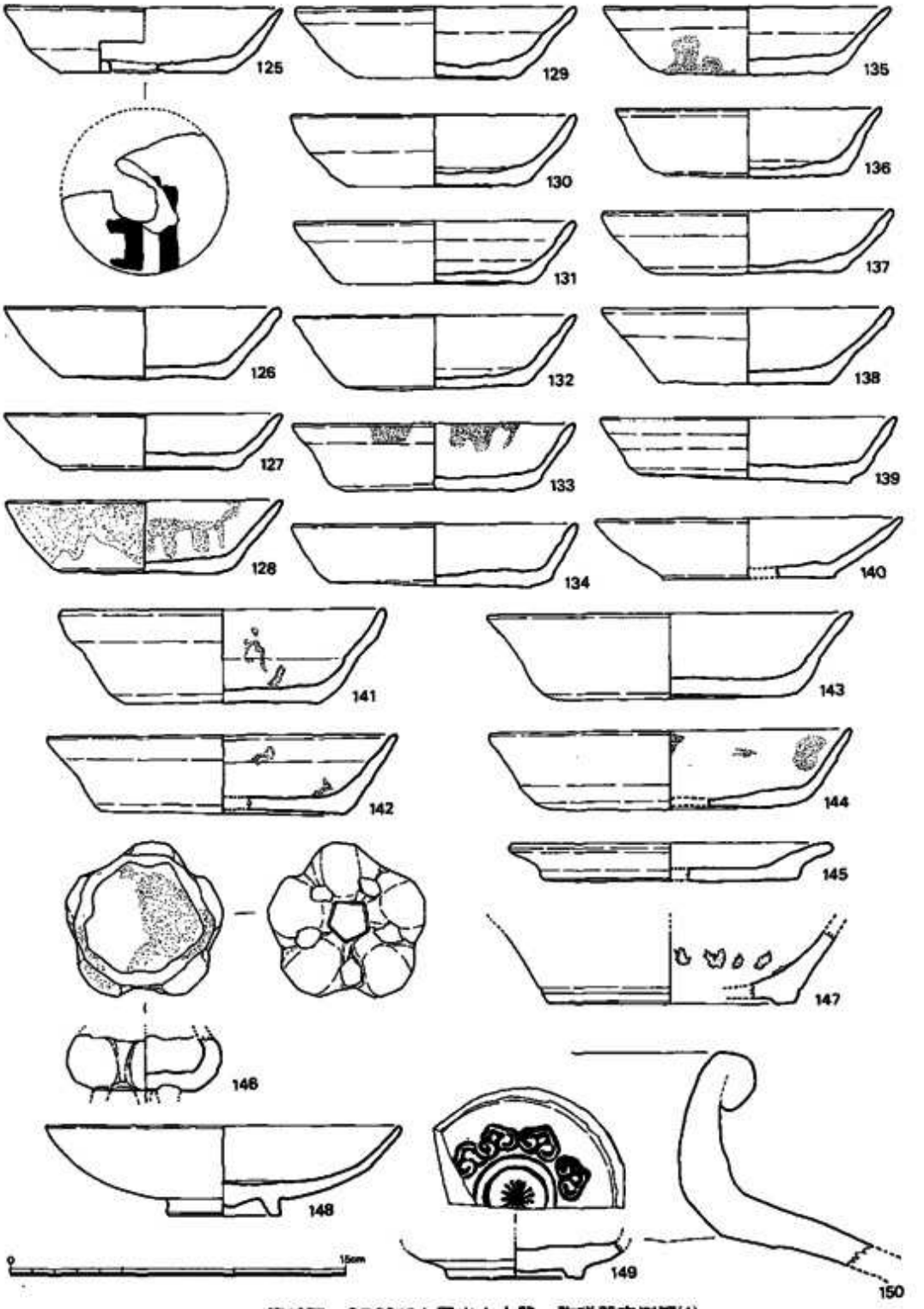
杯a（102～144）102･103は小形で口径9.7～10.0cm、器高2.3～2.8cm、底径6.0～7.6cm。糸切り。板状圧痕を有する。104～140は口径11.5～13.8cm、器高2.5～3.4cm、底径6.7～9.6cm。全て糸切り。125・140を除いて全て板状圧痕を有する。125の底部の中心には径2.0cmの穿孔があり、外底には墨書があるが判読できない。墨書との関係から穿孔は後になされたものである。141～144は大形で口径14.8～16.4cm、器高3.5～4.2cm、底径8.7～12.2cm。すべて糸切り。板状圧痕を有する。

蓋（145）皿形をしたおとし蓋と考えられる。復原径16.5cm、器高1.8cm。下面は明瞭ではないがヘラ削り調整か。下面は煤様の付着物で黒褐色を呈している。

灯火器（146）平面が五角形をした袋状の形態をもつ。上部が欠失し全形を知ることができない。下面には五ケ所に脚部かと思われる貼付痕がある。内外面に油煙が付着して黒化している。



第18図　SD3840上層出土土器・陶磁器実測図(3)



第19図　SD3840上層出土土器・陶磁器実測図(4)

上部の割れた部分も黒化していることから、割れた状態で使用していたとみられる。

土師質土器

鍋（1・2）1は復原口径21.4cmの小形の鍋である。口縁部を「く」字状に外反させる。内外面とも刷毛目調整するが、外面は煤のため部分的に刷毛目が見えるのみである。2は復原径34.0cmの口縁部小片である。内面は1と同様刷毛目調整する。外反させた口縁はやや内弯し古期の形状を示す。

中国陶磁器

青磁

椀（147）越州窯系青磁椀II類である。高台畳付部は露胎であり、内面には目跡を有する。

皿（148）龍泉窯系青磁の皿である。口径15.0cm、器高4.0cm。淡緑色釉を薄めに施し、内面見込みは釉をカキ取る。外底部は露胎。底部に墨書があるが判読できない。

朝鮮陶磁器

高麗青磁

杯（149）杯形の底部で、内面見込みの中心に円文と花文、その周囲に如意頭文を配した白象嵌がある。全面に施釉され、色調は全体に灰緑色を呈している。高台畳付部には重ね痕がある。

陶器

甕（150）口縁部を折曲げ玉縁にする常滑産の甕片である。胎土中には黒い粒子が混じり、器表に黒い斑点にみられる。

下層（第20図、図版46　別表）

土師器

皿a（151～157）口径7.0～8.1cm、器高1.0～1.6cm、底径4.6～5.8cm。糸切り。板状圧痕を有する。

杯a（158～180）口径11.5～13.0cm、器高2.6～3.5cm、底径6.6～8.6cm。糸切りで161・163・170・174を除いて板状圧痕を有する。

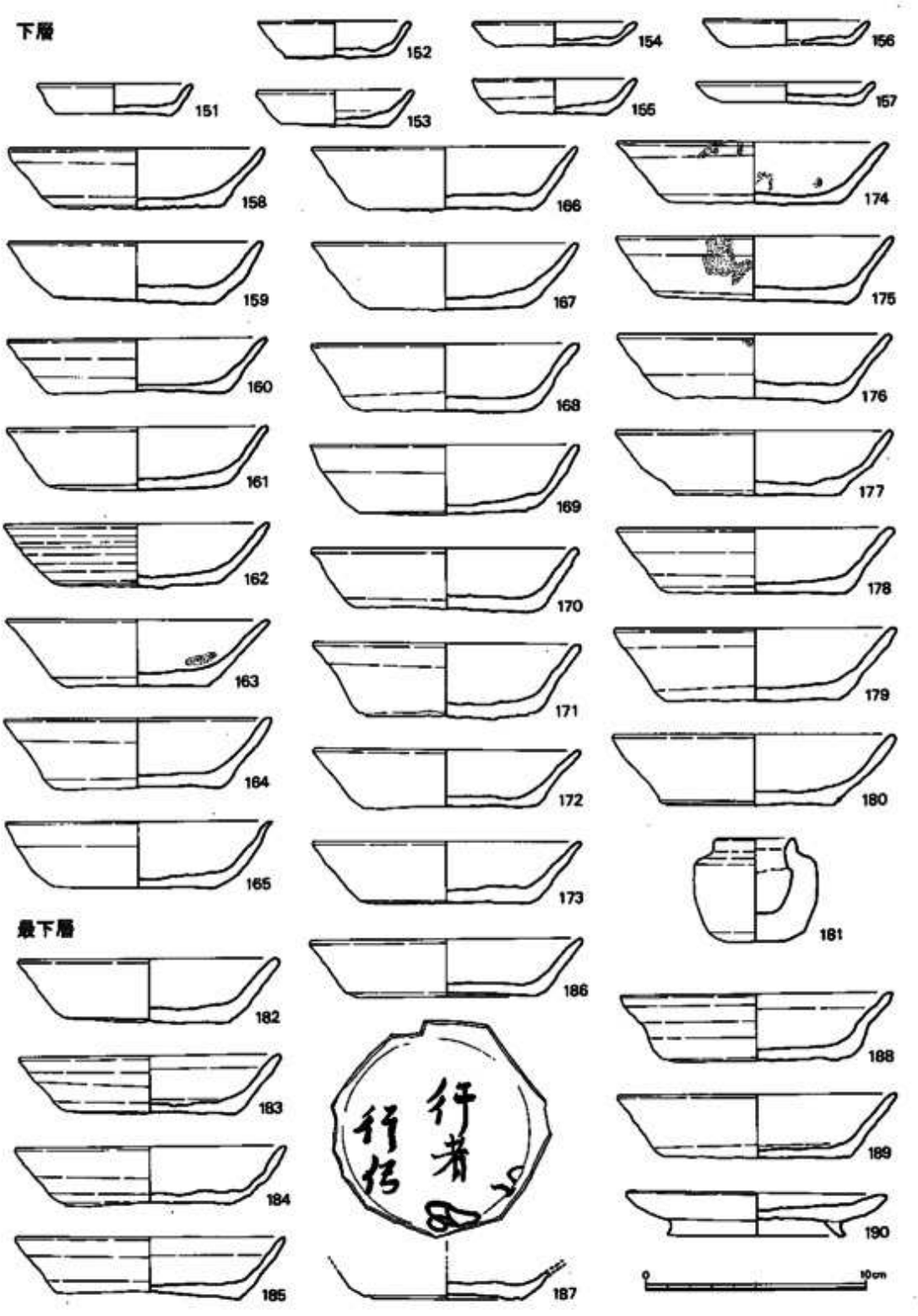
小壺（181）口径3.8cm、器高4.7cm。器肉は厚く口縁部は直立しつまみ上げている。外面は黒変し瓦質になっている。体部にはヘラミガキを施し、光沢がある。

最下層（第20図、図版46　別表）

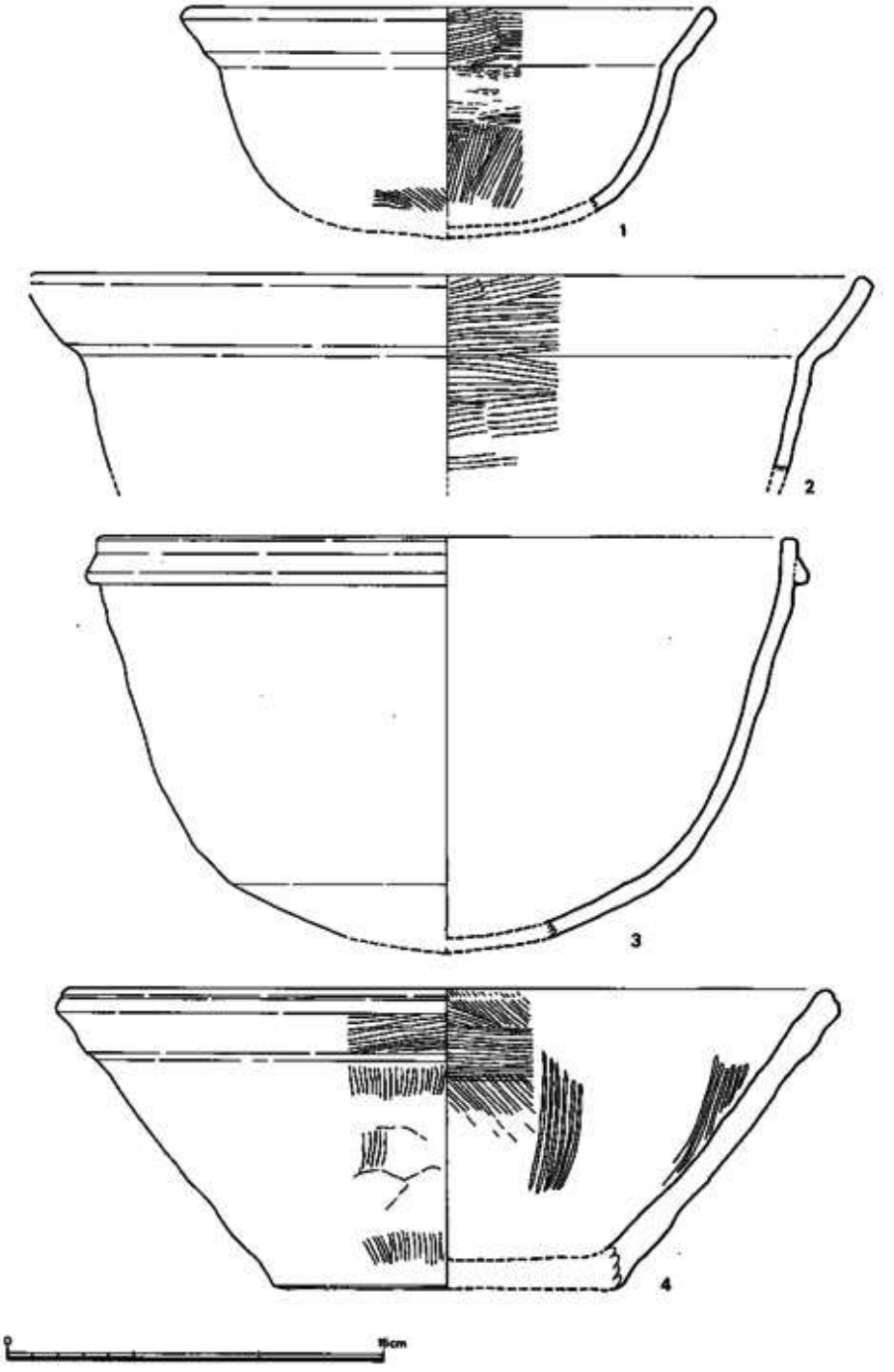
土師器

杯（182～189）口径11.8～12.6cm、器高2.6～3.1cm、底径7.6～8.5cm。糸切り。183を除いて板状圧痕を有する。187の口縁部は欠失しているが、底部内面に「行者」「行□」の墨書があり、周囲に呪文らしきものがみえる。

高台付皿（190）口径12.0cm。高台端部を欠失していて器高は不明である。



第20図　SD3840下層・最下層出土土器・陶磁器実測図(5)



第21図　SD3840・3844、SX3875出土鍋・摺鉢実測図

SD3842出土土器（第22図、図版47　別表）

土師器

皿b（1・2）口径7.0～8.2cm、器高1.6～2.1cm、底径5.0～5.5cm。糸切り。

杯a（3・4）口径12.6～13.7cm、器高2.9～3.0cm、底径7.8～7.9cm。糸切り。板状圧痕を有する。3は杯bの形態に近い。

中国陶磁器

白磁

皿（5・6）口縁部を欠失する。濁白色の柔らかい胎に黄白色の釉をかける。外面の体部以下は露胎。高台見込みに墨書があるが判読できない。

壺（7）底部片である。がっしりとした高台と器肉の厚さに特徴がある。高台部付近が露胎となる他は内外の全面に灰青色の半透明釉がかかる。6はいわゆる枢府磁と呼ばれるものである。白色で緻密な胎に若干青味をおびた淡青白色の釉を高台畳付以内を除いて施釉する。内面見込みには花文様の印文があるが、不透明な釉のため明瞭でない。

青磁

杯（8）龍泉窯系杯のⅢ類。透性のある釉を施す。体部外面には蓮弁文を施すが鎬はない。

椀（9・10）いずれも龍泉窯系青磁である。9は高台を面取りし、畳付以内は露胎となる。10は口縁端部を丸くするタイプで内面に浮文がある。釉は厚く、くすんだ緑色を呈する。

陶器

黒釉椀（11）復原口径11.2cmの天目椀である。ガラス質の釉は厚めにかかり、体部下半は露胎とする。

染付

椀（12）饅頭心の染付椀である。呉須は黒味があり、白磁部は全体にやや青味を帯びている。尖り底の畳付部には砂目がある。

SD3844出土土器・陶磁器（第21・22図、図版47　別表）

土師器

皿a（15・16）口径8.4～8.8cm、器高1.4～1.5cm、底径6.5～7.2cm。糸切り。

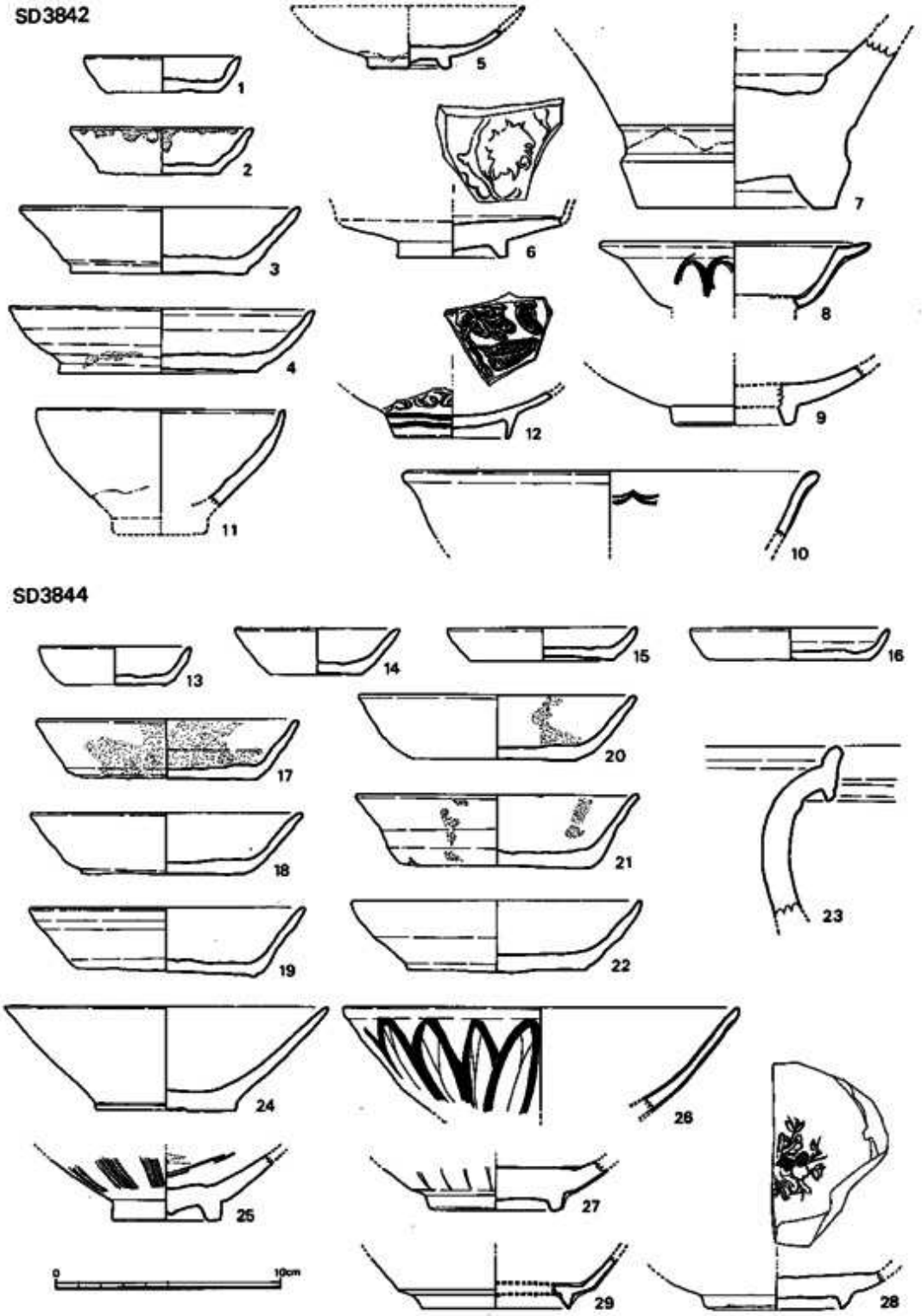
皿b（13・14）口径6.8～7.3cm、器高1.7～2.1cm、底径4.0～4.7cm。糸切り。板状圧痕を有する。

杯a（17～22）口径11.8～12.9cm、器高2.7～3.2cm、底径7.2～8.5cm。糸切り。21を除いて板状圧痕を有する。

中国陶磁器

青磁

椀（24～28）24は越州窯系椀Ⅰ類。いわゆる蛇の目高台で、畳付部の釉は完全に拭き取られ



第22図　SD3842・3844出土土器・陶磁器実測図

ず斑状に残る。そこには目跡4個が見られる。25は同安窯系椀Ⅰ類。外面の櫛目は細く釉は風化が著しい。26・27は龍泉窯系椀Ⅰ－5・b類である。28は龍泉窯系で高台端を斜めに削り畳付部を尖り気味にする。畳付部以内は露胎とする。淡青色味のある半透明釉は薄めに施される。内面見込みに花文のスタンプを有する。

杯（29）龍泉窯系杯Ⅲ－1類。淡緑色の釉が厚めにかかり、高台先端部は露胎となる。

瓦質土器

鉢（4）灰白色を呈する瓦質のもので口径31.4cm、器高12.0cmに復原できる摺鉢である。体部の内面に6本単位の下し目を入れる。8ケ所が復原できる。外面は刷毛目の調整痕が残る。

SD3846出土土器・陶磁器（第23図、図版47　別表）

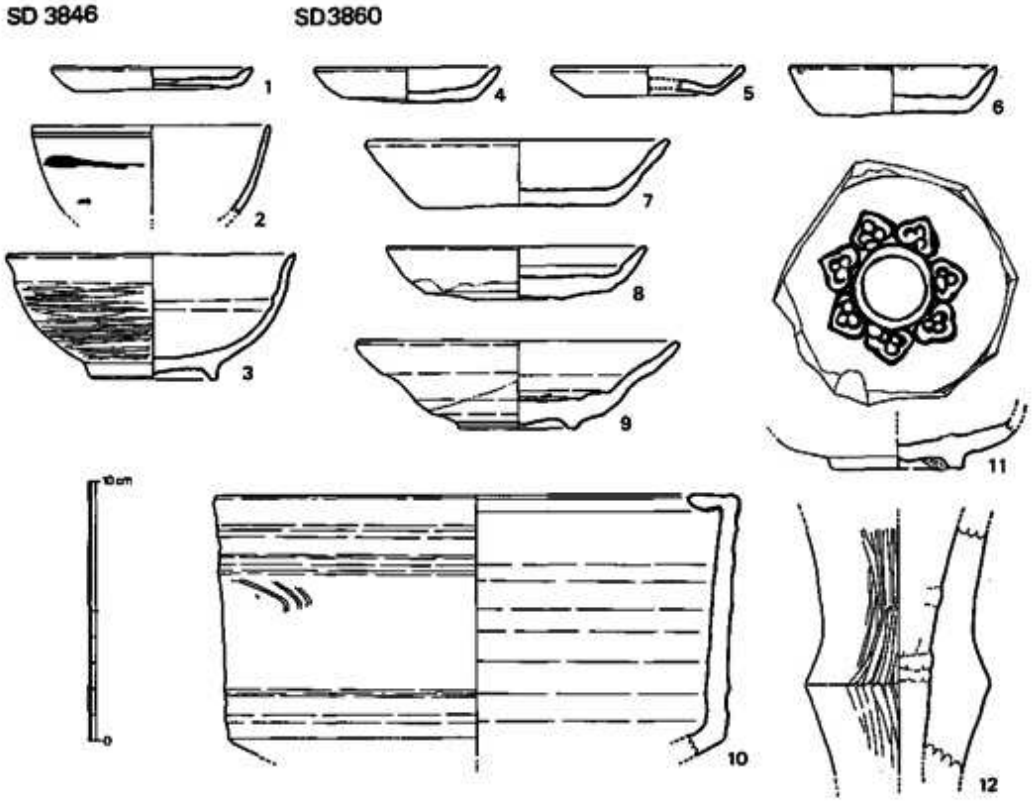
土師器

皿a（1）口径7.7cm、器高0.8cm、底径5.9cm。糸切りで板状圧痕を有する。

日本製陶磁器

染付

小椀（2）口径9.4cmに復原できる小椀片。外面の体部に雲様の染付が若干残る。肥前系。



第23図　SD3846・3860出土土器・陶磁器実測図

陶器（3）口径11.2cm、器高4.9cm。全体に淡い淡茶褐色の釉を施したあと、外面には刷毛で白色釉を塗る。肥前系。

SD3860出土土器・陶磁器（第23図、図版47　別表）

土師器

皿a（4～6）口径7.1～7.9cm、器高1.1～1.9cm、底径5.0～5.9cm。糸切り。4には板状圧痕がある。

杯a（7）口径11.6cm、器高2.6cm、底径7.4cm。糸切り。板状圧痕を有する。

中国陶磁器

白磁

皿（8）体部中位を屈曲させる皿のⅧ類。体部以下は露胎となる。

朝鮮製陶磁器

高麗青磁

杯（11）杯形の底部で、内面見込みの中心に白象嵌で円文とその周囲に7個の如意頭文を配する。

日本製陶磁器

青磁

香炉（10）口縁部を直角に折曲げ上面を平坦にして縁部とする。底部を欠失するが直線的な体部はやや外傾し、上位に2条、下位に2条の凸線を巡らし、その間に文様を施すが不鮮明である。残存部の内外面に淡青色味の釉をやや厚めに施す。復原口径20.4cm。肥前系か。

陶器

皿（9）唐津系の段皿である。胎土は淡灰色でやや粗い。釉は淡茶灰色を呈し、内面見込みに胎土目を有する。復原口径12.4cm。16世紀後半～17世紀初頭。

瓦質土器

花瓶（12）小片のため全形を知りえないが花瓶の頸部片とみられる。灰黒色を呈し外面は密にヘラミガキを施し、銀白色の光沢をもつ。

SD3865出土土器・陶磁器（第24・25、図版48～50）

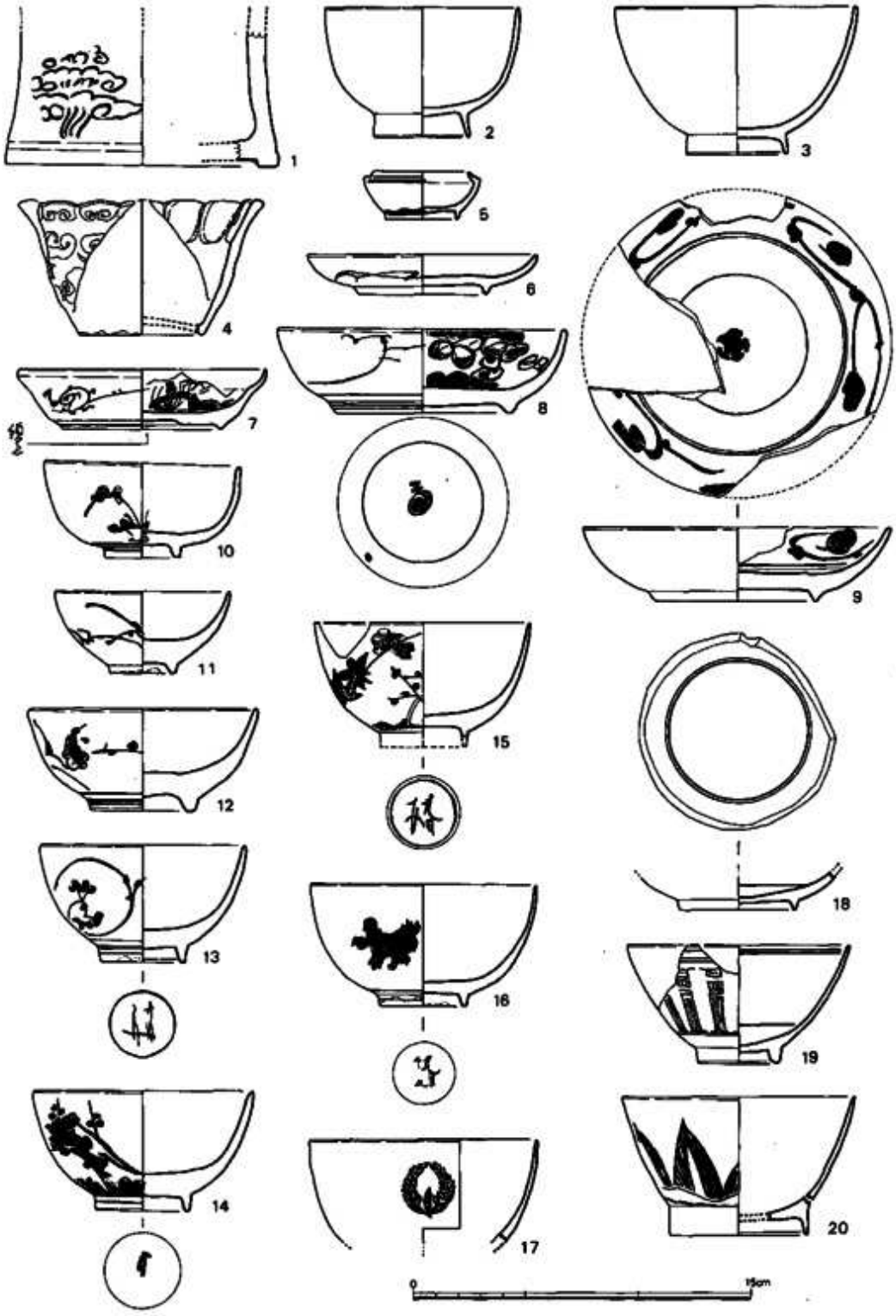
朝鮮製陶磁器

高麗青磁

酒会壺（1）体部下位と底部の小片である。胎土は灰白色を呈する。淡青気味の緑色釉をかける。残存部では畳付部が露胎となる他は見込みの全面に施釉。外面の体部下位には抽象化した樹木をヘラ描きする。

日本製陶磁器

白磁



第24図　SD3865出土陶磁器実測図(1)

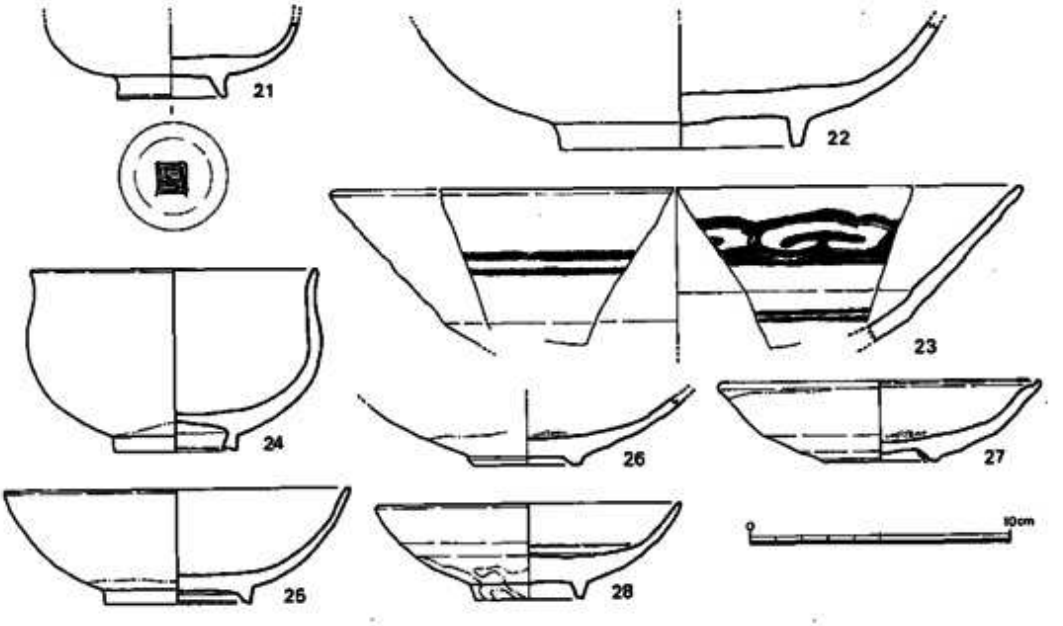
椀（2・3）いずれも純白の緻密な胎に透性のある釉を薄めに施す。2はやや小形で復原口径8.8cm、器高6.0cm。3は口径10.8cm、器高7.6cm。細い高台の先端は釉をカキ取っている。17世紀後半から18世紀代の肥前系白磁である。

杯（4）復原口径11.0cm、器高6.0cm。型造りで口縁端部は波形になり外面には雲形龍を表した浮文がある。透性のある青白色釉を全面に施す。江戸中期。

染付

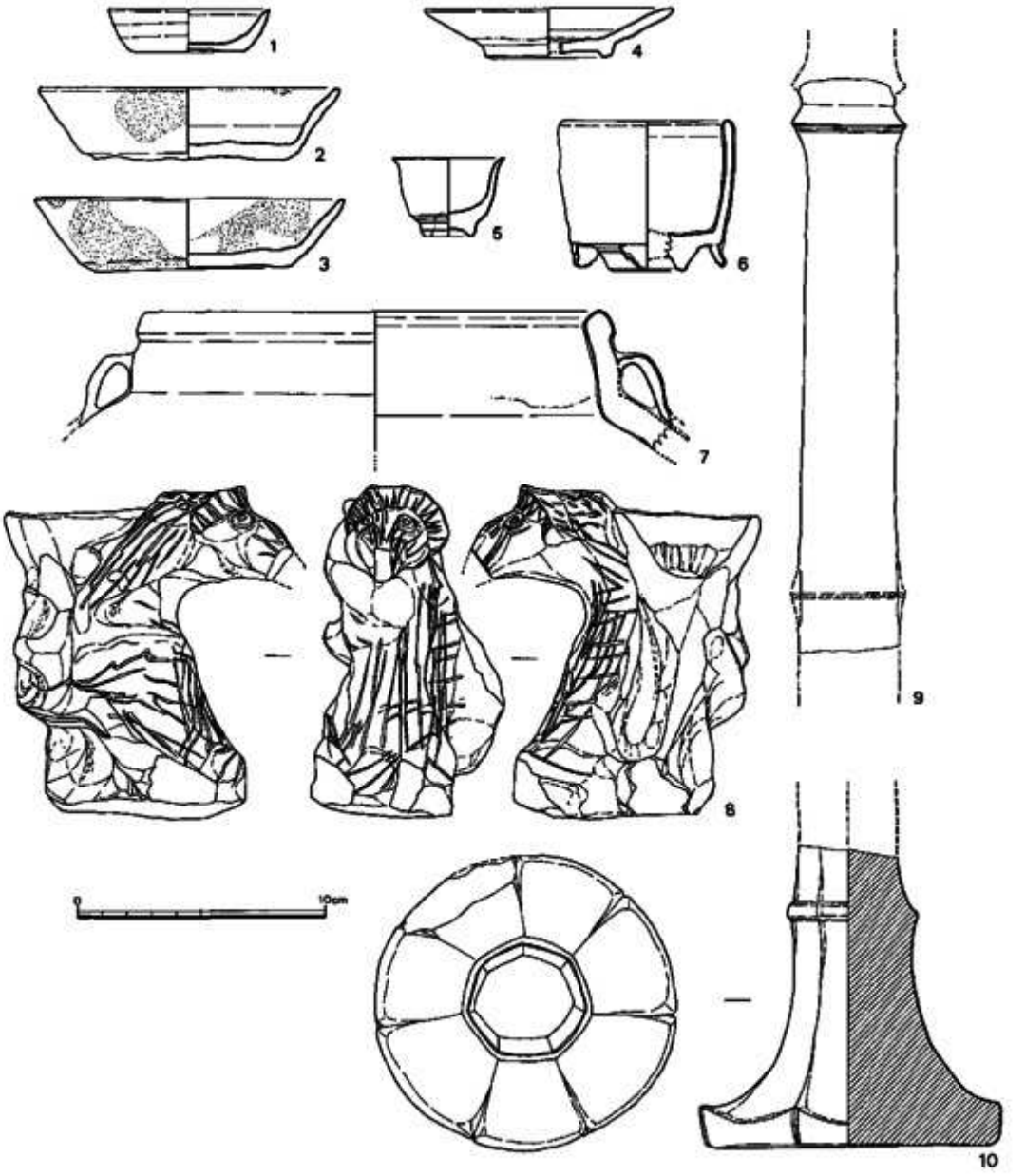
合子（5）ほぼ完形である。口径4.4cm、器高2.2cm。蓋受け部と高台畳付部が露胎となる。淡青色の呉須で2条の圏線を巡らす。白磁部は青色味のある白色を呈する。肥前系。17世紀後半代の可能性が強い。

皿（6～9・22・23）6は復原口径10.4cm、器高1.8cm。呉須は淡青色で内面にコンニャク印判、外面に松葉を描く。白磁部は淡青白色を呈する。肥前系。17世紀末～18世紀初頭。7は高台内面を二段にし、中心に「須恵」銘を入れる。中心部は施釉するがその外側は露胎にする。外面は唐草文、内面の側面は松・竹・梅を描き、見込みの中心には「壽」を描く。呉須の色は明るい青色を呈する。18世紀後半。8・9の染付は薄墨色で白磁部分は灰白色を呈する。内面見込み中心に5弁花のコンニャク印判、体部には梅・笹文様を描く。外底には「渦福」銘をいれる。高台畳付部は露胎となり、砂目がある。18世紀前半～中葉。波佐見系。9も同様に見込み中心に五弁花のコンニャク印判を有する。波佐見系である。22・23は大形の皿で呉須はくすんでおり白磁部分は灰色味が強い。肥前系で17世紀中葉。



第25図　SD3865出土陶磁器実測図(2)

小椀（10～20）10～14の呉須はくすんだ青色で白磁部分は灰青色味のある白色を呈する。12の内面は輪状に釉をカキ取る。18世紀後半。13の底部には「大明年製」銘を入れる。18世紀後半。14にも銘を入れるが判読できず。15・16の底部には「大明年製」の銘を入れ紅葉を手描きし、コンニャク印判を用いる。18世紀前半。17はコンニャク印判の「上がり藤」。呉須があざや



第26図　SK3863出土土器・陶磁器・土製品実測図

かで白磁部分が純白に近い上質の椀。17世紀末～18世紀前半代。18の割れ部にはウルシで接合した跡がある。10～20はいずれも肥前系。

青磁染付

椀（21）内面見込みに二重圏線、中央にコンニャク印判の五弁花。高台内側に「筒江」銘の染付。18世紀後半。

陶器

椀（24・25）24の高台内は深く削られ、新期の形態を示す。18世紀代。25は高台の削り込みが浅く古期のタイプである。17世紀後半代。見込みに梅花の染付がある。京焼風。

皿（26～28）いずれも淡茶灰色の粗い胎で淡緑灰色釉をうすくかける。体部外面の大部分は露胎。27は口縁部内面を凹状にする。内面見込みと高台部に砂目を残す。17世紀前半代。唐津系。28の胎土は灰白色で釉は濁白色。内面に鉄絵がある。18世紀代。内面見込みの釉を輪状にカキ取る。体部外面下半は露胎となる。波佐見系。

SK3863出土土器・陶磁器（第26図、図版51　別表）

土師器

皿b（1）口径6.6cm、器高1.8cm、底径4.6cm。糸切り。

杯（2・3）口径12.1～12.5cm、器高3.0cm、底径7.8～8.0cm。糸切り。

中国製陶磁器

白磁

皿（4）白磁皿II類である。口径12.2cm、器高2.0cm。見込み部分の釉を輪状にかき取る。

小椀（5）口径4.5cm、器高3.2cmの小椀で口縁部を外反させる。釉は薄めに施され、高台部下位は露胎である。

青磁

香爐（6）口径7.0cm、器高6.0cmをはかる。中央に高台を有し、周囲に三足の脚を有する。高台部を除いた全面に茶緑色の釉が厚く施される。

黒釉陶器

四耳壺（7）口縁部の小片である。口径21.8cm、器高26.5cm。耳は一個しか残存していないが、金光寺推定地出土例から四耳壺になると考えられる。胎土は精良で乳白色を呈する。真黒色を呈する釉は厚く、粘性が強くガラス質となる。耳には金光寺例のように装飾はない。

土師質土器

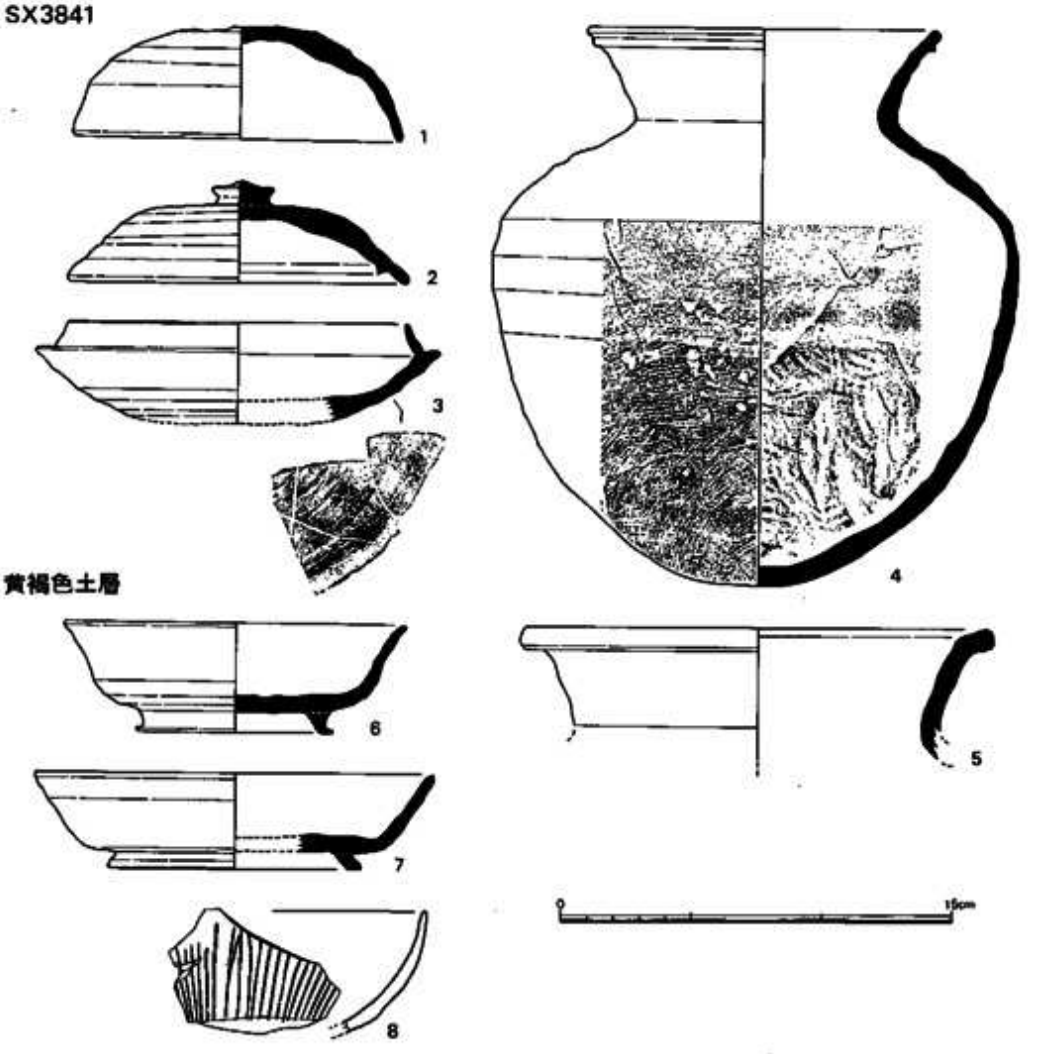
動物形燭台（8）表面の半分は黒色ないし黒灰色、他は淡茶色を呈する。背後に盃形をした燭台状のものを有しているので燭台として用いたものであろう。動物の種類は定かではないが、全体にヘラ先で体毛らしきものをあらわし、頭部にはたてがみ状のものを表現している。背後には尾状のものを表現し、その部分に盃状の燭台をつけている。

竹形燭台（9・10）9・10は直接には接合しないが、胎土・表面の調整・形状から同一個体と考えられる。9の竿部分は竹を表現しており、下部の節は剥離して欠失しているが一節分(23cm)が残存している。断面は正円ではないが径3.8cm前後である。表面は摩滅して色あせ、黒灰色を呈している。10は9の下部と考えられる。最下部は花弁様に面取りをし、台部が安定するようにラッパ状になっている。台部の径は12.0cm。

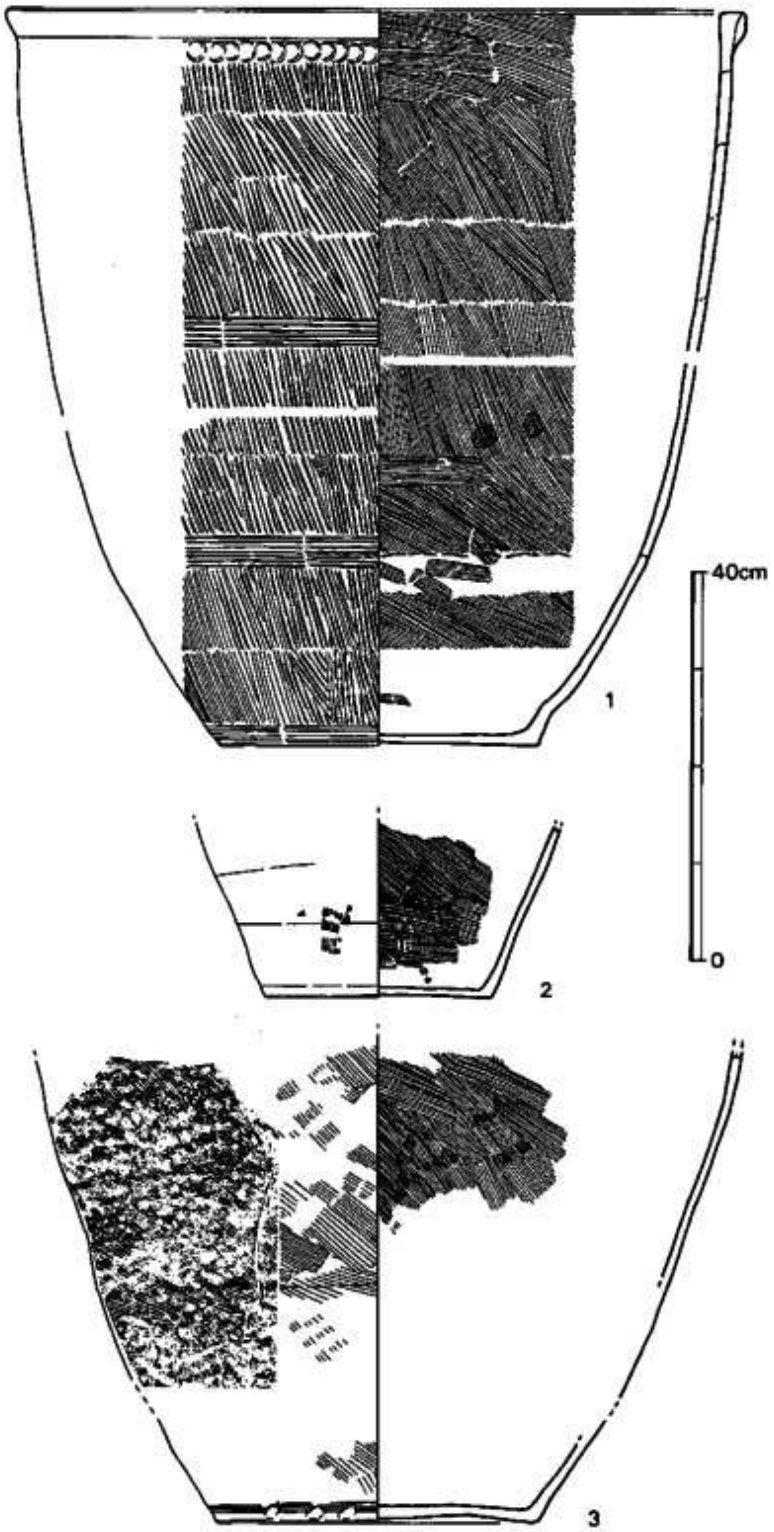
SX3841出土土器（第27図、図版53　別表）

須恵器

杯蓋（1・2）1は口径12.7cm、器高4.4cm。外面の天井部は回転ヘラ削り調整する。また、



第27図　SX3841、黄褐色土層出土土器実測図



第28図　SX3864・3867・3872埋甕実測図

天井部に「ヘラ記号」を有する。胎土は精良で砂粒をわずかに含む。2は口径13.2cm、器高4.9cm、外面天井部は回転ヘラ削り、他はヨコナデ。内面天井部にヘラ記号を有す。胎土中には砂粒が目だつ。

杯身（3）復原口径13.2cm。蓋受け部は高い。底部は回転ヘラ削り調整。

甕（4・5）4はほぼ完形で口径13.6cm、器高21.6cm。体部上位に最大径があり、底部はとがり気味に丸くする。口縁部外面には凸帯を巡らす。内外面の体部上位から口縁部はヨコナデ、外面の体部中位以下は回転ヘラ削りの後刷毛目調整する。5は口縁部の小片で外面は平行叩きの後ヨコナデ調整する。

SX3864・3866・3867・3868・3872出土土器（第28～30図、図版52）

素焼土器

大　甕

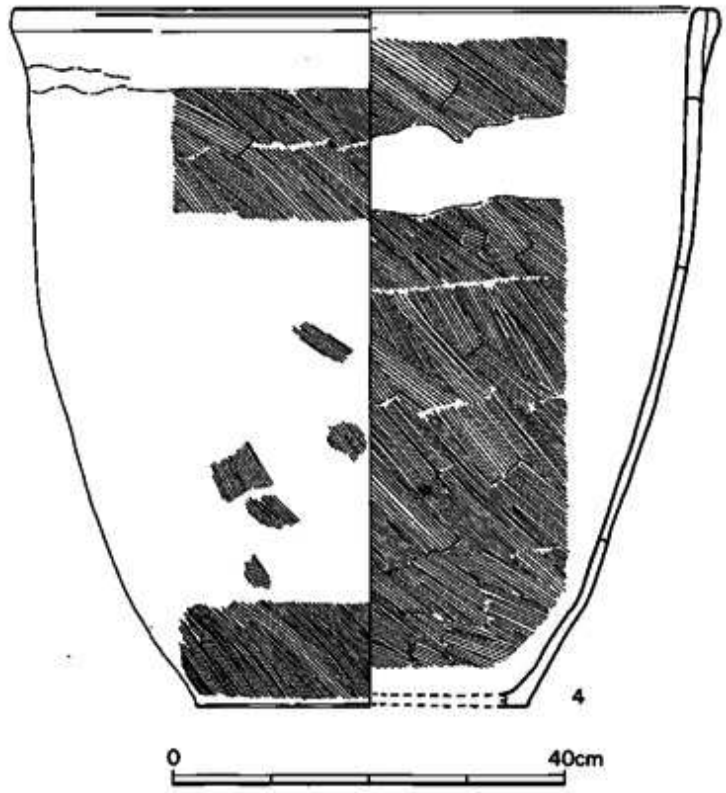
1.（SX3864）上半部は口縁から42cm程、下半部は底部から40cm程のところまで残存するが、上・下で直接接合する個所がなかった。大きさおよび調整等の観察から下半部の最も残りの良い部分が、外面の上位横方向刷毛目の直下に来ると思われる。図上では接合・復原して示した。復原器高は75～76cm、口縁はやや扁円形を呈しており口径は71～75cm、底径は32.6cmを測る。口縁はほぼ直口し、外側に扁平な粘土帯を貼付して肥厚させている。粘土帯下は擬口縁を呈しており、粘土帯が接着しやすいように刷毛目を残している状態がよく観察できる。粘土帯積上技法により成形しているが、粘土帯の幅は底部近くの2段、口縁近くの4段は8cm前後、胴中位の2段は12～13cmで底部を除くと8段積上げたものと考えられる。外面は10mmあたり3本程、工具原体幅40mm前後の粗い縦・斜方向の刷毛目を全面に施すが、中・下・底部の3ケ所には同一工具で横方向の刷毛目を施している。内面は10mmあたり5～6本のやや粗い刷毛目で横・縦・斜方向の刷毛目を施している。底部および底部付近は刷毛目の後、ナデを加えている。また底部から20cm程の所には叩きあて具の痕跡が認められる。内外の刷毛目は対応しており7段階で成形されたことを示している。刷毛目と接合部もほぼ対応するが上から2段目では明らかに粘土帯2段分を含む。底部は3mm程上げ底を呈する。底部の器壁厚は7mm程、胴部の器壁厚は9～12mmとやや分厚い。灰黄色を呈し、胎土には細粒の砂を含み、焼成はやや軟質といえよう。外面には黄色付着物が認められるが、特に底部付近に顕著である。

2.（SX3867）底部付近のみ残る。底径は23.4cmとやや小ぶりである。外面は器面の風化著しく部分的にしか刷毛目は残らない。刷毛目は10mmあたり10～13本の細かいものである。内面は10mmあたり9～10本のやや細かい刷毛目、内底はカキ目および不整方向の刷毛目で調整している。底部は3mm程上げ底を呈する。底部の器壁厚は8mm程、胴部の器壁厚は8～10mmを測る。外面は橙褐色、内面は灰褐色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は良好。

3.（SX3872）下半部が残るが、胴部と底部は直接接合する箇所はなかった。底部径は33cmを測

り、SX3864と同大かやや大きめのものと思われる。外面は叩きの後、10㎜あたり３本程の粗い刷毛目で叩き痕を掻き消すが、叩き痕がよく観察できる。一見弥生時代の甕棺に認められる叩き痕と同種のもののように見えるが詳細な検討を要しよう。底部の外側には横方向の刷毛目が施される。内面は10㎜あたり３～５本の外面のものとは異なる粗い刷毛目を施している。内底にはカキ目があり、中央部には不整方向の刷毛目が認められる。底部は５～７㎜程の上げ底を呈する。底部の器壁厚13㎜、胴部の器壁厚10㎜程を測る。内外ともに灰白色を呈し、胎土には１～２㎜大の石英・雲母・角閃石を含み、焼成は軟質である。

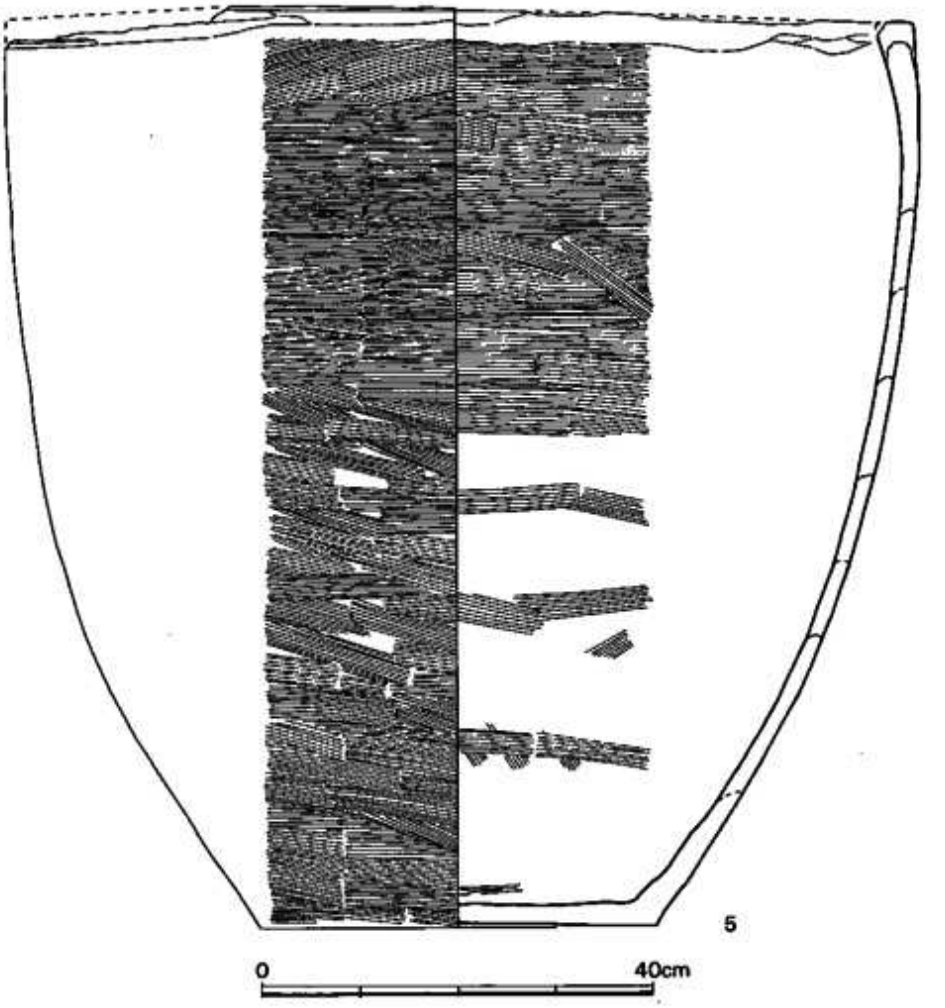
４.（SX3866）底部を欠失するが全容を窺うに支障はない。器高72.0cm、口径71.0cm、底径32cm程を測る。８～10cm程の粘土帯を底部を除き８段積上げて成形している。口縁外側には扁平な粘土帯を貼付し、肥厚した口縁部をつくる。外面の上位と底部近くは10㎜あたり７～８本、工具原体幅25㎜程のやや粗い斜方向の刷毛目を施す。胴部中位の上半は器面が剥落しているが下半は刷毛目の後、ナデを加えている。内面も一部器面が剥落した部分が認められるが、外面のものと同一工具による斜方向の刷毛目が施されている。刷毛目は５段階に分けて施されており、



第29図　SX3866埋甕実測図

粘土帯１段に対応するものと２段に対応する部分がある。胴部の器壁厚は12～14mmとやや分厚い。灰黒色を呈し、胎土には細粒の砂を微量に含み、焼成は軟質である。外面および内面の底部付近をのぞく各所に黄色付着物が認められる。

５．(SX3868) 器高94.2cm、口径92.8cm、底径40.6cmを測る。口縁・底部をのぞき幅８～10cm程の粘土帯を10段積上げて成形している。口縁部はやや内傾しているが、口縁端には粘土帯を被せるように貼付し肥厚した口縁部をつくる。この部分は擬口縁を呈しており、粘土帯が接着しやすいように沈線２条を施しているのが観察できる。外面は10mmあたり６～７本のやや粗いが整った横方向の刷毛目、内面の上位は10mmあたり４本前後の粗い刷毛目と７～８本のやや粗い横方向の刷毛目の両者が認められ下位は刷毛目の後、ナデているが粗い刷毛目が残っている。



第30図　SX3868埋甕実測図

刷毛目の工具原体幅は25mm前後である。底部は6mm程の上げ底を呈する。底部の器壁厚は20mm程、胴部の器壁厚は15～18mmと分厚い。灰黒色～黒色を呈し、胎土には細粒の砂を微量に含み、焼成は軟質である。内面の上半部の全面、下半の一部、外面のほぼ全面に黄褐色の付着物が認められる。

これらの大甕は他の出土遺物に明治時代に下るものがほとんどみられず、染付等の年代からみて江戸時代後半～末頃のものと考えられる。生産地の比定等今後検討を要する課題である。

年代的には近世の大甕であるが、粘土帯積上技法をはじめ成形・調整の段階等に弥生時代の甕棺等の製作技術とも共通する技法がみられることは興味深いが、弥生時代の甕棺に比べ、大甕を作るには底径を大きくし、器壁を厚くし、器高・口径がほぼ同大となっている点等、相異なる面も多く製作技術を別の角度から見ても諸々の検討ができそうである。

層位出土土器

黄褐色土層出土土器（第27図　別表）

観世音寺造営に伴う整地層出土の土器である。

須恵器

杯（6・7）6は復原口径13.2cm、器高4.2cm。体部の下位は回転ヘラ削り調整、他はヨコナデ調整する。7は口径15.4cm、器高3.7cm。大きく開く高台を有する。

土師器

杯（8）内面に縦方向の暗文を施し、体部外面は手持ちヘラ削りする。胎土は精選され緻密である。

暗茶色土層出土土器（第31図、図版53・54　別表）

土師器

皿a（4～7）口径7.5～8.6cm、器高1.1～1.3cm、底径5.3～6.6cm。糸切り。

皿b（1～3）口径6.6～7.5cm、器高1.4～1.6cm、底径4.5～5.2cm。糸切り。板状圧痕を有する。

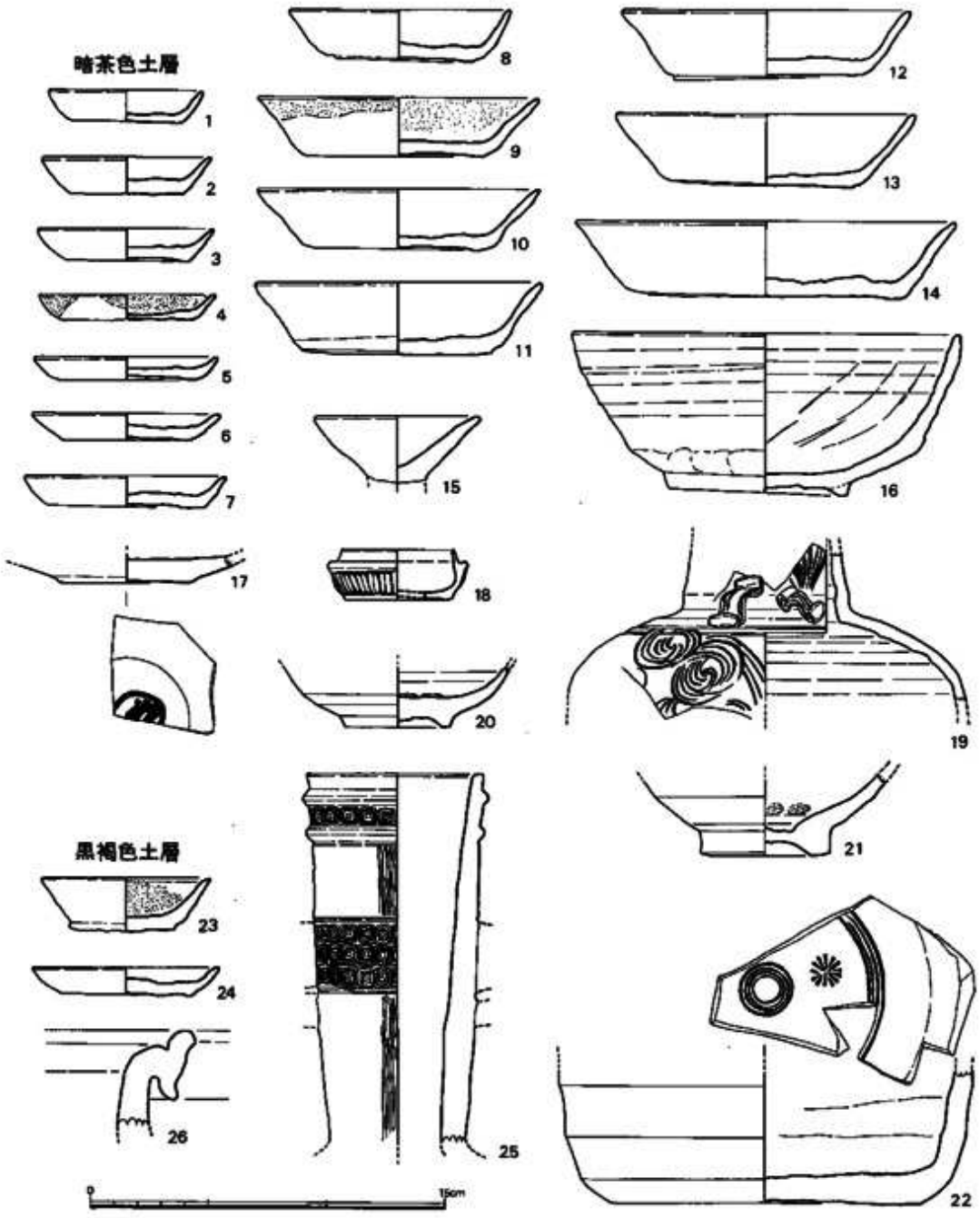
皿d（8）口径9.4cm、器高2.2cm、底径5.7cm。糸切り。板状圧痕を有する。

杯a（9～14）9～13は口径12.0～12.7cm、器高2.6～3.1cm、底径7.5～7.8cm。14は大形で口径16.2cm、器高3.2cm、底径10.8cm。糸切り。板状圧痕を有する。

瓦器・瓦質土器

燭台（15）口径7.0cmで底部に接合痕があり、燭台の杯部と思われる。黒色に燻される。第26図8に類する燭台が想定される。

椀（16）口径16.5cm、器高6.8cm。燻しは甘く灰白色を呈する。内面はミガキを施す。



第31図　暗茶色土層・黒褐色土層出土土器・陶磁器実測図

中国陶磁器

白磁

皿（17）白磁皿VI類。底部は露胎で墨書があるが判読できず。

合子（18）復原径4.8cm、器高2.2cm、体部下位以下と身受部は露胎となる。釉はやや青色味のある白色を呈す。

青白磁

壺（19）双耳壺の破片である。外面には櫛による渦巻の連続文を施す。全面に透性のある淡青色釉を施す。割れた断面に漆による補修痕がある。

朝鮮陶磁器

杯（20）底部片で外面の体部下半から高台部は露胎とするが、見込み部分は施釉する。内面見込みに目跡７個がある。釉は黄色味のある緑灰色を薄めに施す。李朝期。

陶器

椀（21）淡茶色の粗い胎で、高台畳付を除いた他は不透明の白濁釉を施釉する。見込みは凹み平坦ではない。目跡を有する。李朝期か。

灰釉陶器

鉢（22）上位を欠失するが底部の平坦な鉢状のものである。外面の体部下位以下を露胎とするほかは透性のある淡緑色釉を施す。見込みにヘラ先で同心円文・圏線・菊花状文を施す。

黒褐色土層出土土器・陶磁器（第31図、図版54　別表）

土師器

皿ａ（24）口径7.9cm、器高1.2cm、底径5.5cm。糸切り。板状圧痕あり。

皿ｂ（23）口径7.2cm、器高2.3cm、底径4.5cm。糸切り。油煙が付着する。

瓦質土器

花瓶（25）花瓶の口縁部片である。口径7.6cmでほぼ直線的な口頸部はやや外傾気味に開く。口縁部に２条の凸帯を貼付しその間に雷文をスタンプする。また中位に沈線を施し３列の雷文帯を施す。この部分には耳の貼付痕が残る。外面は縦方向に細かいヘラミガキを施している。漆黒色の光沢をもつ。

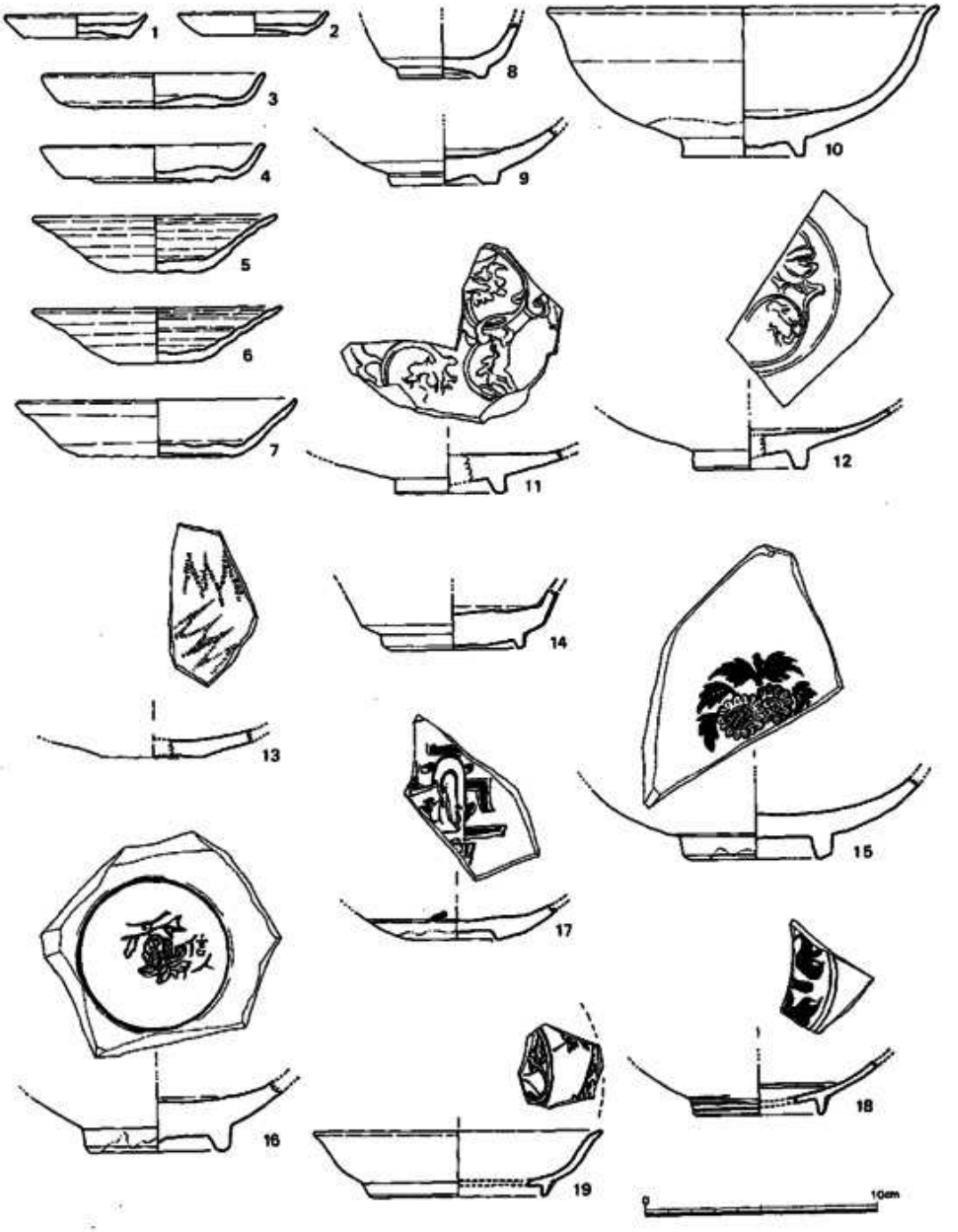
陶器

甕（26）備前産の口縁部小片である。

茶褐色土層出土土器・陶磁器（第32図、図版55　別表）

土師器

皿ａ（１～４）１・２は口径6.2～6.6cm、器高1.0cm、底径4.4～4.7cm。３・４は口径9.8cm、器高1.5～1.6cm、底径5.2～5.4cm。いずれも糸切りであるが３・４は糸切り部分が円盤状にわずかに出る。



第32図　茶褐色土層出土土器・陶磁器実測図

杯b（5～7）口径10.6～12.3cm、器高2.4～2.5cm、底径3.6～6.8cm。糸切り。5・6はb類の典型的な形態でヨコナデ痕が明瞭である。

中国陶磁器

白磁

小椀（8）畳付部を除いて全面にやや青色味のある白色透明釉を施す。肥前系。17世紀中頃。

椀（9・10）9の体部下位以下は露胎で内面に緑青色釉、外面に黄白色釉を施し釉のかけ分けをしている。見込みの釉を輪状にカキ取る。胎は濁白色で粗く、柔らかい感じである。10は幅広の高台を有する。口縁部を外反させる。胎土は灰白色で釉も灰白色味を帯びる。体部下位以下は露胎となる。

杯（11・12）いわゆる枢府磁である。いずれも体部は丸く内弯気味にするものである。高台内側の斜行する部分に黄褐色に変化した砂粒が焦げ付く。釉は淡く青色味を帯びた白濁色。12は浮文が不鮮明である。

青磁

小椀（14）龍泉窯系青磁で見込み中心部の釉をカキ取る。外底高台部中心は露胎とする。淡緑色釉が厚めに施される。

椀（15・16）いずれも龍泉窯系青磁。15は高台外側を斜めに削り細くする。見込みに菊花をスタンプする。16には蔓性の果実と「信人」と判読できるスタンプがある。

青白磁

皿（13）底部には幅広の低い高台を削り出す。内面には櫛目文を施す。淡青色味のあるやや透明性のある釉は体部下位以下を露胎とする。

染付

皿（17・19）17は皿C群（小野正敏氏の分類による）でいわゆる「碁笥底」をもつ。内面見込みに人形化した「寿」の吉祥文字を描く。19はB群の端反りの皿で高台は斜めに面取りする。

椀（18）C群の椀で広く開いた体部で、見込みが高台内に凹む形となる。小片のため見込みの文様は不明。

その他の遺構出土の土器（第21図　別表）

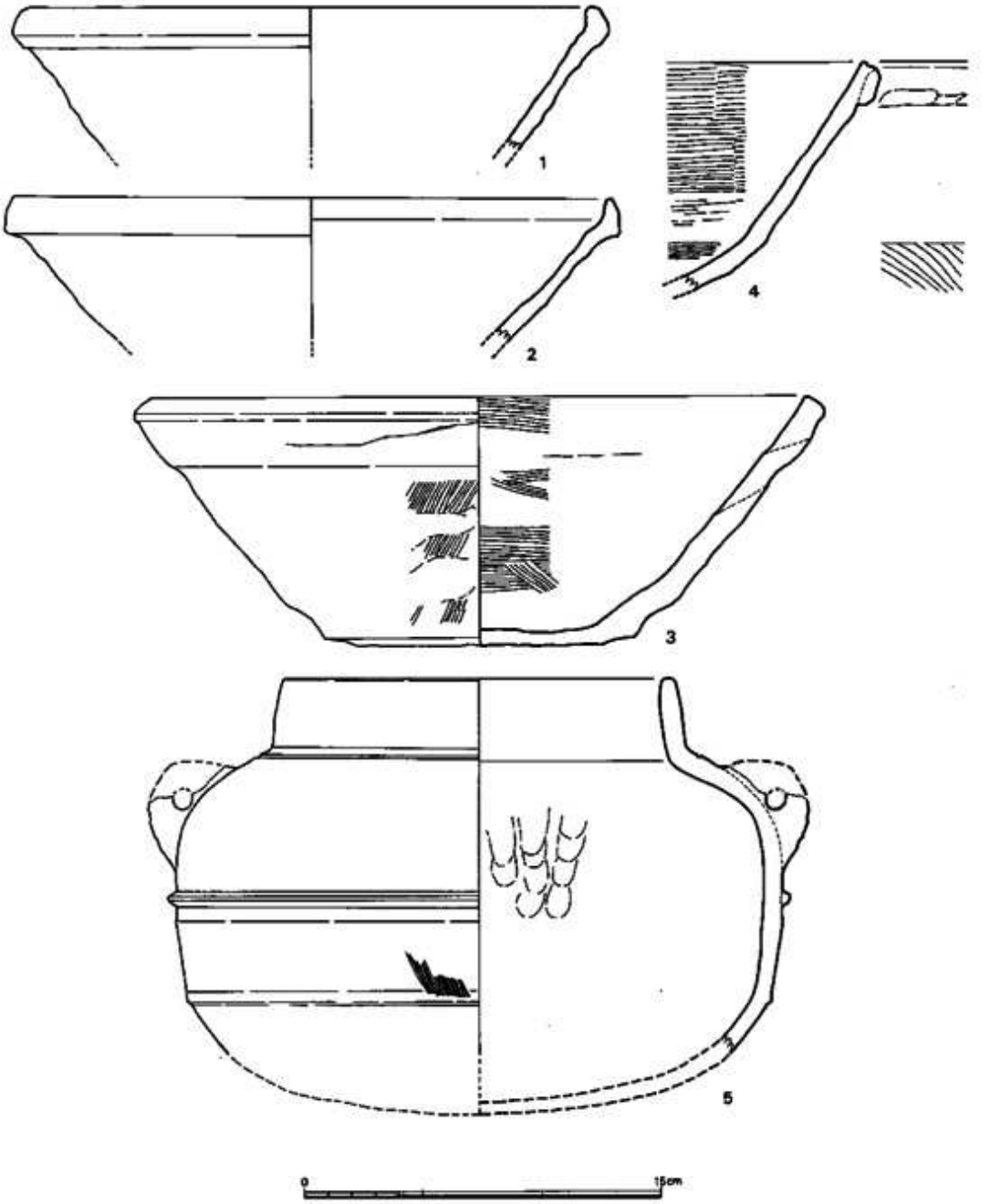
土師質土器

鍋（3）口径28.0cmに復原できる土師質の鍋である。外面の口縁部に凸帯を巡らし鍔状にする。内外面ヨコナデで器肉は全体に薄くつくっている。全体に茶褐色を呈するが外面には煤が付着する。SX3875出土。

その他の層位出土土器（第33図、図版54・56　別表）

須恵質土器

鉢（1・2）こね鉢で内面は使用により摩滅して平滑になる。1は復原口径25.2cm。暗茶色



第33図　層位出土鉢・鍋・茶釜実測図

土層出土。2は復原口径26.0cm。黒褐色土層出土。色調は青灰色を呈する。東播系。

土師質土器

鉢（3）外面は斜め方向の刷毛目調整ののちナデ調整しており指頭圧痕が残る。内面は横方向の刷毛目調整を施す。内面の底部近くは使用により摩滅して平滑になる。つくりは雑で粘土帯の継目がよくわかる。口径29.2cm、底径13.0cm、器高10.5cmをはかる。暗茶色土層出土。

鍋（4）体部の破片で外面はナデ調整、底部外面は粗い刷毛目調整。内面は横方向の刷毛目調整を施す。外面は煤で真黒になる。黒褐色土層出土。

釜（5）球形の体部にやや内傾する直口縁がつく。両肩には径0.9cmの孔を穿った耳を付す。頸部には一条の沈線をまわす。体部の中位および体部と底部の境に断面三角形の凸帯を貼付する。外面は縦方向の刷毛目調整の後ヨコナデ調整を施す。内面はナデ調整で指頭圧痕が残る。胎土は精良。色調は茶褐色を呈する。外面に煤が付着する。復原口径16.5cm。暗茶色土層出土。

中国陶磁器

染付

椀（a）底部を欠失するが、口径12.0cm前後のいわゆる饅頭心の椀の系統のものであろう。小片であるため文様構成もわからないが、残存部にある文様は簡略化された唐草文風である。白磁部分はやや青色味をもつが文様の呉須は比較的明瞭である。明末。南東部の小ピット出土。

皿（e）口径16cm前後、器高3.5cm前後の呉須の皿である。これらの破片は同一個体と思われるが直接には接合しない。白磁部は灰色味が強い濁白色を呈する。呉須の発色は薄墨色気味で、やや明瞭さを欠く。全面施釉で高台畳付と内面付近に砂目がある。16世紀末～17世紀前半代。

日本製陶磁器

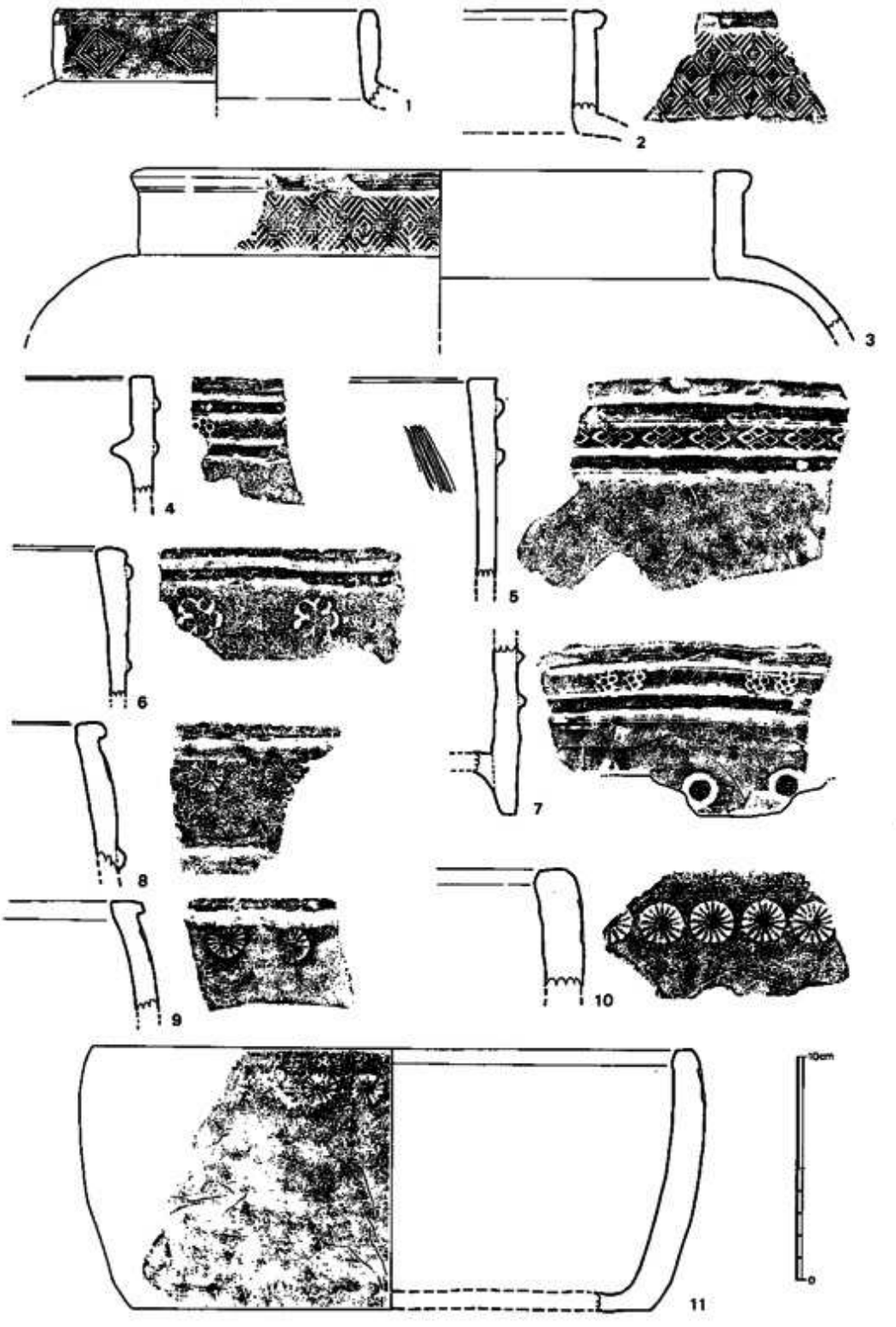
赤絵蓋（b）口径5.8cm、器高2.5cmの返りを有する蓋でやや青色味のある透明釉をかける。返りの部分は露胎とする。上面には赤絵はなくなっているがその痕跡がかすかに残る。17世紀後半～18世紀初頭の肥前系磁器。SK3863の上面から出土。

水注（c）小片であるため全形は知り得ないが型作りの水注かと思われる。底部の高台は円盤状の平高台で露胎となる。不透明な白濁釉の上に赤・青・淡青色で山水風の絵を描く。17世紀後半～18世紀初頭の柿右衛門である。高級品である。

赤絵椀（d）椀の小片で、見込みに市松模様を、体部外面に円と直角文の幾何学文様を描く。赤絵は薄れているが17世紀中葉の初期の色絵の様相を呈する。第III期遺構の層位から出土。

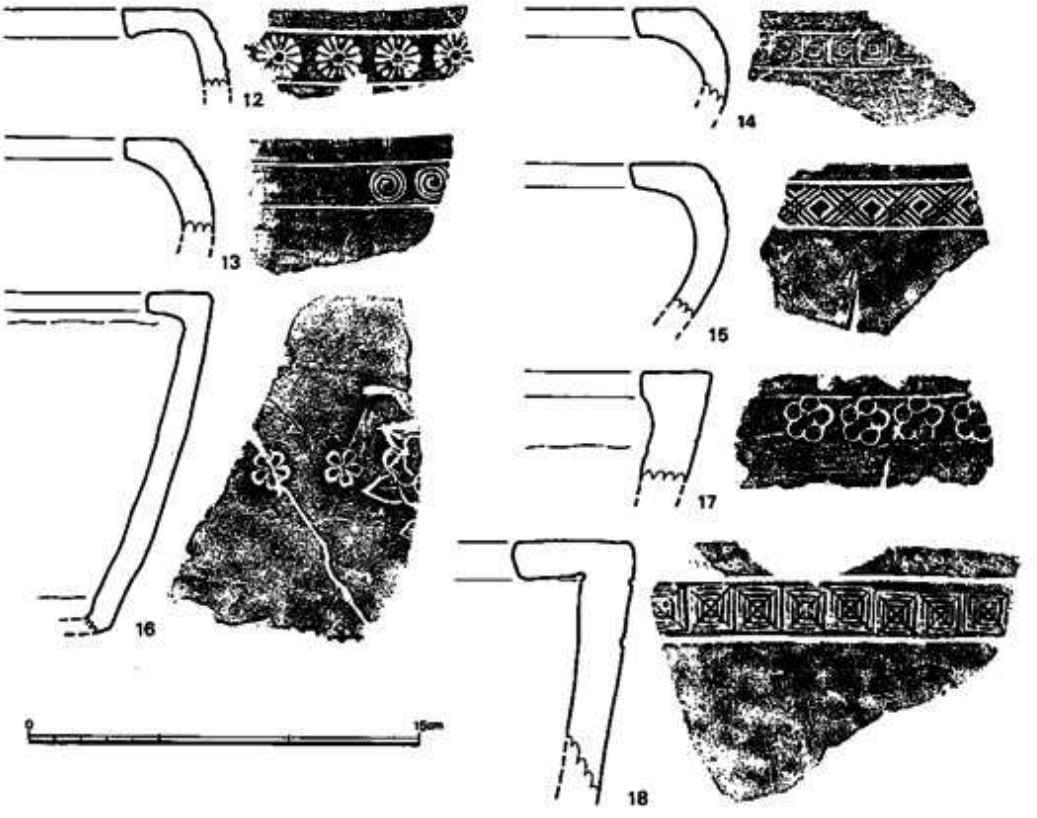
瓦質土器（第34・35図、図版57）

鉢（1～18）1～3は丸味をもつ体部に直立する口縁がつくもの。1は升文、2・3は三本直違文を押印する。4～7は直線的な体部をもつもので口縁部の外面に断面蒲鉾形の二条の凸帯を貼付する。4は口縁部内面に受けを設ける。4・6・7は梅花文、5は四菱文を押印する。7は脚部で竹管文が二ケ所に押印される。8～11は体部が丸味をもって立ち上がるもので8・



第34図　瓦質土器実測図(1)

9は口縁外端部に断面蒲鉾形の凸帯を貼付する。すべて菊花文を押印する。12～15は口縁が内側に長く突出するもので体部が偏球形になり、16～18は体部が直線的になる。12が菊花文、13が渦巻文、14が雷文、15が三本直違文、17が梅花文、18が升文を押印する。16は大きめの花文の横に2個以上の小さな梅花文を配している。すべて外面は黒灰色に燻され、硬質に焼成されている。1～3は暗褐色土下層、4・8・9・17は茶褐色土層、5・6・11～13・16はSD3860上層、14はSD3860下層、7・15が発掘区中央部の溝状遺構、10はSD3842、18は発掘区東南部の石群中から出土。



第35図　瓦質土器実測図(2)

瓦類

軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・埼・丸瓦・平瓦片などが出土している。観世音寺の調査では講堂跡（第126次、1991年）・宝蔵東区（第45次、1977年）に次ぐ出土量であった。

遺構との対比から瓦の年代観の上で特に問題とするような出土状況はなかった。従って講堂跡の調査をはじめこれまでに得た編年観に従って概要報告をする。

第130次調査では南門跡・塔跡・回廊東南隅付近・南門跡の西側で築地推定地の断ち割り調査を合わせて行なっている。軒瓦の概要報告では、それぞれの部分に分けて報告する。

今回の調査では破片資料が多く瓦当文様全体が理解しにくい。出来得るかぎり復原的に図示することにつとめたが、そのままのものも多い。今後改善をはかりたい。

軒丸瓦（第36～39図、図版58～61）

SD3840からの出土が多い。奈良・平安時代の軒丸瓦13種、鎌倉・室町時代の巴文軒丸瓦（講堂跡概要報告でⅠ類としたもの）9種、江戸時代の巴文軒丸瓦（同上・Ⅱ類）7種に分け得る。

第36図1は老司Ⅰ式軒丸瓦である。49点が出土し奈良・平安時代の軒丸瓦の約50パーセントを占める。老司Ⅰ式軒平瓦の頃で改めてふれたいと考えているが、老司Ⅰ式軒丸瓦に2つの種類がある。瓦当文様にその差は見い出していないが、極めて精良な胎土のもの（a類）と一定量の砂粒を含むもの（b類）とがある。出土した49点について見ると35点がa類に11点がb類に分け得る。この差の持つ意味については老司Ⅰ式軒平瓦と合わせて考えたい。

2は外区内縁に忍冬唐草文を配置した軒丸瓦で、南面築地東半部（第122次、1990年）の調査の井戸SE3680の埋没過程で1と共伴した軒丸瓦である。観世音寺創建時の軒瓦の1つである。8点出土。

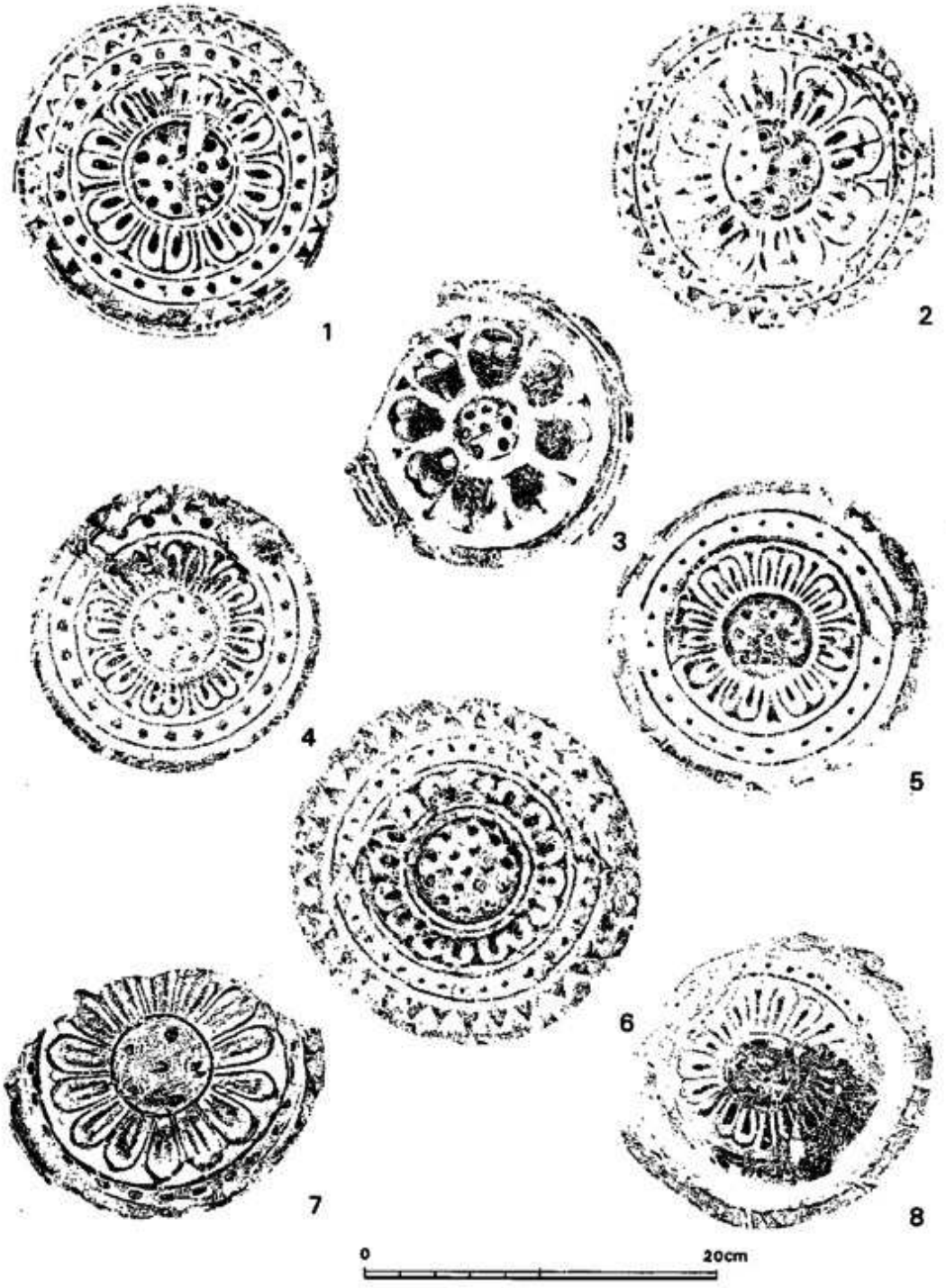
3は百済系単弁軒丸瓦である。1・2とともに観世音寺創建期のものと考えている。外区の圏線が三重となるものが観世音寺では多いが今回の出土例の中には素文縁のものもある。5点出土。

4は鴻臚館Ⅰ式軒丸瓦である。大和興福寺系の軒瓦で老司Ⅰ式軒瓦と比較した場合、やや遅く成立したものと理解されている。観世音寺では老司Ⅰ式が圧倒的に出土量が多いのに対し大宰府政庁跡第Ⅱ期の遺構や筑前国分寺からの出土例が多い。1点出土。

5は鴻臚館Ⅱ式軒丸瓦で筑前国分寺の創建時の軒瓦と考えられている。複弁8弁蓮華文の弁のうち1つが単弁となる特徴がある。3点が出土している。

6は大宰府政庁跡前面不丁官衙推定地（第87・90次、1984年）の調査でSD2340と呼ぶ天平期の木簡を出土した溝から同笵例が出土している。瓦当文様の構成や瓦当裏面下部の凸帯など老司Ⅰ式軒丸瓦によく類似している。5点出土。

7は14の蓮弁があり各弁に2つの子葉が配置されている。学校院中央部（第37次、1975年）



第36図　軒丸瓦拓影(1)

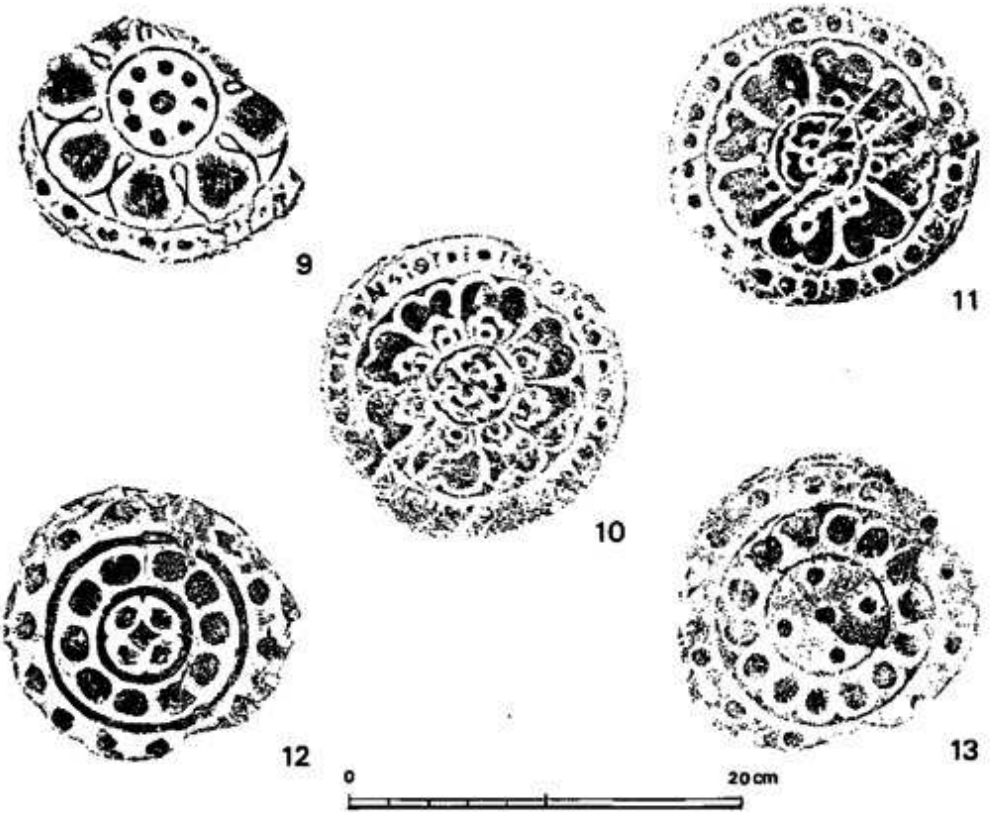
の調査などでの出土例があるが大宰府史跡全体では極く少ない出土量である。本例では横方向に木笵の痕を残す。1点出土。

8も全体の出土量は少ない。複弁蓮華文を意図したものであるが花弁が3つ連続する部分があったり間弁が瓦当の中心に向いていなかったりと文様の均整を欠く。1点出土。7・8とも奈良末～平安時代のものと思われる。

第37図9は観世音寺の平安時代を代表する軒丸瓦である。箱崎八幡宮にも類例があるので10世紀前半頃のものとなろうか。本例では木笵の痕が縦方向に残る。7点出土。

10・11は一見異なった瓦当文様のように見えるが同一の笵型で彫りなおしの関係にある。10が古く11が新しい。安楽寺創建時の軒瓦と考えられている。合わせて7点出土。

12は中房に1＋4の珠文を配置し単弁10弁の軒丸瓦である。外区には13の連珠文を置く。中房中心の珠文は四角形に近く周囲の4つの珠文は算盤玉に近い形状で瓦当文様の特徴となっている。観世音寺では小子房推定地（第70次、1980年）・寺域東南部（第117次、1988年）の調査などに同笵例がある。3点出土。



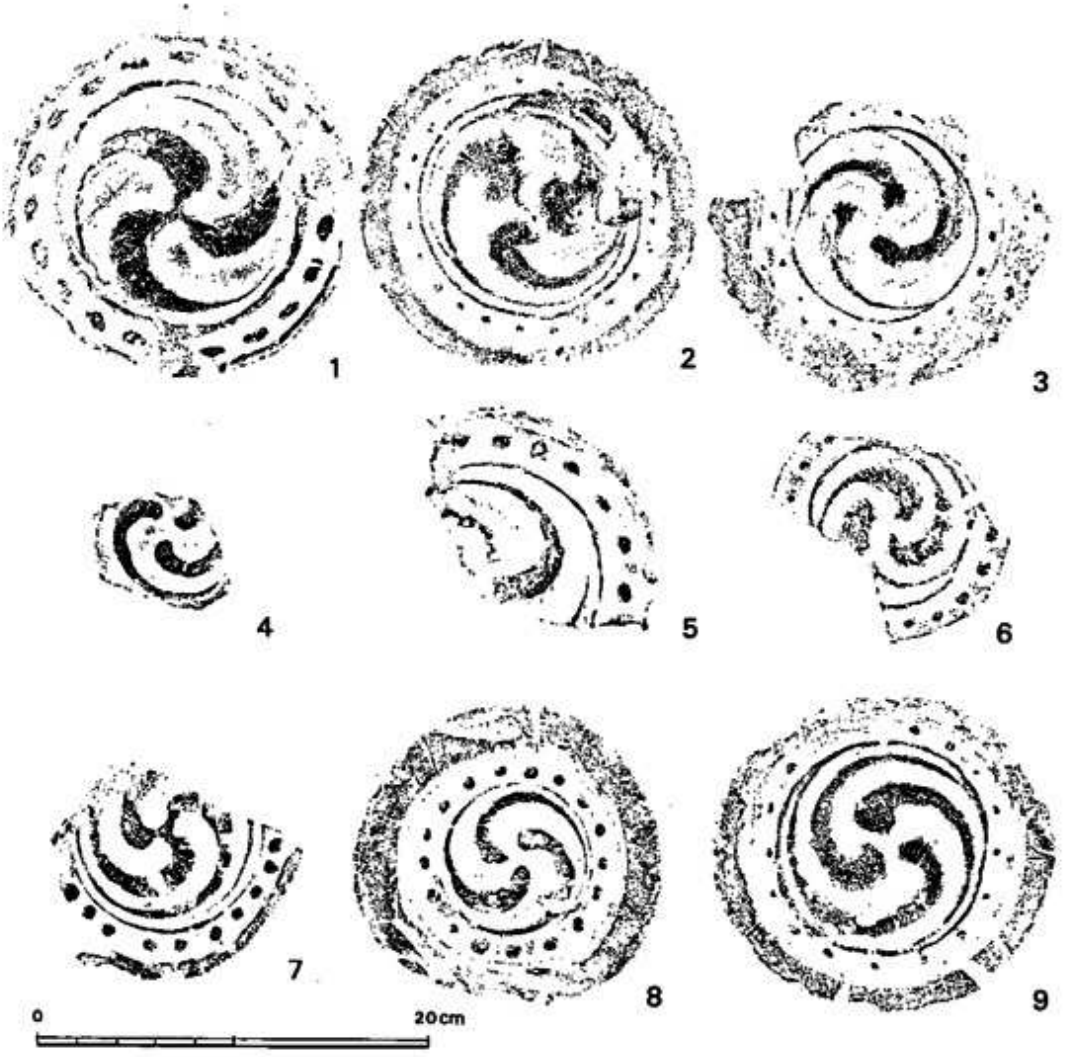
第37図　軒丸瓦拓影(2)

13は中房に１＋４の珠文と弁区には14の単弁を配置し外区には13の珠文を置いている。筑前国分寺跡・大宰府政庁跡・安楽寺など出土する範囲は広い。６点出土。

第38図は巴文軒丸瓦である。１は左廻りの巴を配し界線を挟んで外区には21の算盤玉状の珠文を配置する。観世音寺から出土する巴文軒丸瓦では最も古いものの１つであろう。講堂跡・宝蔵東区・金光寺推定地などに出土例がある。５点出土。

２は巴文の頭が大きな瓦当である。それに比較して外区の珠文23珠は小さい。内区と外区との間には界線がある。同笵例は金光寺推定地・講堂跡から出土している。２点出土。

３は講堂跡出土巴文軒丸瓦９にあたる。１点出土。



第38図　軒丸瓦拓影(3)

4は内区の巴文部分だけが出土している。同笵関係は確定できないものの講堂跡出土の巴文軒丸瓦7・10に近似する。1点出土。

5は比較的大きな瓦当で講堂跡出土の巴文軒丸瓦12と同笵と考える。文様構成が類似するものに大房跡（第43次、1976年）・金光寺推定地からの出土例があるが二者とも右まわりの巴文である。2点出土。

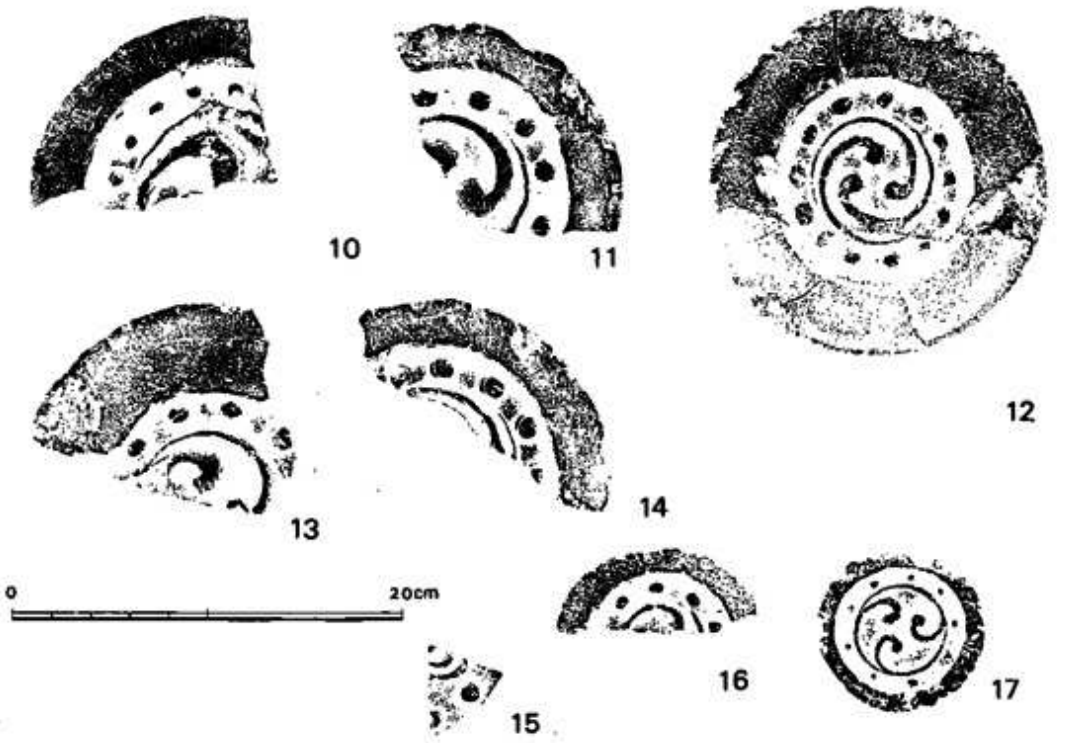
6は新しい出土例であろう。巴文の尾が珠文帯の界線を形づくる文様は3に類似するが巴文の盛り上りが大きく太く珠文の大きさも異なる。1点出土。

7～9の3点は右まわりの巴文軒丸瓦である。7は巴の頭が中央で連結し珠文帯との間に界線がある。講堂跡出土巴文軒丸瓦14と同笵である。2点出土。

8は講堂跡出土巴文軒丸瓦17と同笵と思われる。今回の調査で瓦当文様全体が残る資料が出土した。巴の頭は細く高く尾は瓦当の4分の3をまわる。珠文は比較的大粒で17珠配置される。珠文帯と素文縁との間に界線がある。今回の調査で出土した巴文軒丸瓦では13点と最も多い点数である。

9は講堂跡出土巴文軒丸瓦16にあたる。大宰府崇福寺に同笵例がある。4点出土。

以上が講堂跡の調査で巴文軒丸瓦のⅠ類に相当するものである。



第39図　軒丸瓦拓影(4)

第39図10は講堂跡出土巴文軒丸瓦22の同笵例である。近世の巴文軒丸瓦としては巴文が大きい例である。1点出土。

11は講堂跡出土巴文軒丸瓦24と同笵である。10に比較して小さな巴文で逆に大粒の珠文を配置している。5点出土。

12は講堂跡出土巴文軒丸瓦27と同笵である。講堂跡の調査では40点近い出土があり巴文軒丸瓦としては最も多い出土量を占めた。今回の調査では2点出土したのにとどまっている。

13は素文縁の幅が4.0cm以上と広い。新出資料であろうか。ただ、素文縁の幅が一定でなく瓦当面上部が1.0cm以上も広くなっていることや丸瓦部の接合位置が瓦当裏面の比較的低い位置にあることから鳥衾瓦である可能性も考えられる。同一個体の可能性を残すものが3点出土。

14は講堂跡出土巴文軒丸瓦26と同笵と思われる。2点出土。

15は雲文軒丸瓦の破片である。現在もこの軒丸瓦は本堂に葺かれている。1点出土。

16・17は大棟を飾る菊丸である。丸瓦部が挿入用に細くなっている。16は第39図の10・11あたりをモデルに小型化したものと思われる。15は講堂跡出土巴文軒丸瓦25を小型化したものであろう。2点出土。

第39図では雲文軒丸瓦を除けば講堂跡出土巴文軒丸瓦のII類にあたる。

なお、巴文軒丸瓦ではI類に分け得る不明瓦14点を含めI類は48点が出土し、II類では不明瓦を含め28点が出土している。III類とすべき資料の出土はなかった。

軒平瓦（第40～43図、図版62～66）

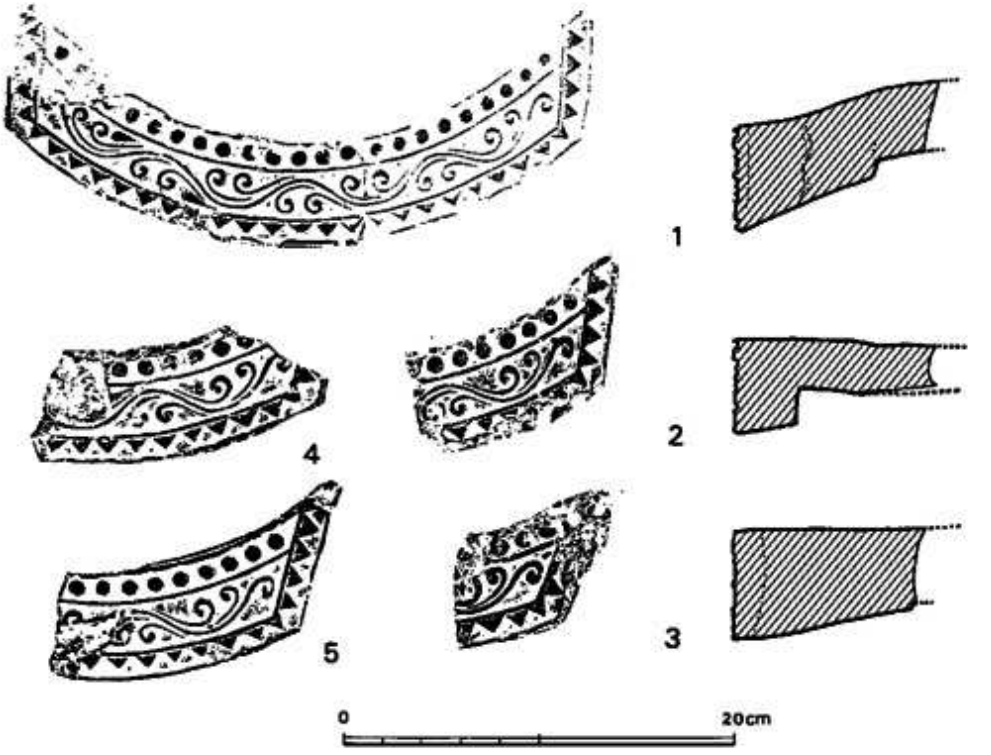
軒平瓦の出土状況も軒丸瓦の出土状況と同様である。瓦当面の2分の1以下の資料が多い。

第40図は老司I式軒平瓦で34点が出土し奈良・平安時代の出土軒平瓦の50パーセント近くを占める。老司I式軒平瓦にも老司I式軒丸瓦と似た傾向が見い出される。精良の胎土で砂粒を含まないもの（a類）と一定の砂粒を含むもの（b類）とに分け得る。

a類（17点）は断面1の形状の段顎を持つ。（17点のうち顎部の計測が可能な資料13点がこれに相当する。）　13点について顎部の長さ・深さを計測すると、長さでは最長9.1cm・最短6.4cm・平均値7.64cmとなり、深さでは最深1.1cm・最浅0.3cm・平均値0.76cmとなった。

b類（14点）は断面2の形状の段顎を持つ。8点を計測した結果、顎長では最長5.0cm・最短3.5cm・平均値4.08cm、顎深では最深2.3cm・最浅0.8cm・平均値1.45cmが得られた。平均値を標準にa・b類を比較するとa類はb類より顎が長く、段顎の深さではb類がa類より深い。目で見て理解出来る相異であり両者の特徴と考えて良い。なお、1点だけ例外があり胎土ではb類に分けられるが顎長9.3cm・顎深0.3cmと計測され顎の断面形状がa類に属する資料3がある。

a・b類の瓦当面を比較するとa類の多くがb類より彫りが深くシャープであるのに対し、b類では浅く文様が全体的に幅広くなる。文様構成のうえでの差異はなく彫りなおしと考えら



第40図　軒平瓦拓影(1)

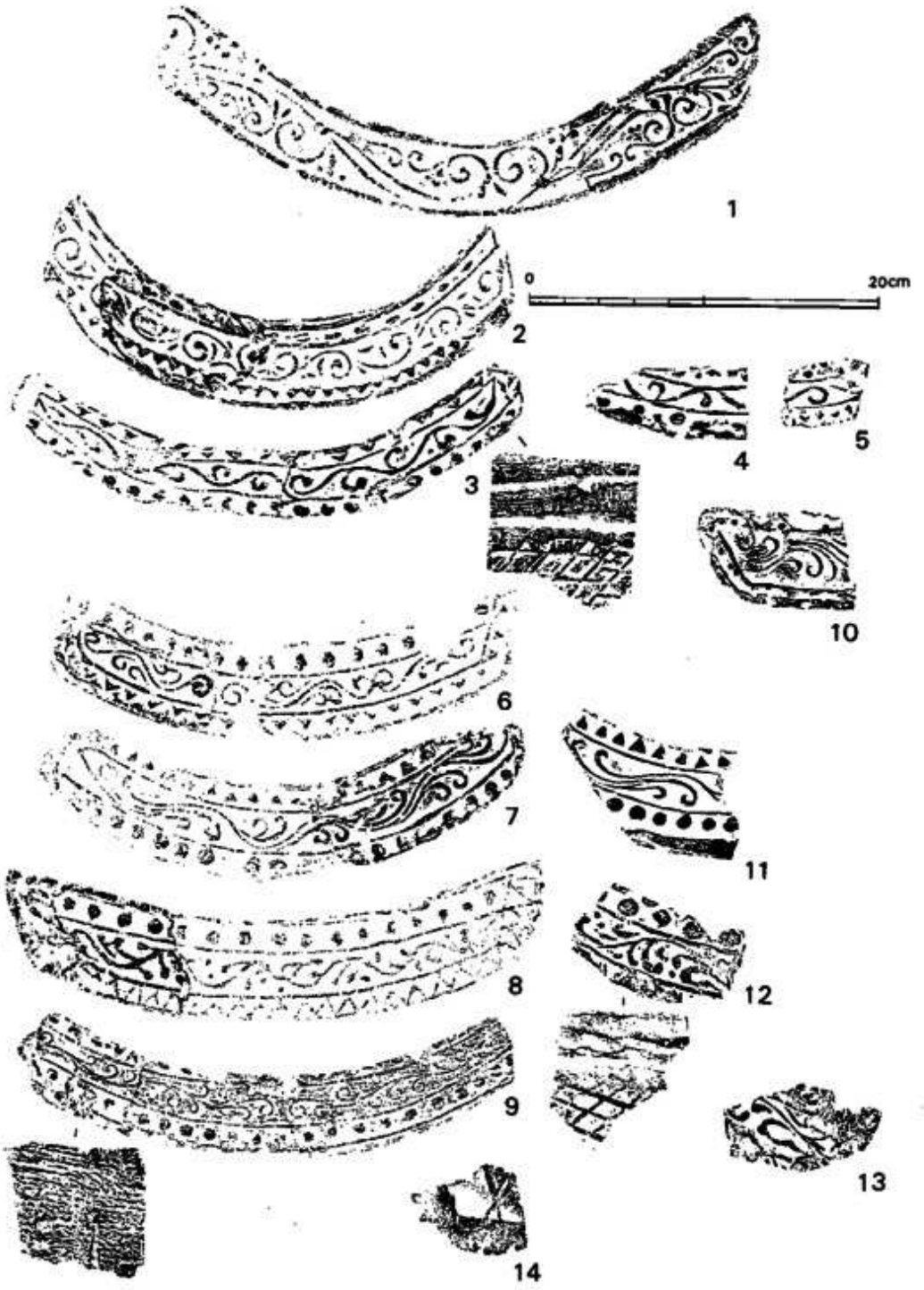
れる部位もないが、瓦当文様に認め得る相異からａ類がｂ類より古いと考えられよう。４はｂ類に属する軒平瓦である。５との比較資料として掲載した。５は下帯鋸歯文帯で脇区最下段の鋸歯文から左側に数えて２番目の鋸歯文と３番目の鋸歯文の間・３番目と４番目の間・５番目・６番目の鋸歯文の間が広くなり界線下に彫り直しの痕を残している。彫り直しがわかる例は今のところこの１点である。

老司Ⅰ式軒丸瓦でも認めたａ・ｂ類の差も軒平瓦で認めた相異と同様のものと考えておきたい。

また、この軒平瓦では先に作っておいた平瓦と瓦当を接合したとわかるものはない。平瓦部の破面に粘土の接合痕と思われる痕や粘土紐の接合部で剝離したものと理解される破片が多いことから、これまでにも指摘されているとおり粘土紐桶巻き作りによって作られたものと考えられよう。

なお、ａ類の軒平瓦の瓦当面から10.8cm（平瓦部）・瓦当面から6.0cm（顎部）に朱線が残るものがあった。

第41図１は偏行忍冬文軒平瓦である。南面築地跡東半部の調査で井戸SE3680の埋没過程で一括廃棄された軒瓦の一つである。大房跡・宝蔵東区などの調査区から出土している。これまで



第41図　軒平瓦拓影(2)

の奈良・平安時代の観世音寺境内地出土軒平瓦で出土量の3.5パーセント弱（多い順で4位）を占める。7点出土。

2は鴻臚館Ⅰ式軒平瓦である。大宰府政庁跡や筑前国分寺で出土している。観世音寺でも軒平瓦全体の出土量の2パーセント弱（6位）で多い方である。2点出土。

3は右から左に偏行する唐草文で上帯には下向きの凸鋸歯文・下帯には連珠文が配置される。平瓦部には粗い斜格子の叩打痕が残る。観世音寺境内地では出土点数は多く6パーセント余り（3位）である。第37図9の軒丸瓦とセットとなる可能性がある。6点出土。

4は3に類似するが偏行唐草文の流れが逆となり上・下帯とも連珠文である。2点出土。

5は瓦当右端の破片である。文様は4に類似するが全体に小型化し下帯の連珠文が密に配置されている。1点出土。

6の唐草文は偏行しているように見えるが唐草が3つの部分に分かれそれぞれの先端が向いあっている。上帯は連珠文・下帯は下向きの凸鋸歯文である。1点出土。

7は左から右へ唐草文が偏行する。上帯は上向きの鋸歯文・下帯は連珠文であるが中央部では2つの珠文の両脇があく。2パーセント弱の出土量ではあるが軒平瓦の出土量では多い方である。1点出土。

8の瓦当文様は12を祖形とするものか。右から左に偏行する唐草文は流水を表現したというより蔓草のようである。上帯は連珠文・脇区から下帯は線鋸歯文を配置する。平瓦のはずれた痕から瓦当＋平瓦の関係が明瞭である。4点出土。

9は左から右へ流れる唐草文と右から左へ流れる唐草文とが中央で向い合う。中心飾はないが均整唐草文と言うべきか。上帯・下帯とも連珠文で脇区はない。顎部には縄目の叩打痕が横方向に残る。1点出土。

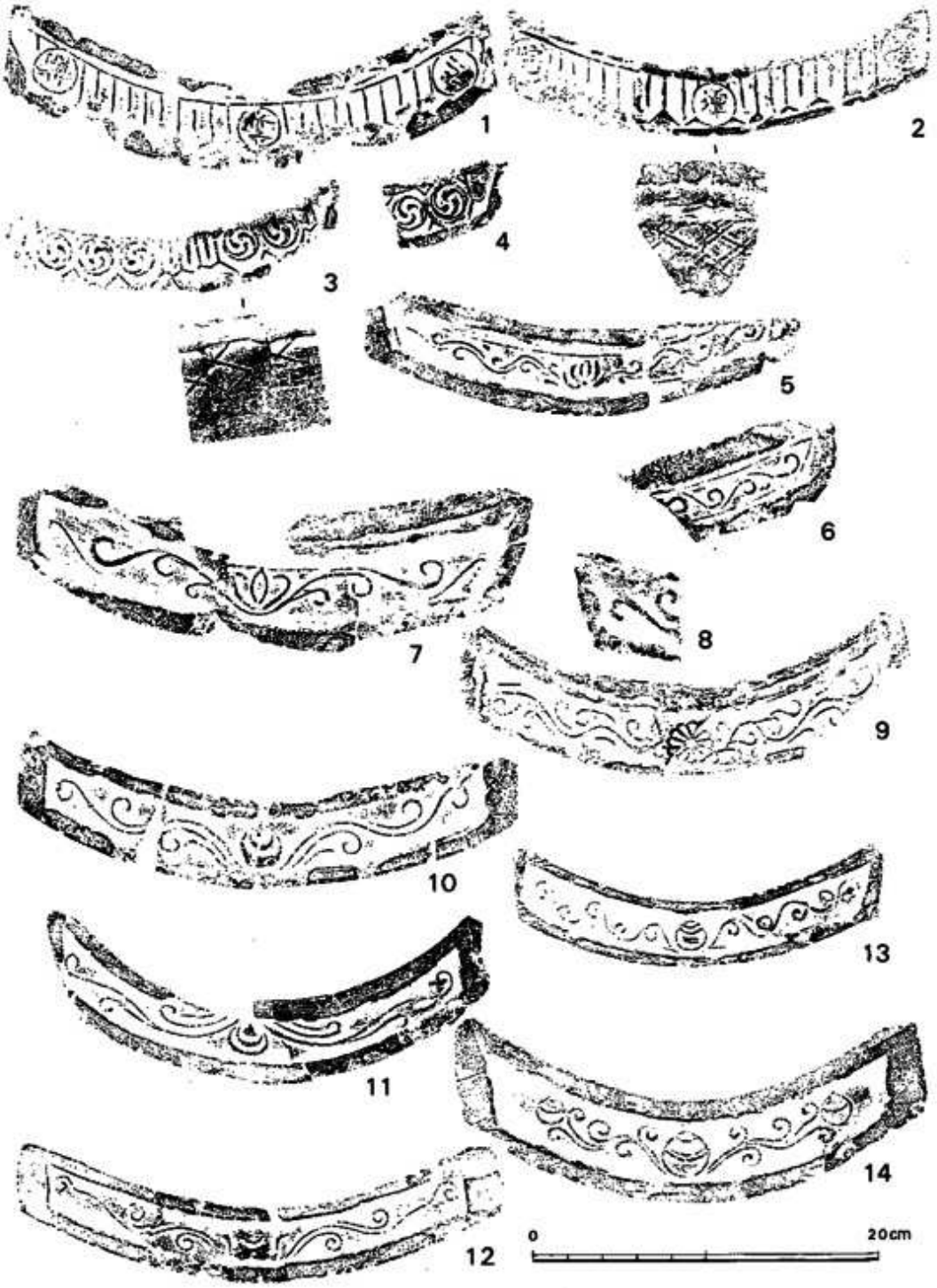
10は左から右へ唐草文が偏行し上・下帯・脇区には小粒の連珠文が粗い間隔で配置される。小破片が3点出土。なお、本例では平瓦の瓦当接着部には接合のためのナイフのキザミ痕が残る。

11は7と同笵の可能性がある。三段に重なる子葉の位置と下帯の連珠文の関係から11は右端の珠文が加えられたものと思われる。7を彫り直したものか。この部分の破片が3点出土。

12は第37図10・11と安楽寺の調査ではセットとなる軒瓦である。右から左に流れる唐草文で上帯は連珠文・下帯は二重の線鋸歯文である。観世音寺では1.5パーセント強の出土量である。平瓦部には斜格子の叩打痕が残る。4点出土。

13は瓦当右端にあたる。唐草文は左から右に偏行するが子葉部分の表現が他の軒平瓦と大きく異なる。上帯には算盤玉状の珠文を配置し下帯は二重の線鋸歯文である。1点出土。

14は瓦当左端の資料である。内区には「×」を連続して配置しているものと思われる。大宰府史跡では「×」の連続文は数種類があるが本例は脇区・上・下帯とも素文である。極く珍し



第42図　軒平瓦拓影(3)

い例である。1点出土。

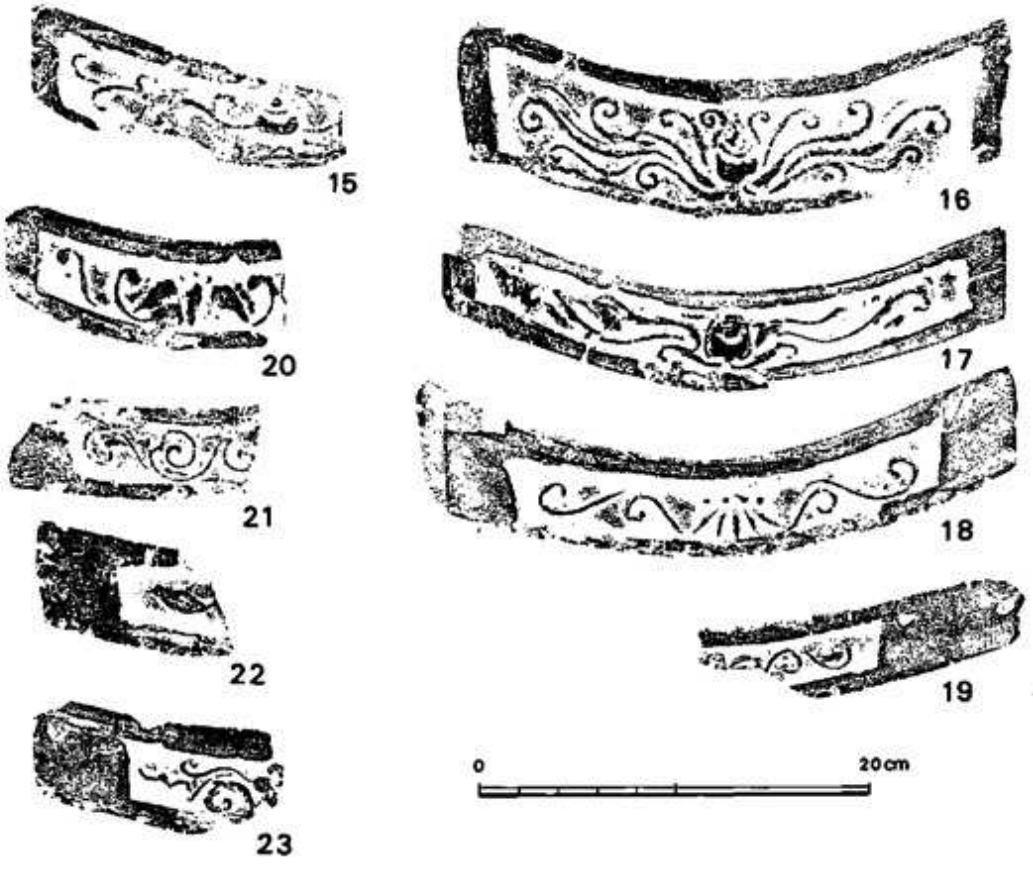
第42図1は剣頭文の左・中・右に円文を配置し、その中に左右逆字で左から「観世・音寺・瓦也」の文字を置いている。宝蔵東区・参道西側などに出土例がある。1点出土。

2の文様構成は1に類似するが小さな瓦当である。3ケ所の円文には正字で右側から「戒・壇・院」の3字を配置している。学校院南辺部（第38次、1975年）・参道西側などの調査区に出土例がある。平瓦部には二重の斜格子の叩打痕がある。1点出土。

3は剣頭文と巴文を併用した軒平瓦で折り曲げ技法により製作されている。巴文は瓦当の中央に3つ、左・右に2つずつ配置される。平瓦部には斜格子文が残る。1点出土。

4は文様は3と同じものである。3と異なるのは折り曲げ技法によらず製作されたと考えられる点である。平瓦には3に類似の斜格子文が残る。1点出土。

5は花の断面を文様化したような中心飾の両側に4回半反転する均整唐草文を配置している。高い素文縁が廻り内区との間には一条の界線がある。平瓦凹面には凸型製作台を用いて製作さ



第43図　軒平瓦拓影(4)

れた証拠と見られる布の端が溝状となって残る（図版65－2）。今回の調査では14点が出土した。

6は瓦当文様が5に類似する。5では均整唐草の子葉が端部で6より1つ多く配置されている。1点出土。

7は講堂跡の概要報告で第21図8としたものである。やや複雑な中心飾の左右に2回半反転する均整唐草文が配置される。3点出土。

8は宝珠文を中心飾に持つ瓦当かもしれない。これまでに出土例はあるが破片資料である。1点出土。

9は中心飾の菊花文の1部が出土している。大房跡・参道西側・講堂跡に同笵例がある。1点出土。

10は三段に表現された宝珠文を中心飾とし3回反転する均整唐草文が配置される。講堂跡の調査では最も出土量の多い瓦当であった。この他大宰府崇福寺からも出土している。4点出土。

11は10の瓦当文様がもとになり変化したものであろう。宝珠文はやや扁平となり唐草文は上帯から派生している。4点出土。

12は10に比較して瓦当面の幅が狭く中心飾は盛りあがるが唐草は細く表現されている。平瓦凹面は板状の器具で縦方向に整形されている。離れ砂が用いられている。講堂跡では10に次いで多く出土している。4点出土。

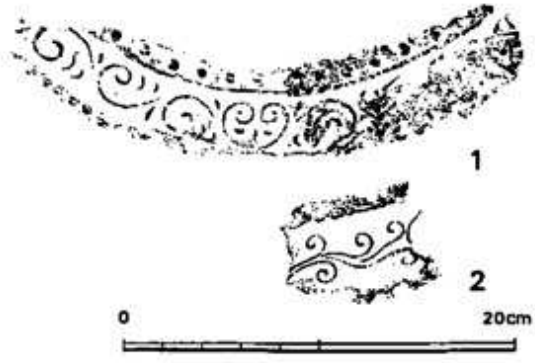
13の宝珠文は線で表現されている。唐草文は1本の主葉が5回反転し反転するたびに子葉が派生している。小型の軒瓦であるから用途にも違いがあるのかもしれない。大房跡・宝蔵東区・講堂跡に同笵例がある。2点出土。

14は大宰府崇福寺に完形瓦当が出土している。線で表現された宝珠文の左右に均整唐草文が配置されるが端部に宝珠文各1つが付加されている。1点出土。

15は参道西側で同笵例が出土している。文様は簡略化されている。瓦当面に離れ砂が用いられた痕がある。1点出土。

16は瓦当面の幅が広く文様も他の宝珠文軒平瓦と異なる。やや縦長に表現された宝珠文の下から均整唐草がそれぞれ派生している。ために文様全体がにぎやかな感じを与えている。瓦当面に離れ砂が用いられた痕を残す。1点出土。

17は高い宝珠文のまわりに界線が配置され均整唐草文は3本の蔓草で表現される。



第44図　南門トレンチ出土軒瓦拓影

この軒平瓦ではほぼ同じ文様でありながら大小の違いなど類例がいくつかあるようだ。本例は平瓦とともに上半部が剝離欠損している。２点出土。

18～23は講堂跡の調査結果から江戸時代以降の軒瓦と考えた。18・20・23などは現本堂にも用いられている。それぞれ１点出土しているがすべて講堂跡の調査で出土している。

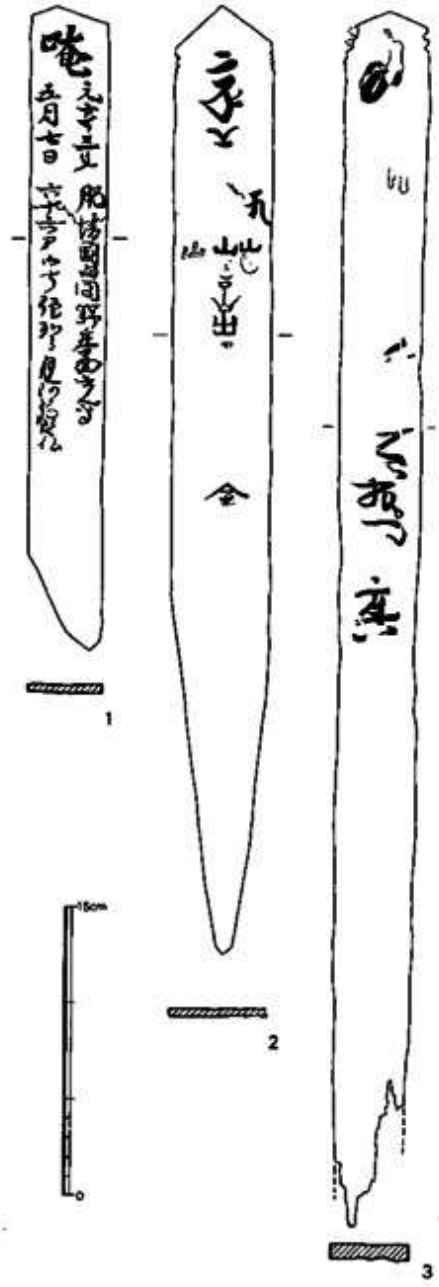
南門跡出土軒瓦（第44図、図版67）

参道の西側で南門礎石の周辺およびその西側の調査区からも数点の軒平瓦が出土している。

出土軒瓦のうち老司Ⅰ式軒平瓦２点・第42図５・10の軒平瓦が１点ずつ出土している。この他では第44図の２点の軒平瓦がある。１は鴻臚館Ⅱ式軒平瓦片で１点が出土している。観世音寺の調査では奈良・平安時代軒平瓦の出土量の２パーセント弱を占めている。

２は均整唐草文軒平瓦の破片である。曲線顎の瓦である。類品は数種あるが本例の瓦当文様全体は不明である。

記録では南門跡は康和４年（1102年）大風によって顛倒する。その後の状況は明らかではない。



第45図　SD3840出土墨書木札実測図

南門跡の調査では出土点数も少なくその後再建されたと考えるほどの根拠は見あたらない。南門の軒瓦として第130次調査区で比較的出土量の多かった軒丸瓦第38図８が13点あり軒平瓦第42図５が14点出土しているが、この軒瓦が最終段階で葺かれたものかもしれない。

木製品

SD3840出土墨書木札（第45図、図版70）

SD3840の溝状の溜まりになった層から土器・木器に伴って３点が出土した。

1　「元亨三年　肥後国白間野庄西光寺
　　五月七日　六十六部写経聖月阿弥陀仏」

頂部を圭頭に作り、下部を斜めに削り尖らせる。完存し、法量は長さ33.2cm、幅4.0cm、厚さ0.5cm。表面に墨書があり、裏面にはない。残存状況は良好で、判読が可能である。

肥後国白間野庄は玉名郡白間荘で、現在の南関町にあたる。西光寺については『肥後国史　巻之八』に見える白間庄田原村所在の応永年中（1394～1427年）の草創と言う天台宗の「西光寺」の可能性がある。西光寺に止宿する月阿弥陀仏の尊称をもつ写経聖によって六十六部の法華経を書写し供養されたことが知れる貴重な資料である。白間野庄の成立については未だ不明な点が多く、写経聖についても不明な点が多い。

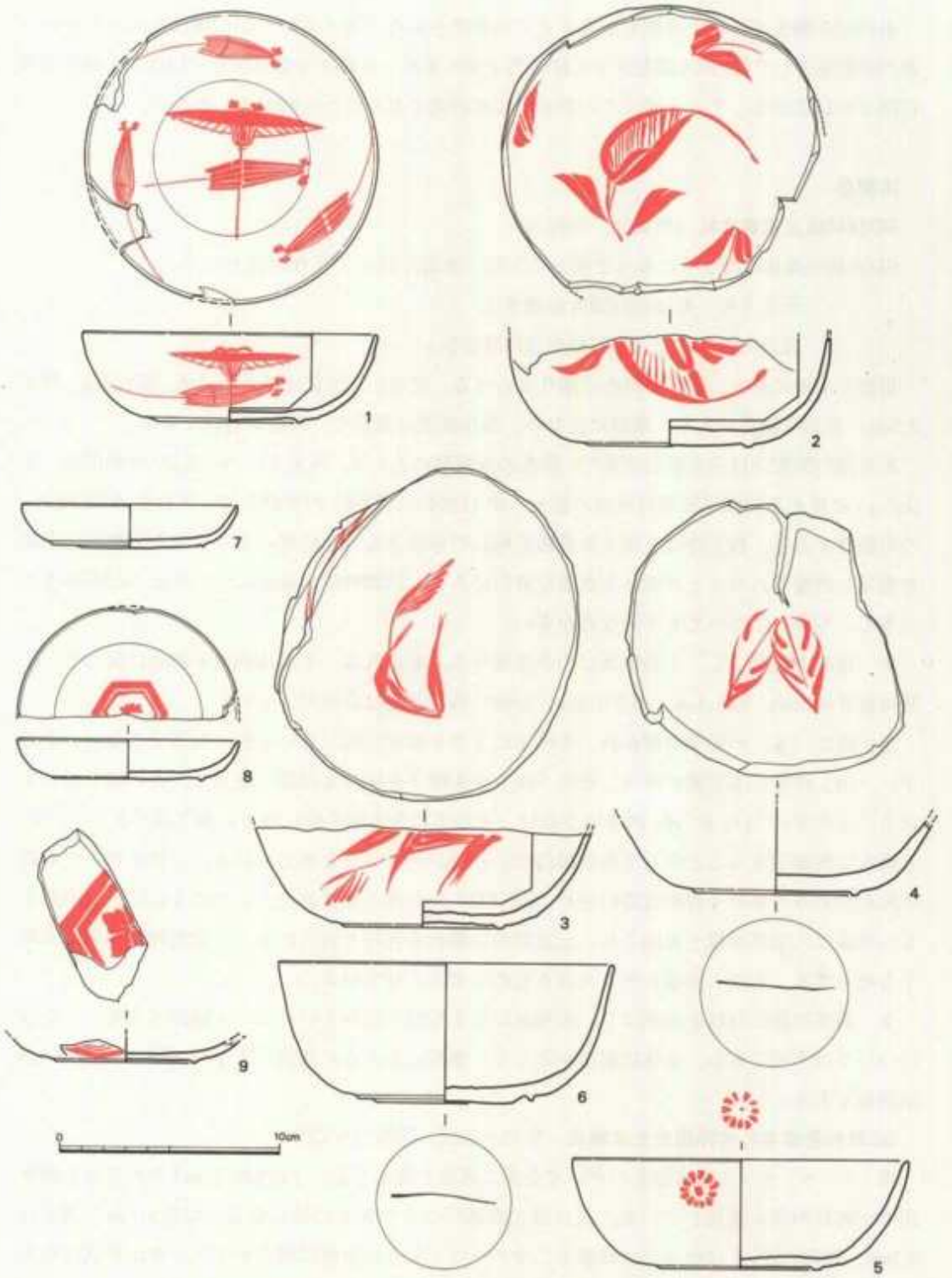
2　頂部を圭頭にし、上端側面に小さな切り込みをいれる。下端は両面を斜めに尖らす。法量は長さ49.2cm、幅5.1cm、厚さ0.4cm。全体に残存状況は良好ではない。

最上位に（ま）の梵字が書かれ、その下に３字を山形に配しているが、判読できない。その下に「山」の字を３字横に並べ、その「山」字を帽子を被った頭部に見立て、人の顔を描いている。その下に「口」と「出」の文字を続け、その下に５文字を縦に書く。最下端の文字が「令」と微かに判読できることから「急急如律令」と書かれていたと考えられる。これに類した呪符木札が広島県の草戸千軒町遺跡の井戸（SE1015）から出土しており、これによれば三つの顔をもつ尊像は三宝荒神像と見做され、三宝荒神に関わる呪符と言われる。三宝荒神は一家に火難をもたらさず、安全と福徳を招き入れるものと考えられている。

3　前者同様に頂部を圭頭にし、両側面に小さな切り込みをいれる。下端部は欠失し、全長については不明である。全体に腐植が著しく、墨痕は見えるが判読できない。幅4.5cm、厚さ0.9cm前後である。

SD3840墨書木札共伴層出土木製品（第46～49図、図版71～73）

皿（７～９）すべて高台部をのぞいて全面に黒漆を塗布する。７は幅0.1cmほどの高台を削り出すが底部内側が接地している。高台部と底部のつくりが６の椀に似る。口径9.9cm、高台径6.9cm、器高2.0cmをはかる。口縁部を二分の一ほど欠くが全体に残りがよい。８は見込み中央に朱漆で花文を描き二重亀甲文で囲う。復原口径10.1cm、高台径6.8cm、器高1.8cmをはかる。



第46図　SD3840（黒書木札共伴層）出土木製品実測図(1)

二分の一ほど欠失する。9は大部分を欠失しているが見込み中央に朱漆で花菱を描き、そのまわりを二重亀甲文で囲う。体部の外面にも三重亀甲文が配される。腐植があまり進んでおらず残りがよい。高台径6.4cmをはかる。

椀（1～6）1～5は高台畳付以外の全面に黒漆を塗布し文様を朱漆で描いたものである。歪みが著しいものが多いため、側面は復原して図示したものもある。1は見込みに開いた蛇ノ目の花傘とたたまれた蛇ノ目の花傘を描き、そのまわりにたたまれた3本の蛇ノ目の花傘を配する。傘は骨太と骨細の二種がある。体部外面には体部内面に対応してセットの花傘が3ヶ所に配される。体部を一部欠き木質は脆くなっているものの残りが非常によいものである。口径13.4cm、高台径6.5cm、器高4.1cmをはかる。2は口縁部の二分の一ほどを欠く。見込みに草花文を描き、体部内面にはそれを中心に3個の草文を配する。体部外面には対する二ヶ所に草文を描く。口径は14.6cmほどで、高台径は7.3cmをはかる。3は見込みに葦様の草花文を描く。体部外面にも対する二ヶ所に見込みと同じ草花文を描く。高台径7.2cmをはかる。4は体部上半を欠失する。見込みに一対の草文が描かれる。底部外面には「一」の字が線刻される。高台径7.4cmをはかる。5は見込みの中央部に11弁の菊花文を描く。口縁部外面にも三ヶ所に12弁の菊花文を配している。全体に腐植が進んでおり残りは悪い。口径15.4cm、高台径7.4cm、器高5.0cmをはかる。6は1～5の漆器椀とくらべ深い椀形となる。底部の内側が張り出しており高台部分も接地しない。内面にはロクロ挽きによる凹凸が残る。底部の外面には4と同じ「一」の字の線刻がある。口径15.4cm、高台径8.0cm、器高6.4cmをはかる。口縁部を二分の一ほど欠失する。腐植が進んでおり歪みが著しい。

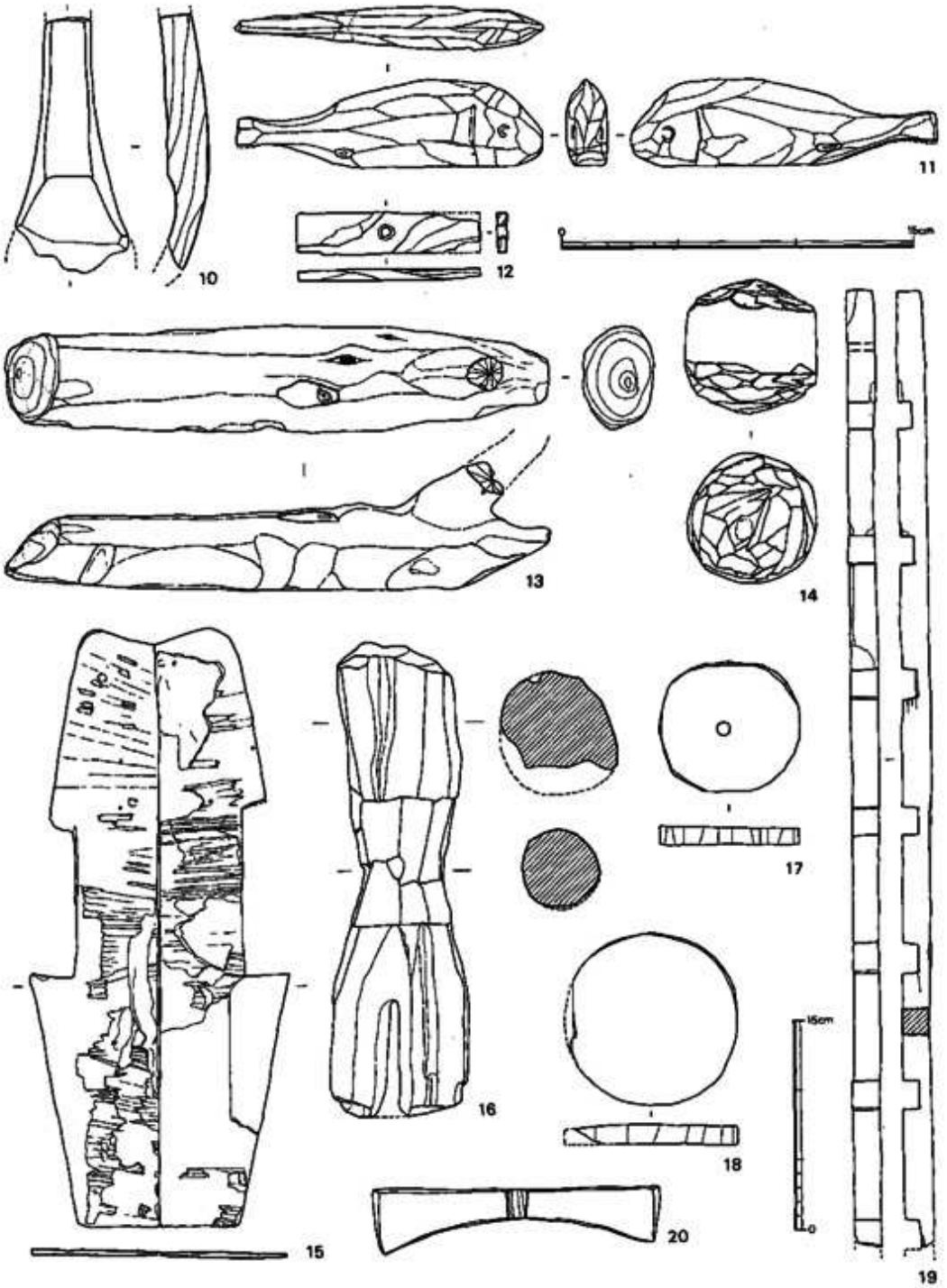
杓子状木製品（10）広葉樹の二股に分かれた枝部を用いてつくられている。柄部と匙部下半を欠失する。

魚形木製品（11）広葉樹の板材を魚形に整えたもので表面の方がつくりが比較的丁寧である。腹部は平坦に削られる。目は径0.6cmほどで周囲を円形に線彫りしてあらわす。削りは全体に粗いが頭部・尾部・えらともリアルに表現されている。体部後方の下部には長径1cmほどの横長の円孔が両面から穿たれる。孔は中央部付近で最も狭くなる。尾鰭の下部はわずかに欠失している。全長13.0cm、高さ3.7cm、最大厚1.8cmをはかる。遊戯具か。

竹とんぼ形木製品（12）とんぼの羽の部分である。板材の左右・表裏をプロペラ状に削って羽としたもの。中央部には径0.4cmほどの軸受けの円孔が両面からあけられる。長さ7.8cm、幅1.8cm、厚さ0.45cmをはかる。

毬杖（13）広葉樹の幹から枝わかれする部分を用いている。幹は頭部、枝は柄部になるが、柄部はほとんどが欠失している。頭部の両端は斜めに切断される。頭部下半部の打面には使用痕とみられる凹凸がある。頭部長23.2cm、頭部最大径4.5cmをはかる。

毬（14）広葉樹の心持材を円柱形にしたあと上下を円錐形に刻って整えたもの。径5.5～



第47図　SD3840（墨書木札共伴層）出土木製品実測図(2)

5.6cm、長さ5.7cmをはかる。

草履状木製品（15）草履の芯の部分で編んだ藁が残っている。藁の方向は左右で異なる。薄板の中央部は長さ6.5～7.0cmほど抉りこむ。上端部はV字形に、下端部は直線的に仕上げる。上端部の中央寄りに二ヶ所穿孔される。全体の形状からは上下逆の可能性もあるが、この対になる鼻緒締用の孔の存在からこちらを上として図示した。そのほかの部分にも径0.1cmほどの孔が4ヶ所に認められる。全長25.4cm、最大幅11.0cm、厚さ0.3cmをはかる。

槌のこ（16）円柱形の材の中央部分を刺って凹ませ紐かけとしたもの。腐植は著しく部分的に欠失するが全長20.3cm、中央部径3.2cmをはかる。広葉樹。

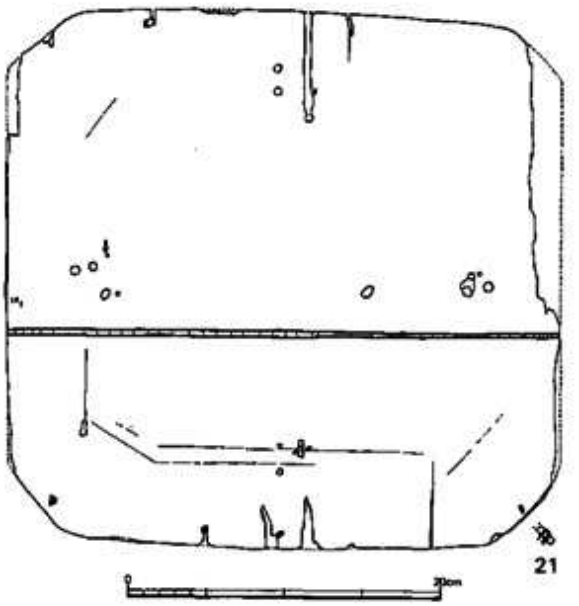
円盤形木製品（17・18）ともに板材の周縁を削って円形に整えたもの。17は削り痕が明瞭に残る。中央部には径0.6cmの孔をあける。径5.5～6.0cm、厚さ0.7～0.8cm。18は径7.3～7.5cm、厚さ0.8cm。

部材（19・20）19は角材の一方向に約7.5～7.7cmおきに切込みを入れている。下半部を欠失する。合い欠きによって組み合わせて用いられるもので、格子戸の桟と考えられる。現長68.7cm、幅・厚さとも1.9cmをはかる。20はアーチ状を呈し部材と考えられる。長さ12.3cm、最大幅2.8cm。

三方（21）三方の台部で板材を隅丸方形に整える。周縁部には縁を取り付けるために緊結された桜の皮紐が残っている。台部裏面には台部と同じ形状で黒化した部分があり、高台が取り付いた痕跡と思われる。高台が取り付く部分の各辺中央には形状・大きさが異なる三組の穿孔があり補修痕と考えられる。34.9cm×35.4cm、厚さ0.5cm。

笊（22）笊で縁部を2分の1ほど欠失している。やや歪んでいるが径53cmほどに復原できる。縦方向に幅0.7cmの竹材を二本一組にし、2.4cm間隔に、それに直交して0.2～0.3cm幅の細い竹材を密に通し笊目編みにしている。縁部は10cm間隔で7重にした竹材を桜の皮で巻く。

箕（23）箕で縁部を部分的に欠失する。歪んでいるが、現状で長



第48図　SD3840（墨書木札共伴層）出土木製品実測図(3)

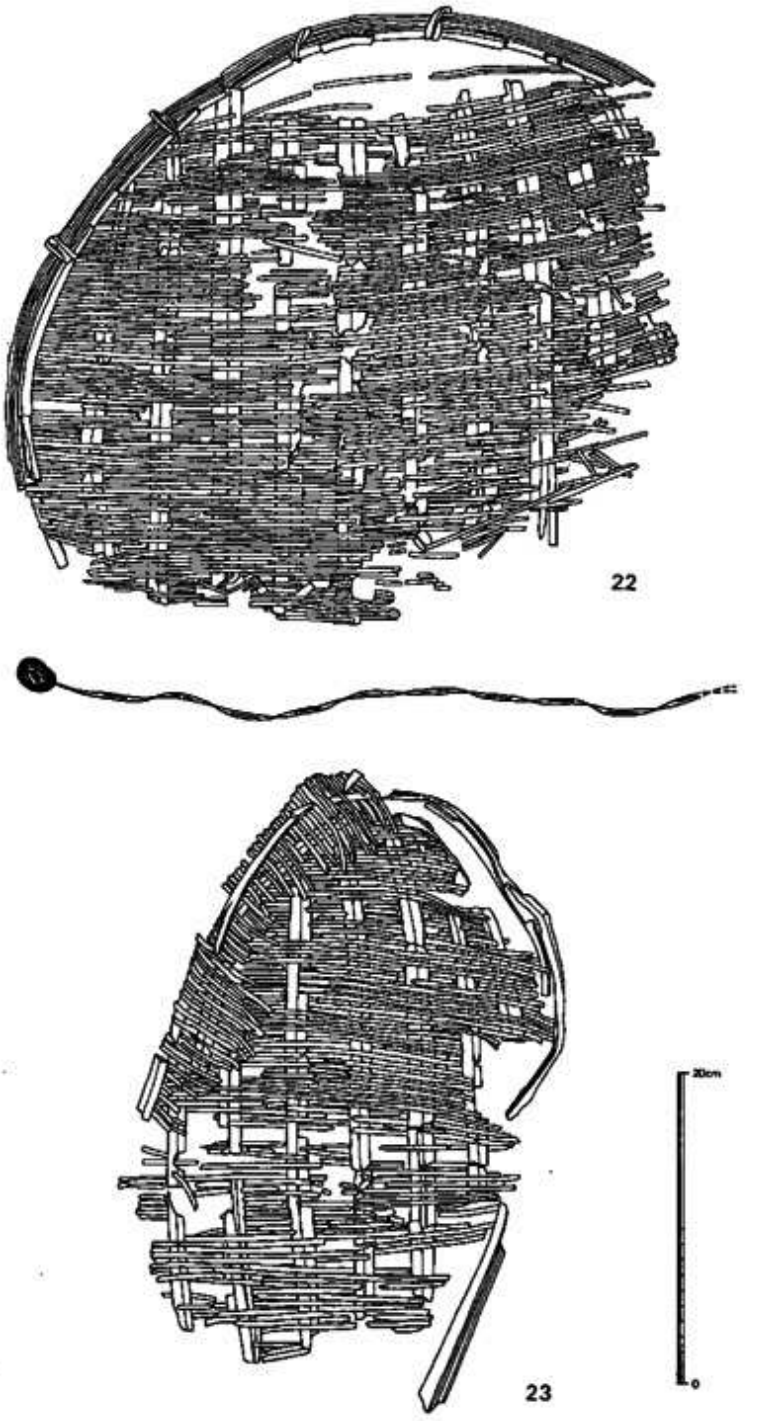
径34.0cm、短径24.0cmをはかる。縦方向に幅0.6cmの竹材を２本１組にして2.7cm間隔にし、それに直交して0.3～0.4cm幅の細い竹材を密に通し笊目編みにする。横方向の材は縁部で折り返しそれと反対側の縁部でとめる。

SD3840下層出土木製品（第50・51図、図版74・75）

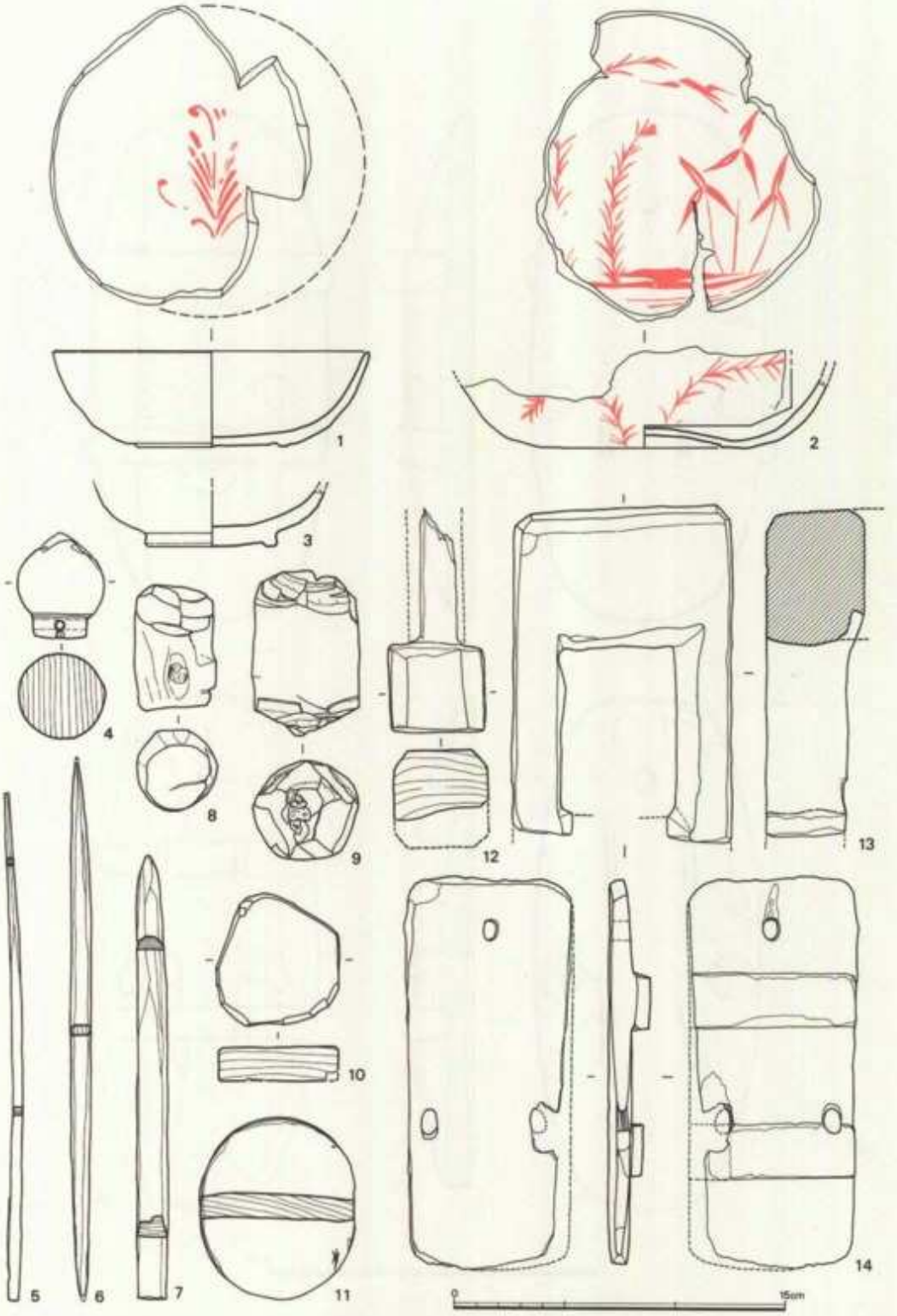
漆椀（１～３）１は口径14.2cm、高台径6.7cm、器高4.4cm。内外面に黒漆を塗布し、底部内面に朱漆で草花文を描く。２は歪みが著しく体部はかなり開いている。体部上半を欠失する。内外面に黒漆を塗布する。底部内面には水辺にたたずむ草文を、体部外面にも草文を描く。３は口縁部を欠失する。高台は比較的高く削り出している。内面に朱漆、体部外面に黒漆を塗布する。底部外面の中央部には朱漆がわずかに残るが文字あるいは文様かは不明。高台径6.0cm。

宝珠形木製品（４）針葉樹の心持材を宝珠形に整えたもの。上端部を欠失する。下部との接合部分には径4.5mmの孔が交叉して穿たれる。

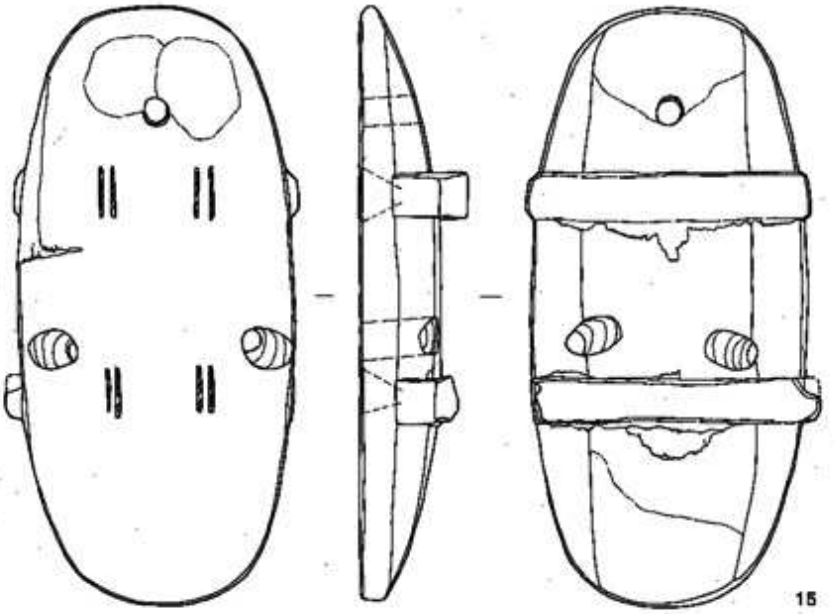
箸状木製品（５）棒状の杉材の四面を面取りし、さらに先端部分を削って整えたもの。長さ22.9cmをはかる。

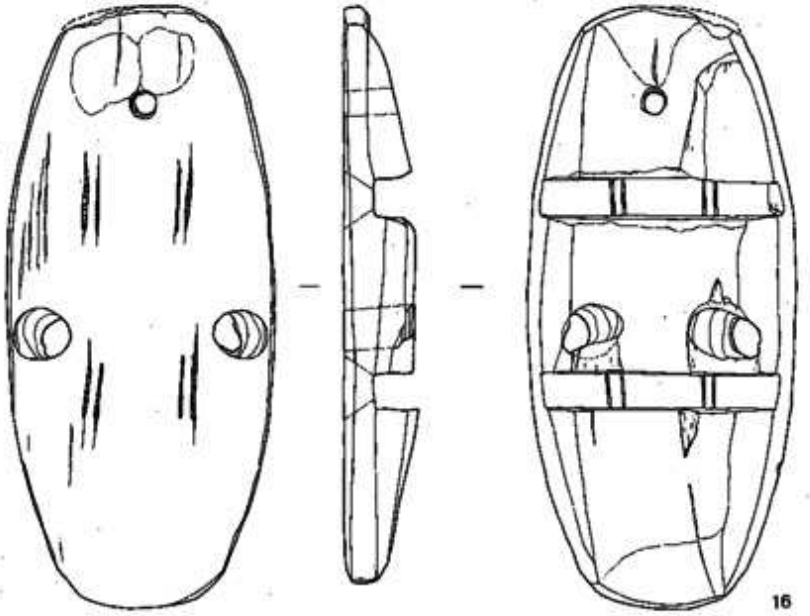


第49図　SD3840（墨書木札共伴層）出土木製品実測図(4)



第50図　SD3840下層出土木製品実測図(5)





第51図　SD3840下層出土木製品実測図(6)

ヘラ状木製品（6・7）6は扁平な板材を面取りし両端を尖らせている。上下端部ともわずかに欠けている。7は先端部のみ尖らせる。下半部は分厚く断面形状が台形になる。長さ20.1cm、最大幅1.4cmをはかる。

毬（8・9）ともに広葉樹の丸木材を用いている。8の下端部は切断してままで上端部のみ斜めに剝っている。径3.6cm、長さ5.6cm。9は両端とも円錐状に整えているが上端部は欠失する。径4.7cm、現長7.5cm。

円盤形木製品（10・11）板材の周縁を剝って円形あるいはそれに近い形状に整えたもの。10は径5.5×6.0cm、厚さ1.5cm。11は径7.0×8.3cm、厚さ1.1cm。

部材（12・13）12は八角柱に柄のような棒状部が取り付くものであるが生きた面はなくこの部分の形状は不明。他のものとの組み合わせによって用途をなす部材と考えられる。13は一見すると鍬の頭部のように思えるが、後背部は欠失しておりさらに厚くなる。上端部は面取りされる。7.1×5.0cmの方形の枘穴があけられるがここも下部を欠失している。

下駄（14～16）14は台部の形状が長方形の連歯下駄で全体に腐植が進んでいる。右側辺部を欠く。歯は全体を3等分した位置につけられている。鼻緒の後壺は後歯に半分ほどかかっている。台幅と歯幅は等しい。かなり使用されたらしく、歯は前後とも摩滅しているが、特に右側部分の摩滅が著しいため右足用と考えられる。全長17.7cm、台部幅7.8cm。杉材。15と16は差歯下駄でセットになるものである。台部形状はともに小判形。全体に残りが良い。台部裏面の両側縁部を面取りし中央部の横断面が台形になるように仕上げている。鼻緒は3つとも焼けており焼火箸状のものによってあけられている。前壺は爪先部にむかってやや斜めに、後壺は台中央部に向かって斜めに穿孔する。歯は台形で台幅よりも広くなる。前後両歯とも二対一組の歯止め様の楔が打ち込まれる。楔は幅1.9～2.0cm、厚さ0.2cmほどで三角形状をしたものである。歯部右側の摩滅が著しいこと、台部裏面も右側の摩滅が著しいこと、足指のアタリ等から15が右足用、16が左足用と考えられる。15は全長23.1cm、台部幅10.8cm、台部最大厚3.2cm、全高4.2cm。16は全長23.2cm、台部幅10.4cm、台部最大厚2.8cm、全高3.9cm。材はヒノキか。

SD3840出土木製品（第52図、図版76）

椀（1）丸味をもつ体部に高い高台を削り出す。高台畳付以外の全面に黒漆を塗布する。外面には草花文を朱漆で描くが残りはひじょうに悪く全体の形状は不明。底径8.6cm。

箸状木製品（2）棒状の杉材の両端部を削って尖らせたもの。断面は隅丸方形となる。長さ22.8cm。

横櫛（3・4）3は左半部と歯の大部分を欠く。頭部は弧状をなす。歯は1cmあたり3本。4は頭部が直線的なもの。歯は1cmあたり10本を数える。材はツゲであろう。

下駄（5）子供用の差歯下駄で台部は細長い小判形。腐植が著しい。台部には歯を固定するための方形の枘穴が前後各一ヶ所にあけられる。鼻緒の前壺は爪先部に向かってやや斜めにあ

けられる。台部裏面は左側の摩滅が著しいため左足用か。全長13.9cm、最大幅5.1cm、最大厚1.7cmをはかる。材はスギを用いる。

円柱形木製品（6）広葉樹の心持材を円柱形に整えたもの。上下とも周縁部を面取りしている。径2.6cm、長さ3.1cm。4分の1は欠失する。

部材（7）上部は欠失し欠損面は焼け焦げている。長方形の板目材の中央部を弧状に抉り、下半部は上面の両側辺と下端部に面取りを施す。三ヶ所に穿孔があるが中央のものが径0.7cmと最も大きい。

丸棒形木製品（8）材を円柱形に削って整えたもの。径2.0cm、長さ31.9cmをはかる。

SD3855出土木製品（第53図、図版76）

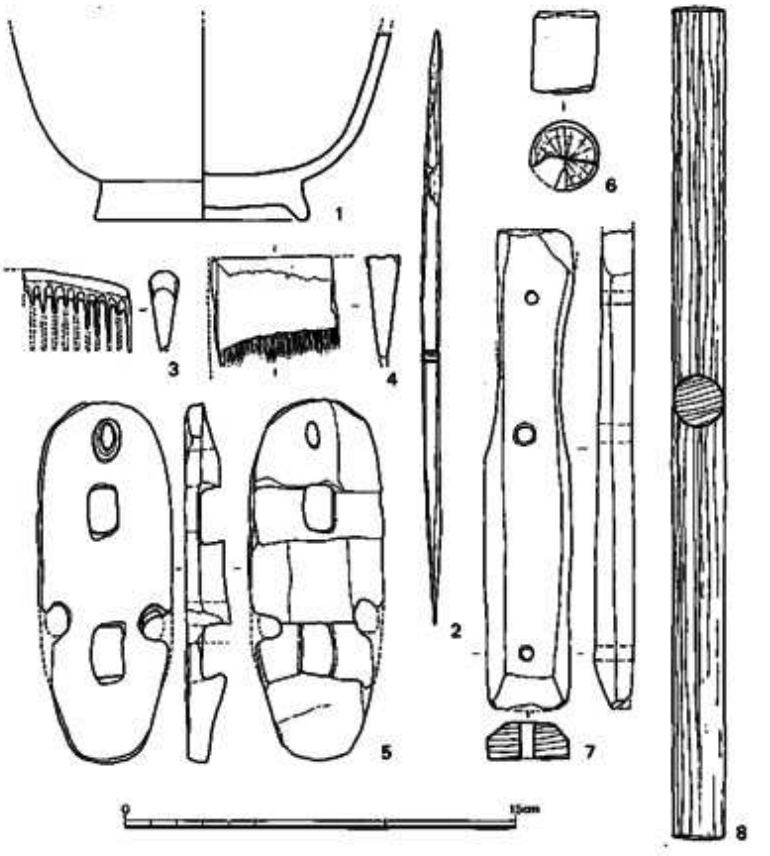
箱状木製品（2）箱状容器の側板と考えられる。板の一方に枘を設けそこに別の側板をはめ込んで、さらに外側から径0.5cmほど円形の孔を穿ち竹ヒゴを4ヶ所に打ち込んでとめている。もう一方は端部を欠失しているが、残存部の切り欠きからみると合欠きして井籠状に組むもののようである。この部分も先端部を尖らせた竹ヒゴを打ち込んで接合している。板材は一つが長さ約22cm、幅12.9cm、厚さ1.1cm、もう一方が長さ17.7cm、幅12.7cm、厚さ0.9cmをはかる。

SK3863出土木製品（第53図、図版76）

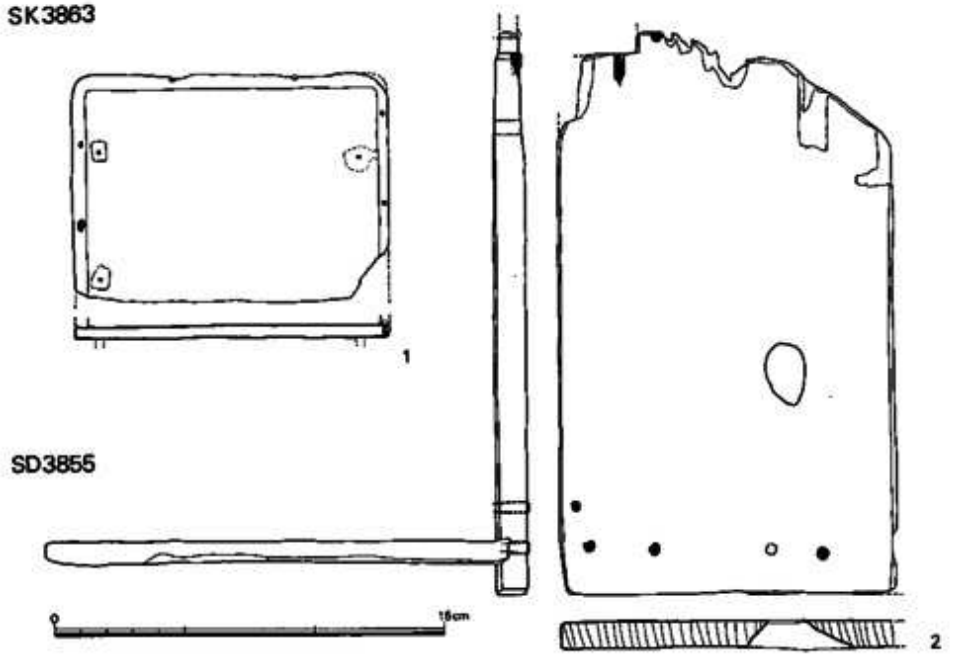
箱状木製品（1）底板で上面に朱漆、下面に赤味のある黒漆を塗布する。上面周縁部に0.4～0.5cm幅で側板用のあたりがまわる。側板と接合するための竹ヒゴが残る。また、下面にも0.3cm幅のあたりが2ヶ所にみられ台がつくものと考えられる。幅12.2cmをはかる。

その他の遺構出土木製品

キセル　羅字の両端に銅製の火皿と吸口をはめ



第52図　SD3840上層出土木製品実測図(7)



第53図　SD3855、SK3863出土木製品実測図

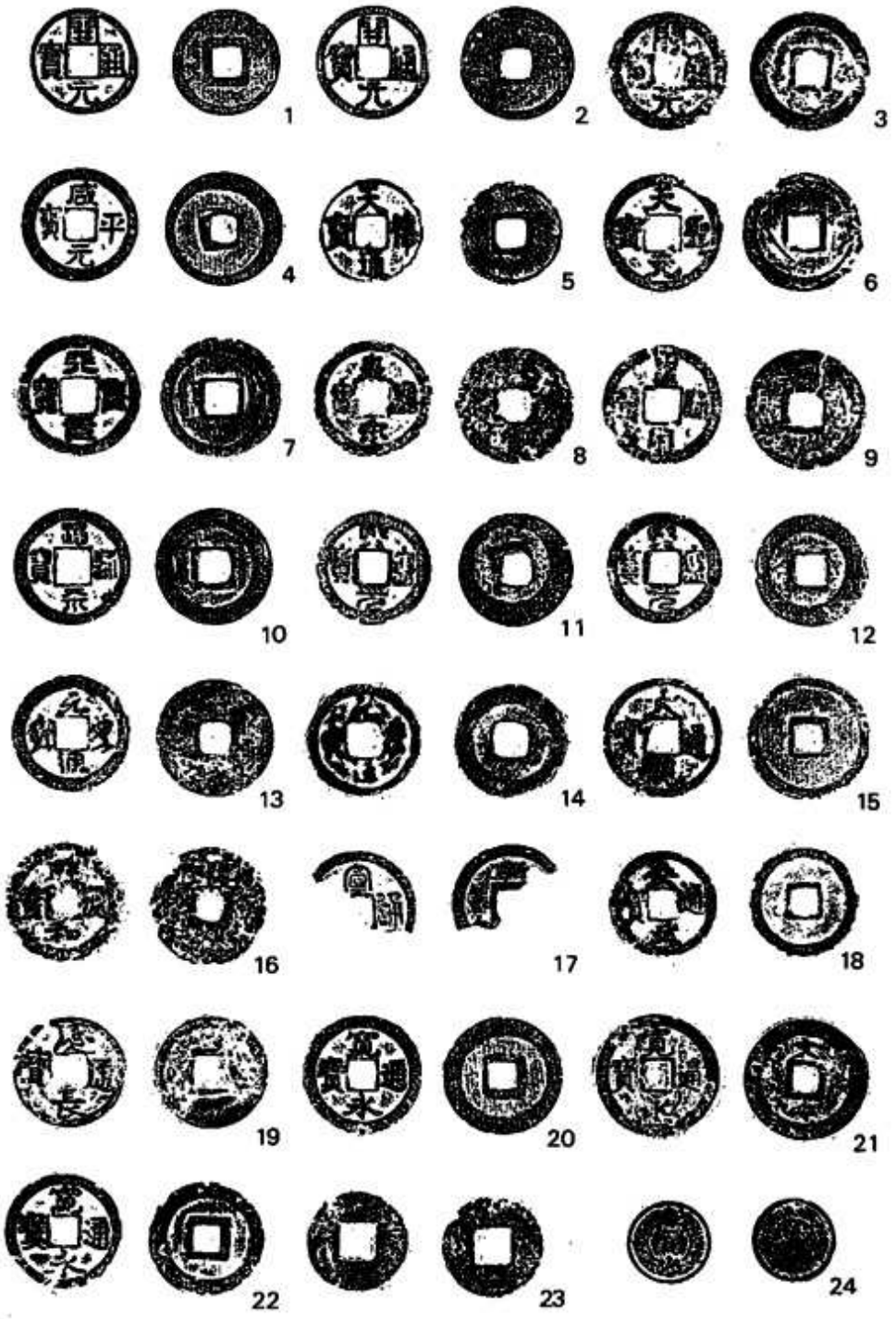
込むもの。雁首は直線的である。火皿径1.3cm、頭部長4.2cm、羅宇長17.2cm、羅宇径1.0cm、尾部長4.9cm。

銅銭（第54図）

各遺構・層位から30枚ほどの銅銭が出土した。そのうちわけは下表の通りである。

遺構・層位出土古銭一覧表

番号	銭　名	出土遺構・層位	初鋳年代	備　考	番号	銭　名	出土遺構・層位	初鋳年代	備　考
1	開元通寶	暗茶色土下層	621		13	元豊通寶	SK3863	1078	
2	開元通寶	暗茶色土下層	621		14	元豊通寶	暗茶色土層	1078	
3	開元通寶	茶褐色土層	621		15	大観通寶	暗茶色土層	1107	
4	咸平元寶	暗茶色土層	998		16	政和通寶	暗茶色土層	1111	
5	天禧通寶	SD3844	1017		17	宣和通寶	暗茶色土層	1119	
6	天聖元寶	茶褐色土層	1023		18	洪武通寶	茶褐色土層	1368	
7	天聖元寶	SD3844	1023		19	慶長通寶	SX3852(ピット)	1596	
8	皇宋通寶	暗茶色土層	1039		20	寛永通寶	茶褐色土層	1636	
9	皇宋通寶	SD3844	1039		21	寛永通寶	表土	1636	背上に「文」
10	治平通寶	暗茶色土下層	1064		22	寛永通寶	表土	1636	
11	熙寧元寶	暗茶色土層	1068		23	無文銭	暗茶色土層		
12	熙寧元寶	暗茶色土層	1068		24	一銭		昭和15年	

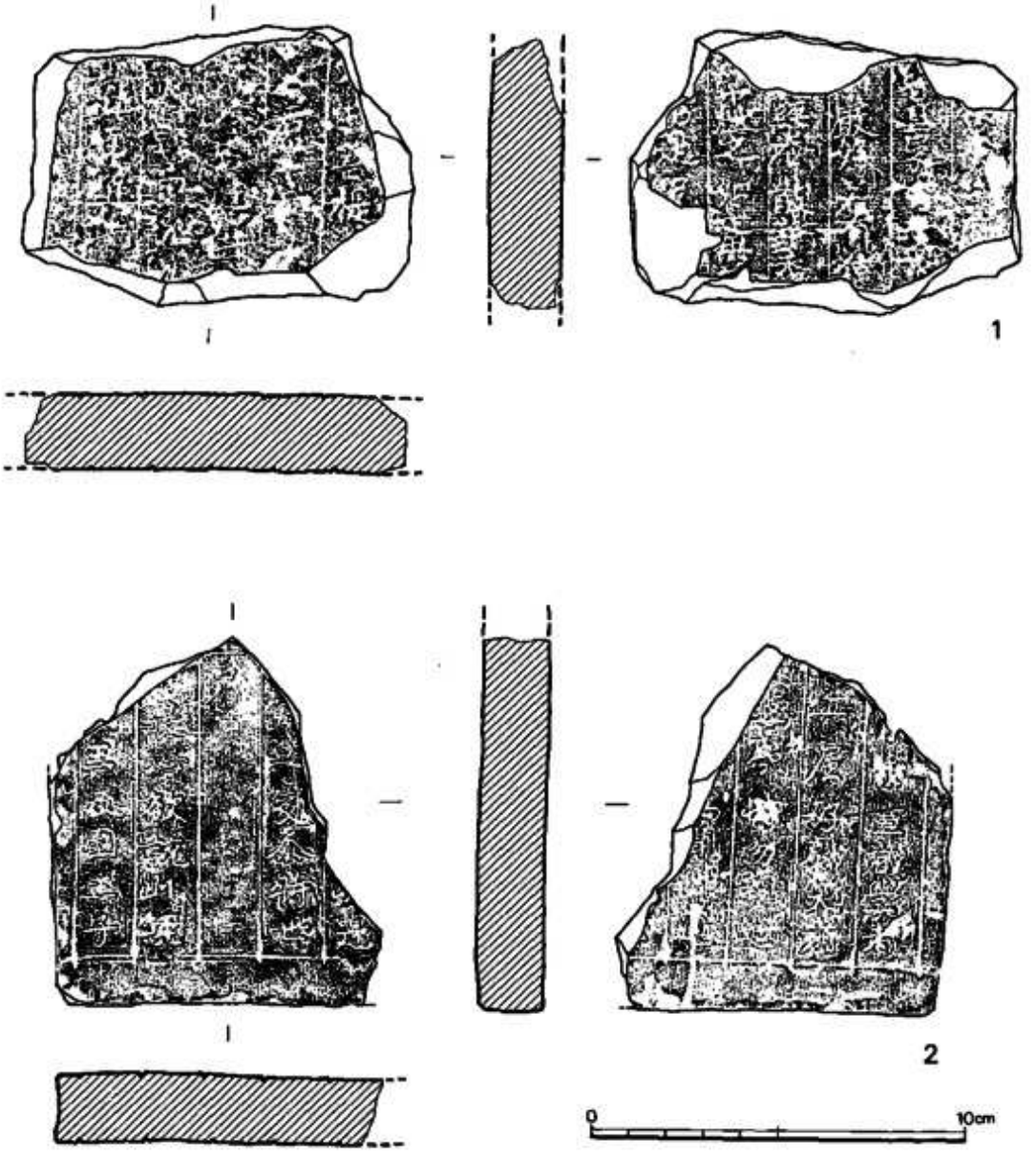


第54図　銅銭拓影

瓦経（第55図・図版77）

今回の調査で２点の瓦経片が出土した。

１は南北溝SD3860から出土し、２は床土直下の灰砂層から出土した。妙法蓮華経巻六　如来寿量品第十六の一部である。福岡市の大円寺の所蔵品である飯盛山出土の瓦経片（13枚目）と



第55図　瓦経拓影・実測図

同じ枚数目の部分である。大円寺蔵の破片と今回出土のものと比較検討すると表で2文字、裏で3文字が重複する。このことから、今回出土の瓦経片は飯盛山出土のものでなく、他の経塚から出土した可能性が大きい。罫線の幅は1.65cm。厚さ1.9cm。2は妙法蓮華経巻五の偈文の一部である。破片は左側縁と下縁が残っており、左下隅部にあたる。罫線は1.65～1.70cmである。厚さは1.7cmを測る。

これまで、観世音寺周辺から3点の瓦経片が出土している。このうち2点は観世音寺の小子房推定地の調査（第70次、1980年）で出土し、他の1点もこの調査地の近くで表採されたものである。第70次調査出土の瓦経は妙法蓮華経巻六如来寿量品の一部であり、今回出土のものと同じ巻のものである。また、他の1点は無量義経巻十功徳品の第三の一部である。そして、表採されたものは妙法蓮華経巻六分別功徳品第十七の部分である。そして、今回の出土分を合わせると合計5点が、この観世音寺周辺から出土ないし表採されたことになる。これまで、県内出土の瓦経片の殆どは飯盛瓦経の散逸したものと考えられているが、さらに観世音寺周辺で2点の資料が追加されたことは観世音寺の背後にある丘陵（日吉神社）に経塚が存在する可能性を示す貴重な資料といえよう。

出土石製品（第56・57図、図版77～79）

石臼（1・2）1は上臼。ものいれ・回し棒用の差込み孔がある。上面に3.0～4.5cm幅の縁をまわす。下面は使用によりかなり摩滅し凹んでいる。中心に径2.0cmの心棒受けの孔を設ける。目は6分割型で単位あたり6本の目を刻む。径32.1cm、高さ9.7cmをはかる。花崗岩製。SD3865出土。2は下臼。6分の1を欠く。中央部に隅丸三角形の心棒孔をもつ。目は6分割型で一単位あたり6本の目を刻む。径32.4cm、高さ6.7cmをはかる。花崗岩製。SD3860上層出土。

五輪塔（3・4・a）3・aは空風輪。3は下部に一辺4.0cmの方形の出枘を設けるが下端部は欠失している。凝灰岩製。風化が著しい。SD3860上層出土。4は水輪。上面に円形の枘穴を設け、下面もやや凹んでいる。四面にキリークの梵字を刻む。風化が著しい。上面径16.0cm、下面径13.0cm、最大径22.0cm、高さ15.4cmをはかる。砂岩製。塔跡Cトレンチ出土。

石鍋（5・6）ともに鍔をまわすもの。5は部位によって厚さが異なる。復原口径26.0cm。外面に煤が付着する。滑石製。5は発掘区中央部のピット、6は暗茶色土層出土。

容器（7・8）7は平面が3.1cm×2.6cmの方形の小形容器。器高は2.5cmをはかる。内面は螺旋状に削る。深さは1.4cmで底部に長径0.3cmの穿孔を施す。SD3840出土。8は口径2.8cm、器高1.7cmで内外面とも縦方向、口縁端部には横方向の削りを施す。黒灰色粘質土層出土。7・8とも滑石製。紅皿。

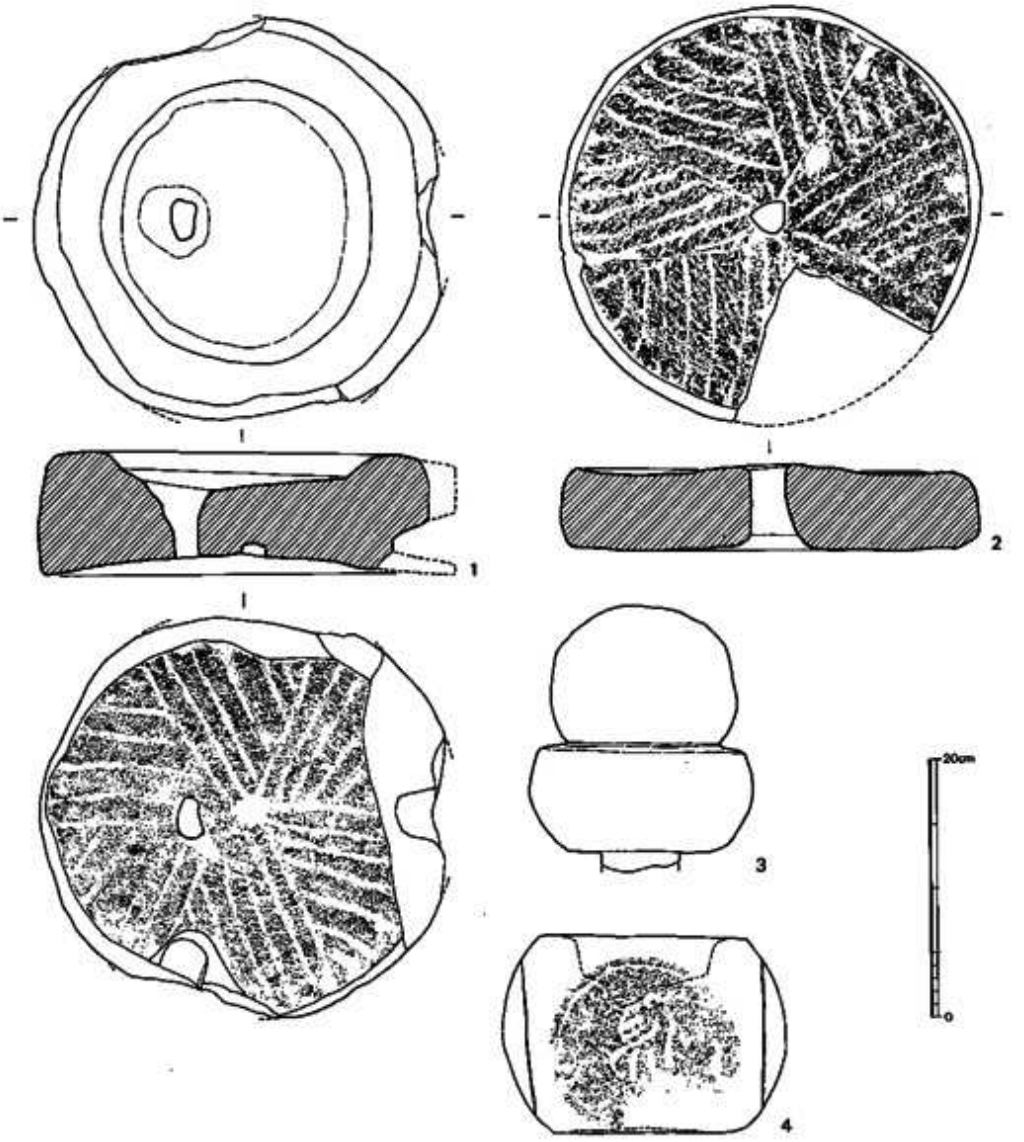
円盤形石製品（9）厚さ0.45cmの滑石を径2.8cm×2.4cmの楕円形に整えたもの。全面を平滑に磨いている。SD3865の下層から出土。

石帯（10）巡方で一辺4.2cm、厚さ0.6cmをはかる。裏面には4ヶ所にかがり孔をあける。側

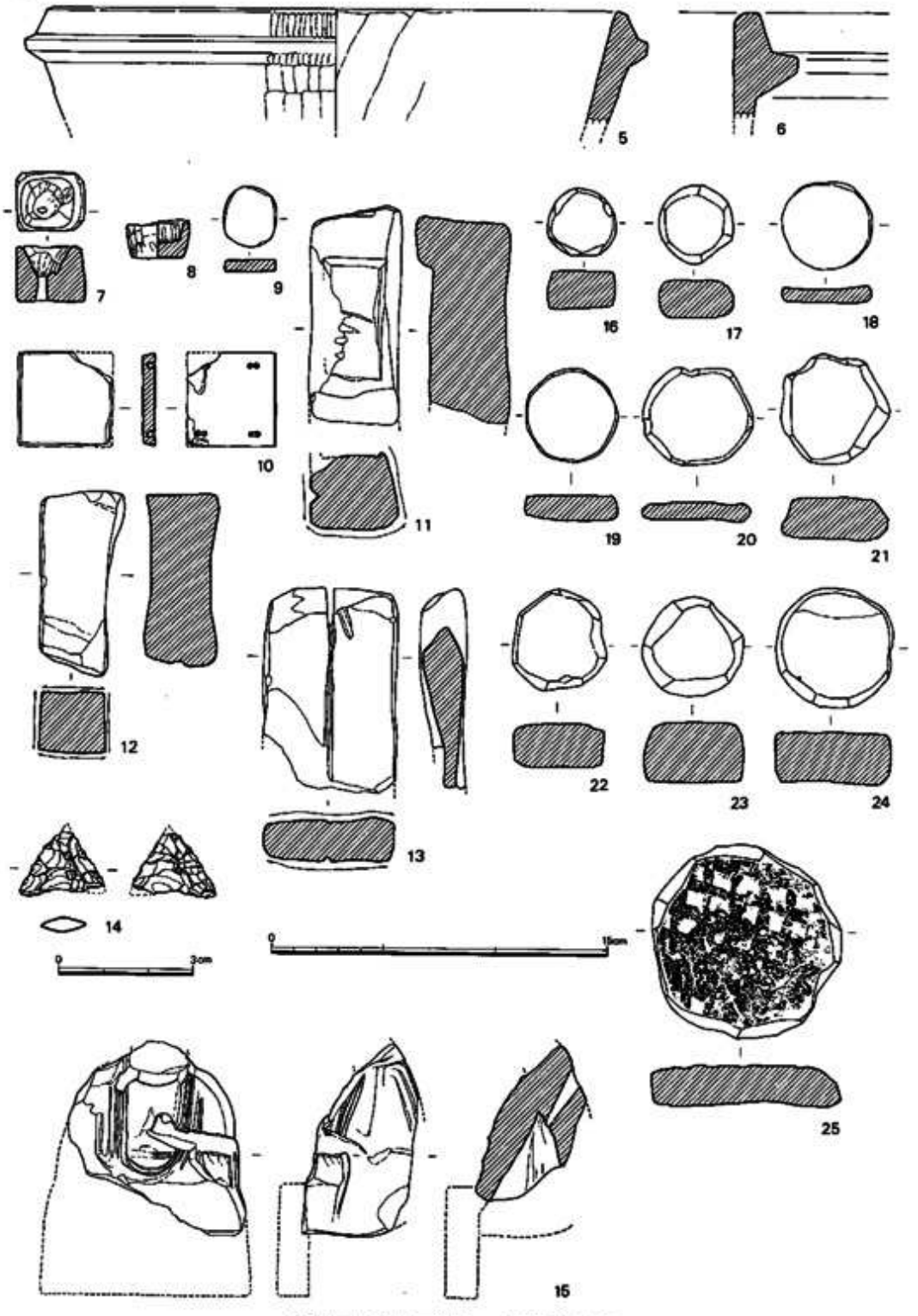
面下端は面取りしている。サヌカイト製で暗黒茶灰色を呈する。暗茶色土層出土。

硯（11）砥石に二次加工を施して硯としたもの。長さ9.8cm、幅4.1cm、高さ4.2cmをはかる。上面を長さ5.4cm、幅2.9cm、深さ0.6cm刳り込んで硯面とする。砂岩製。茶褐色土層出土。

砥石（12）長さ7.8cm、最大幅3.8cm、厚さ2.7cmをはかる。下部に擦切痕が残る。仕上げ砥。砂岩製。SD3840出土。



第56図　出土石製品実測図



第57図　出土石製品・土製品実測図

石錘（13）下半分を欠失する。板石の短辺に両側から切込みをいれ、２つの切込みを溝によってつなぐものと考えられる。溝は中央部が最も深くなる。幅6.0cm。SD3860上層出土。

石鏃（14）長さ1.5cm、幅1.7cmの二等辺三角形状を呈する。厚さは0.3cm。先端部と右脚部を欠失する。基部に浅い抉りをもつ。重量約１g。黒曜石製。SD3860南側の層位中より出土。

土製品（第57図、図版78・79）

仏像（15・b）15は土製の地蔵菩薩像で頭部と右手・脚部・台座を欠失する。左手は胸のところで宝珠をもつ。身には格子文のある衲衣をまとうが残りは悪い。背面には光背を取り付けるための孔があけられる。肩部には型の合わせ目が縦にはしっている。座部には芯木をたてるために円錐形の孔をヘラで彫り出す。胎土は精良で砂粒をわずかに含んでいる。第67次調査として1980年度に調査を行なった推定金光寺跡出土のものと同笵と考えられる。SD3860上層出土。aは土製仏像の膝前と台座の一部である。これと類似するものが金光寺跡（第97次調査）で出土しており、それからみると尊名はわからないが如来形座像である。

円盤形土製品（16～25）16・17・21～25は平瓦の周縁部を打ち欠き、磨いて円盤状に整えたもの。19は土製、18・20は土師器小皿転用品である。径3.0～5.5cmの小・中形品と径８cmを越える大形品がある。16はSD3865、17は黒褐色土層、18～20は発掘区南西部の溝状遺構、21はSX3845、22・23はSX3862、24はSD3855、25はSD3840下層から出土した。

鞴羽口（１・２・a）１は先端部が溶けてガラス質になっている。２は基部で孔が二段になる。部分的に熱を受け黒化している。

築地跡出土土器（第59図、図版80）

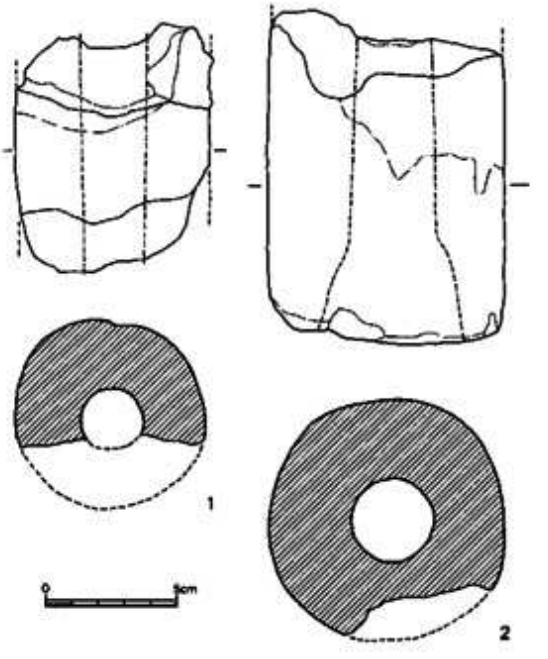
須恵器

蓋（１）杯蓋の蓋で見受けのかえりをもつものである。天井部外面は回転ヘラ削り調整、天井部内面はナデ調整する。天井部外面にヘラ記号があるが欠失しており種類は不明。黒灰色土層出土。

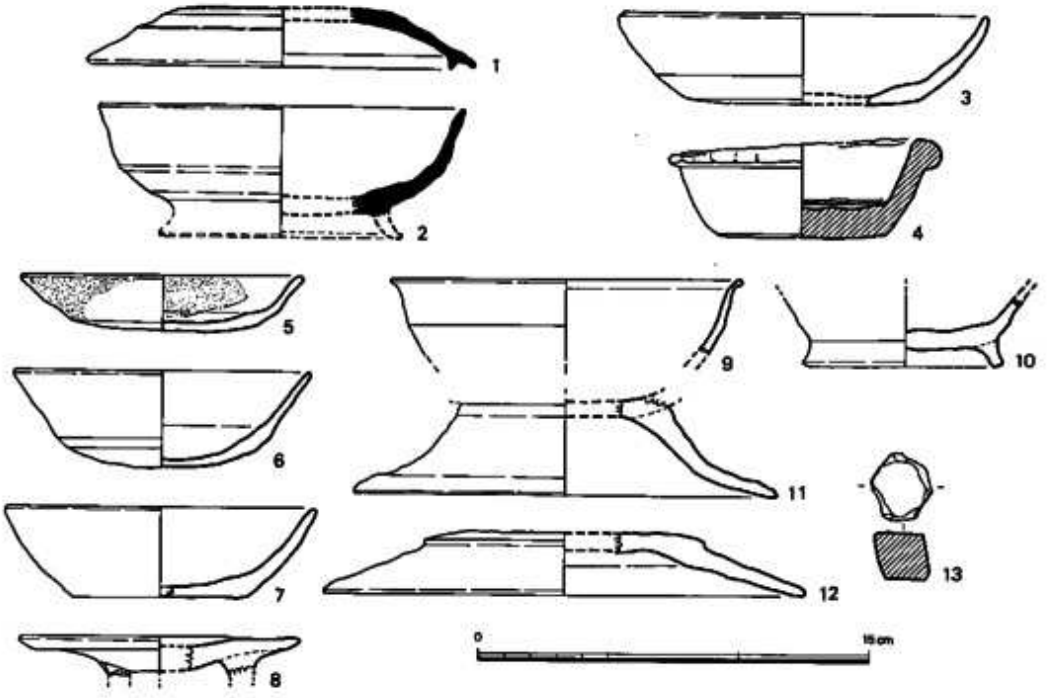
杯（２）底部と体部の境が不明瞭なもので、口縁部はわずかに外反する。底部外面は回転ヘラ削り調整、底部内面はナデ調整を施す。暗灰色粘質土層出土。

築地跡出土軒瓦（第60図、図版80）

巴文軒丸瓦１点・中心飾に梅鉢を置く均整唐草文の軒平瓦１点が出土している。い



第58図　鞴羽口実測図



第59図　築地跡・回廊跡・塔跡出土土器・石製品実測図

ずれも近世以降のものである。

回廊跡出土土器（第59図、図版80　別表）

土師器

杯（3）体部は内弯しながらたちあがる。外面の底部から体部下半にかけて回転ヘラ削り調整を施す。全体的に風化が著しく他の部分は調整不明。Aトレンチのピット出土。

瓦類

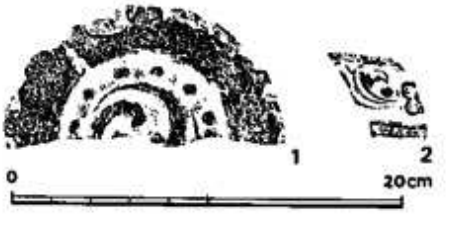
回廊跡出土軒瓦

老司Ⅰ式軒丸瓦3点・第37図9と同じ平安時代の単弁8弁の軒丸瓦2点が出土している。

回廊は康治2年（1143年）金堂とともに焼け落ちる。回廊東南隅部まで焼亡したかどうかは発掘調査の結果ではわからない。特にこの時期どの軒瓦が回廊に使われていたかを想定できる資料は得られていない。

石製品（第59図、図版80）

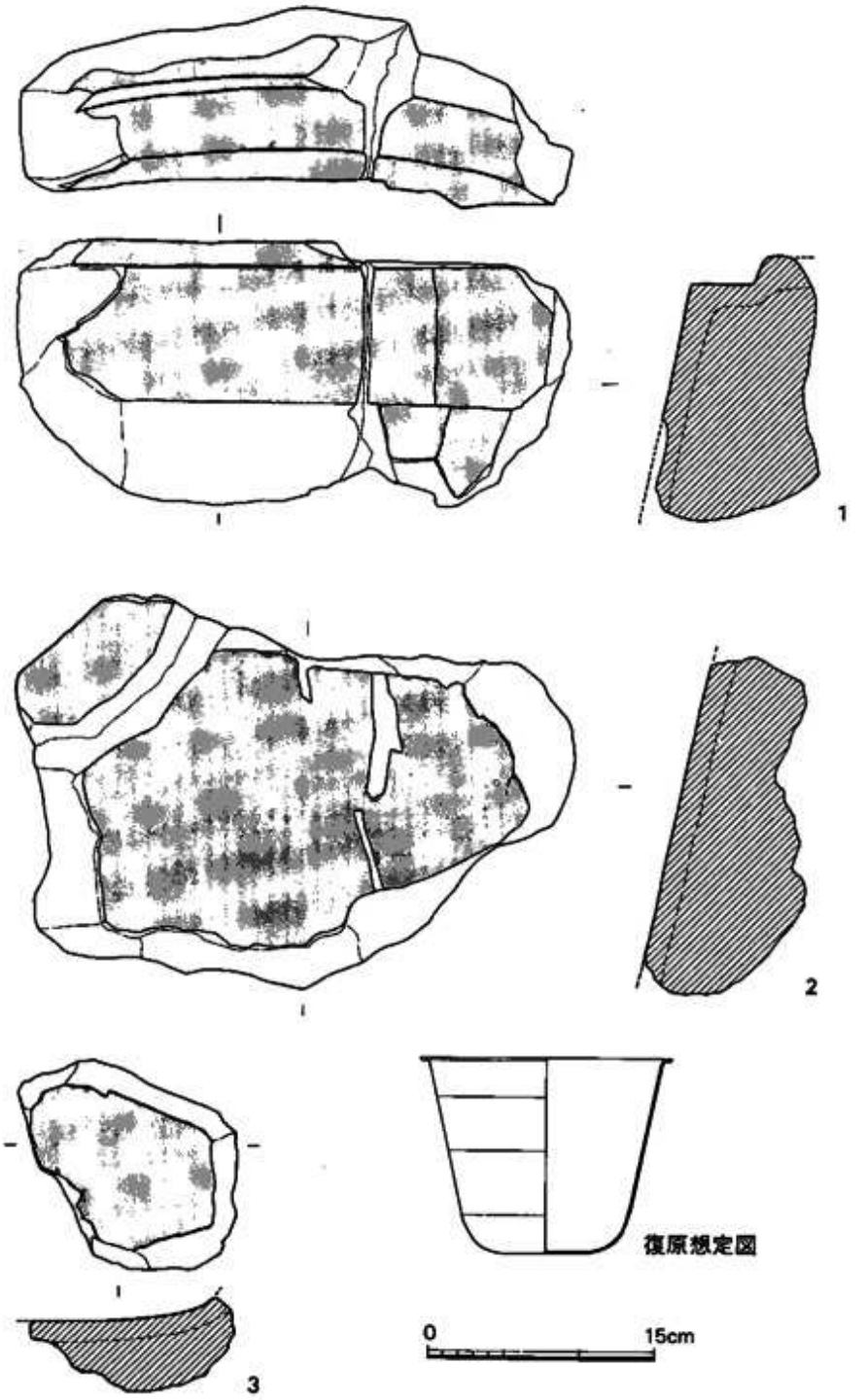
石鍋（4）小形品で口縁端部に鍔をまわす。外面は縦方向に細かく削る。底径6.4cm、器高3.8cm。Bトレンチ SK3888出土。



第60図　築地跡出土軒瓦拓影

鋳造関係遺物（第61図、図版81）

鋳型（1～3）図示したものの他にも同一個体の



第61図　鋳型実測図

鋳型が多数破片で出土した。つくられた製品の形状を完全に復原するにはいたらなかったが製品は口径120cmほどに復原できる。比較的大きな破片で製品の形状を知る上で重要と思われるものに限り図示した。

出土した鋳型はすべて外型である。口縁部（1・a・b・c）は二段になる。口縁部と体部（2）の境から9.4cm下がった位置に真土の継目を示す横割れ線がまわる。この割れ線は2の破片にもみとめられる。縦方向にもひび状の割れが見られるが横線ほど直線的ではない。3・dにみられる様に底部と胴部の境は不明瞭で、丸味をもった底部から内弯しながら緩やかに立ち上がって胴部にいたるようである。真土は三段階ある。粗真土は厚さ9cm以上で砂粒・スサを混入している。茶褐色を呈する。中真土は1.2～1.4cmほどで砂粒をわずかに含んでいる。色調は黄褐色。仕上げ真土は0.25～0.3cmで鋳面には部分的に黒味が塗布されている。色調は明るい青灰色を呈する。投棄された状況でSK3888から出土した。なお、第61図の右下に示した製品の復原想定図は出羽羽黒山黄金堂例より起こしたものである。

塔跡出土土器・土製品（第59図、図版80　別表）

土師器

蓋（12）天井部外面はヘラ切り未調整、その他はヨコナデ調整。黄褐色土層出土。

皿（5）底部外面はヘラ切り未調整。内外面に油煙が付着している。油煙は割れ面にも付着しており、皿が2つに割れたあとそれぞれ灯火器として使用されている。Cトレンチから出土した。

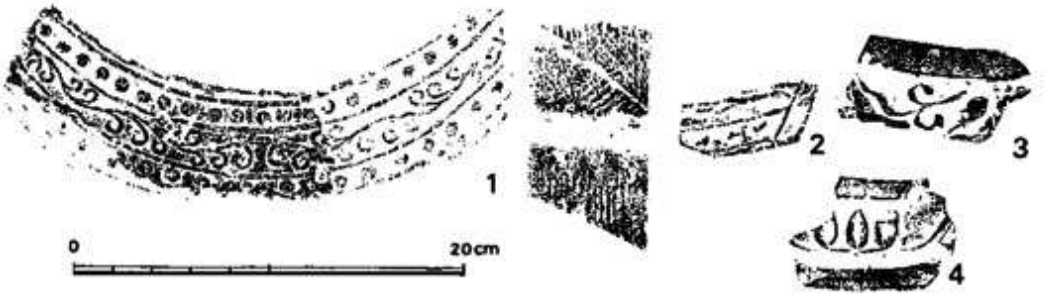
杯（6・7）6は底部外面がヘラ切り未調整、底部内面はナデ調整。7は風化が著しく調整不明。黒色土層から出土。

脚付皿（8）皿の底部に獣脚を付すもの。小片のため口径はやや不確実。黄褐色土層から出土。

椀（9・10）9は金属品の稜椀の写しで器壁は薄く仕上げられる。体部は丸味をもち口縁部は外反する。体部下半は回転ヘラ削り調整、口縁部と体部内面はヨコナデ調整。体部の内面は黒化しており燻されたものか。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。色調は黄褐色を呈する。Bトレンチの黄褐色土層から出土。10は「ハ」の字に開く高台を貼付している。Dトレンチ黒色土層から出土。

黒色土器

脚付椀(11)杯部内面のみを燻しているA類。脚部は裾広がりになる。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。色調は明るい黄褐色を呈する。小片のため復原径にはやや不安が残る。Bトレンチの黄褐色土層から出土。



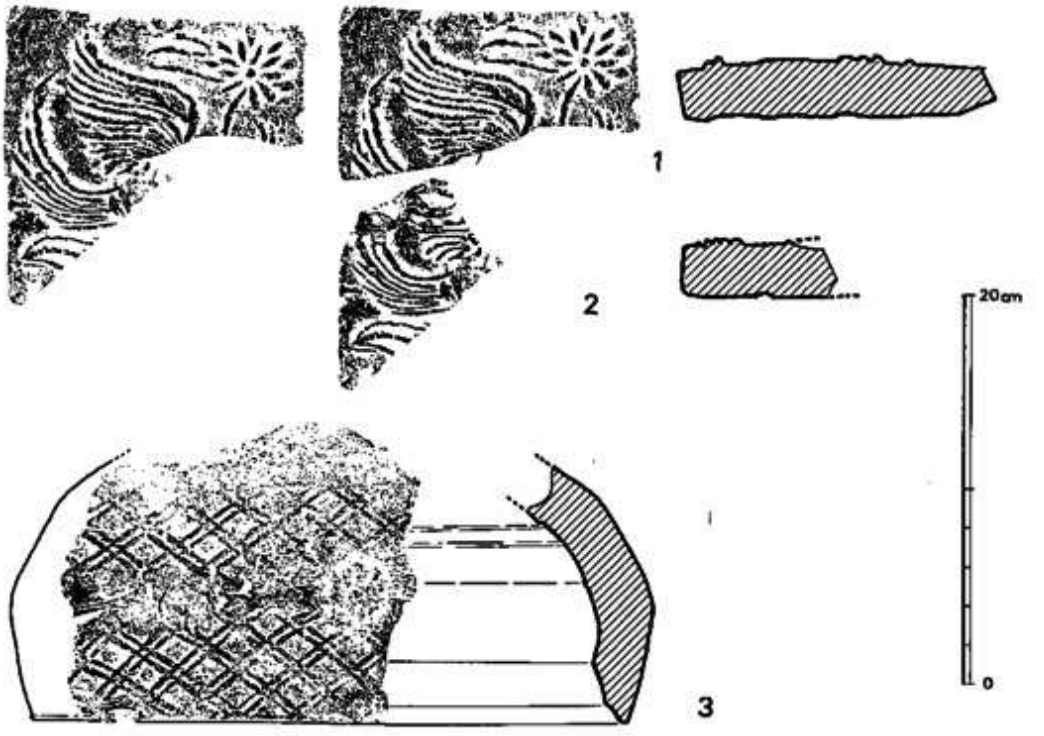
第62図　塔跡出土軒瓦拓影

瓦類

塔跡出土軒瓦（第62図、図版80）

老司Ⅰ式軒丸瓦4点・老司Ⅰ式軒平瓦1点・第42図10の軒平瓦1点と第62図の軒瓦が出土している。

1は中心飾のない均整唐草文で瓦当面の左右から唐草文が中心に向かって流れ両方の先端が中央で向かい合う。上・下帯とも連珠文を配置する。顎から平瓦部にかけては縄目の痕を残す。縄目は平瓦部では縦方向に叩かれるが顎部では縦に叩いたあと斜めにも叩いている。



第63図　埼・瓦質製品拓影・実測図

2は軒平瓦右端下半が残る。退化した唐草文の1部が僅かに残り下帯は連珠文である。脇区は素文で界線が下帯の下までのびる。

3・4は近世以降の軒平瓦である。

この他に珠文帯のみを残す平安時代の軒丸瓦片1点、巴文軒丸瓦の破片1点・近世の軒平瓦片2点がある。

塔跡では塔基壇の規模を知ることはできたが遺構の状況から塔に葺かれた軒瓦を想定し得る根拠はなにもない。今回の出土瓦では康平7年（1064年）までの軒瓦とできるのは老司式軒瓦セットと第62図1の軒平瓦程度である。

道具瓦・塼など（第63図、図版69）

鬼瓦・文様塼・塼・用途不明の瓦質土製品などが出土している。

鬼瓦　笵型から抜かれたものはなく、1点ずつ彫刻された鬼瓦の破片10点余が出土している。中世・近世の区分や個体分けも困難な状況である。ここでは2点を紹介するのに留めたい。

1は比較的小型の鬼瓦である。眉を目の上に逆立てた状況を粘土を盛り上げて作り、ヘラで毛の流れを表現している。目は右目だけが残るが飛び出した円筒で表現される。二重に表現される眼球は竹管を押圧したものである。両眼の円筒に接して大きなダンゴ鼻が配置される。鼻花は楕円形で深く穿たれる。鼻の下は狭い上唇部となり髪がヘラで彫り込まれている。上唇の下にはヘラで区割りされた上顎部の歯が表現される。口は上顎部の歯の下が奥行き2.0cmほどと深く表現されているからやや開いていたものだろう。阿形の鬼であったものか。右眼の脇は破損しているが眉をヘラで表現した状況に近いヘラの痕跡がわずかに残るから毛髪を表現していたものだろう。

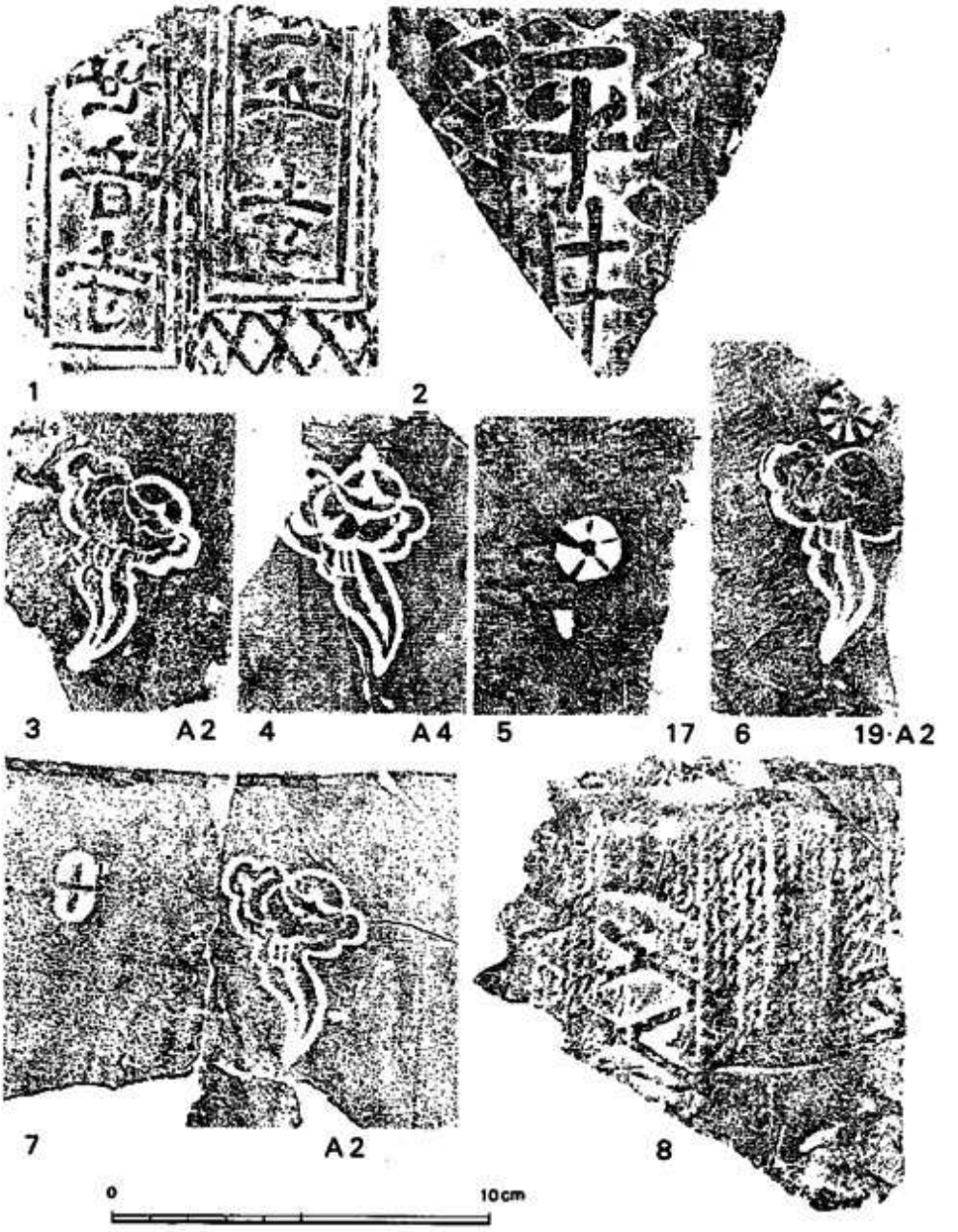
鼻口の右側も破損しているが右頬の傾斜が下向きであるから、下向きの牙か髭が表現されていたものか。裏面は重量を軽くするためか大きく抉られている。

2は左顔面上半部が残る。眉は上部が欠損しているが幅広のヘラ状の器具で眉毛を表現していたものと思われる。目はやや内側下に向き眼球は半球状に表現され竹管で形状を整えている。外周は竹管を押しつけた連続する円文である。眉と円文の間にはヘラで縦方向の区割沈線がある。裏面は横方向のカキ取り痕跡を残し平坦に作られている。

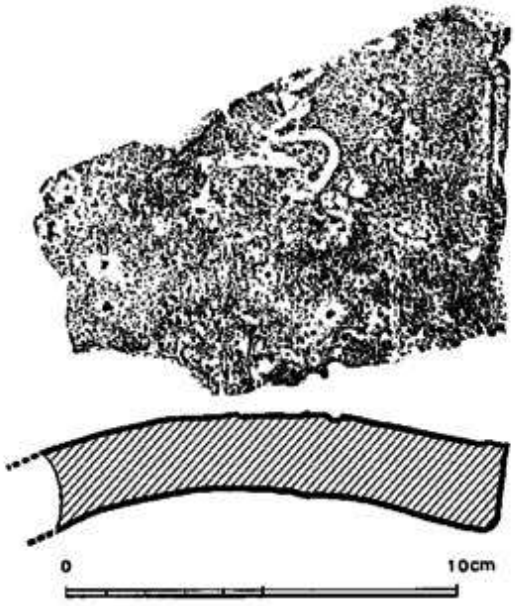
塼　無文の塼は10数点出土しているが短辺17～18cm、長辺28cm、前後厚さ6cm程の規格品の破片である。

1は花鳥をあしらった文様塼である。南門跡の西に設定した築地推定地のトレンチ調査で表土から出土した。上辺で15.5cm、厚さ2.5cmある。文様は型抜されたもので表面はやや荒れている。3つの側面はヘラ削りして形を整えたものと思われるが、上辺には指の痕が残り右辺はやや傾斜している。裏面は横方向にヘラ削りされているが右辺のみ縦方向にヘラ削りの痕を残している。

2は大宰府学校院中央部（第37次、1975年）の調査で出土している。鳥の羽根の文様と植物の葉と思われる文様が残っている。1と同一の文様を施された塼であると考え参考資料として



第64図　塔跡出土軒瓦拓影

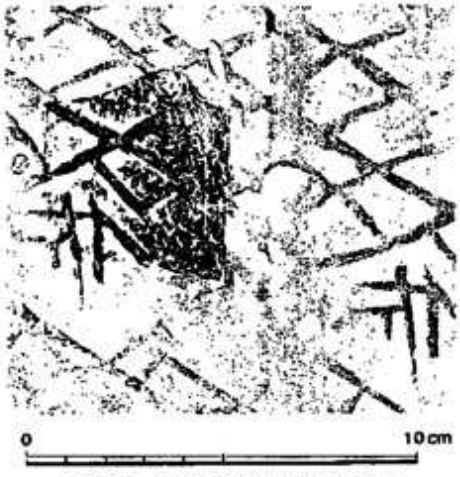


第65図　南門跡出土文字瓦拓影

抜きだした。1・2を拓本で合成すると左端のようになる。

拓図から文様を想定すると鳥が中央右向に配置されている。右翼を大きく広げ尾羽根が弧状に上を向く。右上の開いた花からは3条の線が流れ出ているが何を表現したものかは不明である。また、花と下部に表現された葉のような文様との関係も不明である。合成した拓図からは左辺が15.5cmほどが測れるから縦方向の1辺は20cmを越えるものと予想される。戒壇や須弥壇などの壁面を飾っていたものか。

3は用途のわからない製品である。胎土には多量の砂が入り須恵質に焼き上り表面には瓦の叩打痕と同じ斜格子文が残っている。瓦の製作工房で作られたものと考えて良いだろう。図では伏鉢状に示したが逆である可能性もある。上部破面およびその内外は二次的な火を受けたと思われ灰白色に変色をしている。内面の下端は大きくヘラ削りされ、その上部は横方向にナデ付けられている。



第66図　回廊跡出土文字瓦拓影

文字瓦・刻印など（第64～66図、図版67・68）

第64図1は丸・平瓦の叩打板に左右逆字「観世音寺」と記されたもので丸瓦5点・平瓦14点が出土している。本例は平瓦である。

2は平瓦の凸面に「平井」の文字がある。叩打具に彫り込まれたものである。「平井」・「平井瓦」・「平井瓦屋」の正字や左右逆字のもの、文字を陰刻したものなど10種類以上があるがその一種である。

3は講堂跡の概要報告で「雲」文と呼んだ刻印で同報告の第40図のA2にあたる。平瓦の凹面に押されている。4点出土。4は第40図A4である。丸瓦凸面に押されている。講堂跡の概要報告ではA1・A2・A3は平瓦凹面に押され、A4のみが丸瓦凸面に押されているとしたが、今回の出土例もこのことを踏襲したこととなる。

5は講堂跡概報第38図17と同じ刻印で平瓦凹面に押されたもの1点が出土している。

6は丸瓦凸面に講堂跡概報19とA2が押されている。

7では楕円の中に「十」を配置した新出の刻印とA2が組合せで平瓦凹面に使用されている。6・7の組合せは新しい組合せの例である。また、6で見るようにA2が丸瓦に使用される事例が出た。

8は丸瓦凸面に縄の叩打具痕と斜格子の叩打具痕を残しているものである。

第65図は南門跡の調査で出土した。平瓦凸面にヘラ書きされたものである。平瓦横断面の形状から凹型製作台を使用して製作された一枚作りの平瓦と思われる。文字は上部が欠損しているが何字かあったものと考えられる。「為」の1字が読める。

回廊跡東南隅の調査では第64図1の「観世音寺」の左右逆字の叩打痕を残す丸瓦4点・平瓦9点が出土している。この他では第66図の文字瓦が出土した。「佐」の字の左右逆字である。1点が出土している。「佐」の文字瓦には正字・左右逆字・文字の一部が欠落するものなど数種あるが、その1例である。

出土土製品（第59図）

円盤状土製品（13）瓦の周縁部を打ち欠いて円形に整えたものである。

小　結

以上、南門跡・南門跡東南地域・南面築地跡・南面回廊跡・塔跡の調査結果についてその概略を記した。ここでは、これらの結果をまとめ若干の検討を加え結びとしたい。

1．南門跡東南地域

今回の主要な目的は、過去に実施した第120次および第70次補足調査の結果、観世音寺の後面築地がこれまで推定されていた線より約15m程南へずれる可能性がでてきた。この調査の結果から南面築地を『観世音寺資財帳』記載の築地規模で復原すると、今回の調査地のほぼ中央付近にあたる。既に平成2年度に、東側に隣接する地域を第122次調査として実施しているが、この時の調査では築地を確定し得る遺構の検出はなかった。そして今回さらにこの築地の確定のため、従来の推定地と、さらに南門跡の東辺部を含む形でその追究をおこなった。しかしながら調査の結果、築地遺構を確認することはできなかった。

調査の結果、主要な遺構として検出したのは溝5条・埋甕遺構・ピット群であるが、それらが層位の関係・遺構の切り合いから5期に大別されることは前記したとおりである。建物等の遺構は明瞭に確認できなかったが、遺構を期別にし得た基準は5条の溝である。ここではこれらの溝を中心に年代等の検討を行なってみたい。

Ⅰ期の溝　溝SD3840は幅10m前後の溝で、現参道に並行する形である。この溝からは「元亨三年（1323年）」の紀年銘墨書木札が出土している。また共伴土器から見ても矛盾がない。

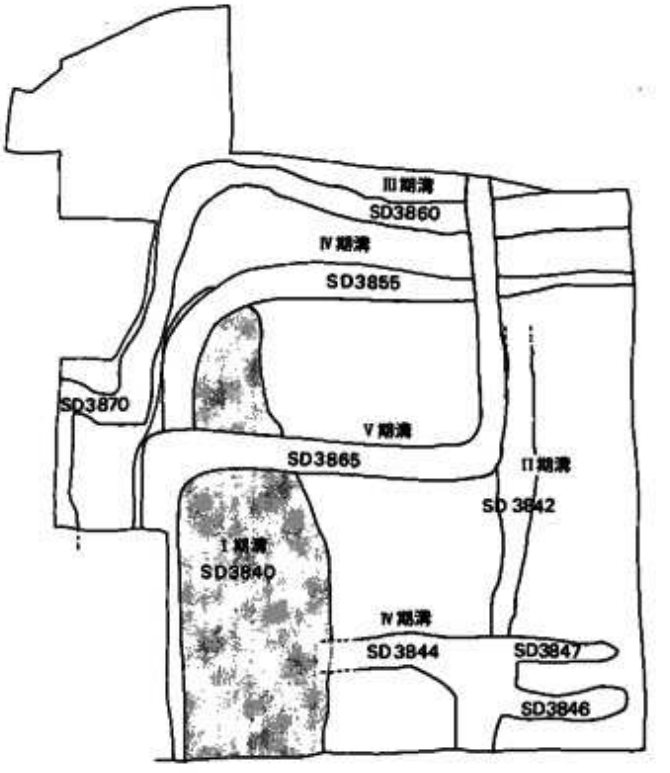
また、参道を挟んだ西側の地域で検出した溝SD3200も幅8.0～11.0mで、同じく嘉元二年（1304年）銘墨書木札が出土しており、年代・規模が似ている点、同時に存在していた溝と考えて差し支えないようである。その年代は14世紀代が考えられる。

II期の溝　溝SD3842は発掘区の中央を南北に走る溝で、出土遺物から15・16世紀代に考えられるものである。

III期の溝　鍵形に巡る溝SD3860は築地推定位置に並行に走る溝で、さらに南門跡を避けるように曲がっている。この溝は出土遺物から17世紀中頃～18世紀前半代に比定されるが、南門を避けていることからこの時期においても南門としての痕跡があり、制約を受けていたと考えることができる。

IV期の溝　III期の溝とほぼ同じ流路をとり、東端部では側石を配するなどIII期の溝に類似している。出土遺物では、最も新しいもので18世紀後半代のものを含んでいる。溝SD3844・3847・3846は西端部が不鮮明であるが、溝相互の切り合い関係からするとこの期にはいる。

V期の溝　溝SD3865は発掘区の中央を鍵形に巡り二分する様な形になっている。北端部付近ではどうであるかは不明である。この期の顕著な遺構として、埋甕遺構や桶埋設遺構が計11個あるが、これらの遺構はこの溝によって２つの地区に分散され、その配置関係から見ると２つの建物遺構が想定されるが具体的な建物の構造等は明瞭ではない。この期の年代については17世紀中頃～19世紀初頭頃が考えられる。『筑前国続風土記』に描かれている「公文書別當」がこの位置に想定され、それとの関連が注目されるところである。明治35年の絵図『観世音寺境内之圖』では庫裏は現在の所に描かれており、この地は水田となっている。このことから、この頃には既に建物等は存在しなかったことが窺われ、発掘調査の結果とも符号するところである。



第67図　検出溝期別模式図

2．南門跡

『資財帳』に記載された南門は「瓦葺大門壱宇　長四丈一尺四寸　廣二丈二尺」である。現在この場所には礎石７個が散在しているがこれらはいずれも原位置を保っていないものであることは先述した通りである。かつて鏡山氏は水平を保っている礎石１個と西側に残る土盤状の高まり等から南門跡をほぼこの位置に推定復原されている。今回の調査で南門跡を確定し得るものを、検出した遺構からは見いだし得なかった。しかし現在、礎石が散在している部分には積土は残存していなかったが、周囲より一段地山が高くなっており、また近世の溝ではあるが、SD3860・3870がこの部分を回避するように巡っている点などを考慮するとほぼこの付近に南門を想定することには大過ないであろう。

3．築地跡

築地については『資財帳』に「東長陸拾五丈　南長五拾柒丈　西長陸拾五丈　北長五十七丈」とある。北面築地については第120次調査でその推定地を調査したが、その痕跡を窺えるような遺構は検出しなかった。しかしながら第70次調査補足で東西方向の溝SD1850を検出し、これが幅2.2m、深さ0.65mのしっかりした溝で年代的に８世紀中頃～後半代までは存続していたと考えられるものである。年代・規模の上から境内地の北を限るものとの見方をしている。もし、これが北を限る溝とした場合、北面築地は従来の位置から約15mほど南へずれる。東面および西面築地は『資財帳』によれば650尺である。第126次調査で得られた『資財帳』の単位尺は0.30mである。650×0.30＝195mの距離を南へとると南面築地は当然にして従来の推定位置より南へ約15m程ずれることになる（第68図破線）。しかしながら先述したようにその痕跡を検出遺構からは確認できなかった。そして今回、築地推定位置にトレンチを設定し調査したが、それを確定することはできなかった。

4．回廊跡

回廊跡についてはその規模を『資財帳』では「東長弐拾陸丈肆尺　廣一丈五寸　南長弐拾五丈八尺　廣一五寸」と記している。

第126次調査（平成２年度）により北面・東面回廊の東北隅部を検出し、それがほぼ『資財帳』の規模に合致することをすでに明らかにしている。今回、南面回廊の東側部分を調査したが明瞭な遺構は検出できなかった。しかしながら推定位置付近で、溝SD3886（北面回廊雨落溝からの距離79.0m）を検出し、これが『資財帳』記載の264×0.30＝79.2mとほぼ近似したところに位置している。調査範囲が狭少であるため断定できないが有力な根拠となろう。そして、この溝の南側では鋳造関係の土壙（11世紀後半）や瓦溜り状の遺構が見られることはそれを補強するものとなろう。

5．塔跡

塔について『資財帳』は「瓦葺五重塔壱基　戸肆具　鐸四口　無実」と記し、その規模等に

ついては具体的には示していない。康平七年(1064年)には火災に見舞われて講堂・回廊等とともに焼失している。講堂は治暦二年（1066年）に再建されているが塔についての再建の記事はない。現在、心礎・四天柱礎石・側柱礎石（東南隅柱・脇間の柱）の計４個あり、そのほかに柱の西北隅には割られた礎石と根石状のものが残存している。鏡山氏は現存するこの４個の礎石から6.5尺・７尺・6.5尺の塔建物を復原されている。今回、Bトレンチ及びCトレンチで検出した基壇地覆石と塔心礎から復原すると、15.0m(50尺)四方の基壇規模が復原可能である。そして残存礎石から再検討すると、６尺・７尺・６尺で総距離が19尺の塔建物が復原できる。

今、心礎及び３個の礎石が創建当初のものであるのかを考慮するとき、いくつかの問題点があげられる。

① 四天柱の柱間を７尺とした時、西北部が心礎上に位置し、礎石を置く余裕がない。

② 心礎と四天柱・側柱礎石のレベル差が70cmと大きいこと。

③ 側柱東南隅の礎石柱座が方形で、地覆座の方位が検出した基壇地覆石の方位とは合致しない。

④ 建物規模19尺に対して基壇一辺の長さが50尺と大きいこと。

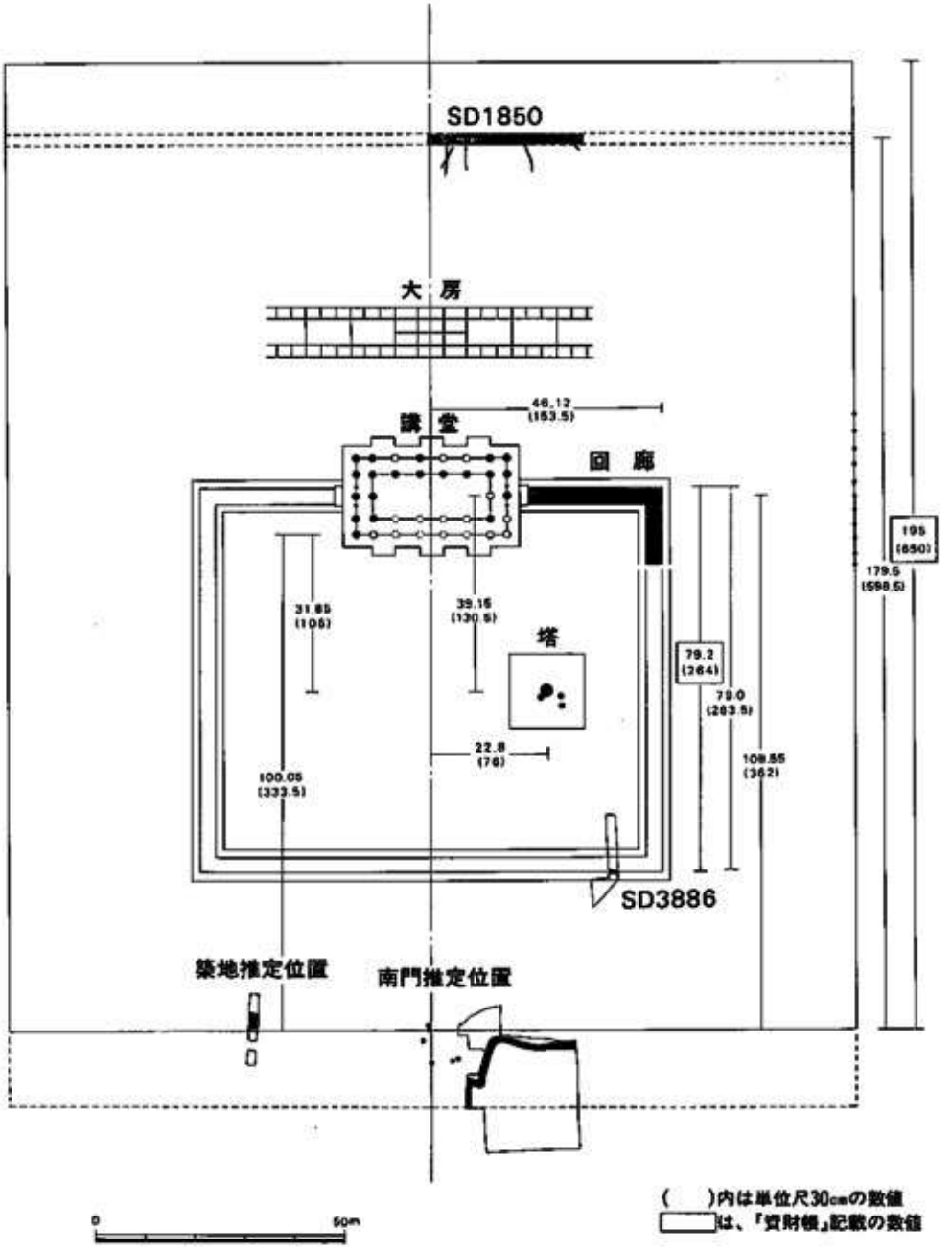
以上の４点が大きな疑問としてあげられる。①については西北の四天柱を解決すれば検出した基壇とプラン上は矛盾が見られない。②については心礎より若干低い例はみられるが、70cmの差のものは類例としては見られない。③については観世音寺境内に残存する礎石に方形の柱座を有するものが唯一であること、地覆座が復原線とは合致しないことなどから後世動かされたか、後補の可能性が強い。④については一般的に基壇一辺の距離は建物規模の２倍に等しいかそれより小さい場合が多く、例外的である。二重基壇であった可能性も考えられる。

以上、いくつかの問題点を提起したが、心礎を除いた礎石が創建期のものであるのか、原位置から移動したものであるのか、断定するまでには至らなかったが、ここでは後世に再建もしくは手が加えられた可能性を指摘するにとどめ、今後さらに検討を加えていきたい。

結　語

１．観世音寺の伽藍配置の関係について

今年度で観世音寺の主要伽藍については金堂を除いてほぼ調査を終了したことになる。ここでは明らかになった事実について数値の上からその配置関係について若干の検討をしてみたい。鏡山氏は現存する講堂跡・塔跡・南門跡などの礎石それに『資財帳』等から配置関係を述べられている。その伽藍配置は東に塔、西に金堂を配する、いわゆる法起寺式であるが塔と金堂が対面することから観世音寺式とも呼ばれている。そして、北門・講堂・南門がほぼ等距離の位置関係にあり、塔・金堂は南門と講堂の３分の１の距離にあることを数値の上から示している。今回、数値のとり方に若干の違いがみられるが、大略それに合致した結果であった。以下、各



第68図　観世音寺伽藍配置関係図

建物間の距離を箇条書きする。

1．講堂と塔心礎の心心距離は39.15m（130.5尺）
　講堂南側柱礎石と塔心礎の心心距離は31.85m（106尺）
　推定中軸線と塔心礎の心心距離は22.80m（76尺）

2．講堂南側柱礎石と南門の礎石（水平を保っている）の心心距離100.05m（333.5尺）

3．北面回廊北側雨落ち溝と南面回廊南側雨落ち溝（SD3866）との距離79.0m（263.5尺）で『資財帳』記載の距離（北面回廊の北側溝からの距離）は79.2m（264尺）で約20cmのずれがあるが、ほぼ近い距離にある。

これまで、数度にわたって述べてきたが、『資財帳』記載の規模と遺構とが合致せず、明瞭にし得なかったのは南面築地および南門の位置である。検出した遺構を重視すれば『資財帳』記載の規模より小さいことになり（資財帳規模650尺－50尺＝600尺）、逆に『資財帳』を重視すれば北面築地を従来通り、SD1850より約15m北方にずらさざるを得ないことになる。いずれにしても、この結論については今後の検討課題として残しておきたい。

2．第4次計画の終了にあたって

1987年から開始した第4次5カ年計画は史跡観世音寺境内および子院地区を発掘調査の対象とした。そのねらいは大きく2つにあったと考える。1つは金光寺をはじめとする子院地区についての調査で子院群の実態の解明に、もう1つは講堂・金堂など観世音寺の七堂伽藍の解明にあった。

観世音寺の子院については『筑前国続風土記』に49の子院の名が載せられているのをはじめいくつかの史料に散見される。高倉洋彰氏によれば観世音寺の周辺に子院の可能性をもつ寺16が抽出できるとされる。しかし、現存する子院としては唯一「戒壇院」が存在するのみで、その実態解明のためには発掘調査を必要としていた。さらに、その存在が中世にあたることから大宰府の中世の様相を発掘調査を通して窺い知ることのできる地区とも考えられていた。

子院群の調査は第4次計画以前の調査として、住宅建設に伴って実施した字安養寺（第8次・第21次、1970・72年）の調査から始まる。字名の安養寺は少弐氏の菩提寺として知られているが、調査面積が狭く安養寺跡を立証するような遺構は検出されていない。ただ重要と思われるのは第21次調査で上・下2層の遺構が検出されていることである。上層は室町時代に、下層は鎌倉時代に比定されており、下層には玉石溝なども残っていた。

この東側隣接地を第78次調査として1982年に調査を行なっている。この地区は『延喜五年資財帳』から推定される北面築地西端部にあたる。調査結果では奈良・平安時代の遺構は谷からの出水ですでに失われていた。これにかわって14世紀以降の3棟の礎石建物、1棟の掘立柱建物、園池などの遺構が検出された。遺構の年代観や建物の柱間寸法などが金光寺跡推定地の状況と近似していることや出土遺物の卒塔婆・位牌などの仏教関係遺物などからと調査区が『太

宰府旧跡全図』（文化三年　1806年）に「サイフクジ」と記された場所に近いことから観世音寺子院西福寺との関連も推定されている。この調査によって「山ノ井池」南の谷地形のなかに観世音寺子院に関連する中世の遺構が残されているものと予測されるようになった。

子院推定地区ではもう一箇所金光寺推定地の調査がある。観世音寺の北500mほどの所に「今光寺」の字名が残る。1953年九州大学九州文化綜合研究所の調査を発端に九州歴史資料館が第57・67・97・107次（1978・79・85・87年）の4次にわたる調査を実施した。数棟の礎石建物や石組の溝などが検出されている。南辺は未調査の状況にあるものの墓地・火葬された遺構などが見つかっている。13世紀中葉から16世紀前半にかけての遺跡で3時期に区分されている。遺構の性格は字名の「今光寺」から観世音寺子院の1つと考えられているが出土木簡に見られる武士的人名から居館的性格も可能性として考えられるようになった。

子院地区の調査では、この他に本書で第144次調査の概要報告を行なうが、他に10件余の現状変更に伴う調査を行なっている程度である。第78次調査区と金光寺跡推定地のように一定のまとまりを持って調査できたものは他にない。

この意味で第4次計画では観世音寺子院地区の調査を計画した。

第4次計画では初年度金光寺跡推定地で石塔群の調査が実施できたのに留っている。当初の計画では第4・5年次に集中して「山ノ井池」南の谷地の調査を計画したが、大宰府政庁跡南側の官衙推定地での緊急調査が急増したことにより進展を見なかった。大宰府史跡のなかで中世関係の遺構が調査できる地区として今後、新たな調査計画のもとにその実態を解明すべきものと考える。

観世音寺は鏡山猛氏の条坊復原案によれば寺域は三町四方と推定されている。

第4次計画以前の発掘調査では大房跡（第43次、1977年）、小子房・客僧房跡（第70次、1980年）、東面築地中央部（宝蔵東区、第45次、1977年）、北面築地西半部（第78次、1982年）などの発掘調査が行なわれ調査面積も4,700㎡ほどに達していた。第4次計画では、伽藍中軸線の確定や伽藍配置の基本計画、講堂跡をはじめとする諸堂宇の創建時の実態などを調査の目的として第109～130次調査まで前後10度にわたって寺域内で発掘調査を実施し、9,500㎡ほどの面積に達した。発掘調査面積だけで見れば第4次計画では観世音寺域内の調査はそれまでの調査面積の2倍近く前進したことになり鏡山氏の推定された寺域の16パーセント近くの面積を調査したことになる。

調査成果の点で見れば、講堂跡（SB3800）・大房跡（SB1080）については、礎石および礎石抜穴等から『延喜五年資財帳』記載に見られる建物寸法との対比を行なうことができた。

講堂跡（SB3800）ではⅠ～Ⅴ期にわたって、基壇の拡張や建替えによる建物の変遷が窺えたが現存する礎石は創建時のままであり『資財帳』の記載にある「長十丈　廣五丈一尺」とほぼ一致することを認めている。（昭和32年福山敏男氏等調査結果の再確認。）

大房跡（SB1080）では「長卅四丈二尺　廣三丈五尺五寸」とある『資財帳』の記載に対し桁行347尺梁行34尺に復原される建物が想定された。これは、桁行で5尺長く、梁行で1.5尺短いことになる。その誤差は『資財帳』が記載する数値が絶対的なものではないことを意味するとともに、逆に観世音寺伽藍のなかでこれほど長大な建物は大房以外にないことも裏付けた結果となった。なお、南門跡の礎石のすべてが動いていることが判明したため、伽藍中軸線を求める根拠は講堂・大房の遺構にたよることとなった。これによると伽藍中軸線は1°強東に振った状況である。

塔跡（SB3850）の調査では人頭大の自然石を用いた列石が地覆石であることを確認し、心礎が創建時から動いていないことを確認し、1辺15mの基壇であること、さらに地覆石と心礎上面のレベルからの高さも約1.8mほどであることが分かった。また、心礎は、講堂の中心から想定する南門跡の中心までの距離の3分1の距離にある。

回廊は昭和32年の福山敏男氏等の発掘調査では、講堂梁行中央の柱の両脇に小礎石が検出され、北面回廊の南雨落溝が発見されている。第4次計画では講堂跡の東西で回廊跡の検出につとめた。講堂跡西側では梁行中央の礎石の両側に回廊の小礎石を認めたものの他の回廊跡の遺構は完全に消失していた。東側では昭和32年の調査成果を追認することができ、さらに北面回廊SC3730・東面回廊SC3720の雨落溝が調査できたことで回廊跡東北隅を確認することができた。北面回廊の規模については『資財帳』には「北方長弐拾丈柒尺　廣一丈五寸」とある。桁行では北方長の2分の1にあたる10丈3尺5寸を講堂跡の調査で得た資財帳単位尺0.30m強で換算して得た31.12mを講堂東側梁行中央にある回廊跡取付部分の小礎石から東側へ測り出すと東面回廊東側雨落溝西肩から0.7mの位置となり、ほぼ東面回廊東側柱列の想定位置と合致することを認めている。しかし、梁行では講堂取りつき部分の小礎石間の心々距離が3.68mと実測されており、その換算値は1丈2尺強となる。従って『資財帳』の記載より1尺5寸強広いことになった。回廊跡は記録上では『資財帳』に記載された以降、焼失・転倒・破損などの記録が久安4年（1148年）まで5回にわたって見られるから記録上はこの時期まで存在していたものと考えられるが、東面回廊SC3720の雨落溝SD3715から出土した土器からその埋没年代が9世紀前半代と推定した。検出遺構は必ずしも『資財帳』の時期とは合致しないものである。

回廊跡についてはさらに『資財帳』に「東長弐拾陸丈肆尺　廣一丈五寸」とあるのをたよりに東南隅推定部分のトレンチ調査を行なったが回廊跡の遺構は消失していた。

南門跡・南面築地跡については概要報告でしたように礎石の現在位置と地山の状況証拠から、ほぼ現在の位置と考えておくのに留っている。

築地跡の調査は、北面築地については第70・120次調査、東面築地は第45・121次調査、南面築地については第122・130次調査でその遺構の検出につとめてきた。

この結果、北面・南面築地間の距離は、『資財帳』に「東長」および「西長」が「陸拾五丈」

とあるから約195mの長さがあったと考えられる。状況証拠ではあるが、南門跡に築地が取り付くことを前提とすれば第120次調査区中央やや北寄りに推定される。しかし、この場所では築地の存在した痕跡を見いだしていない。北面築地跡として最も有力なのは第70次調査での暗渠遺構（SX1831ほか）と第70次補足調査で確認した東西溝を築地北側の雨落溝とした場合である。この暗渠遺構（SX1831ほか）が築地積土に伴なう遺構であるとすれば、東西間の長さは『資財帳』の記載よりも約15mほど短かかったことになり、『資財帳』の記載との間に大きな違いが生じたことになる。

東西間の距離では『資財帳』は「五拾柒丈」と記している。伽藍中軸線からこの２分の１の距離を東側に測り出せば第121次調査で検出した南北方向の柵列SA3625付近にあたる。築地の積土痕跡こそなかったものの、この柵列SA3625および中世の南北溝SD3630との存在から、その西側（境内）と東側では遺構の存在の仕方が大きく異なることから、それを境内地とその外側を区別するものと考え、東面築地の推定場所をこの南北の柵列SA3625付近と考えた。築地跡については状況証拠が多いが以上のような状況にある。

境内地の調査ではこの他に第70次調査では小子房２宇・客僧房２宇が存在しうる可能性が想定されている。また、『資財帳』にある「雑舎」に相当する可能性を持つ建物として第121次調査で２～３棟の掘立柱建物SB3610・3615・3620の柱通りが伽藍中軸線と平行ないしは直角関係にあることから想定できた。

発掘調査からの成果はこれまでで、金堂跡・中門跡・鐘楼跡・経蔵跡・菩薩院の諸堂・戒壇院の諸堂・大衆物章に見られる諸堂・政所院の諸堂などは未調査の状況にある。これらの諸堂宇については正報告の刊行の時点にはできるだけ明らかにしたいものである。

参考文献

高倉洋彰「筑紫観世音寺子院小考」『九州歴史資料館研究論集』３　1977

九州歴史資料館　『大宰府史跡調査概報』1971～1992

鏡山猛　『筑紫観世音寺誌』1933

「福岡県筑紫郡太宰府遺跡」『日本考古学年報』昭和27年度版、日本考古学協会　1952

『大宰府都城の研究』1968　風間書房

澤村仁　『観世音寺、二三の問題』1987　太宰府市史研究会発表要旨

福山敏男「福岡県筑紫郡観世音寺境内」『日本考古学年報』昭和32年版、日本考古学協会　1957

「観世音寺研究」(1)～(3)『建築学研究』第一輯～第二輯八号　1927

2．第137次調査

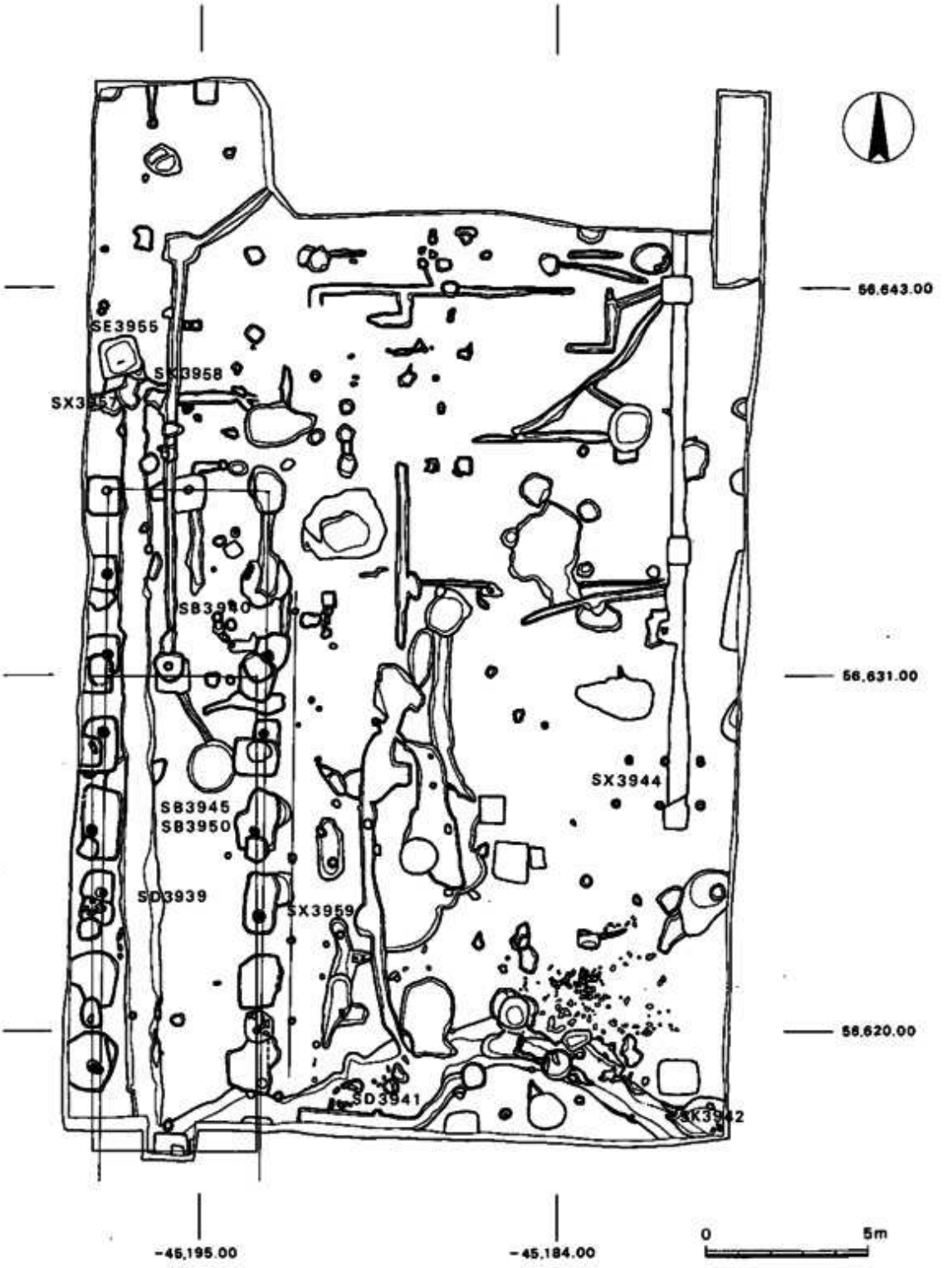
本次調査は住宅建設に伴う事前の発掘調査として行なった。調査地番は太宰府市観世音寺字広丸337－1・337－4・339－4。調査面積は610㎡。調査地は蔵司丘陵の西南方で鏡山猛氏の条坊復原案では右郭五条四坊にあたり、県道関屋－吉木線の南に接する部分である。これまでの調査では大宰府政庁跡の前面で多数の掘立柱建物を検出しており、それらの建物群が南北方向の溝によって区画されていることが明らかになっている。今回の調査地は東側の大楠地区建物群と西側の広丸地区の建物群との間、遺構で言えばSD2680とSD2785の2つの溝に挟まれた部分である。このようなことから今回の調査は当該地における建物遺構の有無の確認、溝等の区割り関連施設の検出を主な目的として行なった。なお、第137次調査地の南側に接する部分を昭和48年度に第29次調査として実施し、溝・土壙等の遺構を検出しているがそのほかに特に顕著なものはみあたらない。平成3年10月15日に重機によって盛土を剝ぎ翌16日より調査を開始、10月22日には遺構面を覆う暗褐色土層を除去後、建物遺構の検出を始める。10月31日に写真清掃・写真撮影、11月2日に空中写真撮影を行なう。11月7日から実測と併行して建物柱掘形の精査・井戸の掘り下げをはじめ、12月14日までにすべての作業を終了した。なお、本調査地が史跡指定地外の住宅地の中の調査であったことも考慮して12月12日に現地説明会を行なった。また柱根は残りが良かったため調査終了後にすべて取り上げている。

検出遺構

検出したおもな遺構は掘立柱建物3棟・溝2条・井戸1基・土壙などで発掘区の東半部には遺構は皆無であった。遺構面は北から南に向かって緩く傾斜し、その差は発掘区南端部と北端部で15～20cmほどである。基本層序はマサ土（盛土）→黒褐色土（旧表土）→暗褐色土（遺物包含層）で遺構はその下の地山面で検出された。一部、発掘区の南西隅部では建物に伴うと考えられる黄褐色ないしは茶灰色の整地層がわずかに残っている。

掘立柱建物

SB3940　発掘区の西壁寄りで検出した梁行2間×桁行9間以上の南北棟建物で南側はさらに調査区外に延びている。北から3列目以南の柱掘形はSB3945と重複する。柱掘形はSB3945によって壊され、もとの姿をとどめないものが多いが、切り合いのないものでみると一辺1.0～1.2mの方形プランを呈する。桁行の柱間寸法は8～19(P99右下の建物模式図に示した柱掘形番号を参照）の柱根の心々で西側が2.50・2.55・2.40・2.50・2.45m、総長12.4mを測る。等間とすれば一間2.48mで8.5尺に復原すると単位尺は29.2cmとなる。東側（34～37）では2.40mをはかる。梁行の柱間は北側妻柱の19～40間で2.48m、17～37と14～34はともに4.96mをはかり桁行と同じ数値になる。梁・桁とも柱筋は通っている。これらには8・17・34・37のように柱根が残



第69図　第137次調査遺構配置図

るものと5・31のようにSB3945の掘形をつくる際に柱を抜いたものがある。前者は建て替えの際に地上に突出した部分の柱を切りとったものと思われる。柱の上面は炭化して黒くなるがこれは焼失によるものではない。残存する柱根は8本で径30～35cm、もっとも残りの良いもので長さ98cmをはかる。すべてに一辺10cm前後の筏穴が穿たれている。柱はすべてイスノキを材として使用している。建物方位はN40°Wにとる。

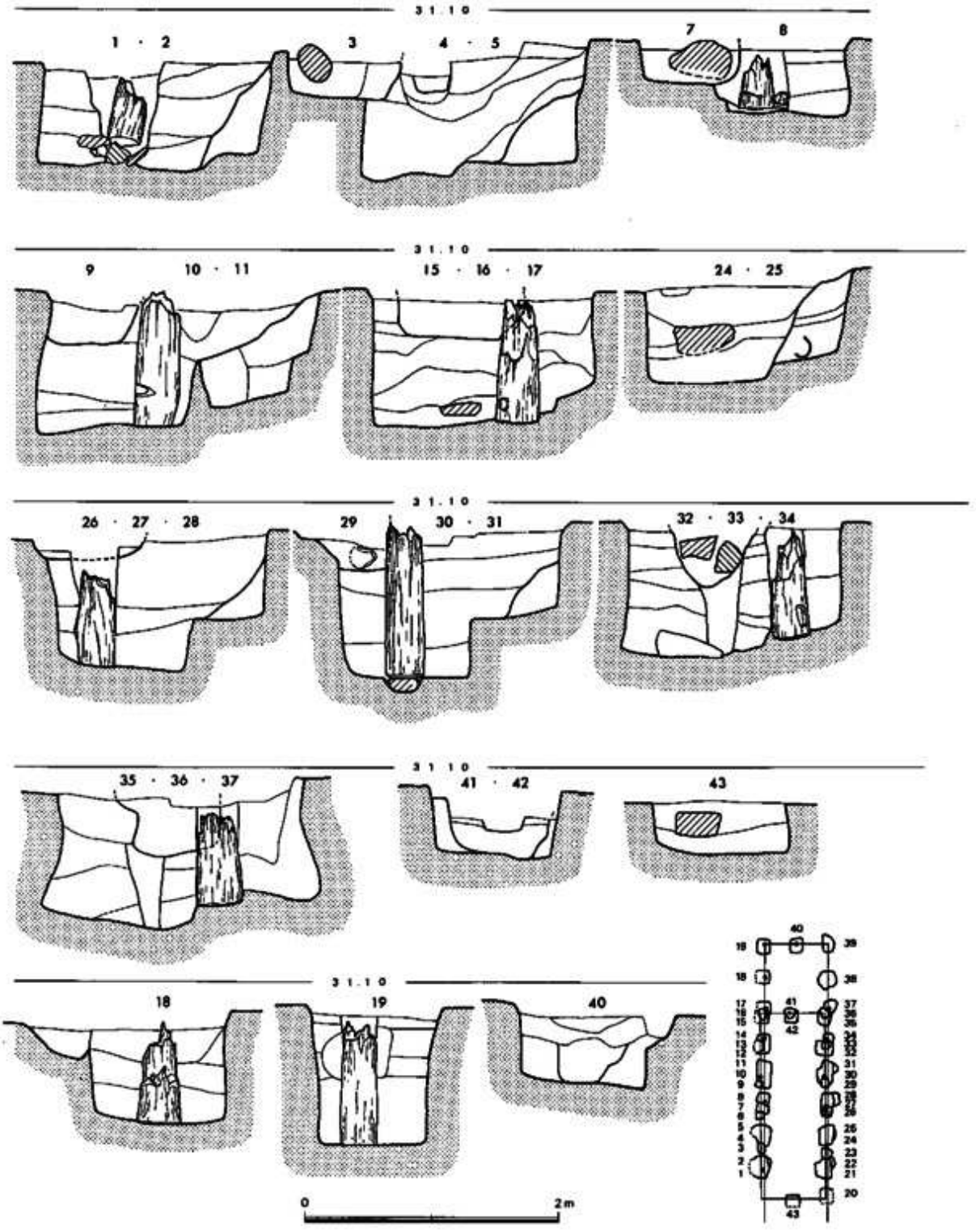
SB3945　梁行2間×桁行6間の南北棟掘立柱建物で、建物位置・柱間等からSB3940の規模を縮小して建て替えられたものと考えられる。SB3945の北側の妻はSB3940を2間分南にずらしてつくられている。柱掘形の平面は一辺1.0～1.5mの方形プランを呈し、SB3940柱掘形の南に接して掘られ、基本的には古い掘形よりも10～50cmほど深く掘り込まれる。掘形の検出面からの深さは0.9～1.2mで、南北の梁筋の中央（42・43）と7は0.45～0.5mと他に比べて浅い。柱間寸法については柱位置を確認できるものは少ないが桁行西側が1～10までの総長7.4mでこれを平均すると一間分は2.47mとなる。東側では27～30がやや広く2.60mをはかる。梁行は10～30が5.00mとなり、梁・桁とも2.50m等間であると考えられる。柱根は径30～35cm程のものが4ケ所に残り、もっとも残りがよいものは長さ1.20mを測る。やはりすべてに筏穴が穿たれている。柱根が残っているものはすべて掘形床面に密着しており、浮いた状態のものは皆無であった。4ケ所に残る柱根のうち1と27がクリ、10と30はSB3940と同じくイスノキを材として使用している。建物方位はほぼ真北にとる。

SB3950　SB3945を切る梁行2間×桁行4間以上の南北棟掘立柱建物で位置はSB3945を踏襲している。平面プランは一辺0.3～0.4mの隅丸方形ないし楕円形で、柱痕跡を確認できたものは北側の梁筋の中央のみである。柱掘形内に径20～30cmほどの石が残っている例が6例あり、レベルも一定していることからこれを礎板として考えると、桁行の柱間は東側では12～16間が2.40m、6～12間が4.95m（2間分）、3～6間が3.30m、西側では29～33間が2.90mとなる。以上のように柱間寸法のばらつきが大きいが、梁方向の柱列がほぼ通っていることから、若干の疑問は残るものの建物遺構とした。

溝

SD3939　発掘区の西壁寄りで検出した南北溝でSE3955のすぐ南側から始まる。溝の南側は発掘区を一部拡張して確認したところ、SB3940の南側の梁筋の中央の柱掘形とわずかに接するが明確な先後関係は確認できなかった。溝はこの柱掘形南側には延びていないことから、終息あるいは西に屈曲するものと考えられる。溝幅は上端が0.7～1.3mで平均すると1.0m、底幅は0.55～0.80m、深さ0.10～0.25m、全長は23.8mをはかる。溝底の北端部と南端部でのレベル差は38cmほどあり南流する。溝底にはわずかに粗砂が堆積するがほとんどは茶灰色土によって人為的に埋めもどされている。主軸の方位はN49°E。

SD3941　発掘区の南壁際で検出した蛇行する東西方向の流路で、東・西ともさらに発掘区外

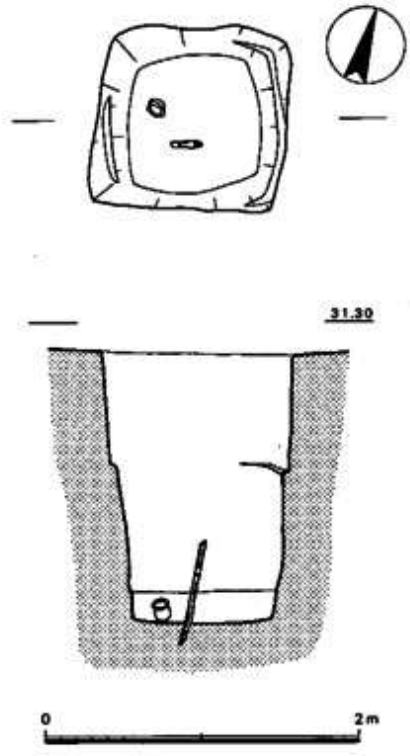


第70図　SB3940・3945・3950柱掘形断面図

に延びる。溝の上端幅は0.9～2.8mで西にいくにつれて幅広くなる。溝底のレベルは西端部が東端部よりも20cmほど低くなっており西流するものである。溝の埋土は黄灰色砂。

井戸

SE3955　発掘区の北西部、SD3939の始点のすぐ北側に位置する井戸である。掘形は上端が一辺1.20mの方形、下端は0.80×0.90mで各辺がやや張り出した方形を呈する。深さは1.75mをはかり、青灰色粘質土層よりさらに下層の砂層に達している。検出面から0.7m下がったところとさらに0.8m下に全周しないわずかな段をもつ。井戸枠は抜き取られその後一気に埋め戻されている。なお、掘形の床面には下端を切り欠き節を抜いた竹を突き立て、その傍らに小型の甕が正置した状態で据えられていた。



第71図　SE3955実測図

土壙

SK3942　発掘区東南隅部で検出した土壙で南側と東側は発掘区外に延びる。SD3941と切り合う。須恵器甕・鞴羽口が出土した。

その他の遺構

SX3957　SE3955の南に接する不整形な土壙状の遺構である。須恵器の円面硯が出土した。

SX3958　SX3957の東側で検出した不整形な土壙状の遺構である。

SX3959　SB3940の東側で検出した径20～25cmの柱穴列で4個を確認した。柱間寸法は柱根が残っていないため明確にはできないが、掘形の心々で南から2.48・2.56・7.04mをはかる。総長は12.1mで等間とすれば一間は2.42mとなる。方位はN40′WでSB3940に伴う足場穴の可能性が考えられる。

出土遺物

SB3940出土土器（第72図、図版82　別表）

須恵器

蓋（1）杯の蓋でかえりをもつものである。天井部の摘みは欠失する。天井部外面は回転ヘラ削り調整を施し、天井部内面はなでる。外面にヘラ記号がある。14（P99の柱掘形番号参照、以下同）の柱掘形から出土した。

土師器

鉢（2）体部は外傾し直線的に立ち上がる小型の鉢である。内外面とも縦方向の刷毛目調整をする。復原口径16.2cm、色調は赤褐色を呈する。18の柱痕跡内から出土した。

壺（3）偏球形の体部に外傾する短い口縁がつく。成形は体部を叩いたのち外面下半を手持ちヘラ削り調整、口縁部はヨコナデ、内面は丁寧にナデ調整する。胴部の中央は未調整で叩きの痕跡が残ったままである。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。25の柱掘形から出土した。

鋳造関係遺物

坩堝（4）手づくね製で成形時の指頭圧痕が残る。口縁部には銅が融着し緑青色になっている。胎土は粗く、砂粒・砂礫を多く含む。39の柱掘形から出土した。

SB3945出土土器（第72図　別表）

須恵器

杯（5）高台付の杯身の底部片。体部と底部との境は不明瞭である。高台はしっかりしており、やや外方に摘みだす。43の柱掘形から出土した。

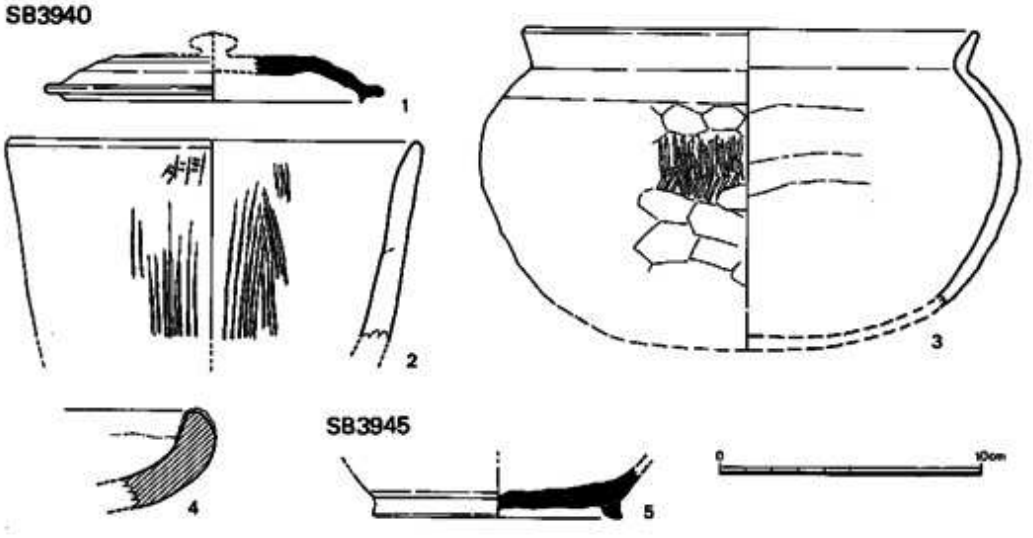
SD3939出土土器（第73図、図版82　別表）

須恵器

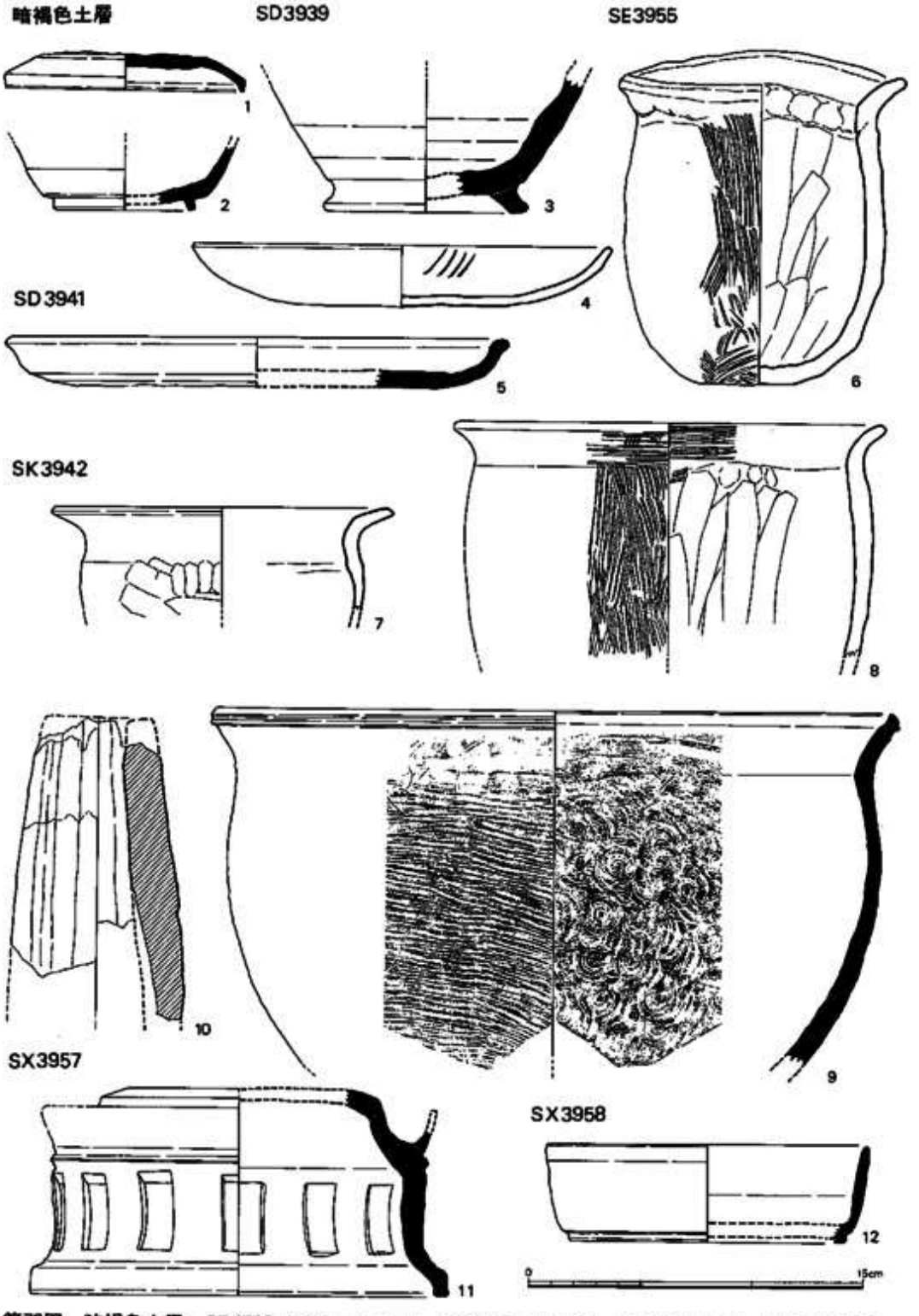
壺（3）平底の壺でしっかりした「ハ」の字に開く高台を貼付している。体部外面から底部にかけて回転ヘラ削り調整、内面はヨコナデする。

土師器

皿（4）底部から緩く内弯しながら立ち上がる皿で、底部と体部の境は不明瞭である。内外面ともヘラミガキされ、口縁部内面には放射状一段の暗文が施される。胎土は精選され緻密である。色調は赤褐色を呈する。



第72図　SB3940・3945出土土器実測図



第73図　暗褐色土層、SD3939・3941、SE3955、SK3942、SX3957・3958出土土器・土製品実測図

SD3941出土土器（第73図　別表）

須恵器

皿（5）体部は開きながら立ち上がり、端部近くで強く外反する。底部外面は手持ちヘラ削り、底部内面はナデ調整する。やや歪んでいるが復原すると口径22.4cmをはかる。

SE3955出土土器（第73図、図版82）

土師器

甕（6）長胴平底の小型甕で口縁部を一部欠く。胴部最大径は下位にある。外面の調整は底部がタタキ、胴部は縦方向の刷毛目調整、内面の調整は底部がナデ調整で指頭圧痕が明瞭に残る。胴部内面は縦方向のヘラ削り、胴部から口縁部にいたる屈曲部の下には指頭圧痕が残る。外面の口縁部から頸部にかけて茶褐色の付着物がある。

SK3942出土土器（第73図、図版82）

須恵器

甕（9）胴部最大径が上位にある甕で口縁部は緩く外反する。内面の口縁部と胴部の境の稜は不明瞭である。復原口径41.2cm。外面は横方向の平行叩き、内面にはアテ具痕が残る。

土師器

甕（7・8）7は小型甕の4分の1ほどの破片。胴部外面はヘラ削り調整、内面は丁寧にナデ調整する。色調は茶褐色を呈し、胎土は緻密で精良。8は復原口径9.6cmをはかる。胴部外面が縦方向の粗い刷毛目調整、内面は縦方向のヘラ削り調整、胎土は比較的精良である。

鋳造関係遺物

鞴羽口（10）先端部の破片で、先端部から4cmほどが溶解し灰青色に変色している。

その他の遺構出土土器（第73図、図版82）

須恵器

硯（11）圏台部裾の復原径19.0cmの円面硯。圏台部にはヘラによる長方形の透かしが施される。復原すると16個を数える。外堤部は端部を欠失するが残存部分から考えると非常に薄いつくりのものである。海部には墨痕が残る。SX3957出土。

杯（12）体部が直線的に上方へ立ち上がるもので、断面四角形の高台は底部端に貼付されている。胎土は精良。SX3958出土。

暗褐色土層出土土器（第73図　別表）

須恵器

蓋（1）杯の蓋で口縁部は下方に折り曲げる。天井部外面は回転ヘラ削り調整、天井部内面はなでる。天井部内面に漆が付着している。

杯（2）高台付の杯身の小片。内面に墨痕と思われるものが付着する。

小　結

調査によって検出した遺構の整理と若干の検討を行ないまとめとしたい。

遺構は調査区の西側に偏って営まれており、東側は空閑地となっていた。遺構の切り合いから先後関係をみると古い順にSD3941→SB3940→SB3945となる。井戸SE3955と溝SD3939は建物と直接切り合い関係をもたないが、溝は後述するように建物の廃絶以後に掘削されたものと考えられる。また井戸は掘形が建物の主軸とは合致しないもののSB3940に伴う可能性がある。

まず建物については、SB3940とSB3945は位置関係、柱間寸法がほぼ同じであること、ともにイスノキという稀な材を柱として用いていることなどからSB3945はSB3940の建て替えであり、同じような性格・機能をもった建物であったと考えられる。柱掘形と柱根の観察からはSB3940の柱がまだ生きている段階でその柱に接してSB3945の柱掘形を設けていることから、SB3940の廃絶後きわめて短期間のうちに建て替えが行われたとみられる。これらの建物の時期についてはSB3940の柱掘形から出土した遺物からみると、下限を8世紀の第1四半期でも早い頃に比定できる。すでにみてきたように出土遺物からSB3940の造営時期を考えるとあるいは7世紀代に遡る可能性も残されている。しかし大宰府政庁前面の官衙の整備は8世紀に入ってから開始されており、これまでの調査では7世紀代に確実に遡ることができる建物の例がなく、ここでは政庁第II期に対応するものとしておく。建て替えられたSB3945は柱掘形から出土した遺物から、その上限は8世紀中頃、下限を後述するSD3939が掘削される以前と考えることができる。

SD3939については埋土中から出土した遺物や、さきに触れたようにSB3945がSB3940の廃絶後、短期間のうちに建て替えられたものとみられ、溝の掘削は8世紀中頃以降と考えられる。次に、この溝の位置について検討する。政庁前面地域は幾条かの南北溝によって数ブロックに区割りされており、8世紀段階ではSD2340以西で大宝大尺（0.355m）の250尺あるいはその半分の125尺等間の南北方向の溝による区割りが明らかになっている。SD3939はSD2340中軸線より西へ271.7mのところにある。大宝大尺では271.7m÷0.355＝765.4尺となり計画線の750尺から5.5mほど西へずれる。しかし9世紀代になるとこれらの溝は2.7～4.6mほど西に移動しており、SD2700（Y＝－45,106.40）、SD3939（Y＝－45,197.00）の心々距離は90.6m÷0.355＝255.2尺で250尺に近い数値となる。広丸地区官人居住域の西を限る溝SD2785という例がないわけではないが、この時期の各溝が2°15′～2°30′東に振れているのに対しSD3939は45′ほど西に振れていることが問題として残る。

これまでの調査で本調査地の東側には大楠地区官人居住域、西には広丸地区官人居住域が想定されていた。両地区に挟まれた部分の調査で官衙地区と遜色ない規模の建物の存在が明らかになり、さらにその建物が政庁第II期のごく初期の段階のものであることが確認できたことの意義は大きい。今回検出した建物が単独で存在するのかあるいはさらに西側で別の建物が確認されてブロックを形成するのか今後の調査を俟ちたい。

3．第138次調査

本次調査は住宅建設に伴う事前の発掘調査として行なった。調査地番は太宰府市観世音寺字大楠322－4。調査面積は137㎡。当該地は鏡山猛氏の条坊復原案では右郭6条3坊にあたる。これまで第138次調査地の周辺では、昭和54年度に第88次調査、平成2年度に第133次調査、平成4年度に第139・146次調査（今回報告分）として実施しているものの、大宰府政庁跡の前面の官衙部分である不丁地区などに比べるとまだ性格づけができるほど調査は進展していない。そこでこの地域の性格を考える上での資料を得ることを目的として調査を実施した。

平成2年11月9日、重機により表土・盛土を除去した後、11月20日より遺構面を覆う遺物包含層を下げはじめた。11月22日より遺構検出を開始する。12月16日に写真撮影を行なったのち、実測作業に入り12月18日までに井戸の精査・実測を終了した。

検出遺構

発掘調査の結果、検出したおもな遺構は溝2条・井戸4基・土壙4基その他ピット多数である。ピットのなかには掘立柱建物の柱穴になる可能性があるものもあるが、調査面積が狭小であり明確にはできなかった。遺構は茶褐色の包含層除去後に検出した。現地表面からの深さは調査区北壁際で80cmほどである。

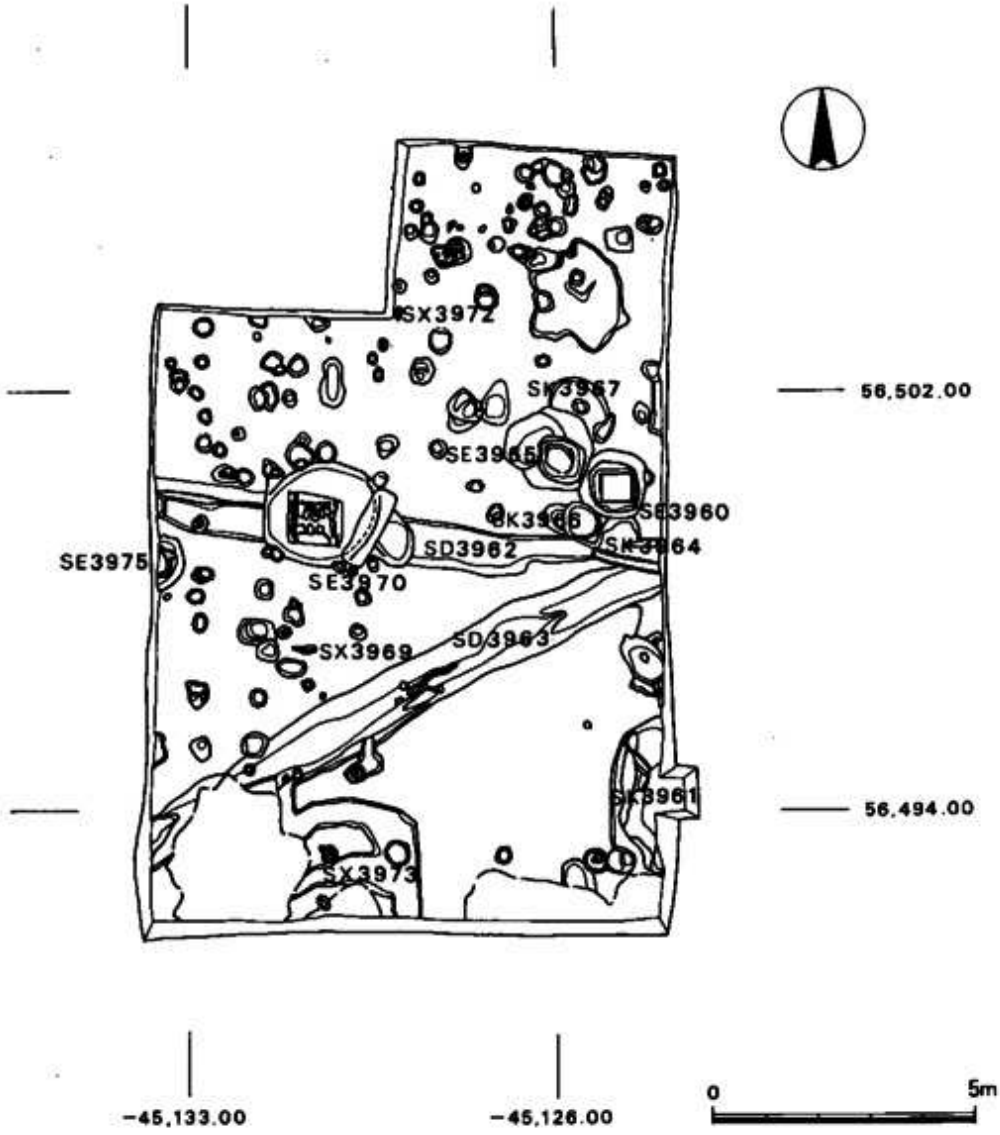
溝

SD3962　発掘区の中央部で検出した東西方向の溝で、さらに発掘区外に延びる。上端幅0.45～0.70m、下端幅0.30～0.60m、深さはもっとも残りのよいところで0.20mをはかる。溝底レベルはほぼ水平であるが全体的な地形から考えると西流するものであろう。なおこの溝の上層でこれと重複して幅0.2mほどの新期の溝を確認した。

SD3963　発掘区の東壁中央部から発掘区西南隅部に向かって流れる溝である。上端幅0.90～1.20m、下端幅0.30～0.60m、深さは0.2m前後をはかる。

井戸

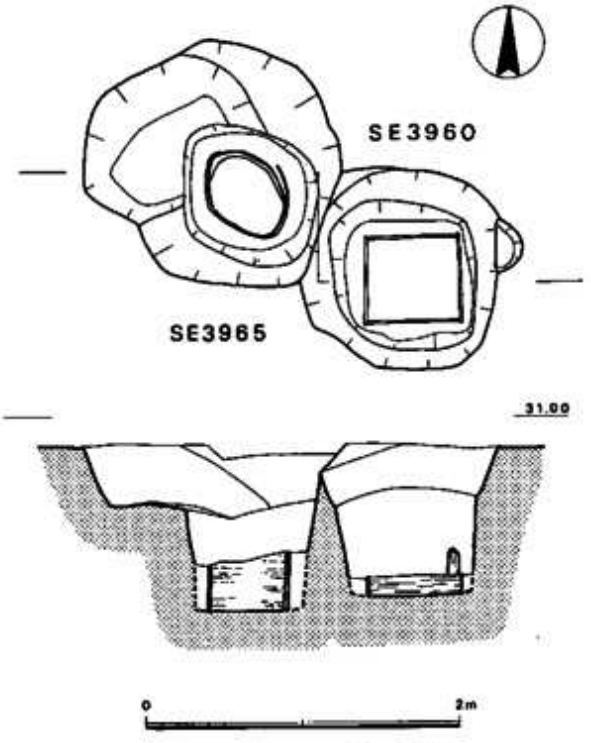
SE3960　発掘区の東壁際の中央部で検出した井戸で、掘形の平面プランは円形に近い隅丸方形を呈する。掘形の規模は径1.30m、深さは0.95mをはかる。井戸枠は方形横板構造で、北壁部にはその上部に配された縦板が部分的に残存している。板材の幅は約7cmで、一辺7枚ほどの縦板が使われていたようである。下部の井戸枠は南・北の板材が東・西の板材によって挟み込まれるように組まれている。使用された板材は長さ56～58cm、幅10cm、厚さ1.9cmをはかる。井戸底面の標高は29.85m。埋土中より須恵器・土師器が多く出土した。Ⅰ類（以下、分類に際しては横田賢次郎「大宰府検出の井戸」『九州歴史資料館研究論集3』1977年の分類を使用する）。



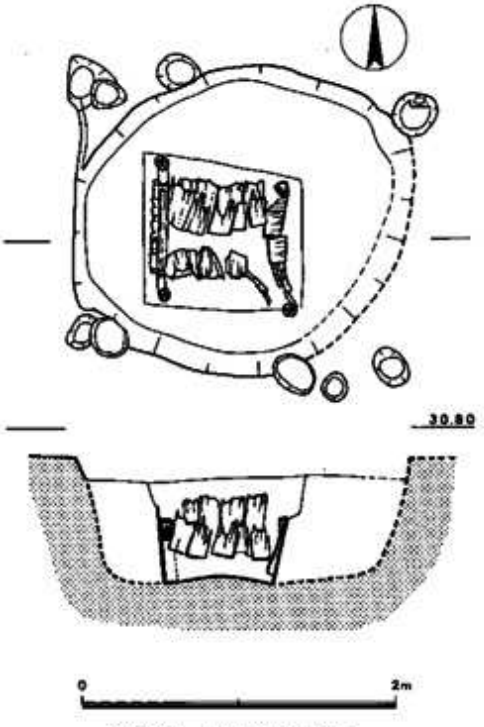
第74図　第138次調査遺構配置図

SE3965　SE3960の西につくられた井戸でSE3960を切っている。掘形の平面プランは円形に近い隅丸方形を呈し北西部は二段掘りとなる。掘形の規模は径約1.6m、深さ1.0mをはかる。井戸枠は最下段の曲物が残るのみである。曲物径50cm、高さ40cmで二重にまわされる。井戸底面の標高は29.75m。埋土の上層には焼土を含む赤褐色土が堆積しており、ここから長沙窯青磁片が出土した。

SE3970　発掘区中央部やや西寄りで検出した井戸でSD3962を切っている。掘形の平面プラン



第75図　SE3960・3965実測図



第76図　SE3970実測図

は2.00×2.35mの隅丸方形を呈するが、東壁は新期の土壙によって損なわれている。深さは0.80mをはかる。井戸枠は掘形のやや西南に偏って検出された。構造は四隅に径7～8cmの丸太材を支柱としてたて、それに枘穴を穿って両端を切り欠いた丸太材を横桟とし、支柱に組み合わせることによって縦板を支えたものである。縦板は原位置をとどめず上下二段分がずり落ちた状態で検出された。使用された縦板材は幅15cm～20cm、現存の厚さ0.5cm前後で、一辺に5枚ずつ使用されている。井戸底面の標高は29.80m。井戸廃棄時に投棄されたと考えられる多量の土器類が出土した。II－A類。

SE3975　発掘区の中央西壁際で検出した井戸で西半分は調査区外となる。掘形の平面プランは隅丸方形を呈し、径1.0m、深さ0.7mをはかる。井戸枠は一辺0.45mの方形縦板構造で残存する板材から考えると幅16cm、厚さ1cmの板材を5枚づつ使用しているようである。井戸底には径0.4m、高さ0.25mの曲物を据える。曲物は地山面よりもわずかに浮いている。井戸底面の標高は29.80m。II－A－b類。

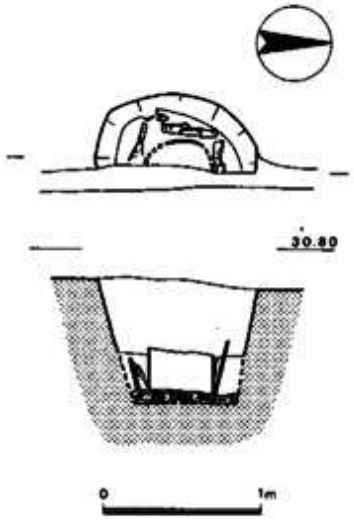
土壙

SK3961　発掘区の東南隅部で検出した土壙で大部分は調査区外に広がる。確認できた範囲で考えると径

3mほどの円形ないしは隅丸方形プランとなる。掘形の形状から井戸の可能性も考えられたため一部東側に拡張したが検出面から50cmほどで底面に至った。埋土中より馬と思われる歯が出土した。

SK3964　発掘区の東壁際の中央部、SE3960の南で検出した円形の土壙でSD3962と切り合う。径0.9m、深さ0.1mをはかる。

SK3966　SK3964のすぐ西側で検出した土壙でSE3960に接する。径0.7m、深さ0.4mの円形プランを呈する土壙である。



第77図　SE3975実測図

出土遺物

SD3962出土土器（第78図、図版83　別表）

須恵器

杯（1）丸味をもつ体部に「ハ」の字に開く高台を貼付したものである。口縁部を一部欠失する。底部外面はヘラ切り未調整で板状圧痕を伴う。底部内面はナデ調整。外面には自然釉がかかる。歪みが著しい。

土師器

杯（2）体部外面は回転ヘラミガキ、底部外面は回転ヘラ削り調整を施す。内面は風化が著しく調整不明。色調は赤褐色を呈する。

椀（3）丸みをもった体部に断面四角形の高台を貼付する。口縁部は外反する。底部内面はナデ調整。器壁は薄く歪みが著しい。色調は黄褐色を呈する。

甕（4）小型甕で胴部は欠失する。残存部分から考えるとあまり胴が張らないものである。内面はヘラ削り調整、口縁部はヨコナデ調整。色調は橙褐色を呈する。

SD3963出土土器（第78図　別表）

須恵器

壺（5）平底の壺の破片で体部外面から底部にかけて回転ヘラ削り調整を施す。

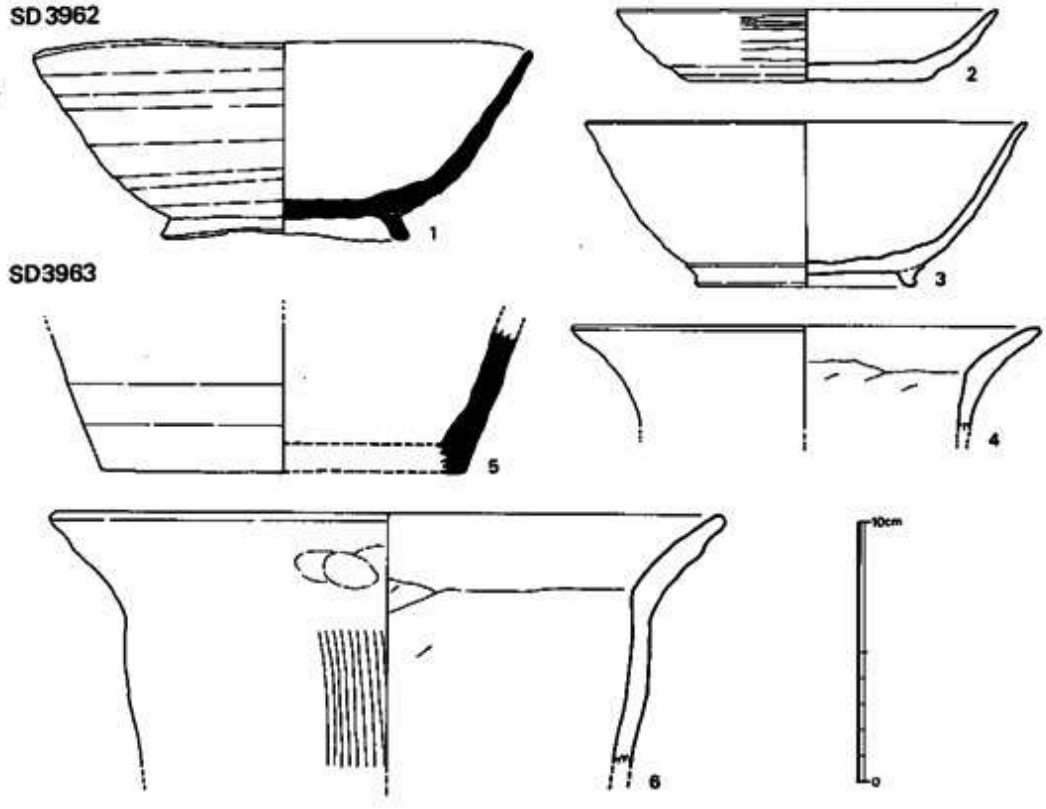
土師器

甕（6）外面は縦方向の粗い刷毛目調整、内面は斜位のヘラ削り調整を行なう。外面の口縁下半部には指頭圧痕が残る。復原口径26.0cm。

SE3960出土土器（第79図、図版83　別表）

須恵器

蓋（1）低平な蓋で口縁端部の内側に沈線状の段をもつ。口縁端部は丸くおさめる。天井部



第78図　SD3962・3963出土土器実測図

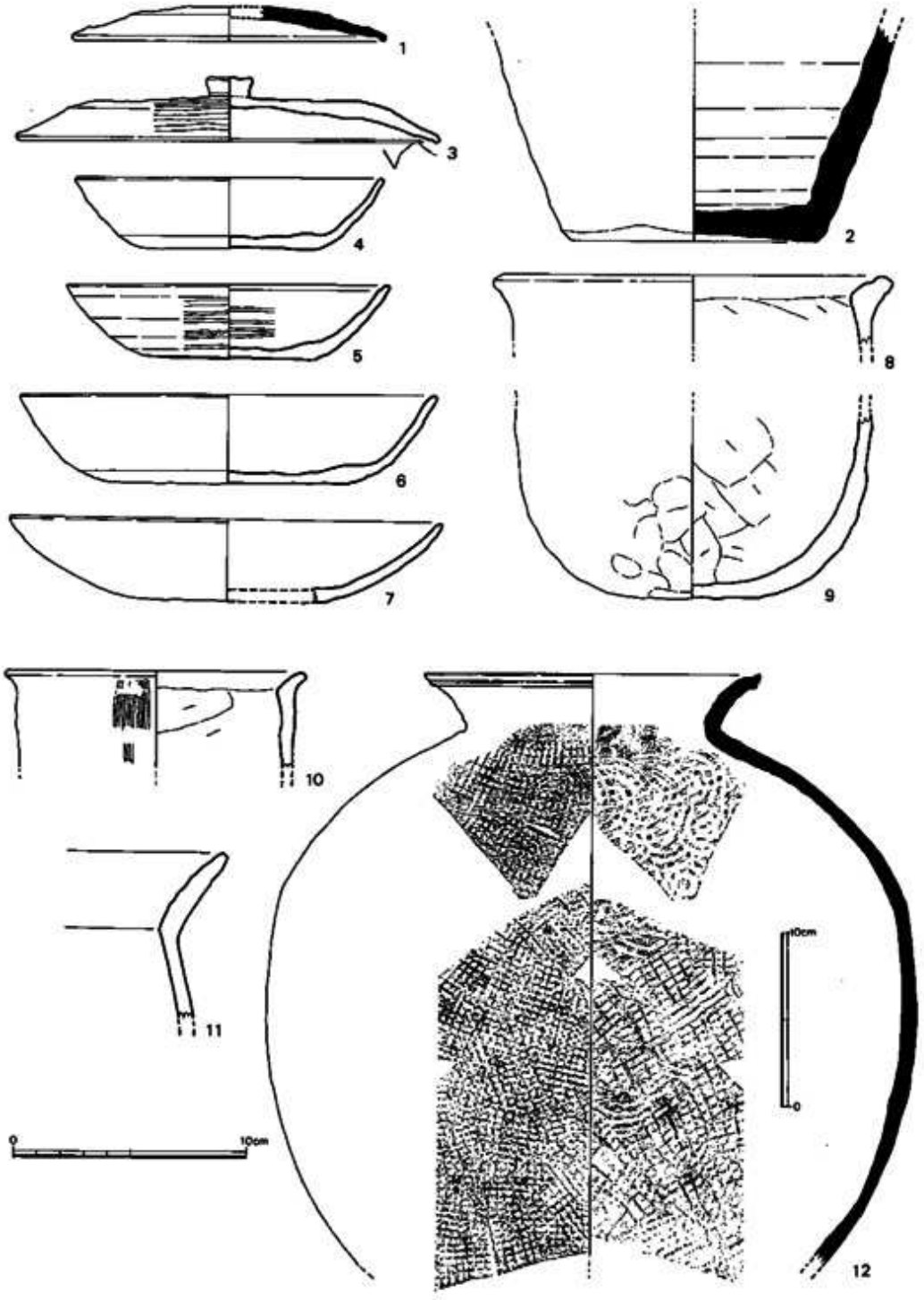
外面はヘラ切り未調整、天井部内面はナデ調整を施す。歪みが著しい。

壺（2）壺の底部で体部外面は回転ヘラ削りのちナデ調整、内面は強いヨコナデを施す。底部はヘラ切り未調整、復元底径10.6cm。

甕（12）口径21.4cmをはかる甕で球形の体部に外反する口縁をもつものである。口縁端部は軽く上方に引き出す。外面には細かい正格子の叩き痕が、内面には肩部に同心円のアテ具痕が残る。その後、内面の胴部から底部にかけて同心円の叩き痕跡が残らないように正格子の叩きを施す。アテ具痕は外面にくらべるとやや粗いものである。口縁部はヨコナデ調整するが内外面ともに叩きの痕跡が完全に消えてはいない。なお、口縁部と体部は直接は接合しないが図上で復原した。色調は茶褐色を呈し、焼成は不良。

土師器

蓋（3）天井部が低平なもので径1.0cmの摘みをもつ。口縁端部の内側の段は沈線状となる。天井は回転ヘラ削りののち回転ヘラミガキ調整、口縁部外面は回転ヘラミガキ調整、内面は丁寧なナデを加える。胎土は精良で、色調は赤褐色を呈す。



第79図　SE3960出土土器実測図

杯（4～7）法量に二種がある。4・5は口径13.4・14.0cm、器高3.0・3.2cm。6・7は口径18.0・18.6cm、器高3.8・3.5cmをはかる。いずれも底部と体部下半部を回転ヘラ削り調整する。5は内外面とも粗い回転ヘラミガキを加えるが、その他は風化が著しく調整は不明である。すべて胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。

甕（8～11）8と9は同一個体か。底部は平底に近い丸底で口縁部は短く外反する。体部内面はヘラ削り調整、外面の底部近くには指頭圧痕が残る。底部は熱を受け黒化する。復原口径16.2cm。10は8のように胴は張らないが、口縁は同じように短く外反するものである。体部外面は縦方向の細かな刷毛目調整、体部内面はヘラ削り調整する。復元口径13.0cm。11は口縁部の小破片である。体部外面は縦方向の刷毛目調整、体部内面はヘラ削り調整、口縁部はヨコナデを施す。

中国陶磁器

青磁

水注（a）長沙窯の水注の胴部片。胎土は茶灰色で外面に褐色の釉を施す。小片のため全形は知れないものの外面には武人像の下半部をかたどったと考えられるメダリオンが貼付されている。壺かも知れない。

SE3970出土土器（第80～82図、図版83～85　別表）

須恵器

蓋（1）口縁部の小片である。口縁端部は丸くおさまり内側に段をもたないもの。

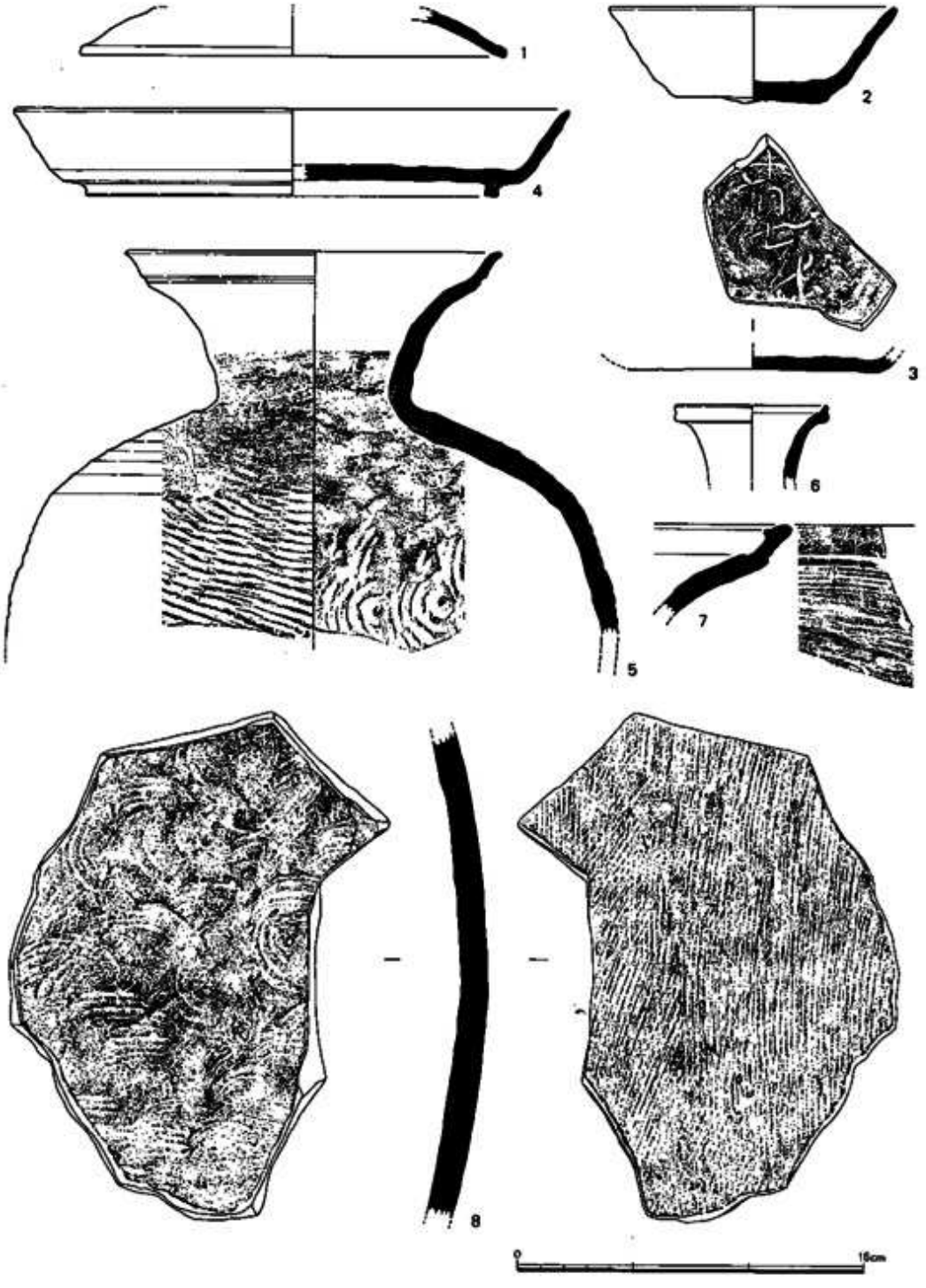
杯（2）体部は直線的に開く。底部外面はヘラ切り未調整、底部内面はナデ調整、口縁部は内外面とも黒化している部分がある。焼成は不良。

皿（3）底部の破片である。底部はヘラ切り未調整。見込みにヘラで刻書されている。文字と思われるが判読できない。「十□七□」か。焼成はやや不良で軟質。

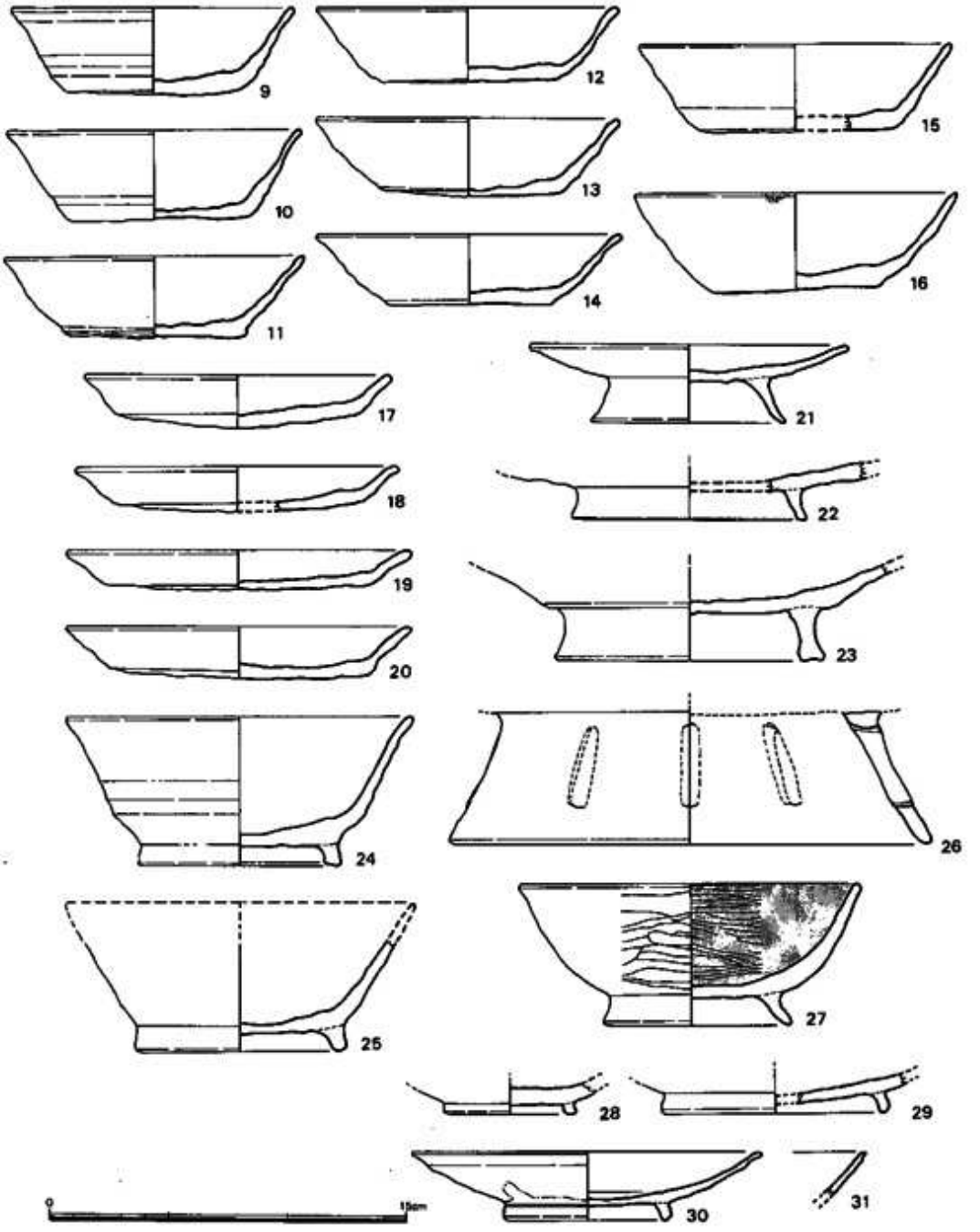
盤（4）復原口径24.2cmをはかる。底部外面は回転ヘラ削り調整を施す。底部内面は硯として使用したために平滑になっており墨痕が認められる。所々には文字と思われるものも残っているが明瞭ではなく判読できない。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。

壺（5・6）5は二重口縁壺の上半部分。肩部と胴部の境に緩い稜をもつ。頸部は開きながら立ち上がり、いったん横に屈曲したのち外反する口縁部にいたる。屈曲部の外面には一条の沈線が巡る。調整は口縁部から頸部にかけてはヨコナデ、体部外面は右下がりあるいは横方向の平行叩きののち肩部には回転ヘラ削りを施す。胴部内面は同心円のアテ具痕、肩部内面は接合のための指押え痕跡が残り、部分的にナデを施す。口縁部から頸部にかけて自然釉がかかる。復原口径16.4cmをはかる。下り山窯産。6は瓶子形の壺で頸部は外反しながら立ち上がり、口縁部は上方に引き出している。口縁端部はやや外反する。復原口径6.8cmをはかる。

甕（7）口縁部の小片である。頸部は大きく開きながら立ち上がり、口縁部で明確な稜をも



第80図　SE3970出土土器・陶磁器実測図(1)



第81図　SE3970出土土器・陶磁器実測図(2)

って屈曲する。口縁端部には内傾する平坦面をもつ。頸部外面は横方向の刷毛目調整を施す。

硯（8）甕の体部片を硯に転用したものである。内面のアテ具痕である同心円文は使用によりかなり摩滅している。内面には墨痕が付着する。外面は縦位の平行叩き。上・下端とも欠損しているものと考えられる。

土師器

杯（9～16）口径12.0～13.6cm、器高3.0～4.1cmをはかる。15は外面の底部から体部下半にかけて回転ヘラ削り調整、そのほかはすべてヘラ切り未調整である。12・13・15の底部内面はナデ調整を施し、底部外面に板状圧痕を伴う。16には油煙が付着する。

皿（17～20）口径13.0～14.6cm、器高1.7～2.3cmをはかる。底部外面はすべてヘラ切り未調整。すべて底部内面はナデを施し、17・19には板状圧痕を伴う。

高台付皿（21～23）21は口径13.6cmの皿に「ハ」の字に開く高い高台が付き端部付近で外反する。皿部の底部外面はヘラ切り未調整、22は皿の底部と口縁部を欠く。高台は「ハ」の字に開くが21よりも短くしっかりしている。高台端部は平坦となる。23は体部を欠失しており全形が知れないが、残存部分から上方に屈曲して椀形になる可能性もある。高台は端部が厚く平坦となる。内面はナデ調整、外面はヘラ切り未調整で板状圧痕を伴う。

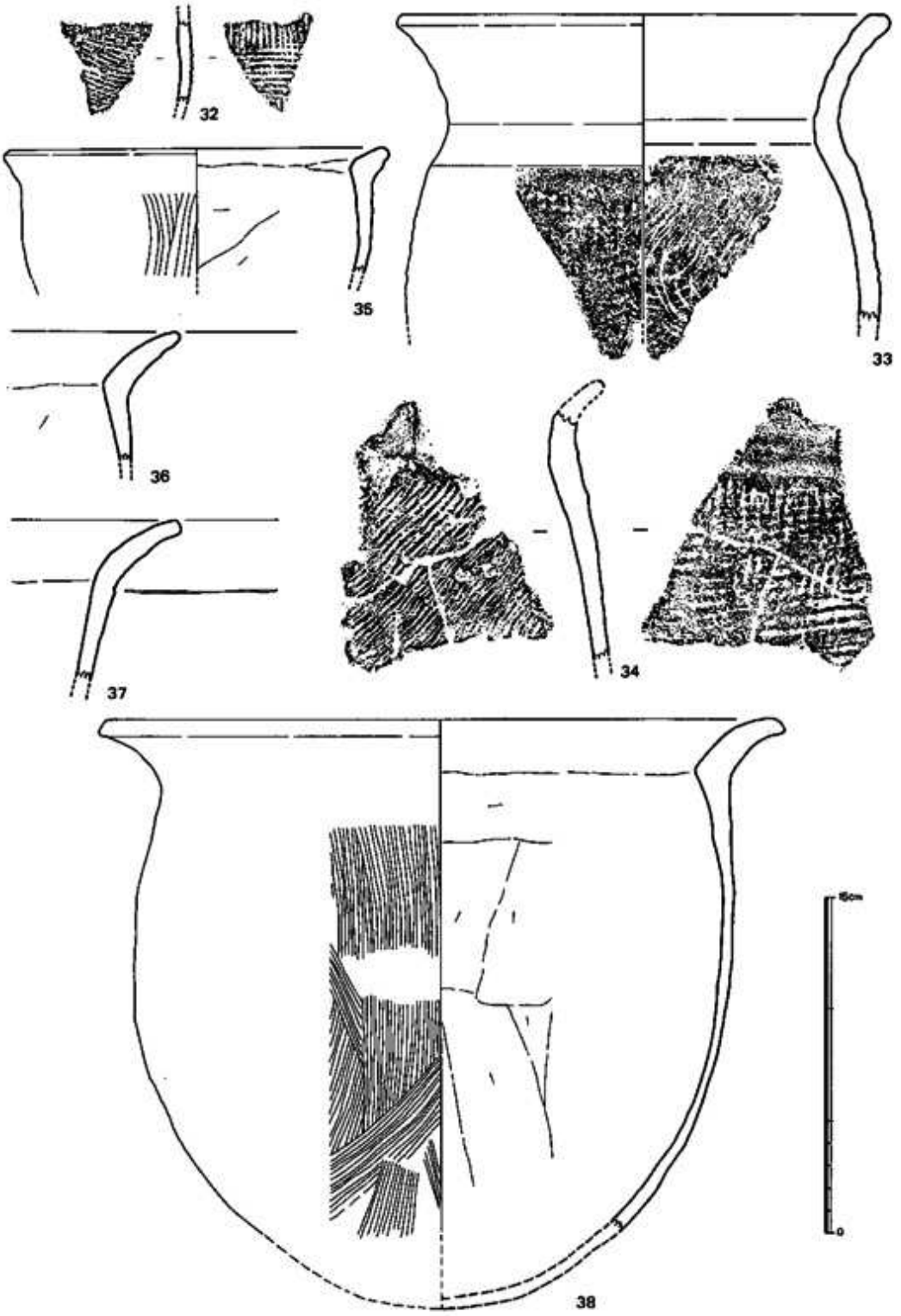
椀（24・25）25の体部は直線的に開き口縁部はやや外反する。高台は断面四角形で、底部端につく。底部外面はヘラ切り未調整、底部内面はナデ調整。26は口縁部を欠失する。風化が著しく調整は不明。

盤（26）「ハ」の字に開く高い高台をもつ。高台には下方がやや幅広の長円形となる透かし孔がヘラによって施される。透かし孔は残存部分から考えると6ケ所に復原できる。復原高台径20.4cm。色調は明黄灰色、胎土は精良で砂粒をわずかに含む。

甕（32～38）32～34は玄海灘式製塩土器である。すべて外面は擬似格子の叩き目が残る。内面は斜め方向の刷毛目調整で33の胴部内面には同心円のアテ具痕が残っている。口縁部はヨコナデ調整。色調はすべて赤褐色を呈し、胎土には砂粒・砂礫を多く含む。34の外面には煤が付着する。煮炊き用の甕には35のように口縁部が短く外反する小型品と、それ以外の長めの口縁をもつものがある。すべて胴部内面はヘラ削り調整、胴部外面は縦方向の刷毛目調整を施す。36～38の外面には煤が付着する。

黒色土器

椀（27）内面のみを燻したA類である。口縁部を一部欠く。体部は内弯しながら丸味をもって立ち上がり口縁部はやや外反する。「ハ」の字に開く高台を貼付する。体部内面は横方向のヘラミガキ、外面はやや粗い横方向のヘラミガキを施す。底部および高台部はヨコナデ調整。胎土には砂粒・砂礫を多く含む。色調は黄褐色を呈する。



第82図　SE3970出土土器・陶磁器実測図(3)

緑釉陶器

皿（28）体部は欠失する。高台畳付以外の全面に淡黄緑色の釉を施す。胎土は灰白色で硬質。高台は貼付するタイプである。底径5.6cmをはかる。

灰釉陶器

皿（29・30）29は内弯気味の高台を貼付する。外面は露胎で内面は刷毛塗りによって灰白色の釉を施す。胎土は明灰色を呈し硬質。復原底径9.6cm。30の皿部は内弯気味に開き口縁部は上方に屈曲してさらに外反する。見込みにはわずかに段を有する。高台は「ハ」の字に開きしっかりしている。底部外面及び高台部以外には刷毛塗りによって灰白色の釉を施す。胎土は明灰色を呈し硬質。口径14.8cm。高台径7.1cm、器高2.9cmをはかる。

中国陶磁器

白磁

皿（31）小片のため傾きはやや不確実。白色のきめ細かな胎に白色の薄い釉を均一に施す。釉の発色はよい。Ⅰ類。

SE3965出土土器（第83図、図版85　別表）

須恵器

甕（1・2）1は球形の体部に強く外反する口縁がつくものである。胴部外面は格子叩き、胴部内面には同心円のアテ具痕が残る。2の頸部は大きく外反し、口縁部で外面に明瞭な稜をもってたちあがる。口縁端部はやや内傾し平坦面となる。口縁部下に一条の波状文をヘラ描きする。色調は黒灰色ないし淡茶灰色を呈し、胎土には黒色の粒子を含む。

土師器

高台付皿（3）皿部を2分の1ほど欠く。内面には2～3mmほどの厚さの油煙が付着する。

甕（4）口縁部の破片で口縁部外面には指頭圧痕が残る。外面は縦方向の刷毛目調整、内面は斜め方向のヘラ削り調整を行なう。色調は橙褐色を呈する。

SK3961出土土器（第83図）

須恵器

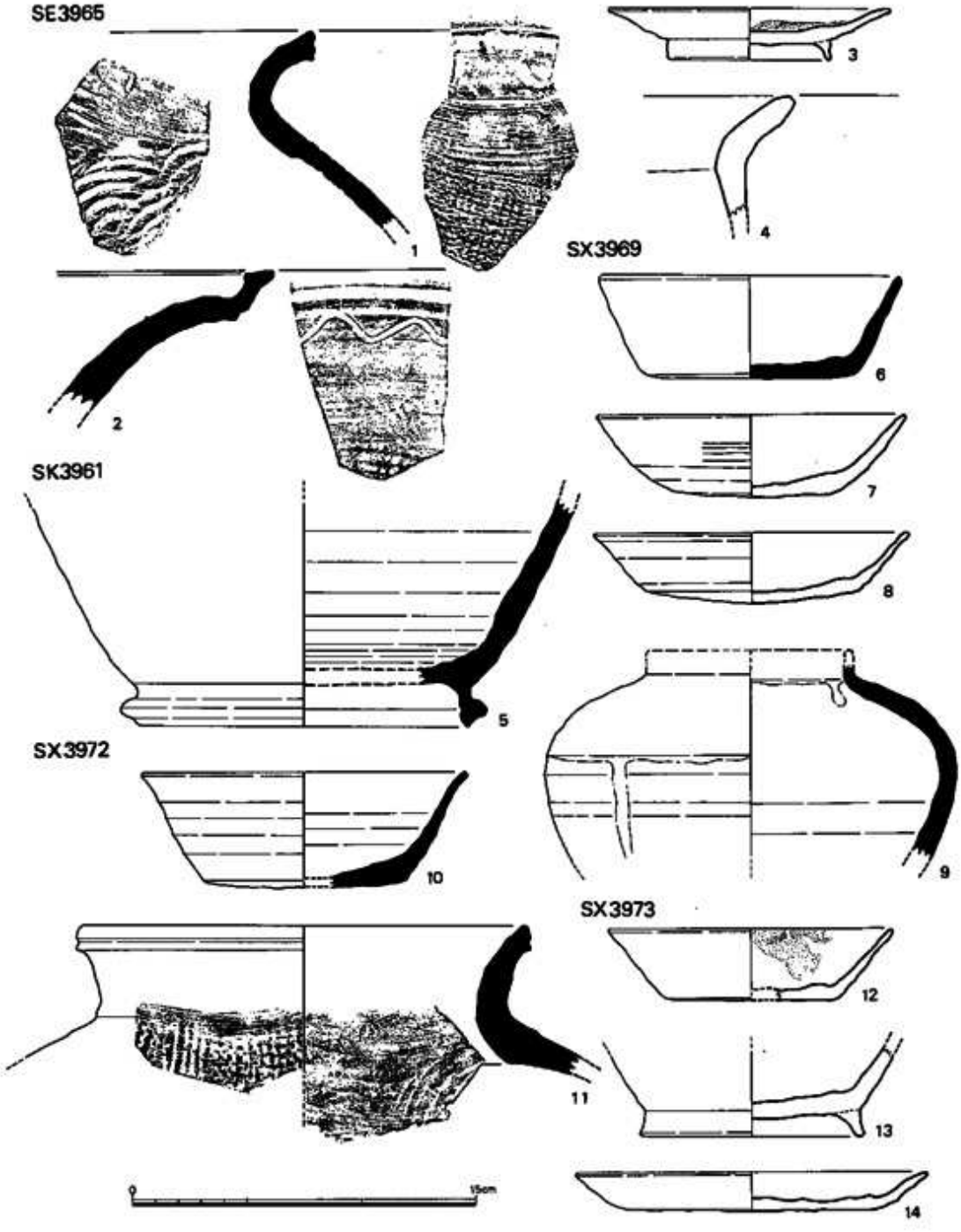
壺（5）壺の下半部で、底部内面にかかる自然釉から短頸壺になるものと考えられる。高台は外反気味に開くものを内側に屈曲させたもので、屈曲部は瘤状に肥厚する。体部外面は回転ヘラ削りののちヨコナデ調整、内面はヨコナデ調整する。復原底径14.4cm。

SX3969出土土器（第83図、図版85　別表）

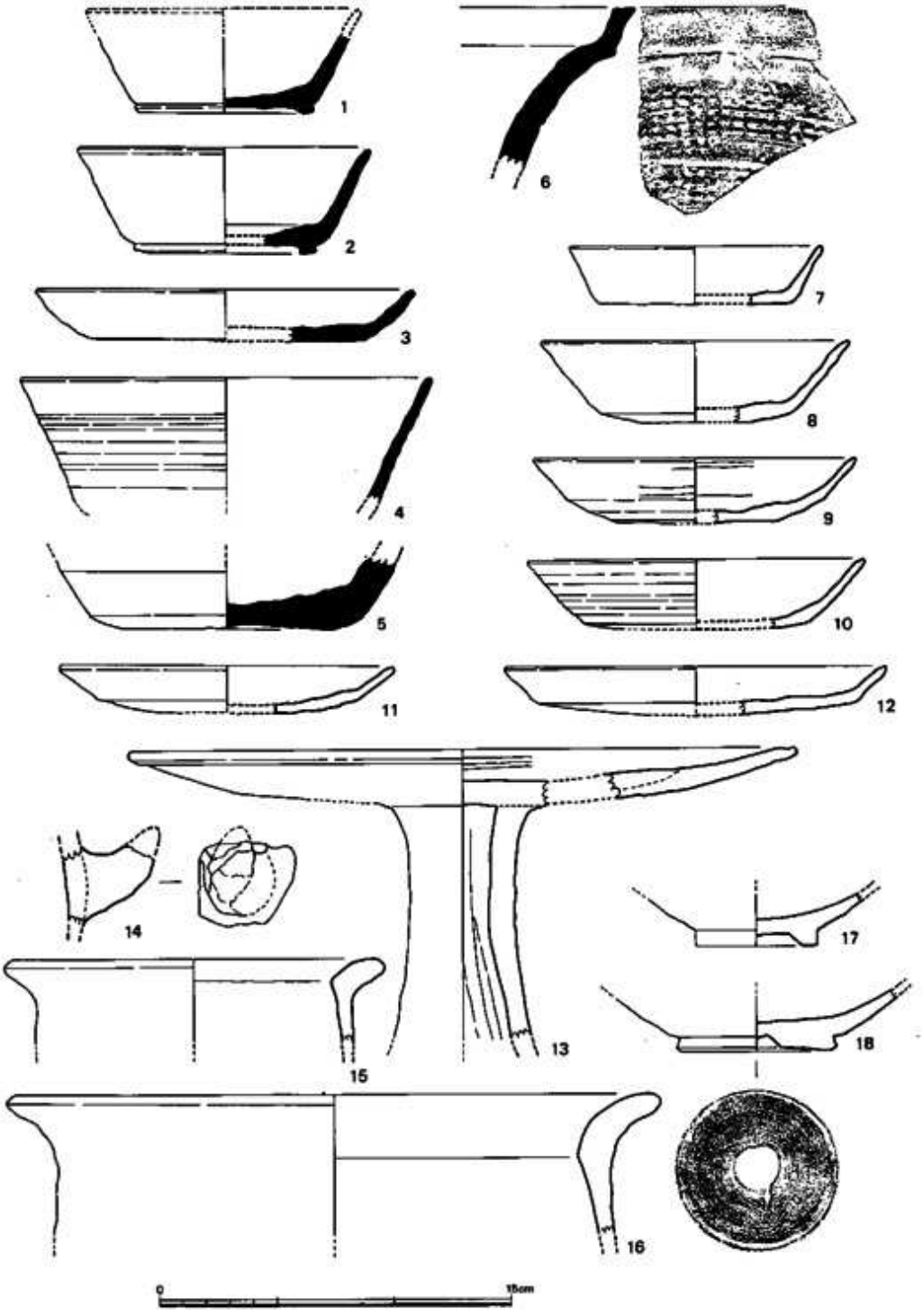
須恵器

杯（6）深めの杯で体部は直線的に立ち上がる。底部外面はヘラ切り未調整。焼成はやや軟質である。

壺（9）球形の体部に直立する口縁がつく短頸壺で、口縁端部と底部は欠失する。胴部の最



第83図　SE3965、SK3961、SX3969・3972・3973出土土器実測図



第84図　茶褐色土層出土土器・陶磁器実測図

大径はやや上位にあり、その上に沈線を巡らせる。肩部の外面と体部下半の内面には濃緑色の自然釉が付着する。胎土はやや粗く黒色の粒子を含む。

土師器

杯（7・8）7は内弯気味に立ち上がる体部をもつもの。外面の底部から体部下半にかけて回転ヘラ削り調整を施す。体部は内外面とも回転ヘラミガキ調整。8は底部外面が回転ヘラ削り調整、体部は内外面ともヨコナデ調整、底部内面はナデで板状圧痕を伴う。ともに胎土は精良で赤褐色を呈する。

SX3972出土土器（第83図　別表）

須恵器

杯（10）深めの杯で底部の一部を欠く。体部は薄く引き出され口縁部は外反する。底部外面はヘラ切り未調整、底部内面はナデ調整で板状圧痕を伴う。淡茶色を呈し焼成はやや軟質。

甕（11）外反する口縁下に一条の断面三角形の凸帯を巡らす。体部外面は細かな正格子の叩き、内面は同心円のアテ具痕跡をヨコナデで消す。

SX3973出土土器（第83図　別表）

土師器

杯（12）体部は直線的に開く。底部外面はヘラ切り未調整、底部内面はナデ調整を施す。内面には油煙が付着する。

椀（13）口縁部を欠失する。底部と体部との境は明瞭で「ハ」の字に開く高台はしっかりしたつくりである。底部内面はナデ調整で板状圧痕を伴う。

皿（14）体部が大きく開くもので口縁部は外反する。底部外面はヘラ切り未調整、底部内面はナデ調整を施す。

茶褐色土層出土土器（第84図、図版85　別表）

須恵器

杯（1・2）ともに底部外面はヘラ切り未調整で底部内面はナデ調整する。高台は1が断面台形、2は断面四角形で両者ともに低く、底部の端寄りに貼付される。

椀（4）体部は直線的に開く。外面はヨコナデによる凹凸が著しい。

皿（3）体部は内弯気味で口縁部は外反する。底部外面はヘラ切り未調整で、底部内面はナデ調整、板状圧痕を伴う。硯として使用されており、底部内面は平滑になっている。

鉢（5）平底の底部から丸みをもって体部にいたる。器壁は分厚い。底部外面はヘラ切り未調整、体部外面は回転ヘラ削り調整を施す。内面はヨコナデによる凹凸が著しいが、底部は使用によって摩滅し非常に平滑になっている。器形から壺の可能性も考えられるがここでは鉢とした。

甕（6）口縁部から頸部にかけての破片である。頸は外反しながら開き、斜め上方に屈曲し

て口縁部となる。口縁部上面は平坦で端部は外方に延びる。頸部外面は格子の叩き、口縁部から頸部内面にかけてはヨコナデ調整。

土師器

杯（7～10）器形的には体部が短い7とそれ以外とがある。7・8の底部外面はヘラ切り未調整。9は底部外面は回転ヘラ削り調整、体部の内外面には回転ヘラミガキ調整を施す。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。10の外面はヨコナデによる凹凸が著しいが、内面は風化のため調整不明。

皿（11・12）ともに底部を欠失する。底部外面はヘラ切り未調整、底部内面はナデ調整、口縁部はヨコナデする。

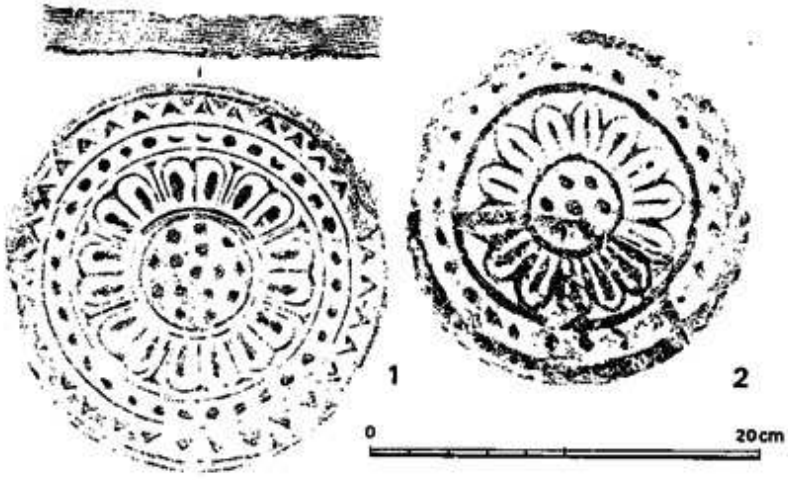
高杯（13）杯部と脚部は直接接合しないが、同一個体であり図上復原した。杯部は口縁部内面に沈線状の段をもつ。内面は回転ヘラミガキ調整、外面の下半は回転ヘラ削り調整を施す。脚部は円筒形で外面はナデ調整、内面にはしぼり痕が認められる。胎土は精良。色調は赤褐色を呈する。

甕（14～16）14は小形の甕の把手と考えられる。先端部を欠失する。15は小形品で口縁部は短く外反し肥厚する。内面は横方向のヘラ削り調整。復原口径16.3cm。16は大きく外反する口縁をもつ。内面はヘラ削り調整。

中国陶磁器

白磁

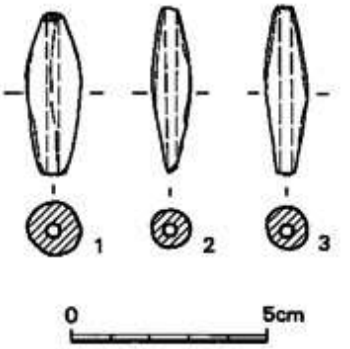
椀（17）内面に灰色の胎に黄味のある白色釉を施す。全面に細かい貫入が見られ全体に釉が剥げ落ちている。外面は露胎となる。



第85図　出土軒瓦拓影

青磁

椀（18）高台は蛇の目状に削り出す。体部と高台部の境には段をもつ。胎土は茶褐色で砂粒を多く含む。内面に濁乳白色の化粧を施し外面は露胎となる。高台径6.8cmをはかる。長沙窯系か。



第86図　土錘実測図

瓦類（第85図、図版85）

1は老司Ⅱ式軒丸瓦の上半部の破片である。丸瓦は欠落しているが丸瓦先端部に接合のため入れたヘラキザミの痕が残る。瓦当上部周縁は櫛状の整形痕を残している。1点出土。

2は複弁7弁の蓮華文とするよりも単弁14弁の軒丸瓦と考えるべきだろう。中房には1＋6の珠文を配し外区珠文帯の珠文数は25珠である。大宰府政庁跡の調査に出土例がある。1点出土。

丸瓦・平瓦では縄目叩打痕を残すものが多かった。

土製品（第86図、図版85）

土錘（1～3）砲弾形の土錘で中央に径0.3cmほどの紐通し用の孔を設けたもの。1は長さ4.1cm、最大径1.4cm、重さ8g。SX3969出土。2は長さ4.2cm、最大径1.2cm、重さ4g。茶褐色土層出土。3は長さ4.3cm、最大径1.1cm、重さ5g。SX3973出土。

小結

今回の調査地は大楠地区官人居住域の西を限る溝よりも西側にあたる。今回の調査により主要な遺構として4基の井戸を検出した（SE3960・3975は8世紀末、SE3970は9世紀前半、SE3965は9世紀末～10世紀初頭）。大楠地区官人居住域の西側地区ではそのほとんどが9世紀後半になってから遺構が営まれはじめるが、そこで検出した主な遺構は井戸が大部分を占め、8世紀代の遺構としては第133次調査のSB3905（2間以上×3間）を唯一検出したのみであった。今回の調査により検出した井戸SE3960・3975は出土遺物から8世紀末に比定され、この地区の造営が部分的には8世紀後半代まで遡ることが明らかとなった。しかし、この地区で過去の調査により確認した建物遺構はこのSB3905のみであり、多くの建物を検出した東側の地区とは様相を異にしている。しかしながら井戸の検出例が顕著であることをみれば、当然それに伴う建物の存在を考えることもでき、今後の調査で検出される可能性は大きく、大楠地区官人居住域の西側部分の全体の様相把握についてはこれからの調査に依る所が多い。

4．第139次調査

本次調査は住宅建設に伴う事前の発掘調査として行なった。調査地番は太宰府市観世音寺字329－18。調査面積は21㎡。当該地は鏡山猛氏の条坊復原案では右郭６条３坊にあたり、第138次調査地の北方約30mの地点である。

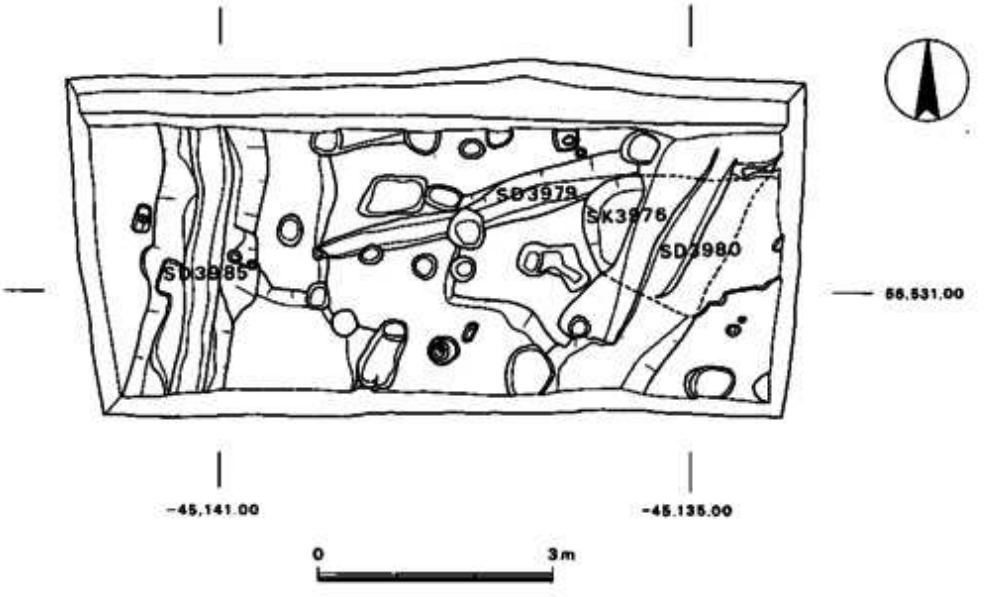
平成３年11月９日に４×９mの調査区を設定し、床土の面まで重機によって除去する。その後、作業員を投入して床土・包含層を下げ遺構検出を行なう。11月12日までに写真撮影・実測を終了し、調査を完了した。

検出遺構

発掘調査の結果検出した遺構は溝２条・土壙１基・その他多数のピットである。調査地の基本層序はマサ土（盛土－約50cm）→黒色土（旧水田耕作土）→床土→黒褐色土層で、遺構は黒褐色土層上面から切り込むものとその下から切り込むものがある。黒色土層の上面から切り込むものにはSD3979・3980・3985がある。

溝

SD3979　発掘区の中央部で検出した東西方向の溝。上端幅0.5m、下端幅0.2m、深さはもっとも残りのよいところで0.2mをはかる。東側はさらに調査区外にのびる。西側については後世の削平により消失している。SK3976を切る。



第87図　第139次調査遺構配置図

SD3980　発掘区の東壁際で検出した溝で中央部が0.3～0.5m幅で5cmほど深くなる。上端幅1.3～1.4m、深さは0.3mをはかる。溝主軸の方位は30°ほど東に振れている。第94次調査で検出した11世紀代の溝SD2705は南端部で大きく蛇行して西南方向に流路をとっており、この溝と一連のものか。

SD3985　発掘区の西壁際で検出した南北方向の溝で中央部分が0.2～0.3m幅で15cmほど深くなる。上端幅1.2～1.3m、深さはもっとも残りがよいところで0.4mをはかる。溝主軸の方位は7°ほど東に振れている。溝底のレベルはほぼ水平。

土壙

SK3976　発掘区の東側で検出した土壙で大部分をSD3980に切られている。深さは0.3mで床面はほぼ水平である。埋土中より土師器・灰釉陶器片が出土した。

出土遺物

SD3935出土土器（第88図、図版86）

土師器

甕（1）体部から緩く外反する口縁をもつ。胴部外面は平行叩き、胴部内面は強いヨコナデ調整を施す。口縁部はヨコナデ調整。口縁部の内側にふきこぼしの痕跡がみられる。復原口径13.9cm。

SK3976出土土器（第88図）

土師器

杯（2）体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。底部外面から体部下半にかけて回転ヘラ削り調整、その他の部分は粗い回転ヘラミガキ調整を施す。

灰釉陶器

壺（3）円盤状の底部に直線的な体部がとりつくもの。調整は外面の底部から体部にかけては回転ヘラ削り調整、内面はヨコナデ調整、外面には緑味を帯びた淡い灰色の釉が薄く施される。釉の発色はよい。外面ではさらに緑色の流れ釉が3ケ所に残っており復原すると6ケ所にかけられていたものと考えられる。流し釉は垂れてガラス質になり底部にまで付着している。内面は露胎で底部の中央部付近には自然釉がかかる。復原底径14.0cm。

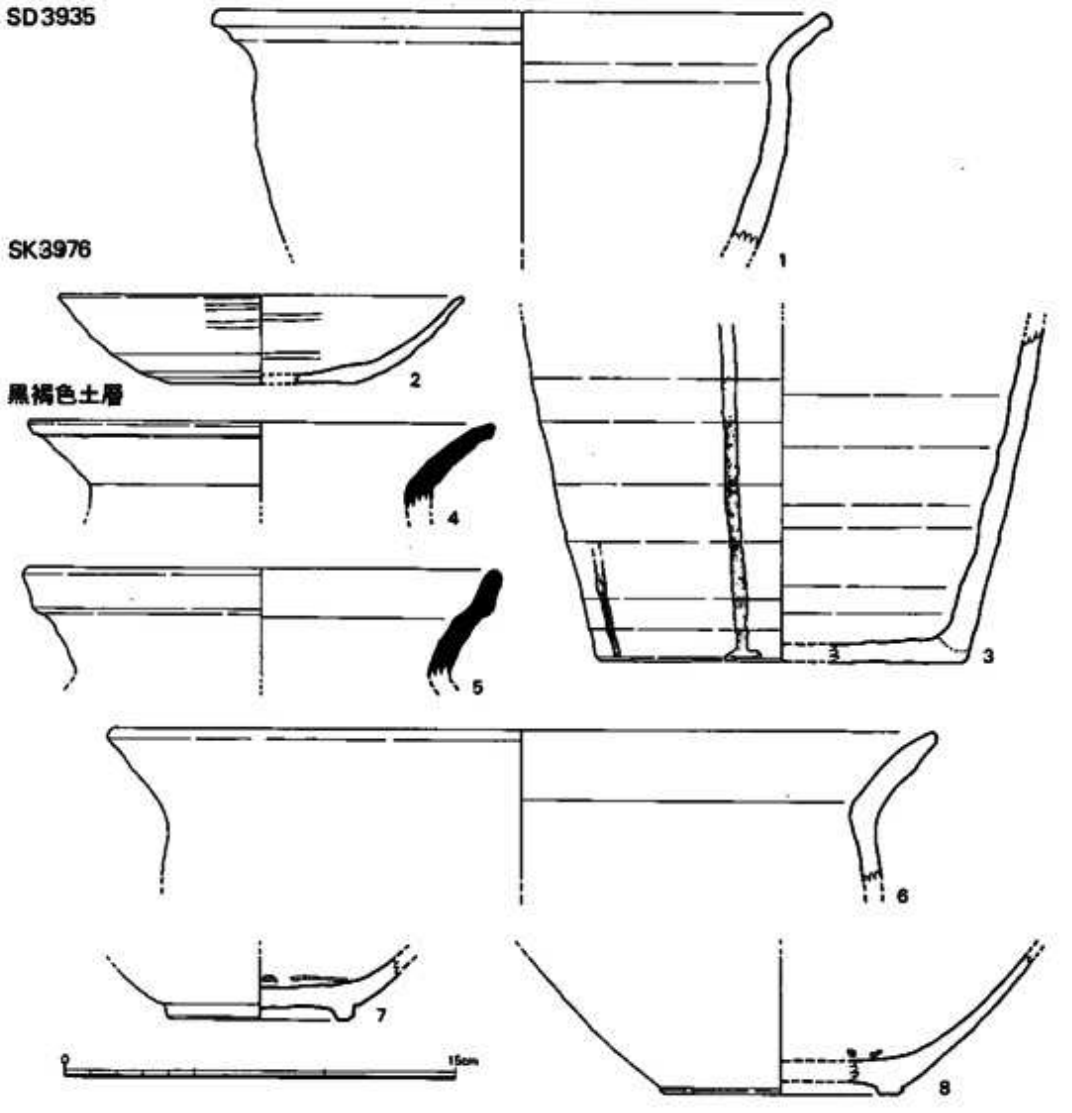
黒褐色土層出土土器（第88図、図版86）

須恵器

甕（4・5）4は外反する口縁の端部下に断面三角形の凸帯をつくりだす。復原口径18.0cmをはかる。5の口縁部は二重口縁状となり端部はそのままの厚みで丸くおさめる。口径18.4cm。

土師器

甕（6）口縁部と体部の境にわずかな稜をもつ。外面は加熱をうけ茶変する。口径は小片の



第88図　SD3935、SK3976、黒褐色土層出土土器・陶磁器実測図

ためやや不確実だが復原すると32cmほどか。

中国陶磁器

青磁

椀（7・8）7は淡茶色の胎にやや茶味をおびた緑色釉を薄く施す。高台畳付は露胎となる。内面の体部と底部の境には長さ2.5cmほどの細長い目跡が残る。高台径7.2cm。8は内弯しながら開く体部に低い輪状高台がつくものである。灰色の細かい胎にやや黄味がかった緑色釉を施す。目跡は内面の見込みと高台畳付に残る。高台畳付は露胎となる。復原高台径9.4cm。7・8とも越州窯系。

5．第140次調査

本調査地は太宰府市大字観世音寺字不丁282－2、283－2番地に所在し、大宰府政庁南門の南南西200mの地点に位置する。この地域は観世音寺地区土地区画整理事業地内にあり、住宅建設の申請が行なわれたため、事前の発掘調査を実施した。調査面積は200㎡。

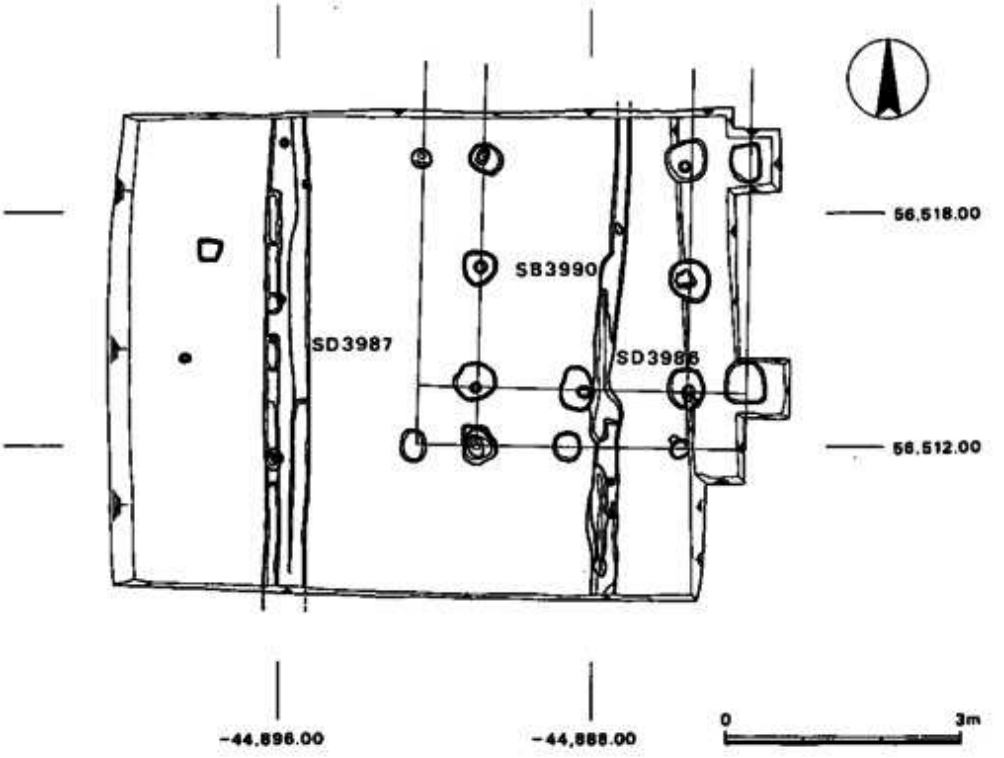
調査地は区画整理事業によって盛土が行なわれていたので、盛土と表土の除去は重機を用いて平成4年5月2日から実施し、発掘作業は5月11日から開始した。6月10日にはすべての作業が終了した。

検出遺構

検出した遺構は掘立柱建物1棟と溝2条である。

掘立柱建物

SB3990　発掘区の東半部で検出した2間×3間以上の南北棟建物で、東・南・西側に廂をもつことからおそらく北側にも廂があり、四面廂をもつ建物と考えられるが北側は調査区域外へ延びているため規模は不明である。梁行の柱間寸法は2.70m前後、桁行の柱間寸法は3.00m程で



第89図　第140次調査遺構配置図

それぞれ9尺・10尺を基準としたものと考えられる。身舎部と廂との間の柱間は梁行・桁行ともに1.50m前後で5尺を基準としたものと考えられる。

身舎部の柱掘形は1.0m前後の隅丸方形、もしくは不整円形ともいうべきもので深さは0.40m程残るが、建物の3分の2程は表土除去の際掘りすぎて残りが悪い。廂部分の柱掘形も東側桁行に残るものからみると本来は身舎部のものと大きさは変らないが、深さが浅いため南・西側の部分ではやや小さくなったり削平を受けて消失したりしている。身舎部の東側桁行の2つの柱掘形には礎板と考えられる花崗岩があるが、東南隅の石は掘形の南側に押し寄せられ、かつ平坦面が下面にあり、中央部には柱根の痕跡らしきものがあるので建て替えの際、根石に用いられたものと考えられる。南から2番目の柱掘形では花崗岩が中央にあり礎板として用いられたものと考えられるが、掘形の底部の中央には柱根の沈んだ跡とみられる痕跡がある等、建物がほぼ同じ場所に同じ掘形を用いて建て替えられたものと考えてよかろう。

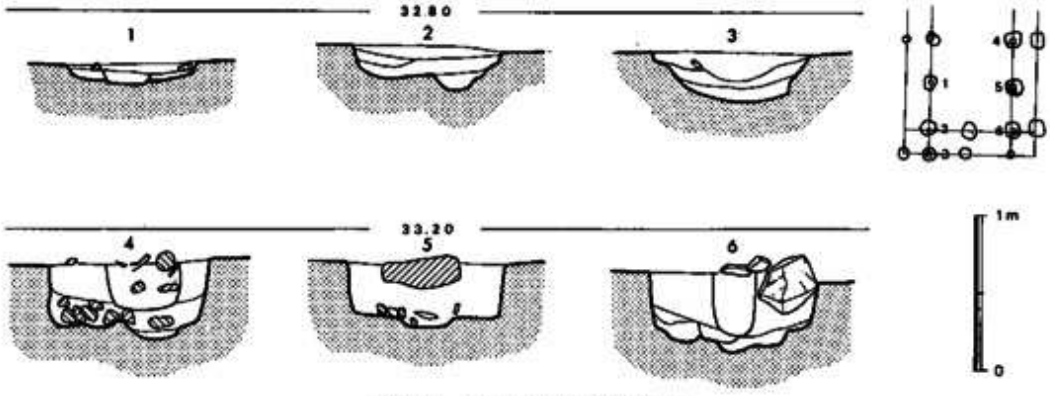
建物の柱掘形は礫層を掘り込んで建てられているが、礫層は上下2層あり下層の礫層の上面には鉄分が沈着し、柱掘形はこの面から確認できる。建物の方位は1°45′強、東に振れている。

溝

2条の南北溝を検出した。

SD3986　調査区の東側寄りで検出した。幅0.35～0.75m、深さ0.10m程であるが、南側壁面の土層で観察するとSB3990の柱掘形と同じ面で確認でき、幅1.40m程、深さ0.25m程を測る。この溝は掘立柱建物SB3990と切合関係があり、SB3990よりも古い。出土遺物は少量かつ小片で図示できるようなものはないが奈良時代のものと考えて大過ない。この溝の方位は2°近く東にふれており掘立柱建物SB3990よりもわずかに東への振れが強い。

SD3987　調査区の西側で検出した。幅は0.85～1.18m、深さ0.15m程のものである。出土遺物は奈良時代の土器、瓦、およびそれらよりも古い土器片があり、奈良時代の溝と考えられる。



第90図　SB3990柱掘形断面図

溝の方向はほとんど真北といえる。

出土遺物

瓦類（第91図・図版86）

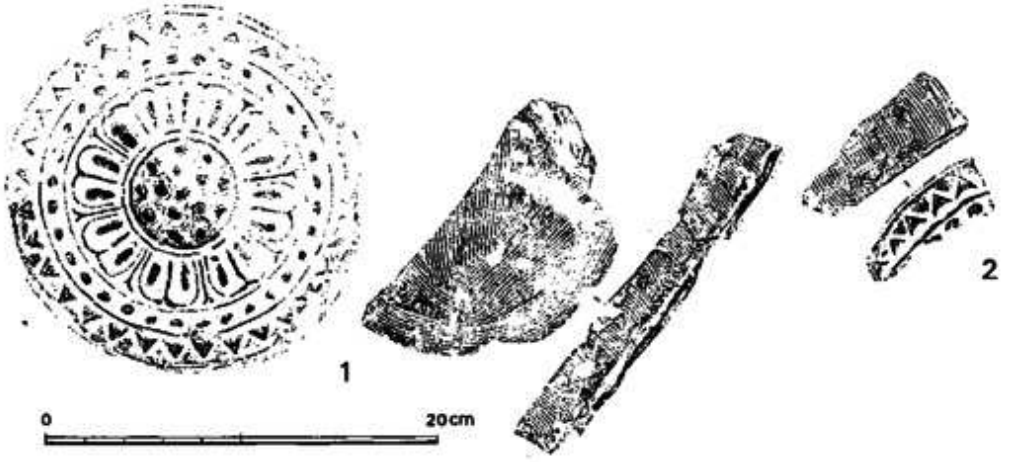
瓦類の出土量は多くない。軒丸瓦で１の老司Ⅱ式軒丸瓦１点が出土した。この軒丸瓦は瓦当周縁および裏面に櫛状の整形痕が残る。SD3987出土。

この調査では大宰府政庁第Ⅰ期に相当すると考えられる格子目の叩打痕を残す平瓦片もあったが主体は縄目の叩打によるものである。

２は参考資料である。国指定史跡国分寺瓦窯跡の隣接地新池の水を落した時に採集された資料である(1992年11月採集)。小破片であるが瓦当文様は老司式軒丸瓦である。この瓦当周縁に見られる整形痕跡と１の瓦当周縁の整形痕跡とは同一の整形具が用いられたものと考えられる。この整形痕跡は大宰府政庁前面の広場推定地（第134次・1991年）や第138次調査で出土している老司Ⅱ式軒丸瓦の整形痕跡とも同一のものであるからこの資料も老司Ⅱ式軒丸瓦と考えて良いだろう。国分瓦窯跡で生産された瓦が大宰府政庁周辺部にも供給されていたことになる。

なお、鏡山猛氏によると老司Ⅱ式軒丸瓦と他に一種瓦窯内出土と報告された資料があるからこの報告を改めて裏付けたことになる。

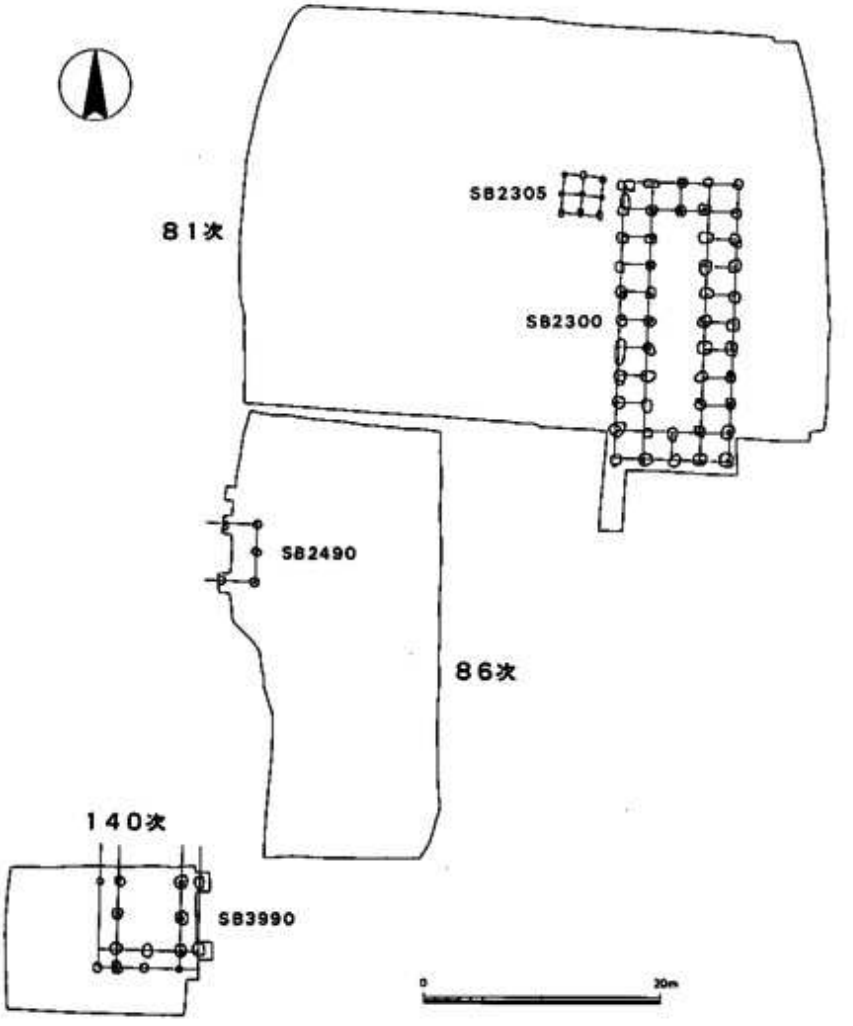
参考文献　鏡山猛　「筑前国分寺」『国分寺の研究』　西海道之部　1939年



第91図　軒瓦拓影

小結

本調査で検出したSB3990はSD2340以東のいわゆる政庁前面広場域での4例目の建物遺構である。4棟の建物の時期についてはSB2300は柱掘形から出土した瓦と整地層出土土器から8世紀初頭とされ、SB2490とSB2305はそれと同時期である可能性が指摘されている。今回検出したSB3990は出土遺物からは築造時期を決定し得ないが、SB2300・2490と方位を等しくとることから考えると同時期に位置づけられる可能性がある。いずれにせよ従来広場的な空閑地とされていた部分で、また1棟の建物遺構の存在が明らかとなった。朝集殿的な建物とされたSB2300を含めてこの地域の性格を再検討する必要がでてきた。



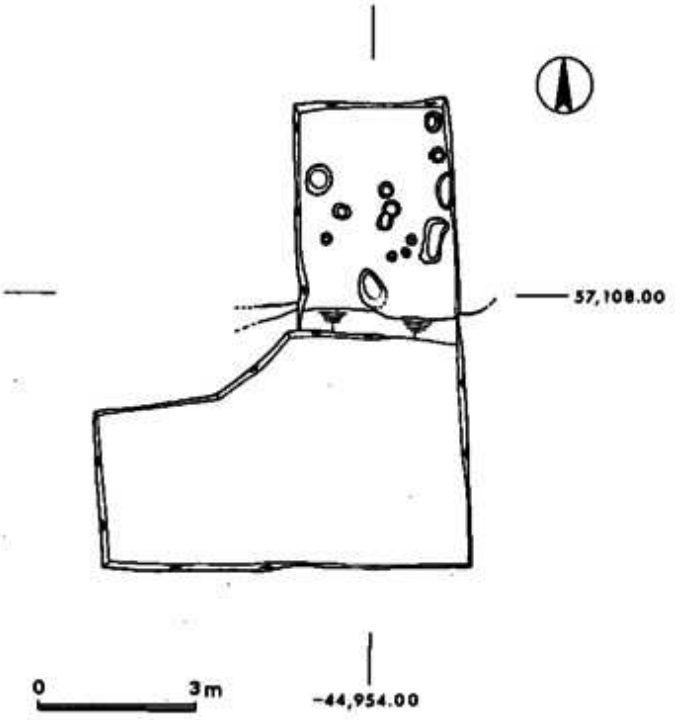
第92図　第81・86・140次調査建物模式図

6．第141次調査

本調査地は太宰府市大字坂本字花屋敷265－5番地に所在し、大宰府政庁正殿の北北西280m程の地点に位置する。住宅改築のための現状変更申請が提出され、文化庁の指示によって発掘調査を実施することとなった。調査区は計画平面図から既存の建物部分をのぞき、発掘可能な庭の部分に設定した。発掘面積は42㎡である。調査は平成4年6月9日から表土剝ぎを開始し、6月18日埋めもどしに至るまですべての作業を終了した。

検出遺構

調査区南半部は既にかなり古い段階で削平を受けたものと考えられ何らの遺構も検出できなかった。北半部では表土下35cm程で黒色砂質土層があり、その上層に客土を施したものと考えられる黄褐色粘土があたかも地山のような感じで残存していた。黄褐色土層の中には縄文早期の押型文土器片、弥生中期の甕棺口縁片等を含んでおり、これらの遺物を出土する遺構のあった、おそらく北側の丘陵部から客土用の土を運んできたことを示している。黒色砂質土の下層は花崗岩バイラン土系の砂層が地山となっている。検出遺構はピット類だけであるが、黒色砂質土層からは中国製白磁・朝鮮製粉青沙器および宋銭（熙寧元寶）等が出土している。白磁は15世紀前半頃、粉青沙器は15世紀後半～16世紀初頭頃のものであり、この地点が小字名花屋敷の示すように中世屋館の一角、もしくはそれに近接した場所である可能性が強い。



第93図　第141次調査遺構配置図

出土遺物

黄褐色土層出土土器（第94図、図版87）

縄文土器

鉢（1）深鉢の口縁部付近の破片。内面は上部が横走の楕円押型文で下部はナデ、外

面は縦走の楕円文を施す。色調は外面が暗黄褐色ないし茶褐色、内面は黄褐色、断面は黒茶色を呈する。胎土に砂粒・砂礫を多く含む。

黒色砂質土層出土土器（第94図、図版87）

中国陶磁器

白磁

椀（2）体部は丸味をもち、口縁部は強く外反する。濁白色の胎に灰色味の強い白色の釉を施す。復原口径16.6cm。

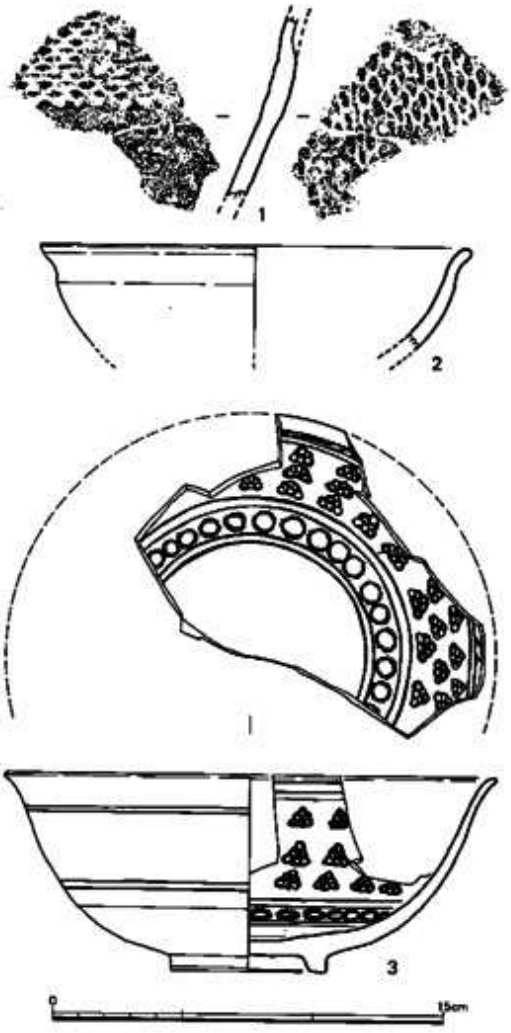
朝鮮陶磁器

李朝青磁

椀（3）体部は丸味をもち口縁部は外反する。高台部分は外側が接地する。内面には口縁部と体部下半に数条の圏線をまわし、その間に白象嵌の三段の如意頭文と菊花文をスタンプする。外面にも白象嵌の圏線を2本一組で二ケ所にまわす。釉は白灰色味の強い淡緑色で高台畳付が露胎となるほかは全面に施される。胎土は暗灰色で緻密。

銅銭（図版87・a）

熙寧元寶(1068年初鋳)。黒色砂質土層から出土。



第94図　黄褐色土層、黒色砂質土層出土土器・陶磁器実測図

7．第142次調査

本調査地は太宰府市大字観世音寺字広丸352－1番地に所在する。県道関屋－吉木線に南接し、大宰府政庁からは西へ480m程の地点に位置する。この地域は観世音寺地区土地区画整理事業地内にあり、住宅建設の申請が行なわれたため、事前の発掘調査を実施した。調査区の東側は第96次調査の北西部の一部と重複している。

表土除去作業は重機を用いて平成4年6月15日から実施し、発掘作業は6月19日から開始し、7月27日にすべての作業を終了した。

検出遺構

第96次調査で検出されていた掘立柱建物SB2835、井戸2845等の他に、掘立柱建物6棟分、溝2条、土壙、溝状の流路等を新たに検出した。

掘立柱建物

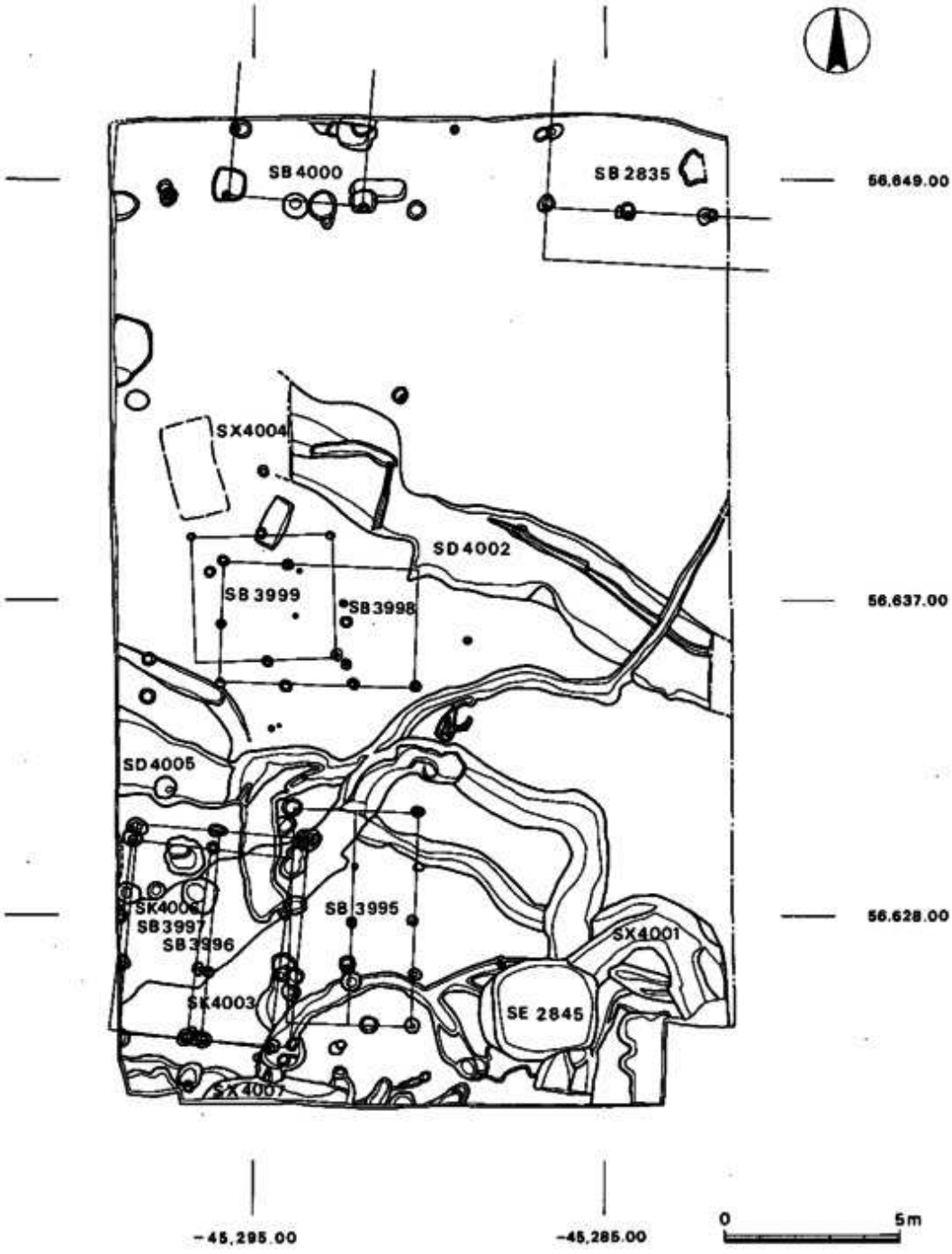
SB3995　調査区の西南部で検出した2間×4間の南北棟である。梁行の中央の柱穴は南北ともに検出できなかったが、梁行の柱間寸法は1.80m前後、桁行の柱間寸法は1.50mでそれぞれ6尺・5尺を基準としたものと考えられる。削平を受けているものと考えられ、柱穴の多くは径30～40cm程の大きさで残りは悪いが、西側桁行の南から2番目の柱穴は径70cm程あり、本来は他の柱穴もこの位の大きさのものだったと考えられる。建物の方位は1°15′東にふれている。時期の決め手はないが、第96次調査の掘立柱建物SB2835の方位とほぼ同じでかつ柱穴の大きさ等にも共通するところがあり9世紀後半頃のものと考えてよかろう。

SB3996　発掘区西南端で検出した2間×3間の南北棟で、SB3997と重複しており、これより新しい。梁行の柱間寸法は2.40m前後、桁行の柱間寸法は1.80mでそれぞれ8尺・6尺を基準としたものと考えられる。南側梁行には柱根が残存していたが残りは悪かった。建物の方位は7°15′東に振れている。

SB3997　前記SB3996より古く、SB3996はこの建物の建て替えと考えられる。2間×3間の南北棟である。梁行の柱間寸法は2.40m前後、桁行は1.95m前後でそれぞれ8尺・6.5尺を基準としたものと考えられる。建物の方位は4°東に振れている。

SB3996・3997は土壙SK4006とも重複している。SK4006の出土土器は9世紀末～10世紀初頭のものと考えられ、SB3996・3997の柱穴より出土した土器は10世紀前半頃のものと考えられることから、この二つの建物の時期は10世紀前半頃のものと考えてよかろう。

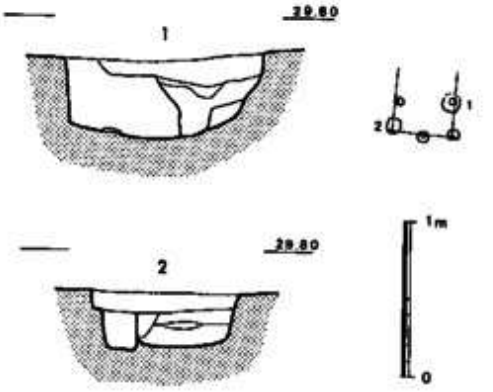
SB3998　2間×3間の東西棟であるが、東北部の3つの穴は既に削平されていて検出できなかった。梁行・桁行ともに柱間寸法は1.80m前後で6尺を基準としたものと考えられる。建物の方位は1°15′東に振れている。時期の決め手を欠くが、建物の方位からすればSB2835・3995等と



第95図　第142次調査遺構配置図

同じく9世紀後半頃のものかと思われる。

SB3999 既に削平を受けて検出できない柱穴もあったが2間×2間の建物と考えられる。東西方向の柱間寸法は2.00m前後、南北方向は中間の柱が既に削平されているが2間で3.60m前後を測り、それぞれ8.5尺・8尺を基準としたものかと思われる。建物の方位は1°30′程西に振れている。大宰府史跡においては建物の方位が西に振れるものは、一般的にいえば新しい傾向といえる。



第96図 SB4000柱掘形断面図

SB4000 調査区の北西端で2間×1間分を検出した。北側はさらに県道の下にのびるものと思われるが規模は不明である。おそらく南北棟と考えられる。南側の梁行の柱間寸法は1.95m前後で6.5尺を基準としたものと思われるが、桁行の柱間寸法は東側で2.25m程、西側で1.95m程で全容がわからないと何とも言えないが6.5～7.5尺の間にあるといえよう。この建物の柱穴は0.65～1.30m程で比較的大きいものである。建物の方位は4°30′東に振れている。この建物の柱穴からは8世紀後半頃の須恵器高台付杯が出土している。

溝

SD4002 西北－東南方向の溝である。幅は2.50m程のもので、長さ14m程を発掘した。2.50m程の浅い溝の中央に幅0.25～0.40m、深さ0.25mの小溝がある。そしてこの小溝は検出した溝の中央付近では切れており、環溝の陸橋的な感じを受ける。出土遺物がなく時期の決め手を欠くが、SX4001とした流路に切られており、これより新しいことは確実である。第96次調査の井戸SE2845は9世紀後半のものであるが、この井戸の出土遺物の中に古式土師器が図示されている(昭和60年度概報　第27図－20)。今回SE2845は輪郭のみを出したが、第96次調査ではこの流路の一部を井戸とともに掘っており、この土師器はこの流路からの出土である可能性は大である。したがってこの溝は古墳時代初頭以前のものではなかろうかと考える。

SD4005 調査区西側で検出された東西方向の溝状遺構である。幅1.50～2.50m、深さは0.10m程と浅い。瓦片、土師器高台付椀等の土器等が出土した。

土壙

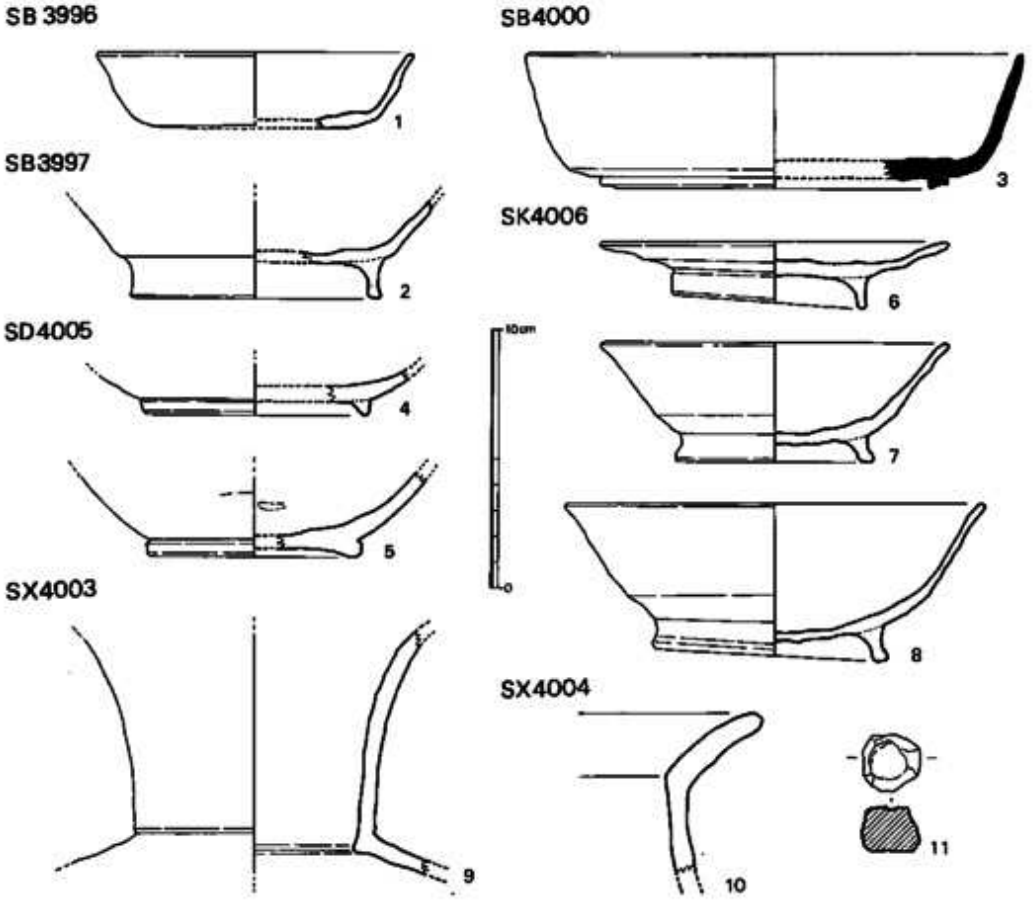
SK4003 SB3995・3996・3997等の柱穴と重複した不整形の土壙で深さも0.1m弱で浅い。性格は不明であるが、古式土師器・灰釉陶器等が出土した。

SK4006 SB3996・3997と重複している。径1.00m前後の円形を呈し、深さは0.10m程の浅い土壙である。碁石様の小円礫・緑釉陶器等が出土した。

その他の遺構

SX4001　流れの方向が定まっていない流路である。幅は0.30～3.00mである。深さは各所で異なるが0.20～0.55m程である。壁面はほぼ直になっており、すべてを自然の流路とするには躊躇する。出土遺物はほとんどないが板付II式壺片、古式土師器片等が南端で出土しており、第95・96次調査のSD2760等に相通じるものかとも考えられる。

SX4007　調査区南端でその一部を検出し、鞴羽口等を出土しているが、第96次調査のSD2817に連続する可能性が強い。



第97図　SB3996・3997・4000、SD4005、SK4006、SX4003・4004出土土器・瓦玉実測図

出土遺物

SB3996出土土器（第97図、図版87　別表）

土師器

杯（1）底部外面はヘラ切り未調整、底部内面はナデ調整で板状圧痕を伴う。

SB3997出土土器（第97図　別表）

土師器

杯（2）直立する高い高台をもつ。内外面ともヨコナデ調整する。

SB4000出土土器（第97図　別表）

須恵器

杯（3）体部と底部の境が不明瞭なもので、断面四角形の低い高台をもつ。底部外面は回転ヘラ削り調整、底部内面はナデ調整を施す。

SB4005出土土器（第97図　図版87）

緑釉陶器

皿（4）断面三角形の高台を貼付するものである。胎土は黄色味を帯びた緑色の釉を施す。土師質。

中国陶磁器

青磁

椀（5）円盤状の底部をもつもので上げ底気味になる。明灰色の胎に黄色味の強い緑色釉を施すが発色は悪い。外面の底部から体部下半にかけては露胎となる。見込みには目跡が残る。復原底径8.1cmをはかる。

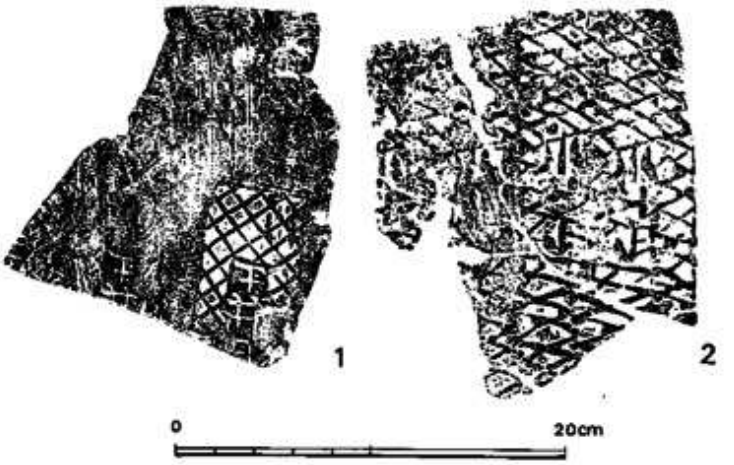
土壙

SK4006出土土器（第97図、図版87　別表）

土師器

高台付皿（6）直立する高台を貼付するもので口縁部は大きく外反する。皿底部はヘラ切り未調整で内面はナデ調整する。

椀（7・8）法量に二種がある。ともに体部下半に屈曲部をもち、高台は「ハ」



第98図　文字瓦拓影

の字に開く。底部外面はヘラ切り未調整で８の底部内面はナデ調整する。７・８とも器壁が薄い。

その他の遺構出土土器

SX4003出土土器（第97図）

灰釉陶器

壺（９）頸部と肩部との境の屈曲部は内側に突出している。頸部は大きく外反する。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。外面に灰色の釉がかかる。

SX4004出土土器（第97図）

土師器

甕（10）　内面は横方向のヘラ削り調整、内面はタテ方向の刷毛目調整を施す。

瓦類（第97図、図版87）

この調査では瓦類の出土量は少ない。軒瓦類の出土はないが文字瓦の出土が２点ある。

１は斜格子文の叩打具の上部中央に「平井瓦」と陰刻した平瓦片である。「平」の字の左側の点が欠落する。「瓦」は略字であろうか。「平井」・「平井瓦」・「平井瓦屋」の正字・左右逆字など平井関係の文字瓦の種類は多い。その１例である。凹面には粘土の合わせ目がある。

２は斜格子目の中に「小ト瓦」の左右逆字が組み込まれた平瓦片である。「小ト」については意味不明である。砂粒を多量に含んで灰色を呈する。焼成も悪い。粘土板桶巻き作りの瓦である。

出土土製品（第97図）

円盤形製品（11）　平瓦の周縁部を打ち欠き玉状に整形したもの。上面には格子の叩き目が残る。

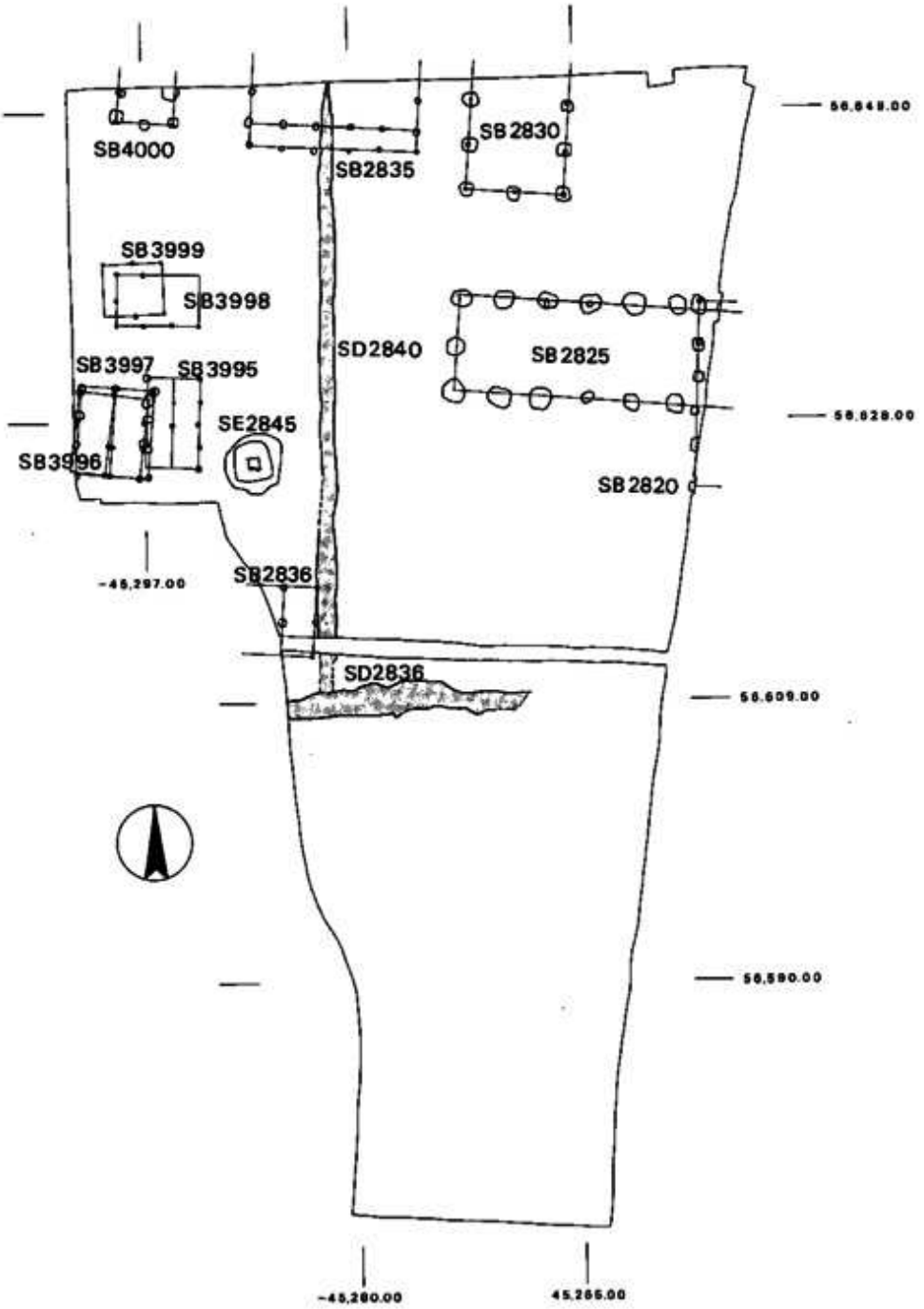
出土石製品

径0.6～1.5cmほどの円盤状の蛇紋岩。SK4006の埋土中からある程度のまとまりをもって出土した。何らかの祭祀に関わるものであろうか。

小結

発掘調査の結果、６棟の掘立柱建物を検出した。第142次調査区は昭和60年度に行なった第96次調査区の北西部と重複している。その時の調査では８～11世紀にわたる掘立柱建物５棟を確認しており、Ⅰ～Ⅲ期にわたる変遷がみられたのでそれに基づいて広丸地区の建物遺構を中心に再度整理してみたい。

まずⅠ期はSB2825・2830の２棟が当該地においてもっとも古期に位置づけられる建物で「L字型」に配される。Ⅰ期はSB2825の柱抜き穴から出土した遺物より８世紀後半以前と考えられている。今回検出した建物ではSB4000がⅡ期と考えられる。柱掘形から出土した遺物は最も新



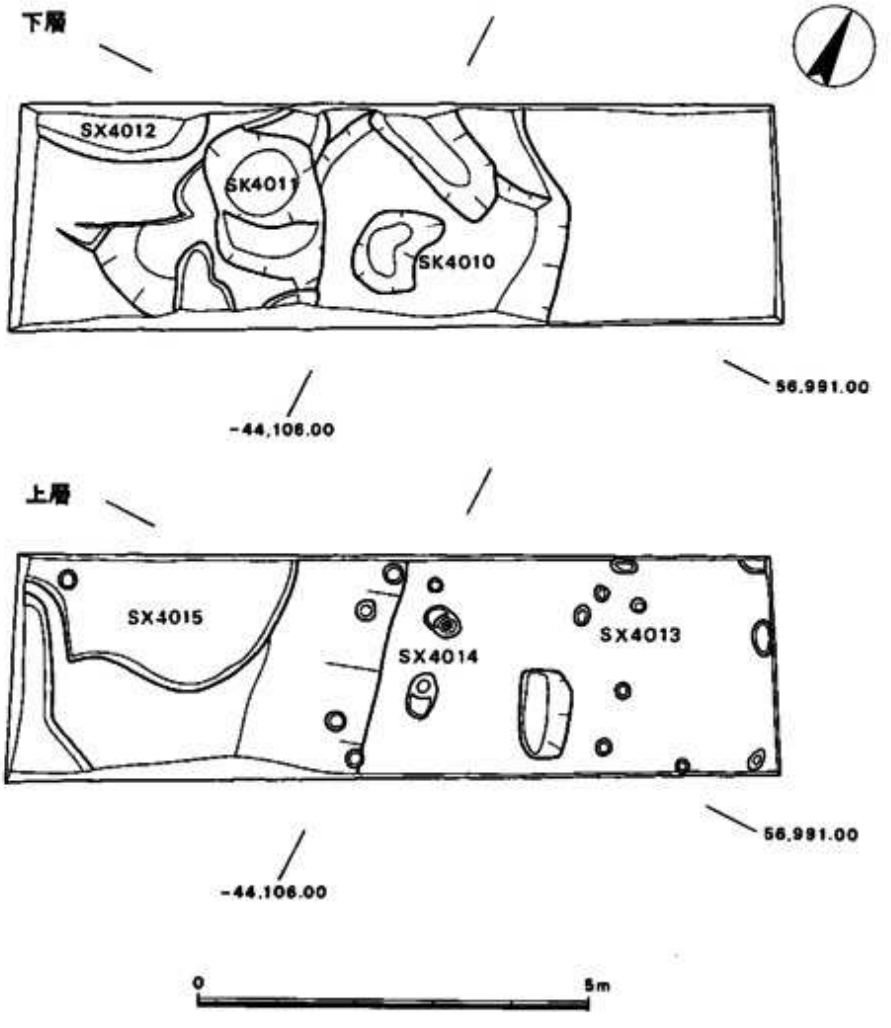
第99図　第96・142次調査遺構概念図

しいもので8世紀後半であった。建物方位がSB2825・2830と等しいため、あるいはⅠ期に上る可能性もある。Ⅱ期にはSB2820があり上限は8世紀後半。Ⅲ期はa・bの小期に分かれる。Ⅲa期では第96次調査で検出したSB2835と同時期と考えられるものにSB3995・3998がある。この2棟は棟を直交させ「L字型」に配置されている。これらはSB2835と方位を同じくし柱掘形から出土した遺物も9世紀後半代で矛盾はない。この時期に井戸SE2845が伴う。Ⅲb期はSB2836とSB3997からなる。これより後出するSB3996は位置・規模から考えてSB3997の建て替えである。10世紀中頃～後半に比定される。Ⅳ期としたSB3999は先述した通り2°ほど西へ振っており、これは政庁前面の建物の変遷からみると柱穴など新しい様相がみられ、10・11世紀代の建物と考えられる。したがってⅢb期～Ⅳ期は10世紀後半～11世紀代に時期設定し得る。

以上、建物を中心として広丸地区の状況をみてきた。その結果、第96次調査の結果ともほぼ合致することが確認できた。そして現段階では第Ⅱ期に属するSB4000は政庁前面で検出した建物群の中でもっとも西側に位置する建物となった。この建物は広丸地区官人居住域の西を限る溝SD2840よりも西側に位置し、8世紀代における建物群がさらに西に展開していることを示す重要な意味も有している。さらに、以前の調査ではこれらの建物の性格については建物規模・柱掘形の形状・大きさ等から官衙的ではあるものの掘形埋土の状況等からみて官人の居宅の可能性を示唆している。いずれにせよ今後Ⅰ・Ⅱ期における大規模な掘立柱建物がどこまで広がるのか、その範囲の確定を行なうと同時に、出土遺物等から、官衙とするのか居宅であるかの性格付けが今後の重要な検討課題として残る。

8．第144次調査

本次調査は観世音寺北面築地の推定線の東北隅部の東方20mにあたる。また、平成元年度に実施した大宰府史跡第120次調査（観世音寺北門推定地）の東方約90mの所に位置する。観世音寺の中心伽藍を囲繞する築地は『観世音寺資財帳』から東西171m、南北195mの規模が推定復原されているが、今回の調査地はその推定線の外側になる。調査地の地番は太宰府市大字観世音寺字山の井862－１番地である。調査期間は平成４年７月29日～９月７日である。途中夏休み等があったため作業を一時中断したこともあり、期間が若干延びることになった。調査地は狭い平坦部を成しており、すぐ南側には比高約８mの高まりがある。そしてこの平坦部に面した部分は



第100図　第144次調査遺構配置図

急斜面となっており、丘陵の一部が削り取られたようである。この平坦部に3m×10mのトレンチを設定し調査を行なった。

検出遺構

調査の結果、上下二層の遺構面を検出した。

上層

トレンチの中央から東側では表土下0.30mで地山（東端部）と一部整地された面を検出した。この地山と整地面は西に向かって緩やかに傾斜し、トレンチ西側では深さ0.40mの落ちとなる。トレンチ東側ではSXC4013・SX4014などの小ピット群と、西側でSX4015の浅い落ち込みを検出した。ここからは近世末の遺物が出土している。他には顕著な遺構はみられない。

SX4013　トレンチ東半部の地山および整地面で検出した径0.20m～0.30m、深さ0.10～0.30m前後の小ピット群である。建物としてはまとまらない。近世以降のものである。

SX4015　トレンチ西端で検出した。径0.20m前後の浅い落ちである。ピット群同様近世以降のものである。

下層遺構

上層整地を除去し、東側に露出している地山面をトレンチの西側に向かって露出した結果、トレンチのほぼ中央で落ち込み状になった土壙SK4010・4011を検出した。いずれの土壙も明瞭なプランを成さず地山面を露出した結果検出したものである。

土壙

SK4010　不整円形を呈する0.80×1.10m、深さ0.30mの土壙である。ここからは14世紀末～15世紀代の土器・陶磁器が少量であるが出土した。

SK4011　不整円形を呈する1.40×1.20m、深さ0.36m前後の土壙である。前者と同様若干の遺物が出土。特に炉壁片や鞴羽口が数点であるが出土している。

出土遺物

SK4011・赤褐色土層出土土器・陶磁器・石製品（第101図、図版88　別表）

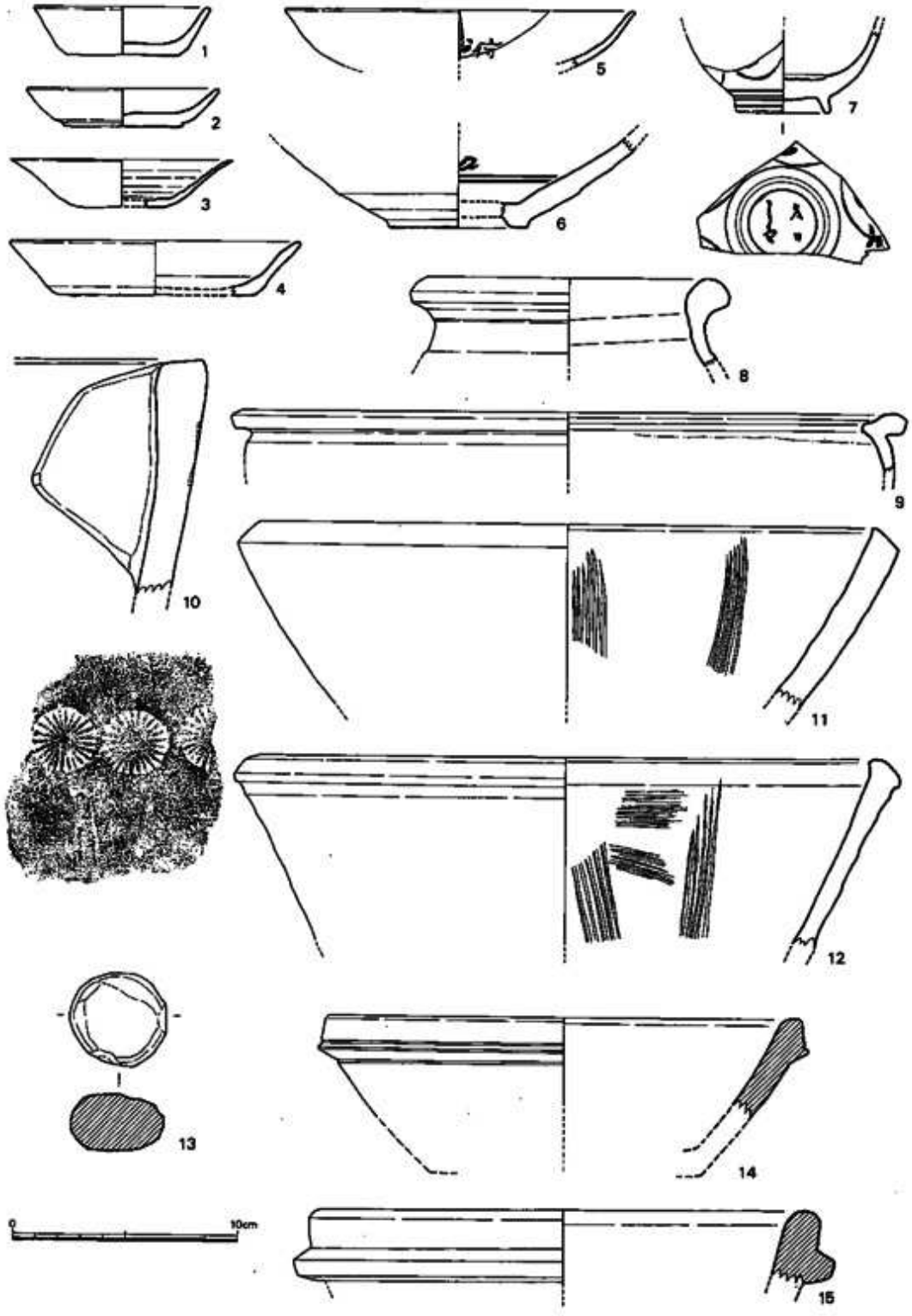
土師器

皿a（2）口径8.6cm、器高1.7cm、底径5.4cm。内底はナデ調整する。糸切り。

皿b（1）口径7.8cm、器高2.0cm、底径5.0cm。糸切り。

杯a（4）口径13.0cm、底径8.7cm、器高2.4cm。底部内面はナデ調整。糸切り。

杯b（3）復原口径10.0cm、器高2.1cm、底径3.8cm。体部の器肉は非常に薄い。糸切り。



第101図　SK4011、赤褐色土層出土土器・陶磁器・瓦質土器・瓦玉・石製品実測図

中国陶磁器

白磁

杯（5）体部が丸味をもつもので、胎土・釉調とも精良である。小片であるため文様は不明であるが、「府」の浮文が残る。これまで数十点の枢府磁が出土しているが「枢府」銘がわかるものの出土は今回が初めてで、貴重である。赤褐色土下層出土。

中国陶器

壺（8）黄釉壺の口縁部片である。胎は淡茶色で光沢のある釉を口縁部に施す。内面は刷毛目調整。復原口径14.2cm。茶褐色土下層出土。

盤（9）復原口径30.2cm。砂粒を含んだ茶褐色の粗い胎に黄緑色の薄い釉を施す。口縁部と体部外面は露胎となる。SK4011出土。

朝鮮陶磁器

高麗青磁

椀（6）灰白色の胎に灰緑色の釉をかける。高台畳付は露胎で砂目が残る。体部の下半に白象嵌の圏線を2条巡らす。赤褐色土下層出土。

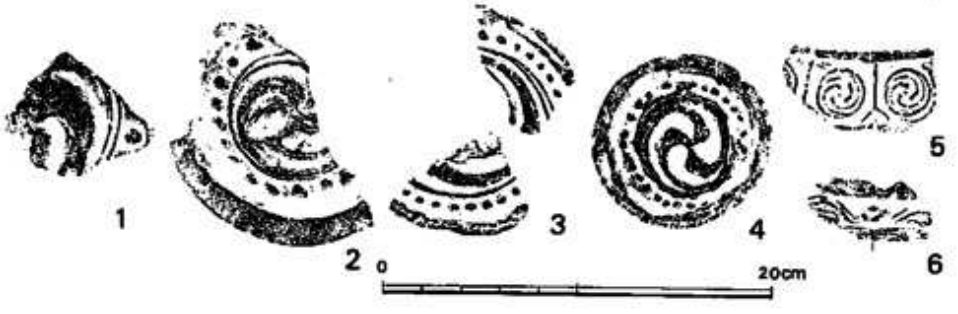
日本陶磁器

染付

椀（7）肥前系の染付椀。体部上半部を欠く。見込みは輪状に釉をカキ取る。外面の体部の最下部と高台部に3条の圏線を巡らす。底部の外面に「大明年製」の銘をもつ。赤褐色土下層出土。

陶器

鉢（11・12）ともに摺鉢。11は単位あたり6本の筋目を刻む。口縁端部はわずかに内側につまみ出す。内外面ともヨコナデ調整。胎土は赤褐色を呈しやや粗い。復原口径29.5cm。備前産か。茶褐色土下層から出土。12は単位あたり5本の筋目を刻む。体部内面は横方向の刷毛目調整、体部外面はナデ調整する。復原口径は30cmほど、赤褐色土下層出土。



第102図　出土軒瓦拓影

瓦質土器

鉢（10）口縁部の破片で内面に台形の粘土板を貼付し、支えとしている。外面には菊花文を押印する。赤褐色土下層出土。

瓦類（第102図・図版88）

軒丸瓦４種・軒平瓦２種が出土している。

１は右まわりの巴文軒丸瓦である。右まわりの巴文のなかでは最も大きな頭をもつものと思われる。巴の回転は逆であるが第38図２と文様構成が類似する。１点出土。

２は高い素文縁で左まわりの巴文軒丸瓦である。文様の彫りは全体に浅い。巴文の尾は半周して珠文帯との間の界線につながる。巴文・珠文帯とも均整がとれ端整な瓦当文様となっている。新出資料で１点出土。

３の左まわり巴文軒丸瓦も新出資料である。瓦当の全体の形はわからないが非常に尾が長く珠文帯との間の界線に連続する。連珠文は細く密で30粒以上が配置されるものと思われる。素文縁には笵の端と思われるアタリが残る。３点出土。

４は小型の軒丸瓦である。丸瓦は半截されたものが使われているから大棟を飾る菊丸瓦ではないだろう。巴文は一見手彫りによったもののように見えるが笵型から抜かれた後に指でなでつけられたためであろう。巴は３つの頭が中央で連結し約半周して珠文帯との間の界線を作る。連珠文は29粒ある。２点出土。新出資料。

５は剣頭巴文の軒平瓦である。類品には安楽寺天満宮・武蔵寺のものがある。本例は巴文の中心に付点がある。この点前二者と異なる。安楽寺天満宮例では巴は左まわり、武蔵寺例では巴が右まわりである。１点出土。

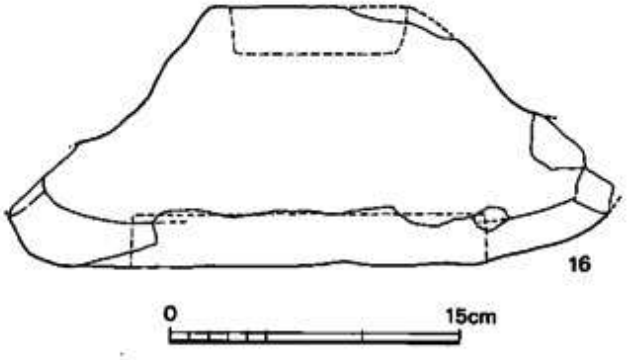
６は小型の軒平瓦である。２段に表現された宝珠文の左右に均整唐草文が配置される。大きさから４とセットとなる可能性がある。１点出土。この他に巴文軒丸瓦の破片が１点出土している。

土製品

円盤形土製品（13）瓦の周縁部を打ち欠き玉状に整えたもの。周縁部は角がとれて丸くなる。径4.1×4.3cm、厚さ2.5cm。赤褐色土下層出土。

石製品（第101・103図、図版89）

石鍋（14・15）復原口径は14が21.2cm、15は23.0cmをはかる。ともに外面に煤が付着する。14が赤



第103図　五輪塔実測図

褐色土層下層、15はSK4010出土。

五輪塔（16）

調査区東側の丘陵裾部で採集した五輪塔の火輪。軒先は欠失している。下り棟は中央部付近で一旦段がつく。上面に一辺9.0cm、深さ2.5cmの方形孔、下面に径18.2～18.6cm、深さ2.8cmの円形の孔を設ける。下面の方形の枘孔にはノミ痕が多く残る。凝灰岩製で風化が著しい。

小　結

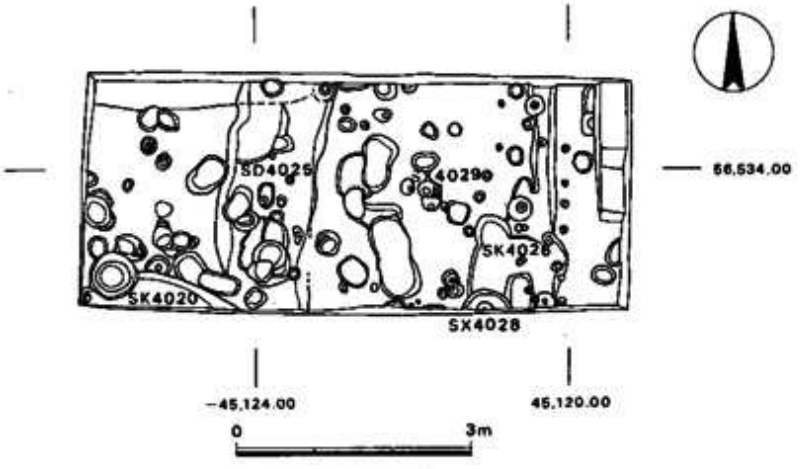
現在調査地の南側には丘陵の斜面が延びてきており、調査地は平坦になっているものの、やや不自然な地形を呈している。すなわちこの平坦面は南側の高まりを一部カットして造られたことが現状からも推定できる。そして、調査の結果によってこのことが裏付けられた。この平坦面は現状より本来は狭かったとみられる。現在、調査地のすぐ北側にはかなり広い平坦面がひろがっており、今回の調査結果からみると遺構の中心はこの北側の平坦部にあったと推定される。今回検出した鋳造に関連する炉壁片等はこの北側に広がる平坦部で使用されたものが、一部谷状になった調査地に廃棄されたものとみることができよう。出土した遺物をみると年代的には14～15世紀代が中心であり、古代観世音寺を窺うことのできる遺構はここではみられなかった。

9．第146次調査

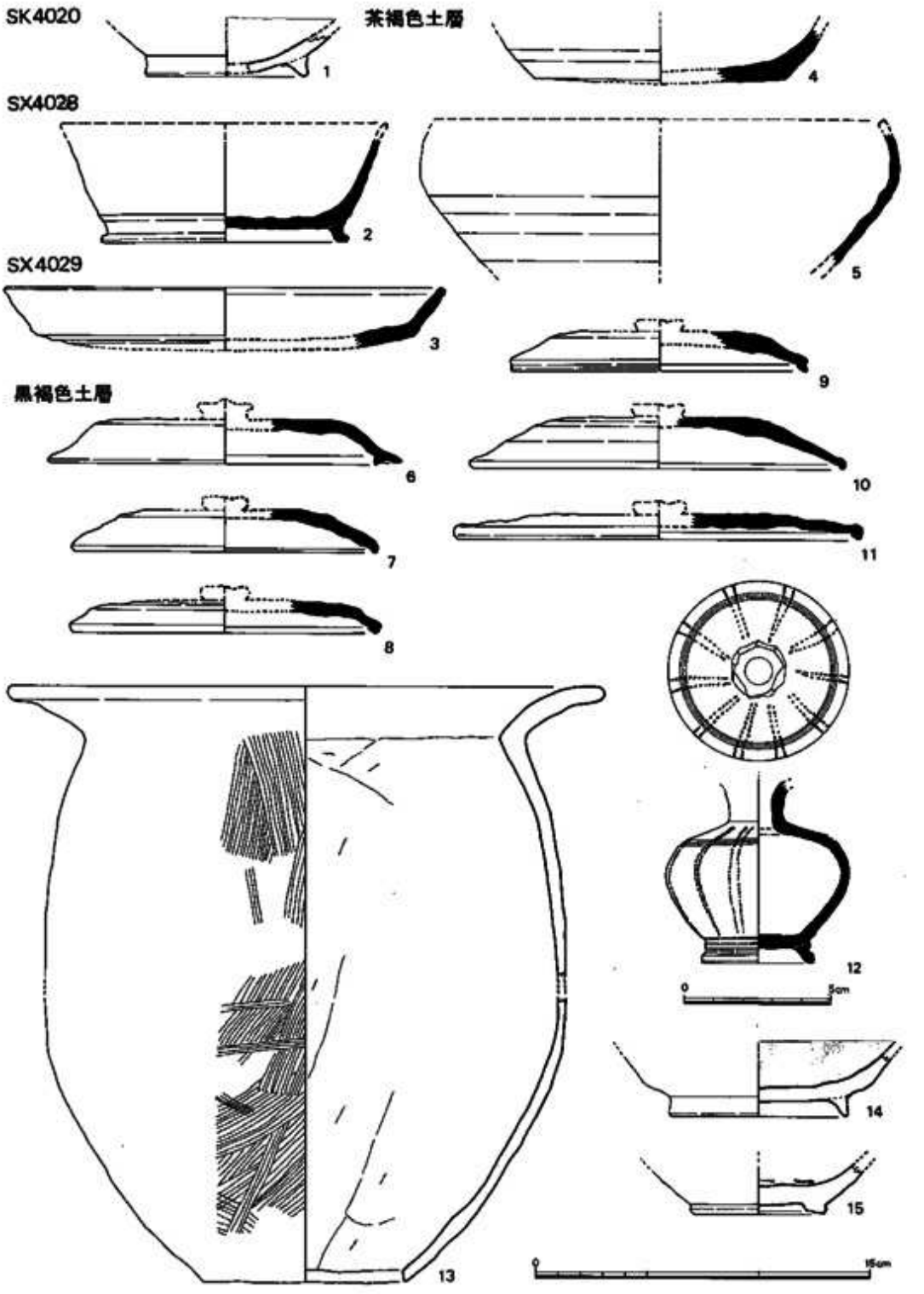
本調査地は太宰府市大字観世音寺字大楠329－21番地に所在する。県道関屋－吉木線と御笠川に挟まれた間にあり、大宰府政庁南門から西南西345m程の地点に位置する。住宅増築の申請が行なわれたので事前の調査を実施することとなった。発掘調査は平成４年９月７日に開始し、９月24日にすべての作業を終了した。東西方向に３×８mのトレンチを設定し発掘した。既に現在の住宅を建設する際にマサ土を80cm程客土しており、その客土下から水田面があらわれた。水田面には稲株の痕跡・足痕等も確認されたが、稲株の並びから機械植えのものと判断された。水田耕作土は15cm程、その下に７～８cmの黄褐色の床土があり、その下面に包含層および遺構面が確認された。遺構は包含層より掘りこまれた黒褐色土を埋土とするものと、包含層下の地山に掘りこまれた茶褐色土を埋土とする上下の二層があった。

検出遺構

南北に流れる溝２条、土壙状遺構２の他、多くの柱穴を含むピット群、および鋳造関係のものと思われる火床穴の痕跡等が確認されたが、狭いトレンチであるため建物等はこの範囲では不明といわざるを得ない。出土遺物は８世紀前半のものを主とし、坩堝・小銅塊等も出土しているので近辺に鋳造関係の遺構の存在も予測できよう。



第104図　第146次調査遺構配置図



第105図　SK4020・4028、SX4029、茶褐色土層・黒褐色土層出土土器実測図

出土遺物

SK4020出土土器（第105図、図版89　別表）

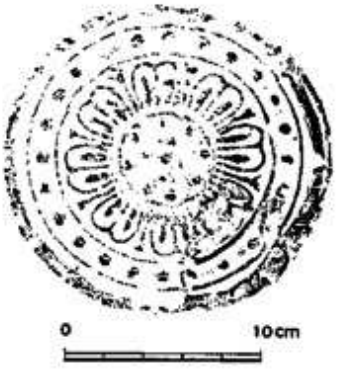
黒色土器

椀（1）内側のみを燻すA類である。丸底の杯に断面三角形の高台を貼付する。底部内面はヘラミガキ、外面はヨコナデ調整。

SX4028出土土器（第105図）

須恵器

杯（2）体部と底部の境が不明瞭なもので、全体的に薄く仕上げられている。口縁部は欠失する。高台は端部を横方向につまみだす。底部外面は回転ヘラ削り調整、底部内面はナデ調整を施す。



第106図　軒瓦拓影

SX4029出土土器（第105図　別表）

須恵器

皿（3）底部がやや丸みをもつもの。底部外面は回転ヘラ削り調整、底部内面はナデ調整を施す。

茶褐色土層出土土器（第105図）

須恵器

椀（4）体部は内弯しながら立ちあがる。外面の底部から体部下半にかけては回転ヘラ削り調整、底部内面はナデ調整を施す。

鉢（5）鉄鉢形の鉢で体部の小片である。外面の体部下半は回転ヘラ削り調整を施す。

黒褐色土層出土土器（第105図、図版89）

須恵器

蓋（6～11）口径13.8～18.4cm。6は身受けのかえりをもつものである。天井部外面の調整は7がヘラ切り未調整でそれ以外はすべて回転ヘラ削り調整する。すべて天井部内面をナデ調整する。6は焼成不良で黄褐色を呈する。

壺（12）平底の壺に「ハ」の字に開く高台を貼付するものである。高台の端部は丸くおさめる。体部と高台部との境には2条の沈線を巡らせる。頸部はほぼ直に立ち上がり外反して口縁部にいたるようであるが欠失しているため形状は不明である。肩部にも2条の沈線を巡らせる。体部外面には櫛状工具による刺突文を二本一組で10ケ所にほどこす。刺突文は二本が平行になるものと上下端が接するものとがあり、それらは交互になるように配されている。胎土は精良で微砂粒を含む。胴部最大径6.3cm、高台部径3.9cmをはかる。

土師器

甕（13）卵倒形の体部に大きく外反する口縁部をもつ。器壁はヘラ削りによって薄く仕上がる。底部は焼成前に穿孔される。体部の外面は縦方向の粗い刷毛目調整。口径26.8cm、底径9.0cm、器高27.0cmをはかる。

黒色土器

椀（14）内面のみを燻すA類。断面三角形の高台を貼付する。内面はヘラミガキ調整を施す。

中国陶磁器

青磁

椀（15）輪状高台をもつ椀の底部片。胎土は灰色から茶灰色で内外面に黄色味がかった緑色の釉を施すが発色は悪い。高台畳付は露胎となる。内面の見込みと高台畳付に目跡が残る。復原底径6.0cmをはかる。越州窯系。

瓦類（第106図、図版89）

調査で出土した瓦類は発掘面積が狭いこともあって少ない。

鴻臚館Ⅰ式軒丸瓦１点が出土している。鴻臚館Ⅰ式軒丸瓦は大宰府政庁Ⅱ期を代表する軒瓦であるが観世音寺・不丁地区官衙推定地・筑前国分寺など大宰府史跡の広範な地域から出土する。なお、丸・平瓦類では縄目の瓦が主体であった。

鋳造関係遺物（図版89）

坩堝（b）片口の部分の破片。胎土は灰色を呈し砂礫を多く含む。内面には一部鋳型の仕上げ真土様の細かい粘土が残る。

別　表

器　種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
SD3840　墨書木札共伴層（第130次調査）									
土師器　皿a	16	1	6.6	4.7	1.4		○	○	○
	〃	2	7.1	4.6	1.2		○	○	○
	〃	3	7.2	5.2	1.2		○	○	○
			7.3	5.5	1.2		○	○	
	〃	4	7.3	5.5	1.8		○	○	
	〃	5	7.4	5.4	1.1		○	○	○
	〃	6	7.4	5.6	1.3		○	○	
	〃	7	7.4	5.0	1.2		○	○	○
	〃	8	7.7	5.2	1.7		○	○	
	〃	9	7.8	5.8	1.5		○	○	○
	〃	10	8.0	6.6	1.6		○	○	○
	〃	11	8.1	6.3	1.6		○	○	○
	〃	12	8.1	6.2	1.7		○	○	○
	〃	13	8.2	8.3	1.4		○	○	○
	〃	14	8.2	6.3	1.6		○	○	○
			8.3	6.2	1.7		○	○	○
	〃	15	8.3	6.4	1.7		○	○	○
	〃	16	8.4	6.8	1.4		○	○	○
杯a	〃	17	(9.2)	(5.6)	3.0		○	○	○
	〃	18	10.0	5.7	3.1		○	○	○
	〃	19	11.8	7.7	3.0		○	○	○
	〃	20	11.8	7.4	2.7		○	○	○
	〃	21	11.8	7.7	3.0		○	○	○
	〃	22	11.9	7.7	2.6		○	○	
	〃	23	11.9	7.8	2.8		○	○	○
	〃	24	11.9	8.2	2.8		○	○	○
	〃	25	12.0	8.0	2.5		○	○	○
	〃	26	12.0	7.9	2.8		○	○	○
	〃	27	12.0	7.8	2.7		○	○	○
	〃	28	(12.0)	(8.2)	2.9		○	○	○
	〃	29	12.2	7.4	2.7		○	○	○
	〃	30	12.2	8.0	2.8		○	○	○
	〃	31	12.2	8.0	3.0		○	○	○
	〃	32	12.3	8.3	3.0		○	○	○
	〃	33	12.4	8.2	2.9		○	○	○
	〃	34	12.4	8.4	2.7		○	○	○
	〃	35	12.4	8.2	2.5		○	○	
	〃	36	12.4	7.5	2.8		○	○	○
	〃	37	12.4	7.4	2.8		○	○	○
	〃	38	12.4	8.3	2.9		○	○	○
	〃	39	12.4	7.7	3.2		○	○	○
	〃	40	12.5	9.0	2.7		○	○	
	〃	41	12.5	7.9	2.8		○	○	○
	〃	42	12.5	7.8	3.2		○	○	○
	〃	43	12.6	7.2	2.9		○	○	○

器　種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
土師器　杯a	〃	44	12.6	7.8	2.9		○	○	○
	〃	45	12.6	9.0	2.9		○	○	○
	〃	46	(12.6)	(8.7)	2.9		○	○	○
	〃	47	12.6	8.0	3.0		○	○	○
	〃	48	12.6	8.0	3.0		○	○	
	17	49	12.7	8.2	2.8		○	○	○
	〃	50	12.7	8.0	2.9		○	○	○
	〃	51	12.8	10.0	2.9		○	○	○
	〃	52	12.8	8.8	2.7		○	○	○
	〃	53	12.8	8.0	2.8		○	○	○
	〃	54	(12.8)	(8.4)	2.9		○	○	
	〃	55	12.8	8.8	3.0		○	○	○
	〃	56	12.9	8.2	2.7		○	○	○
			(13.0)	(8.8)	(2.5)		○		
	〃	57	13.0	7.5	2.7		○	○	○
	〃	58	(13.0)	(7.4)	3.1		○	○	○
	〃	59	13.0	8.0	3.1		○	○	○
	〃	60	13.1	9.1	3.2		○	○	
	〃	61	13.3	8.2	2.8		○	○	○
	〃	62	16.0	11.6	3.3		○	○	○
SD3840　上層									
土師器　皿a	18	75	7.0	5.0	1.3		○	○	○
	〃	76	7.0	5.0	1.4		○	○	○
	〃	77	7.0	4.8	1.4		○	○	○
	〃	78	7.2	5.0	1.5		○	○	○
	〃	79	7.2	5.8	1.2		○	○	○
	〃	80	7.2	5.8	1.4		○	○	○
	〃	81	7.2	5.2	1.2		○	○	○
	〃	82	7.3	5.2	1.2		○	○	○
	〃	83	7.4	5.2	1.2		○	○	○
	〃	84	7.5	5.4	1.2		○	○	○
	〃	85	7.5	4.8	1.5		○	○	○
	〃	86	7.6	6.0	1.2		○	○	○
	〃	87	7.7	6.0	1.2		○	○	○
	〃	88	7.7	6.2	1.0		○	○	○
	〃	89	7.7	6.5	0.9		○	○	○
	〃	90	7.7	5.6	1.3		○	○	○
	〃	91	7.7	5.7	1.6		○	○	○
	〃	92	7.8	5.8	1.0		○	○	○
	〃	93	7.8	6.0	1.4		○	○	○
	〃	94	8.0	6.0	1.0		○	○	○
	〃	95	8.0	6.3	1.1		○	○	○
	〃	96	8.0	6.6	1.3		○	○	○
	〃	97	8.1	6.5	1.0		○	○	○
	〃	98	8.4	6.2	1.3		○	○	○
	〃	99	8.1	5.6	1.4		○	○	○

器　種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧底の有無
土師器　皿b	〃	68	6.4	4.8	1.5		○	○	○
	〃	69	6.5	4.0	1.7		○	○	○
	〃	70	6.6	4.4	1.5		○	○	
	〃	71	6.6	4.4	1.6		○	○	○
	〃	72	6.8	4.6	1.5		○	○	○
	〃	73	6.9	5.0	1.5		○	○	○
	〃	74	6.9	4.2	1.7		○	○	○
皿c	〃	100	8.1	6.0	2.4		○	○	○
	〃	101	8.0	5.6	1.8		○	○	○
杯a	〃	102	9.7	7.6	2.8		○	○	○
	〃	103	10.0	6.0	2.3		○	○	○
	〃	104	11.5	8.0	3.2		○	○	○
	〃	105	11.6	6.7	2.6		○	○	○
	〃	106	11.9	7.0	3.1		○	○	○
	〃	107	12.0	7.4	3.1		○	○	○
	〃	108	12.1	9.2	2.7		○	○	○
	〃	109	12.1	7.9	2.8		○	○	○
	〃	110	12.1	7.0	2.9		○	○	○
	〃	111	12.2	8.2	2.9		○	○	○
	〃	112	12.2	7.8	2.7		○	○	○
	〃	113	12.2	7.1	2.8		○	○	○
	〃	114	12.2	7.8	3.0		○	○	○
	〃	115	12.2	9.0	3.1		○	○	○
	〃	116	12.2	9.4	2.8		○	○	○
	〃	117	12.3	7.0	3.0		○	○	○
	〃	118	12.2	7.4	2.9		○	○	○
	〃	119	12.3	8.5	3.0		○	○	○
	〃	120	12.3	9.6	3.1		○	○	○
	〃	121	12.3	7.8	2.8		○	○	○
	〃	122	12.3	8.0	2.9		○	○	○
			12.4	7.4	2.9		○	○	○
	〃	123	12.4	8.0	2.8		○	○	○
	〃	124	12.4	8.2	2.9		○	○	○
	19	125	12.4	7.5	3.0		○	○	
	〃	126	12.4	7.3	3.2		○	○	○
	〃	127	12.4	8.0	2.5		○	○	○
	〃	128	12.4	7.4	3.2		○	○	○
	〃	129	12.6	6.8	3.1		○	○	○
	〃	130	12.6	7.6	3.2		○	○	○
	〃	131	12.6	8.5	2.8		○	○	○
	〃	132	12.6	8.0	3.3		○	○	○
	〃	133	12.7	7.9	3.0		○	○	○
	〃	134	12.8	8.0	2.8		○	○	○
	〃	135	12.8	7.2	3.0		○	○	○
	〃	136	12.9	8.0	3.1		○	○	○
	〃	137	13.0	8.2	2.8		○	○	○
	〃	138	13.0	7.6	3.4		○	○	○

器　種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
土師器　杯a	〃	139	13.2	9.0	2.7		○	○	○
	〃	140	(13.8)	(7.7)	2.7		○	○	
	〃	141	(14.8)	(8.7)	4.2		○	○	○
	〃	142	15.7	10.8	3.5		○	○	○
	〃	143	16.4	10.4	3.8		○	○	○
	〃	144	(16.2)	(12.2)	3.5		○	○	○
蓋	〃	145	12.2		1.8				
SD3840　下層									
土師器　皿a	20	151	7.0	5.0	1.5		○	○	○
	〃	152	7.0	4.6	1.6		○	○	○
	〃	153	7.1	4.9	1.6		○	○	○
	〃	154	7.5	5.1	1.1		○	○	○
	〃	155	7.5	5.0	1.6		○	○	○
	〃	156	7.6	5.2	1.2		○	○	○
	〃	157	8.1	5.8	1.0		○	○	○
杯a	〃	158	11.6	7.8	2.8		○	○	○
	〃	159	11.5	7.3	2.7		○	○	○
	〃	160	11.8	8.0	2.6		○	○	○
	〃	161	(11.9)	(8.2)	2.9		○	○	
	〃	162	(12.0)	(7.3)	(2.9)		○	○	○
	〃	163	12.0	6.6	3.0		○	○	
	〃	164	12.0	7.8	3.2		○	○	○
	〃	165	12.0	7.6	3.2		○	○	○
	〃	166	12.1	7.7	2.9		○	○	○
	〃	167	12.2	7.0	3.0		○	○	○
	〃	168	12.2	8.0	3.1		○	○	○
	〃	169	12.2	7.7	3.1		○	○	○
	〃	170	12.2	8.4	2.9		○	○	
	〃	171	12.2	7.4	3.5		○	○	○
	〃	172	12.2	7.8	2.7		○	○	○
	〃	173	12.3	7.7	2.8		○	○	○
	〃	174	12.4	7.9	2.8		○	○	
	〃	175	12.5	8.6	3.0		○	○	○
	〃	176	12.5	7.6	3.0		○	○	○
	〃	177	12.6	7.5	3.0		○	○	○
	〃	178	12.6	8.2	3.0		○	○	○
	〃	179	12.8	7.8	3.3		○	○	○
	〃	180	13.0	7.5	3.2		○	○	○
SD3840　最下層									
土師器　杯a	〃	182	11.8	7.6	2.8		○	○	○
	〃	183	12.0	7.6	2.6		○	○	
	〃	184	12.2	7.6	2.7		○	○	○
	〃	185	12.2	8.2	2.7		○	○	○
			12.4	7.8	3.0		○	○	○
			12.4	7.9	3.0		○	○	

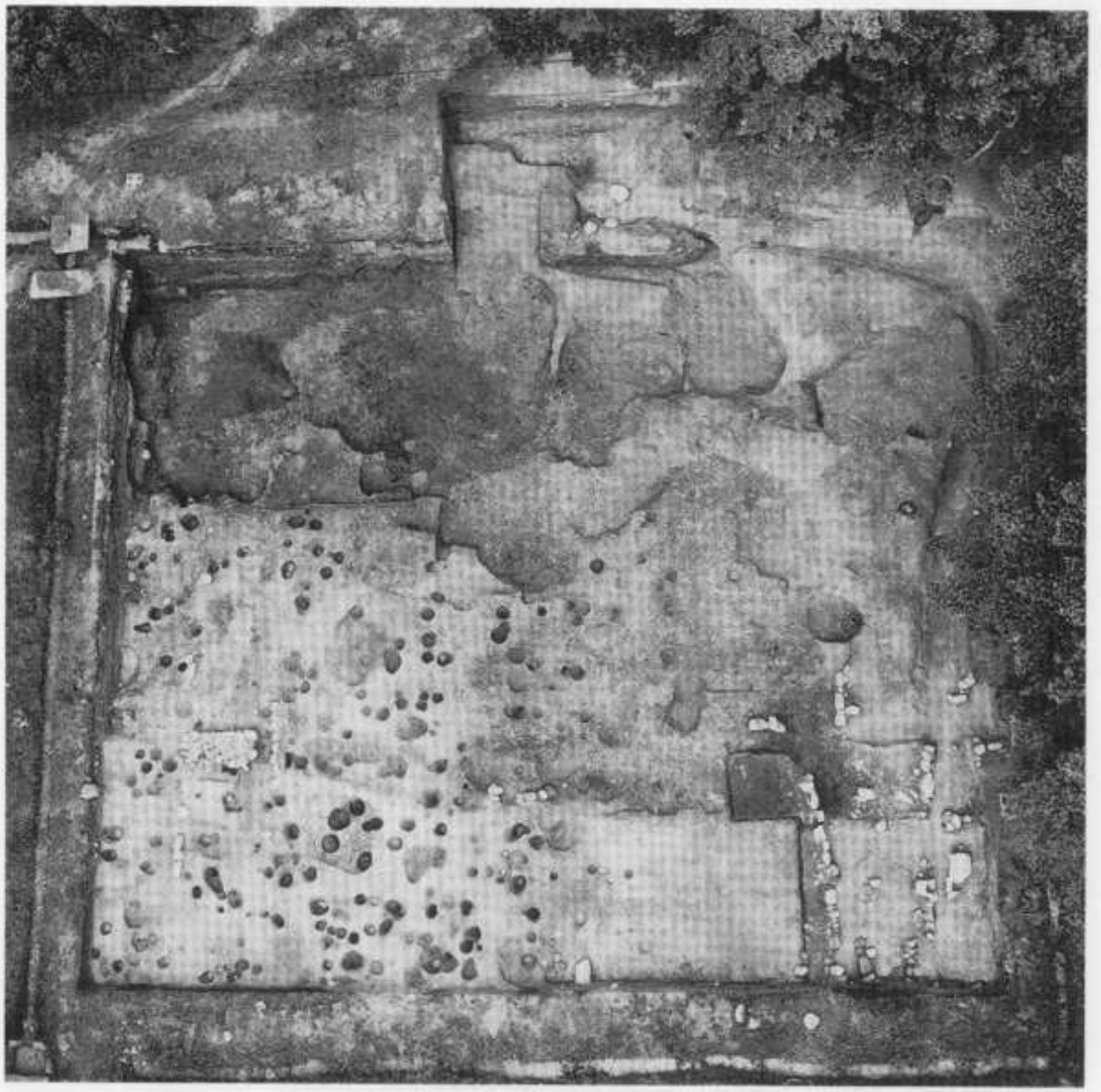
器　種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
土師器　杯a			12.4	8.0	3.2		○	○	○
	〃	186	12.4	8.2	2.7		○	○	○
	〃	188	12.4	8.5	3.1		○	○	○
	〃	189	12.6	8.5	2.9		○	○	○
高台付皿	〃	190	(12.0)	(8.1)		○			
SD3842									
土師器　皿b	22	1	(7.0)	5.0	1.6		○	○	
	〃	2	8.2	5.5	2.1		○	○	
杯a	〃	3	12.6	7.8	3.0		○	○	○
	〃	4	13.7	8.9	2.9		○	○	○
SD3844									
土師器　皿a	〃	15	(8.4)	(6.5)	1.5		○	○	
	〃	16	(8.8)	(7.2)	1.4		○	○	
皿b	〃	13	(6.8)	(4.7)	1.7		○	○	○
	〃	14	(7.3)	(4.0)	2.1		○	○	○
杯a	〃	17	11.8	8.0	2.7		○	○	○
	〃	18	12.2	7.3	2.8		○	○	○
	〃	19	12.3	8.0	2.9		○	○	○
	〃	20	12.4	7.2	2.9		○	○	○
	〃	21	12.6	8.5	3.2		○	○	
	〃	22	12.9	8.0	3.2		○	○	○
SD3846									
土師器　皿a	23	1	7.7	5.9	0.8		○	○	○
SD3860									
土師器　皿a	〃	4	7.1	5.0	1.4		○	○	○
	〃	5	(7.4)	(5.1)	1.1		○	○	
	〃	6	7.9	5.9	1.9		○	○	
杯a	〃	7	11.6	7.4	2.6		○	○	○
SK3863									
土師器　皿b	26	1	6.6	4.6	1.8		○	○	
杯a	〃	2	12.1	7.8	3.0		○	○	○
	〃	3	12.5	8.0	3.0		○	○	○
SX3841									
須恵器　蓋	27	1	12.7		4.4				
	〃	2	13.2		4.9				
杯	〃	3	(13.2)						
黄褐色土層									
須恵器　杯	〃	6	(13.2)	(7.6)	4.2				
	〃	7	(15.4)	(9.8)	3.7				

器　種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
暗茶色土層									
土師器　皿a	31	4	7.5	5.6	1.1		○	○	○
	〃	5	7.8	6.0	1.0		○	○	○
	〃	6	8.0	5.3	1.2		○	○	○
	〃	7	8.6	6.6	1.3		○	○	○
皿b	〃	1	6.6	4.5	1.4		○	○	○
	〃	2	7.2	4.8	1.6		○	○	○
	〃	3	7.5	5.2	1.4		○	○	○
皿d	〃	8	9.4	5.7	2.2		○	○	○
杯a	〃	9	12.0	7.5	2.6		○	○	
	〃	10	12.0	7.5	2.6		○	○	○
	〃	11	12.2	7.8	3.0		○	○	○
	〃	12	12.3	7.8	2.9		○	○	○
	〃	13	12.7	7.8	3.1		○	○	○
	〃	14	16.2	10.8	3.2		○	○	○
瓦質土器　椀	〃	16	16.5	7.5	6.8				
黒褐色土層									
土師器　皿a	〃	24	7.9	5.5	1.2		○	○	○
皿b	〃	23	7.2	4.5	2.3		○	○	○
茶褐色土上層									
土師器　皿a	32	1	6.2	4.4	1.0		○		
	〃	2	6.6	4.7	1.0		○		
	〃	3	9.8	5.4	1.5		○		
	〃	4	9.8	5.2	1.6		○		
杯b	〃	5	10.6	3.6	2.5		○		
	〃	6	10.9	3.8	2.4		○		
	〃	7	12.3	6.8	2.4		○	○	○
築地跡									
須恵器　蓋	59	1	(13.0)						
杯	〃	2	(14.2)						
回廊跡									
土師器　杯a	〃	3	(14.2)		3.5				
塔跡									
土師器　蓋	〃	12	(18.7)						
皿	〃	5	11.0		2.2	○			
杯	〃	6	(11.4)		3.7	○			
	〃	7	(12.0)	(6.7)	3.5				
暗褐色土層（第137次調査）									
須恵器　蓋	73	1	(10.6)		1.6				

器　種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
須恵器　皿	〃	5	(22.4)		(2.2)				
土師器　皿	〃	4	18.8		2.7				
SD3962(第138次調査)									
須恵器　杯	78	1	18.7	9.5	7.3	○			
土師器　杯	〃	2	(14.6)	(8.8)	2.8	○			
椀	〃	3	(17.0)	8.4	6.3				
SE3960									
須恵器　蓋	79	1	(13.6)		(1.5)				
土師器　蓋	〃	3	(18.2)		1.8				
杯	〃	4	(13.4)		3.0				
	〃	5	14.0	7.6	3.2				
	〃	6	18.0		3.8				
	〃	7	(18.6)		3.5				
SE3970									
須恵器　杯	80	2	12.5	6.7	4.2				
盤	〃	4	(24.2)	(18.0)	3.8				
土師器　杯	81	9	(12.0)		3.7	○			
	〃	10	(12.5)	7.4	3.8	○			
	〃	11	12.8	9.6	3.5	○			
	〃	12	12.8	7.6	3.2	○		○	○
	〃	13	12.8	7.7	3.3	○		○	○
	〃	14	(13.0)	7.0	3.0	○			
	〃	15	(13.0)	8.2	3.7				○
	〃	16	13.6	7.0	4.1	○			
皿a	〃	17	13.0		2.3	○		○	○
	〃	18	(13.8)			○		○	
	〃	19	(14.0)		1.7	○		○	○
	〃	20	14.6		2.2	○		○	
高台付皿	〃	21	13.6	8.2	3.2	○			
椀	〃	24	(14.6)	(8.6)	6.3	○		○	
黒色土器A　椀	〃	27	14.4	7.9	6.0				
SE3965									
土師器　皿c	83	3	(12.0)	7.2	2.3				
SX3969									
須恵器　杯	〃	6	(13.9)	9.0	4.5	○			
土師器　杯	〃	7	13.6	(6.9)	3.6			○	
	〃	8	(13.8)	(9.4)	3.1			○	○
SX3972									
須恵器　杯	〃	10	(14.2)	(8.0)	(5.0)	○		○	○

器　種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
SX3973									
土師器　杯	〃	12	(12.4)	7.6	3.1	○		○	
皿	〃	14	15.4	10.7	1.7	○		○	
茶褐色土層									
須恵器　杯	84	2	(12.6)	(7.8)	4.5			○	
皿	〃	3	(16.2)			○		○	○
土師器　杯	〃	7	10.8		(2.5)	○			
	〃	8	13.1			○		○	
	〃	9	(13.8)	(7.0)	2.8				
	〃	10	(14.2)	(9.0)	(5.0)				
皿	〃	11	(14.4)			○		○	
	〃	12	(16.3)			○		○	
SK3976（第139次調査）									
土師器　杯	88	2	(15.6)	(7.4)	(3.4)				
SB3996（第142次調査）									
土師器　杯	97	1	(12.1)	(7.6)	2.9	○		○	○
SB4000									
須恵器　杯	〃	3	(19.2)	13.3	5.2				
SK4006									
土師器　高台付皿	〃	6	13.4	7.5	2.3	○		○	
椀	〃	7	13.4	7.0	4.6	○			
	〃	8	16.2	9.1	5.9	○		○	
赤褐色土下層（第144次調査）									
土師器　皿a	101	2	8.6	5.4	1.7		○	○	○
皿b	〃	1	7.8	5.0	2.0		○		
杯a	〃	4	13.2		2.5		○	○	
杯b	〃	3	(10.0)	3.8	2.1		○		
SX4028（第146次調査）									
須恵器　杯	105	2	(11.2)						
SX4029									
須恵器　皿	〃	3	(20.0)						
黒褐色土									
須恵器　蓋	〃	6	(13.5)						
	〃	7	(13.8)			○			
	〃	8	(14.0)						
	〃	9	(13.4)						
	〃	10	(17.0)						
	〃	11	(18.4)						

図　　版



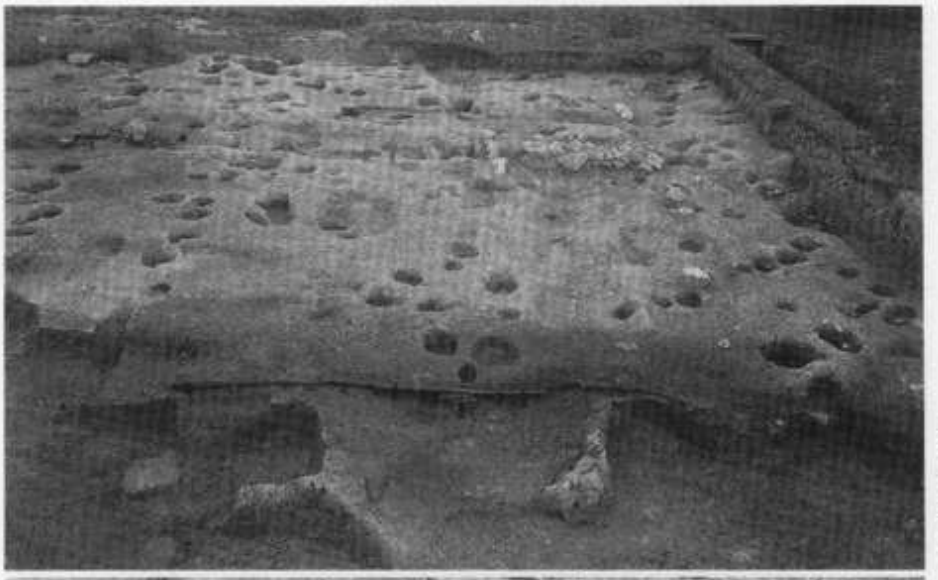
第130次調査区全景（空中写真）

第130次調査　南門東南地域全景（南から）

第130次調査　南門東南地域全景（東から）

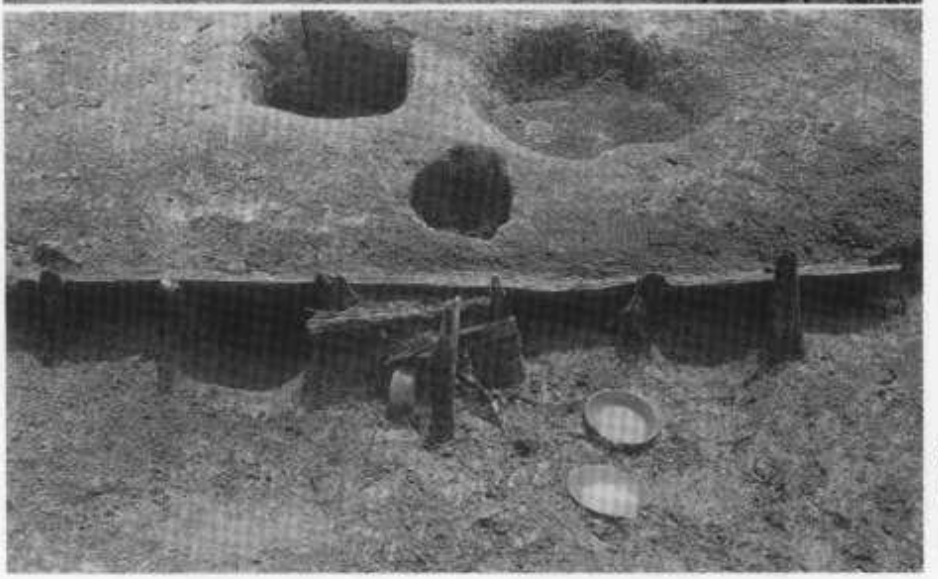
粘土採掘穴
SX3856（南から）

自然流路
SX3841（南から）



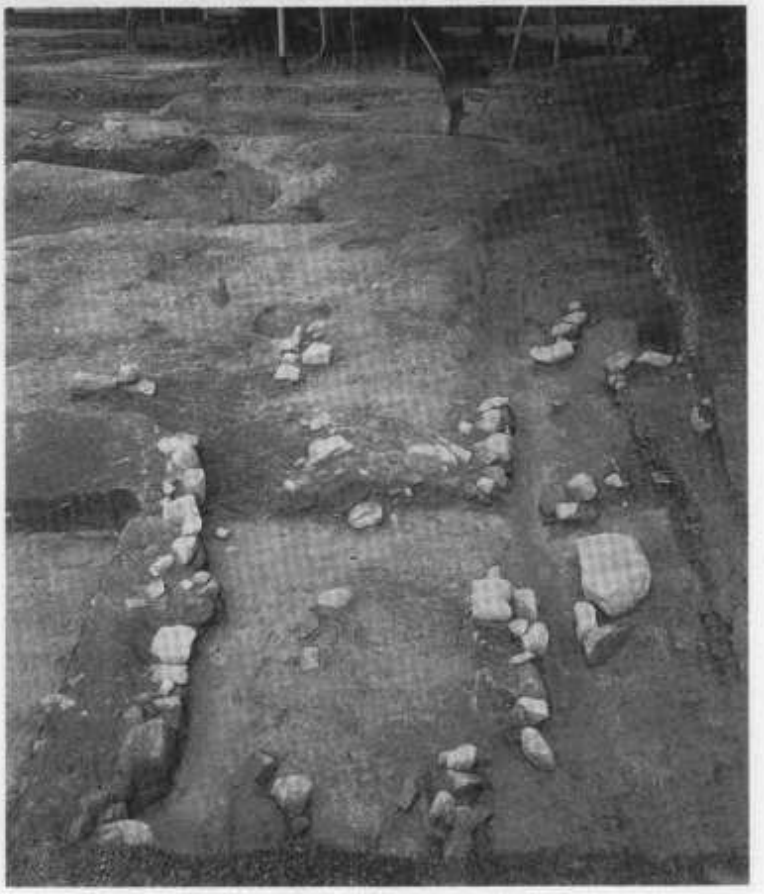
発掘区の南半部
溝SD3840と
護岸施設
（西から）

溝SD3840の
護岸施設
（南西から）



溝SD3840の
護岸施設の近景

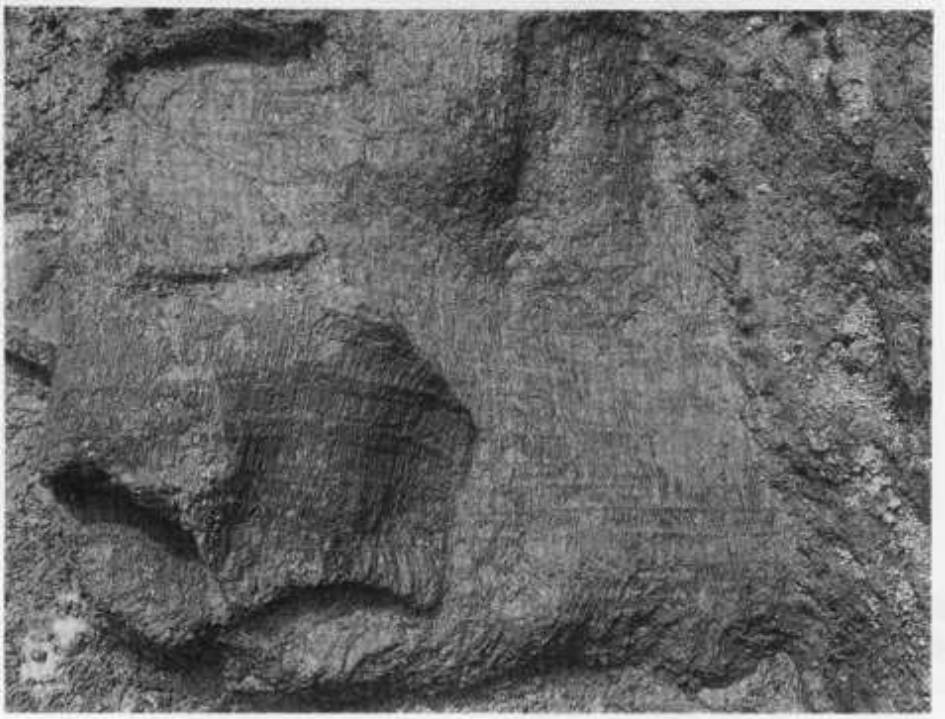
発掘区の東半部
及び溝SD3843・3844・3846・
3847とSD3842　（南から）



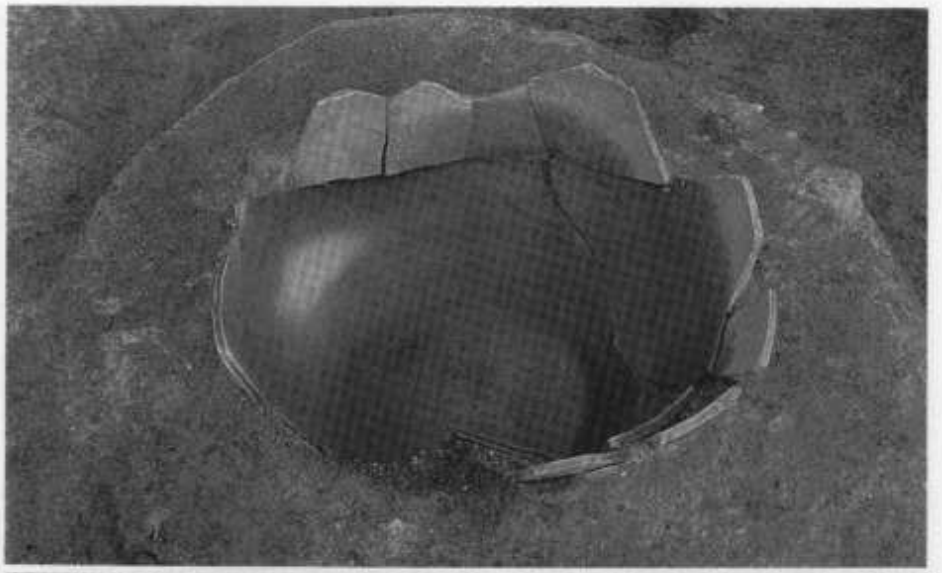
発掘区の北半部
及び溝SD3855とSD3860
（東から）

溝SD3840における
笊出土状況

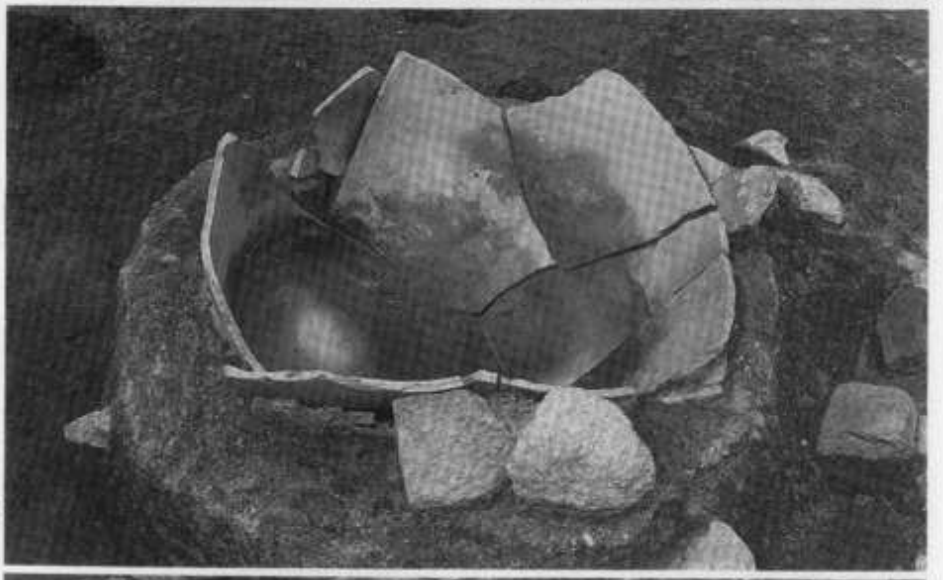
溝SD3840における
笊出土状況



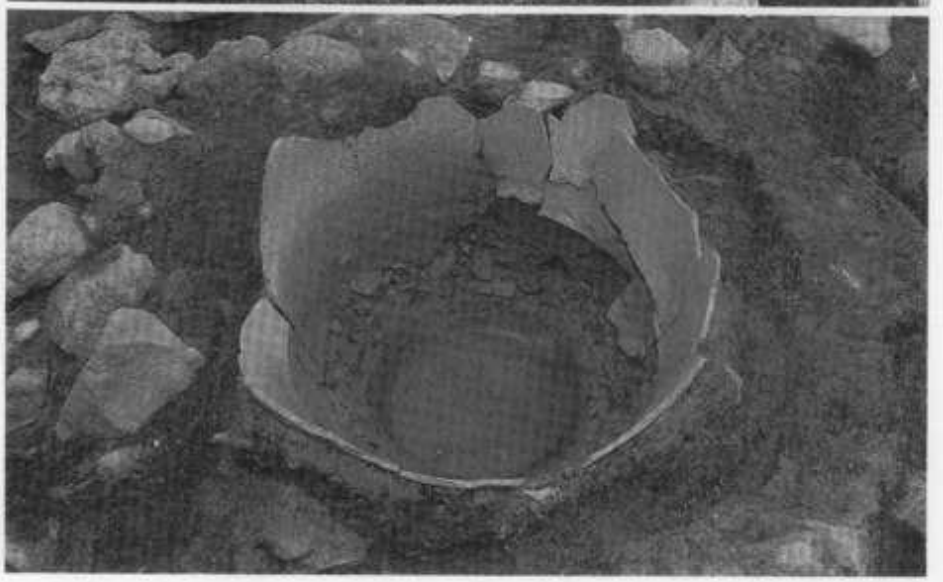
粘土採掘穴
SX3856における
蓆検出状況



埋甕遺構
SX3864



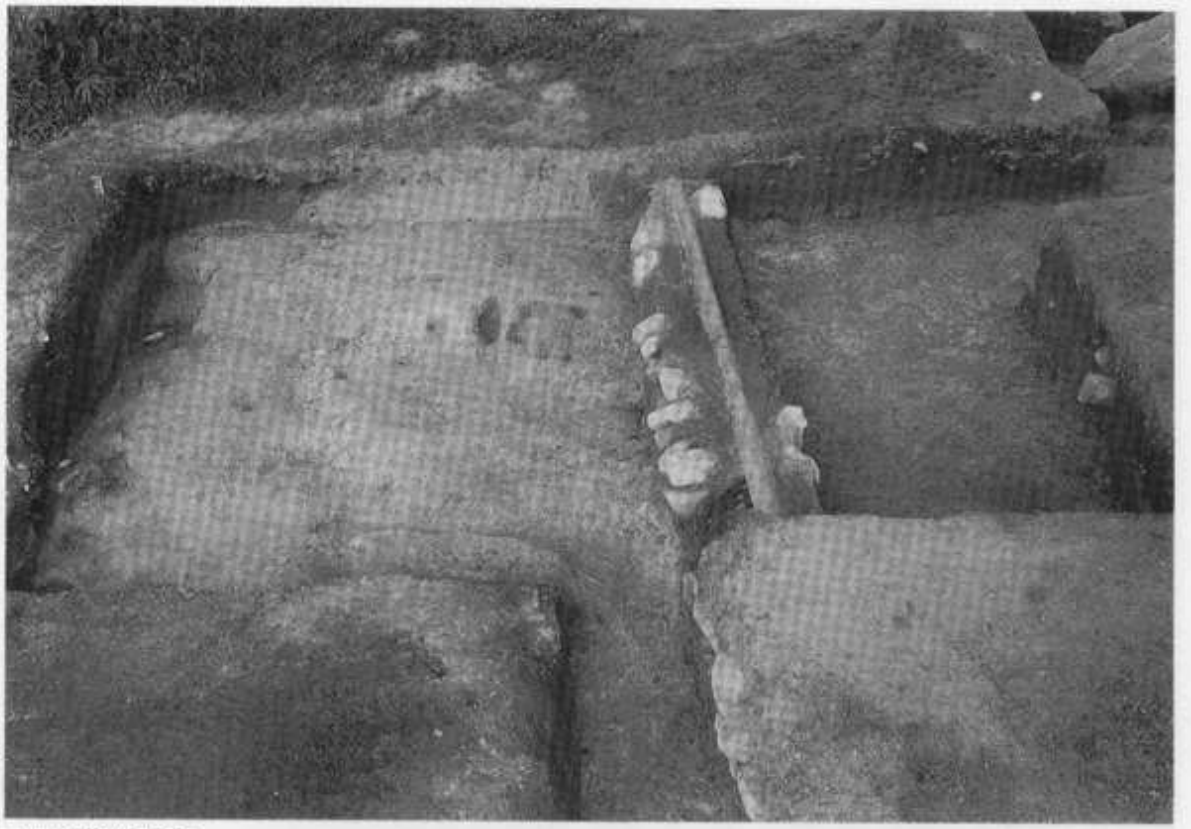
埋甕遺構
SX3868



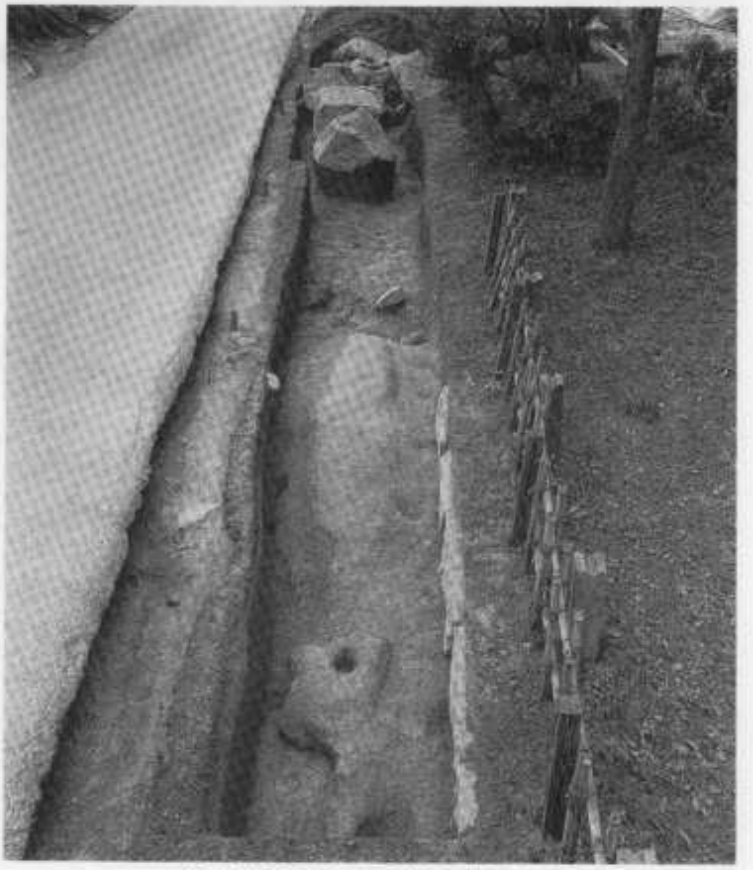
埋甕遺構
SX3872

第130次調査　南門跡全景（南から）

南門跡発掘区の西半部（南東から）



南門跡発掘区の
西半部（南から）



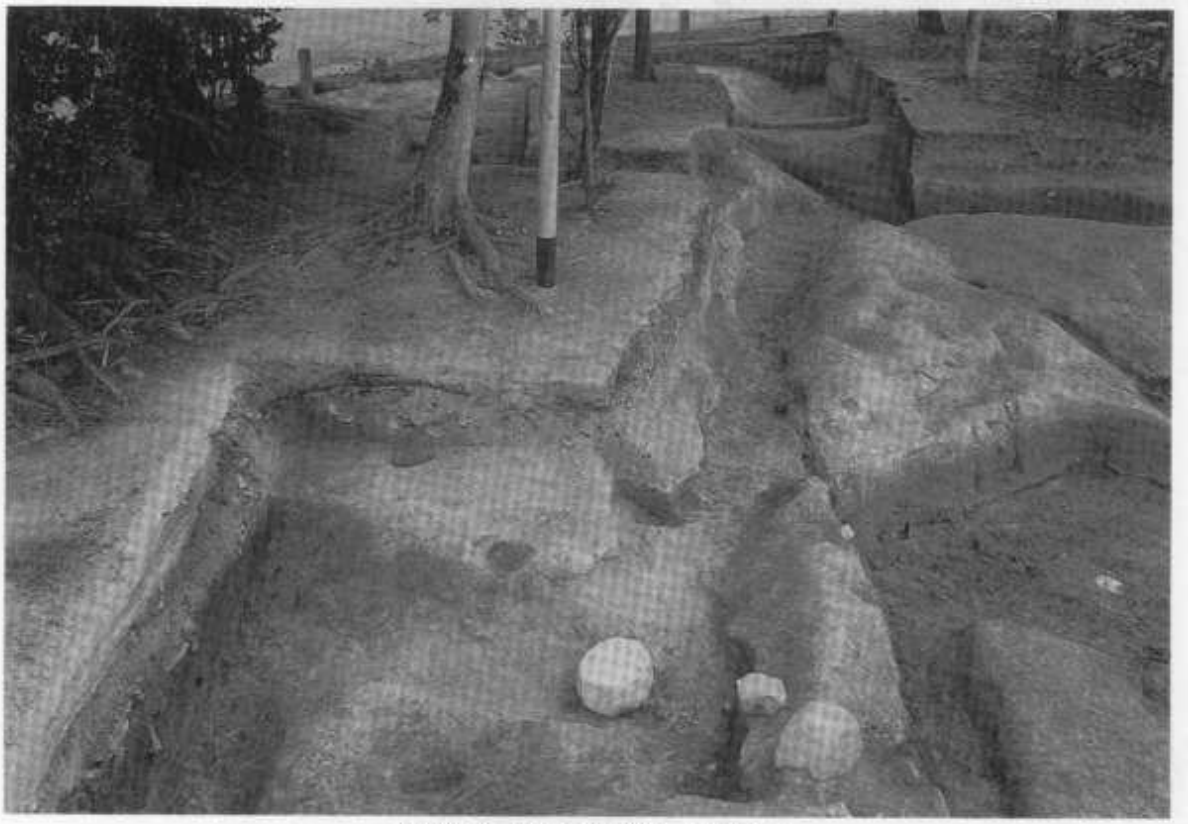
南門跡発掘区の西半部（北から）

南門跡発掘区西半部
検出の礎石群

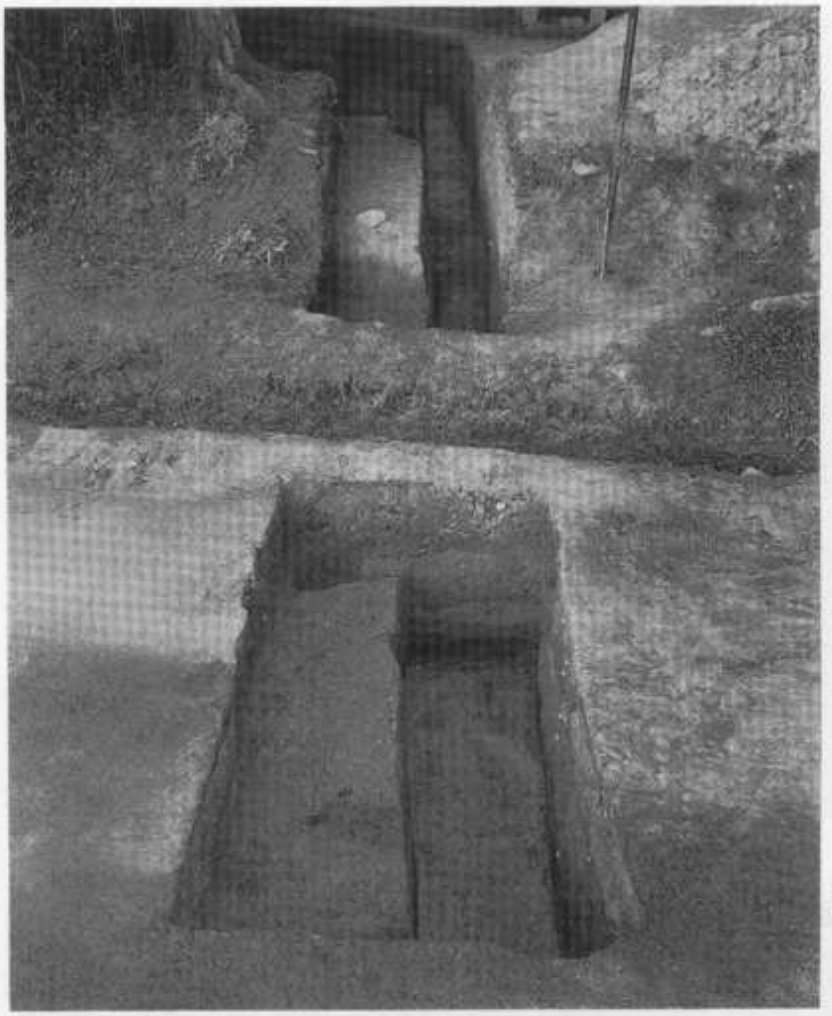
南門跡発掘区西半部
検出の礎石群

南門跡発掘区東半部
検出の礎石群

南門跡発掘区の東半部（北から）



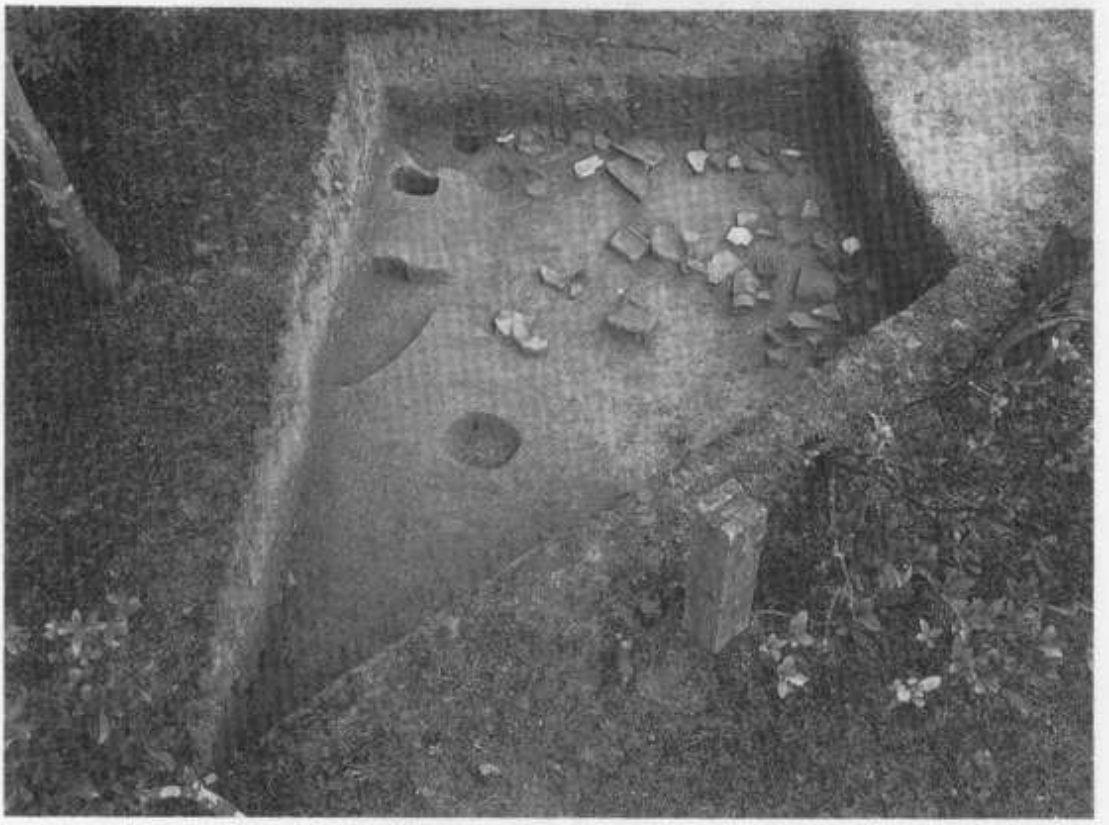
南門跡発掘区の東半部（南から）



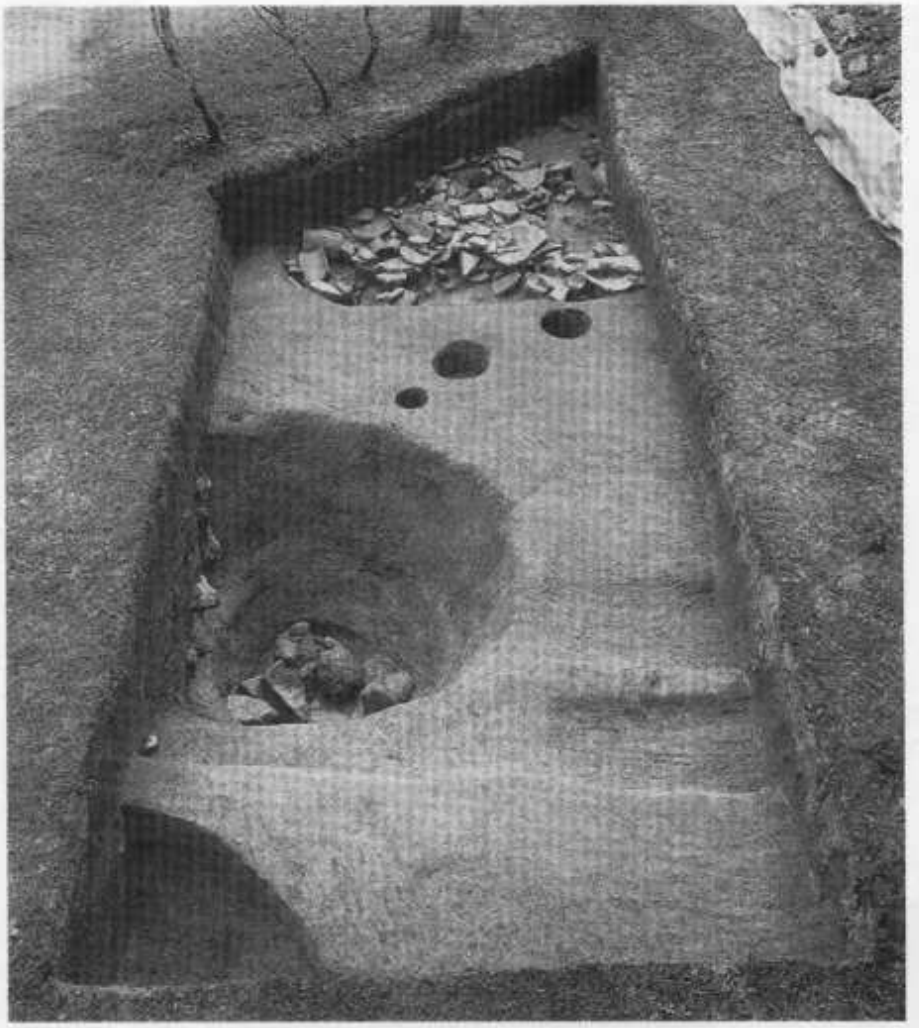
第130次調査
築地跡
発掘区全景（南から）

築地跡の
断面近景
（南西から）

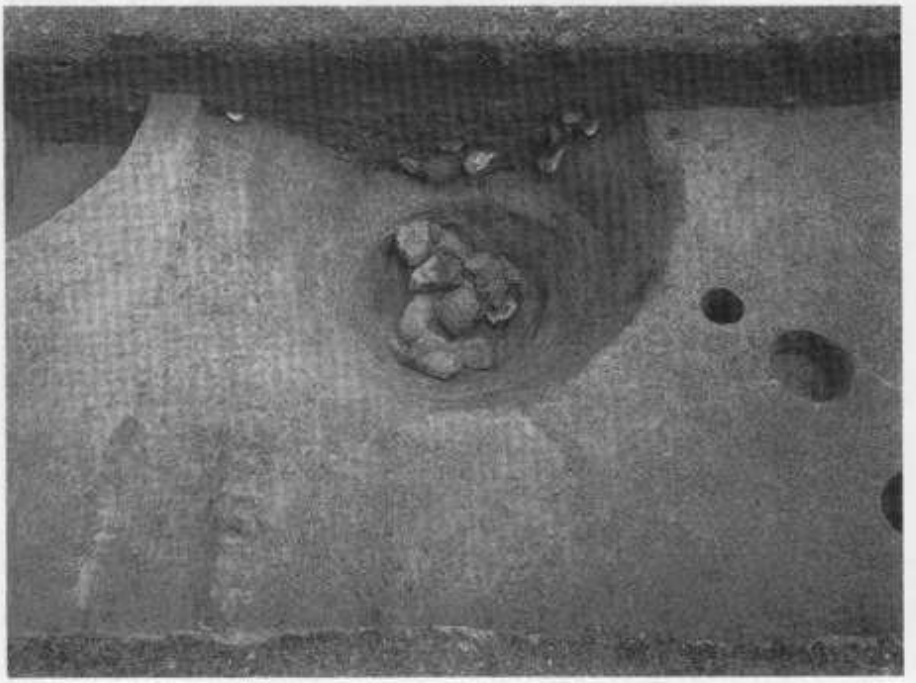
第130次調査
回廊跡Aトレンチ全景
（南から）



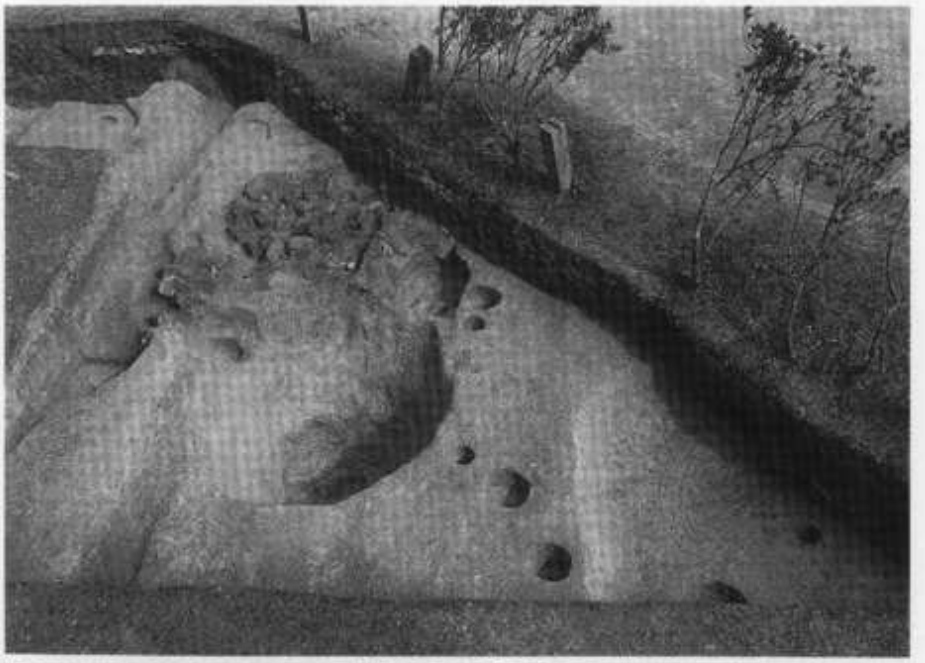
回廊跡Cトレンチ全景（南から）



回廊跡
Bトレンチ全景
土壙SK3887とSK3888
（北から）

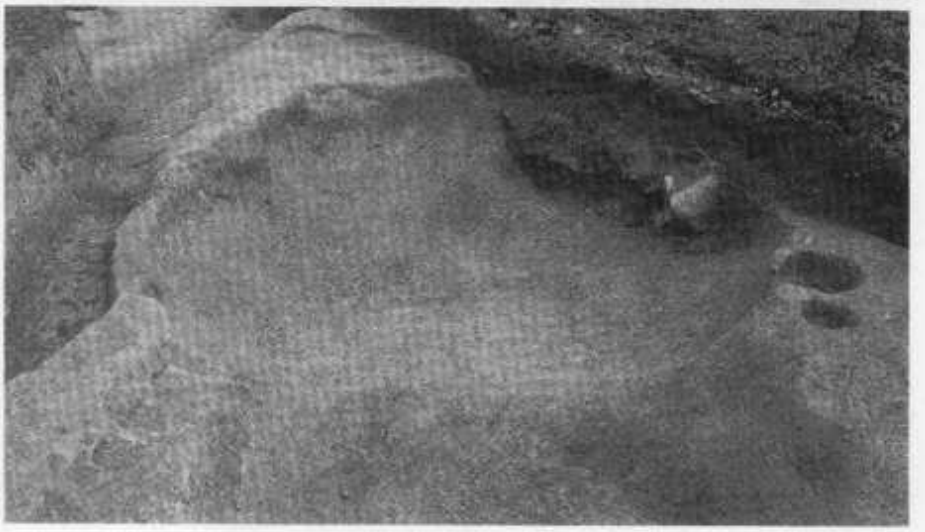


回廊跡
土壙SK3888
（西から）



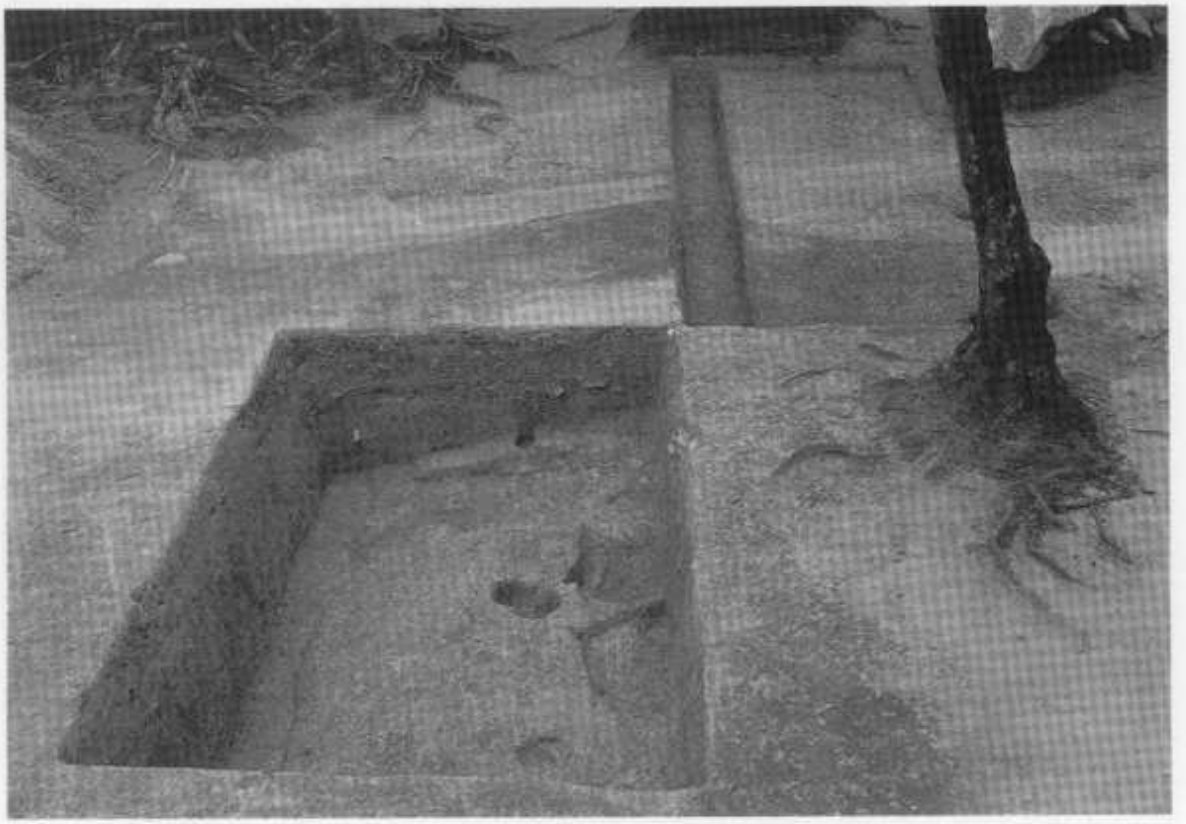
回廊跡
Bトレンチ拡張後
全景
土壙SK3888
（西から）

回廊跡
土壙SK3889
鋳型出土状況
（北から）



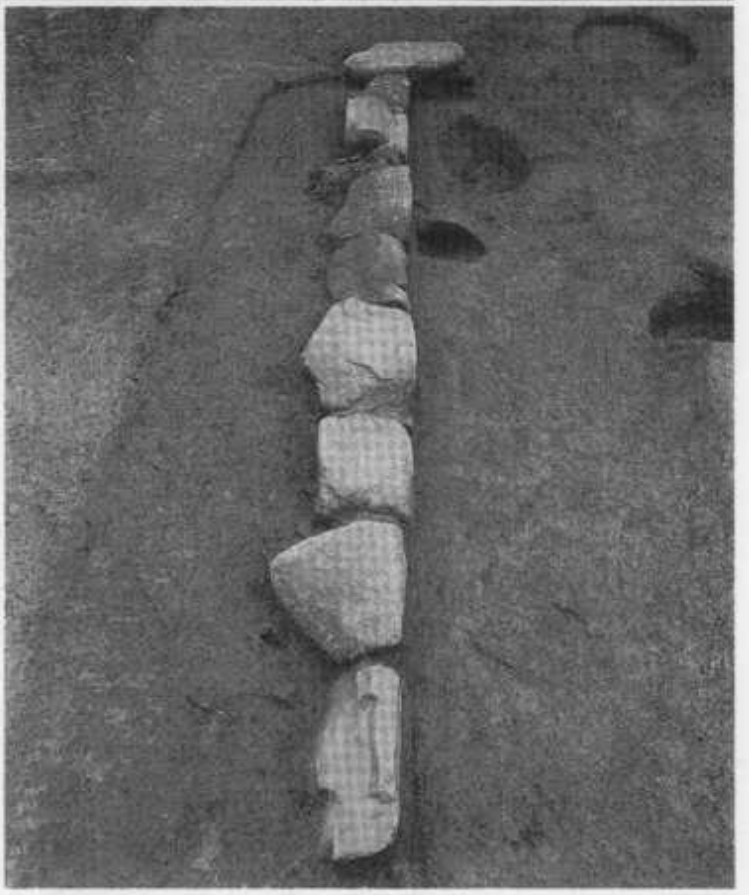
回廊跡
土壙SK3889
完掘後
（西から）

第130次調査　塔跡SB3850全景（北から）



塔跡Aトレンチ（北から）

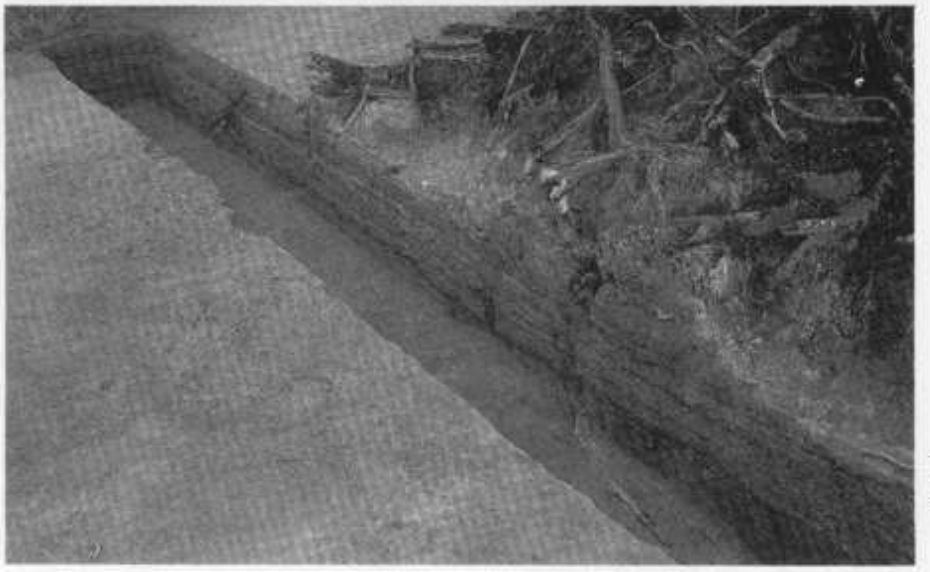
第130次調査
塔跡SB3850全景（西から）



塔跡SB3850基壇西側地覆石（北から）

塔跡SB3850全景
（南から）

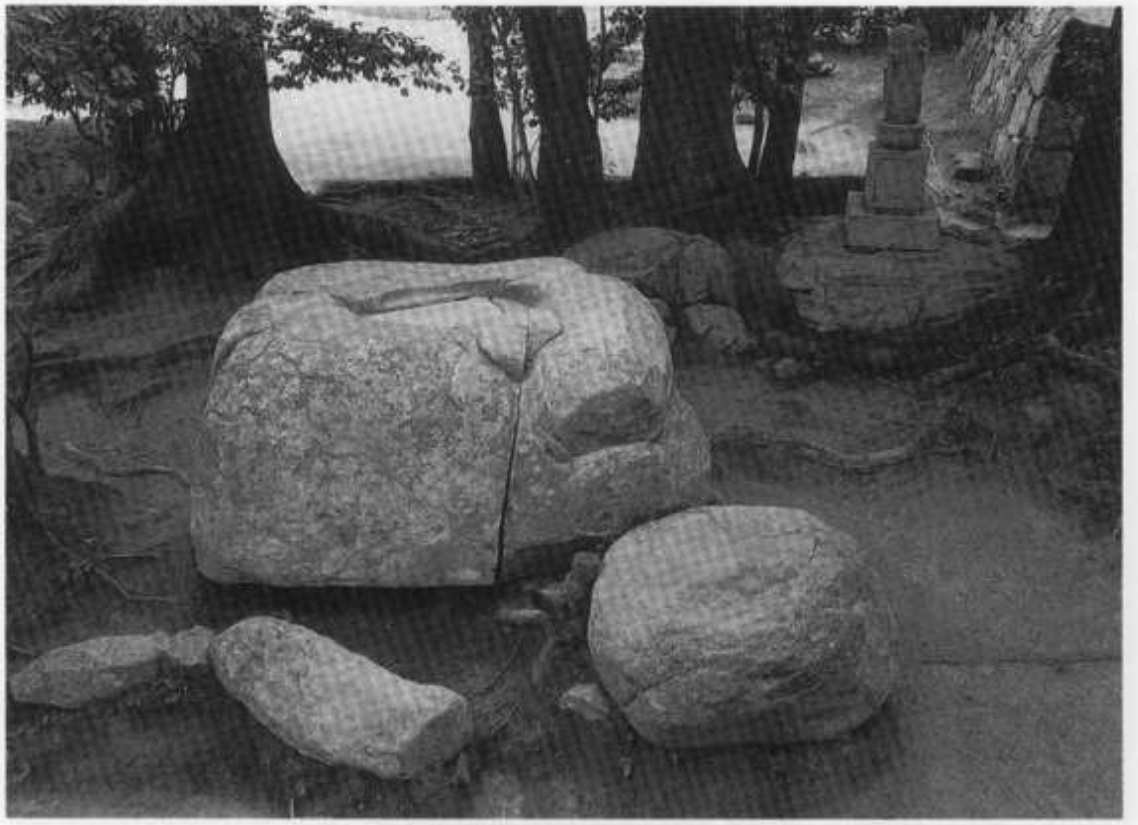
塔跡SB3850
基壇南側地覆石（南から）

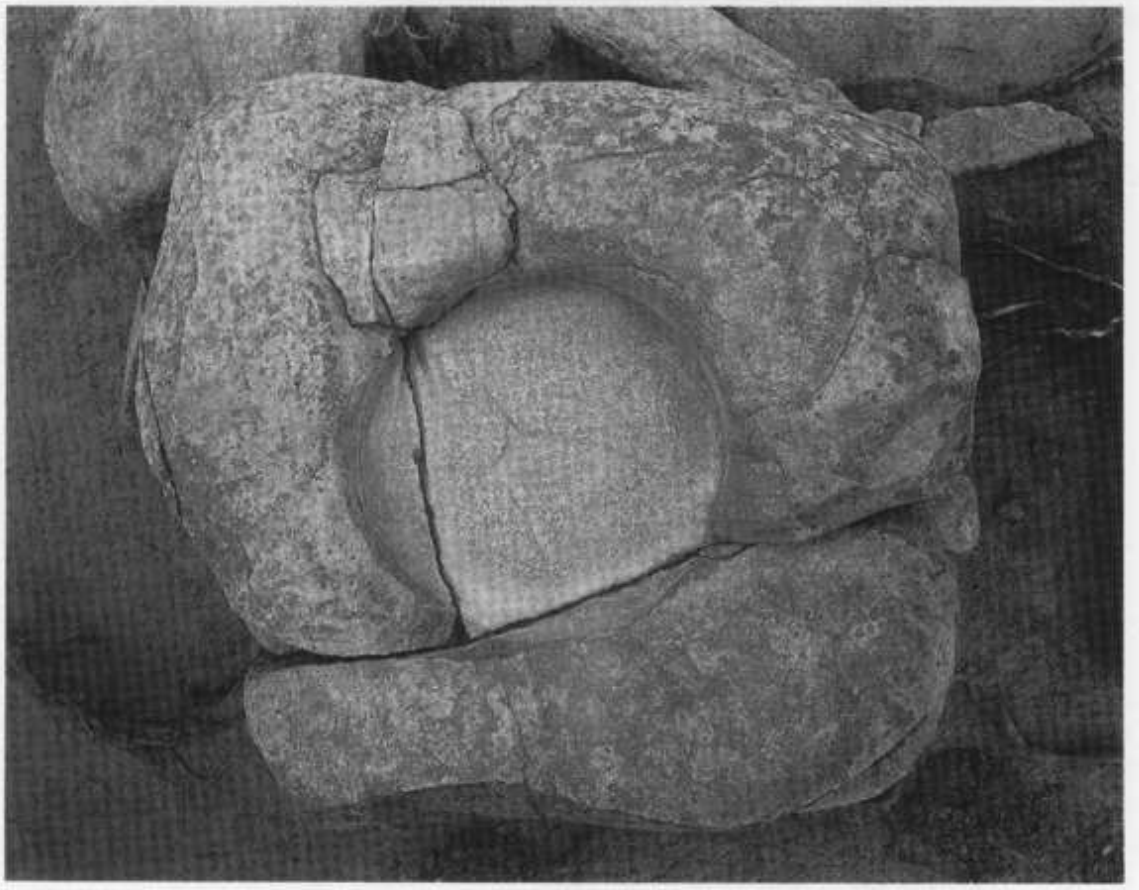


塔跡Cトレンチ
基壇積土近景
（南西から）

塔跡SB3850全景（東から）

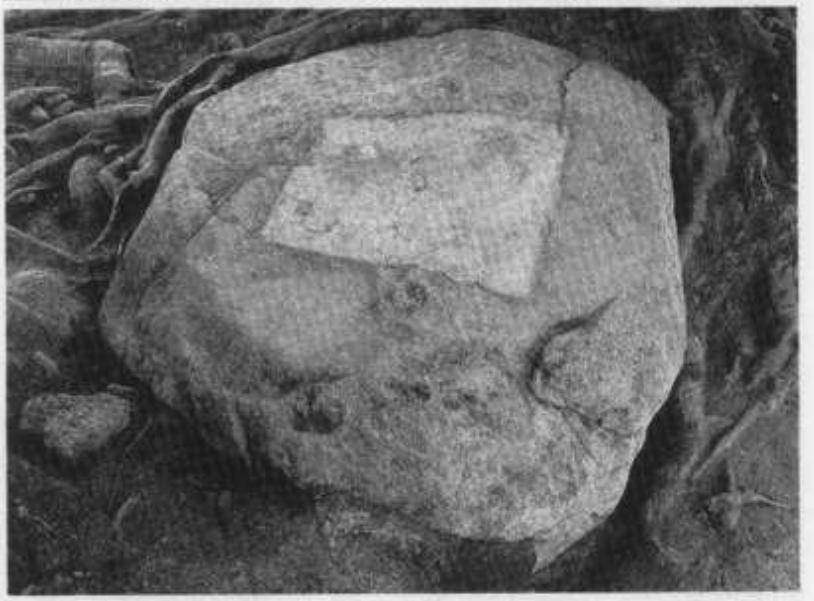
塔跡Dトレンチ全景（南から）





（上）　塔心礎・四天柱礎石（西から）（下）　塔心礎（上から）

塔跡
西側柱礎石
（南から）



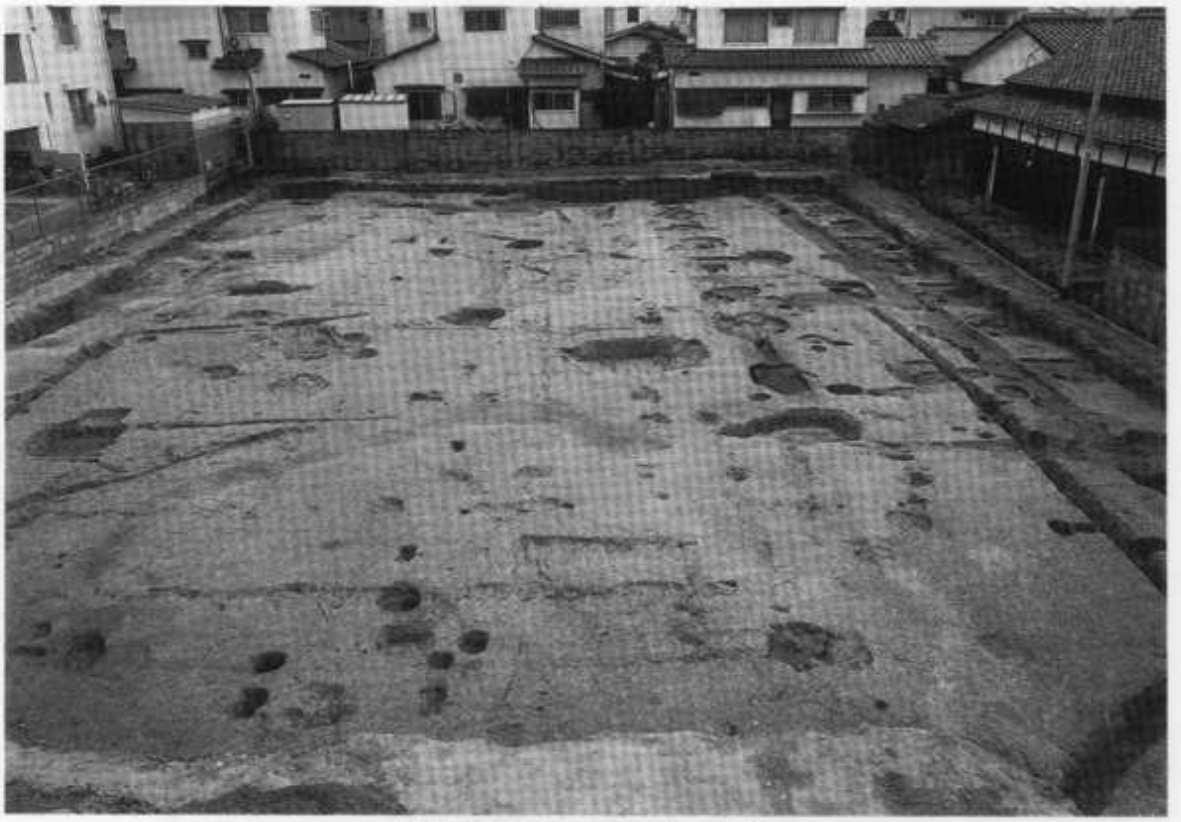
塔跡
東南隅柱礎石
（北から）

塔跡
周辺の礎石(6)

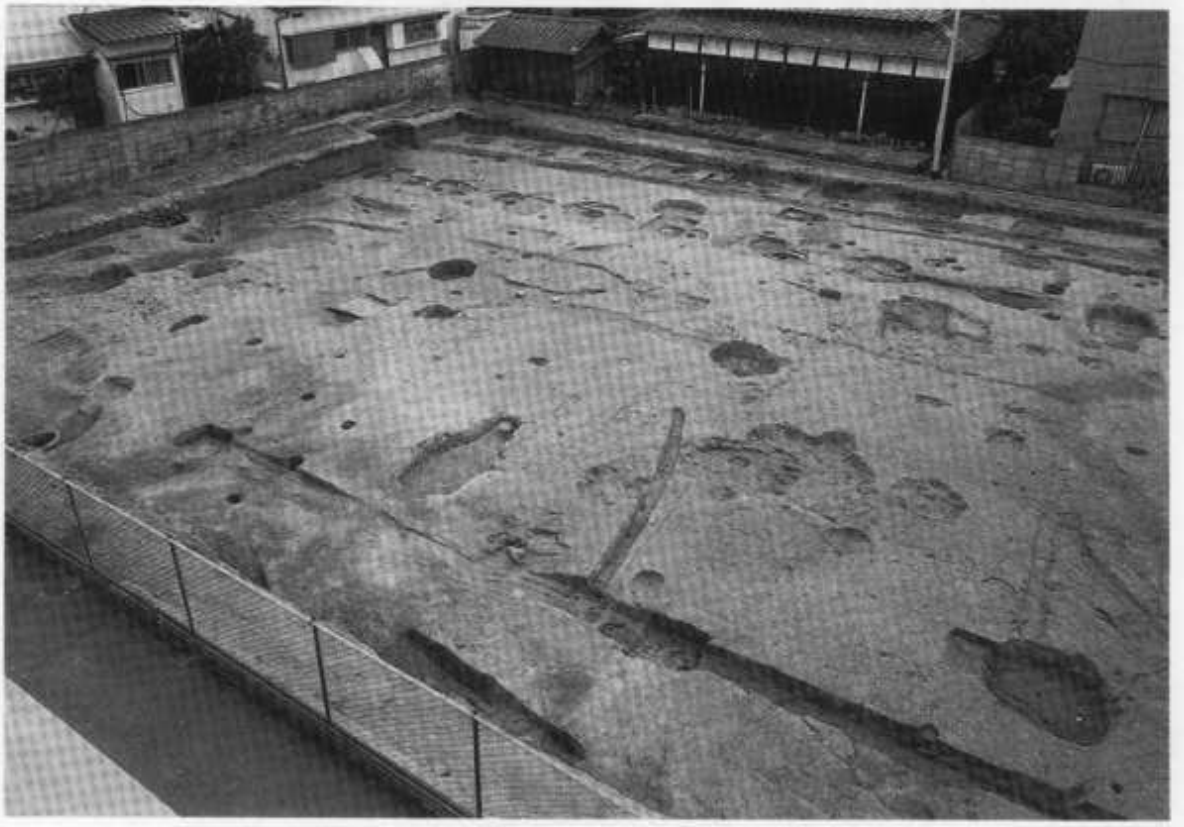
塔跡
周辺の礎石(3)

塔跡
周辺の礎石(4)

塔跡
周辺の礎石(5)

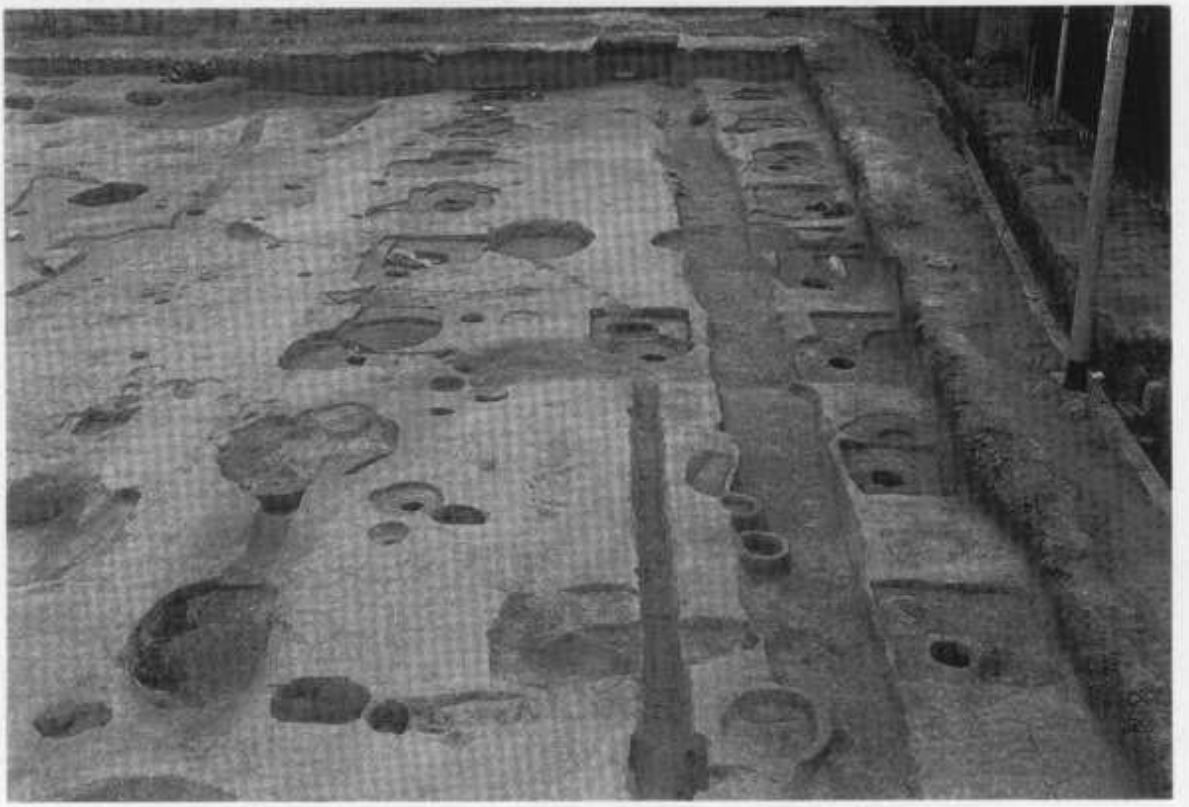


第137次調査区全景（北から）

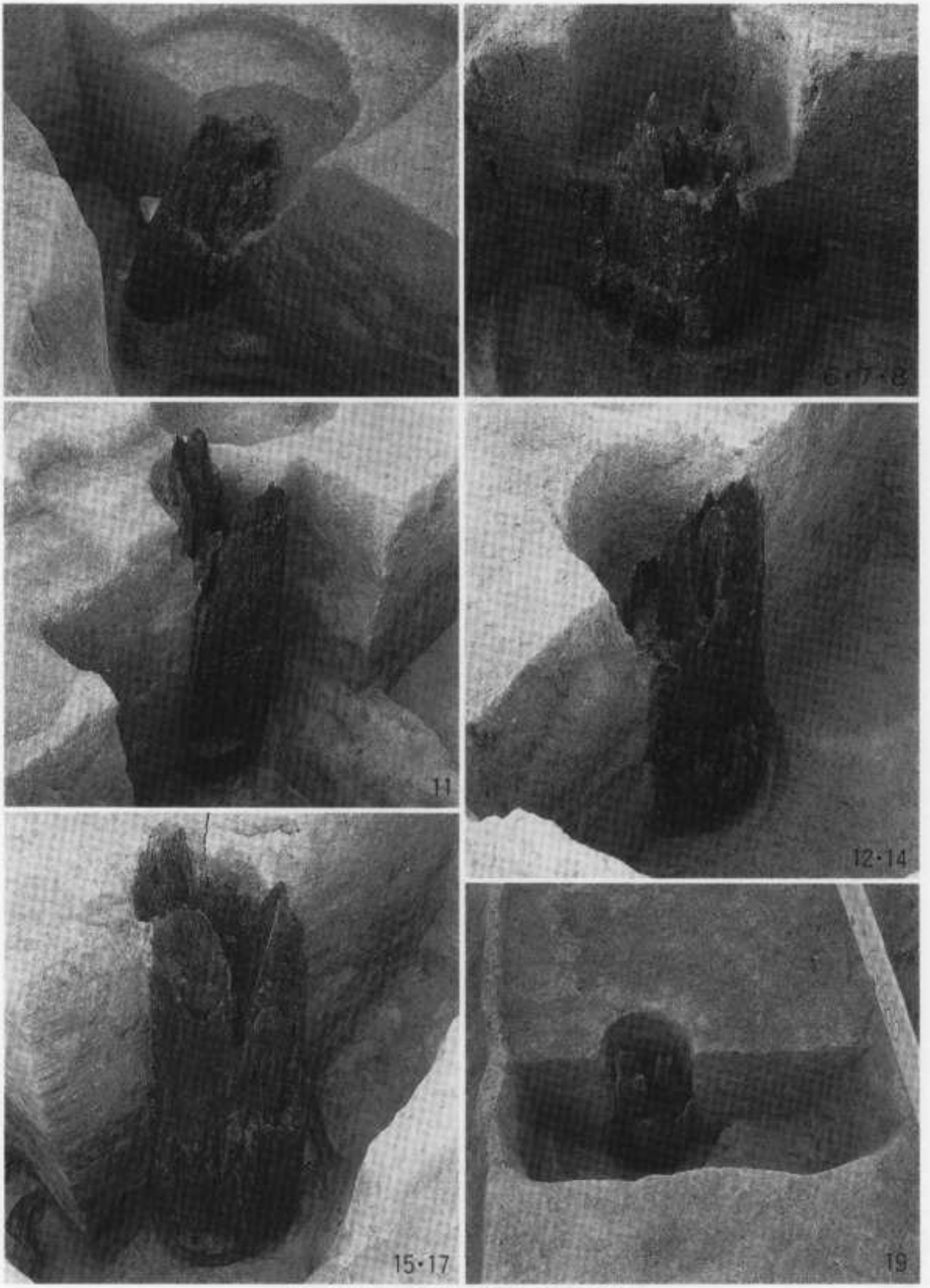


第137次調査区全景（北東から）

第137次調査区東半部
（北から）

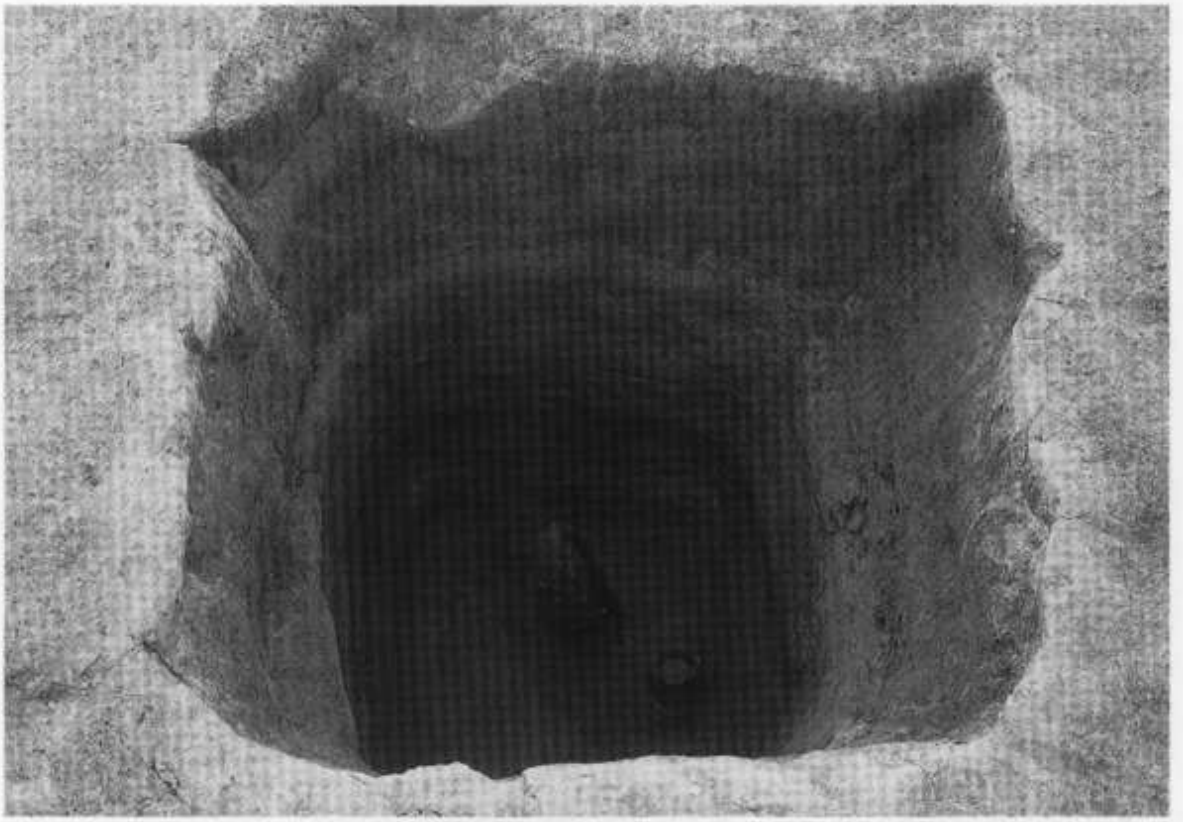


掘立柱建物SB3940・3945、溝SD3939、井戸SE3955（北から）

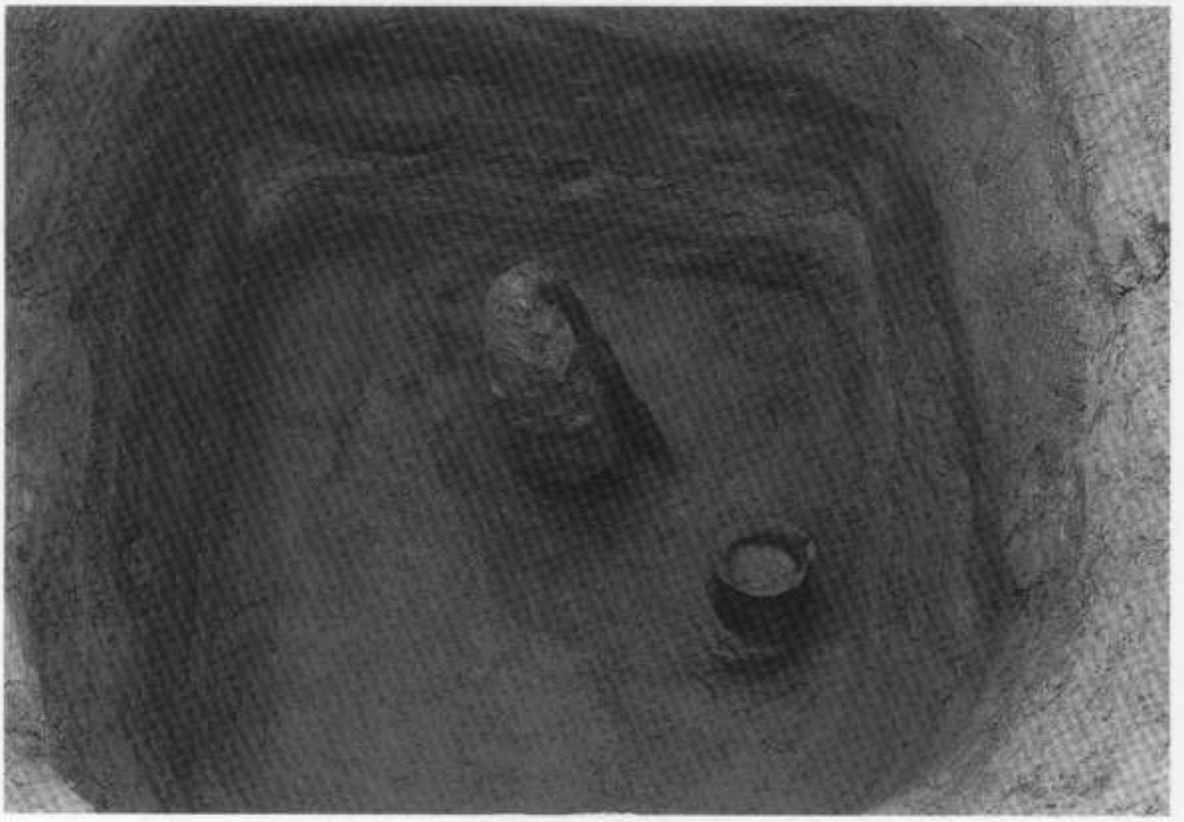


掘立柱建物SB3940・3945・3950柱掘形

掘立柱建物SB3940・3945・3950柱掘形



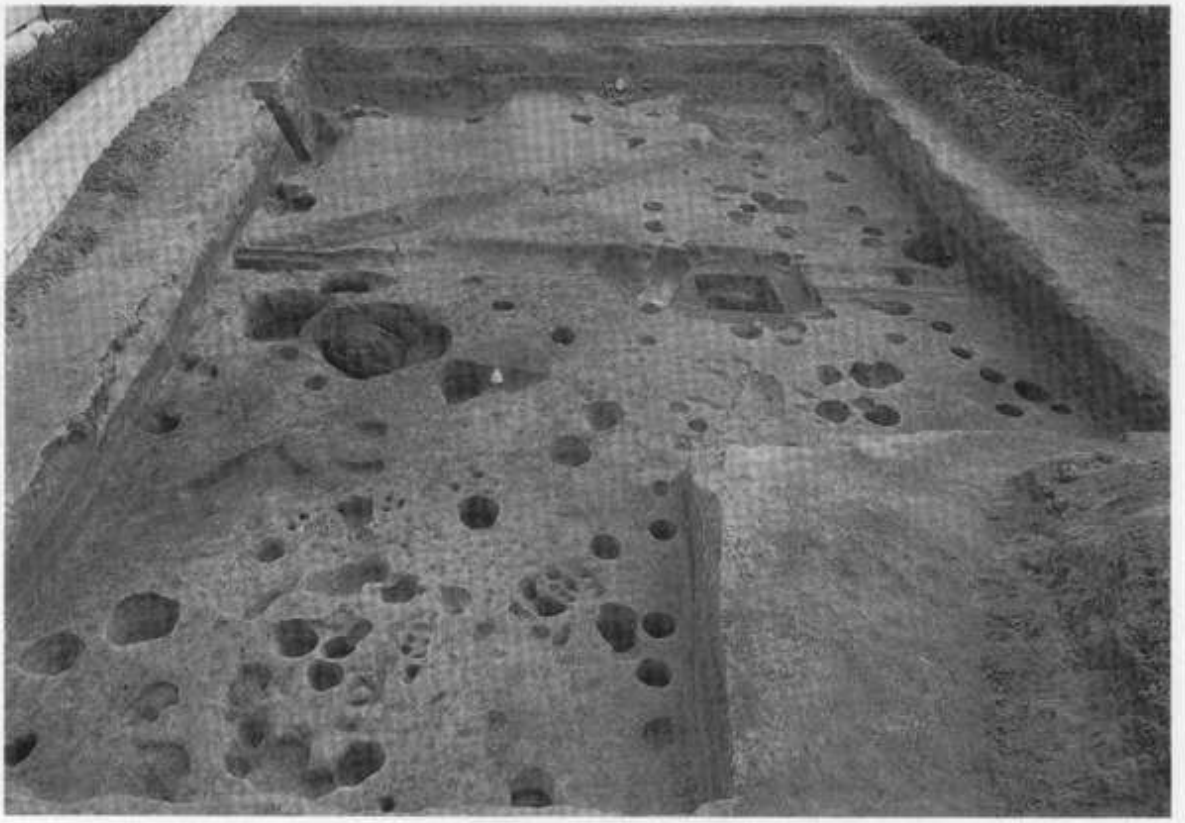
井戸SE3955（南から）



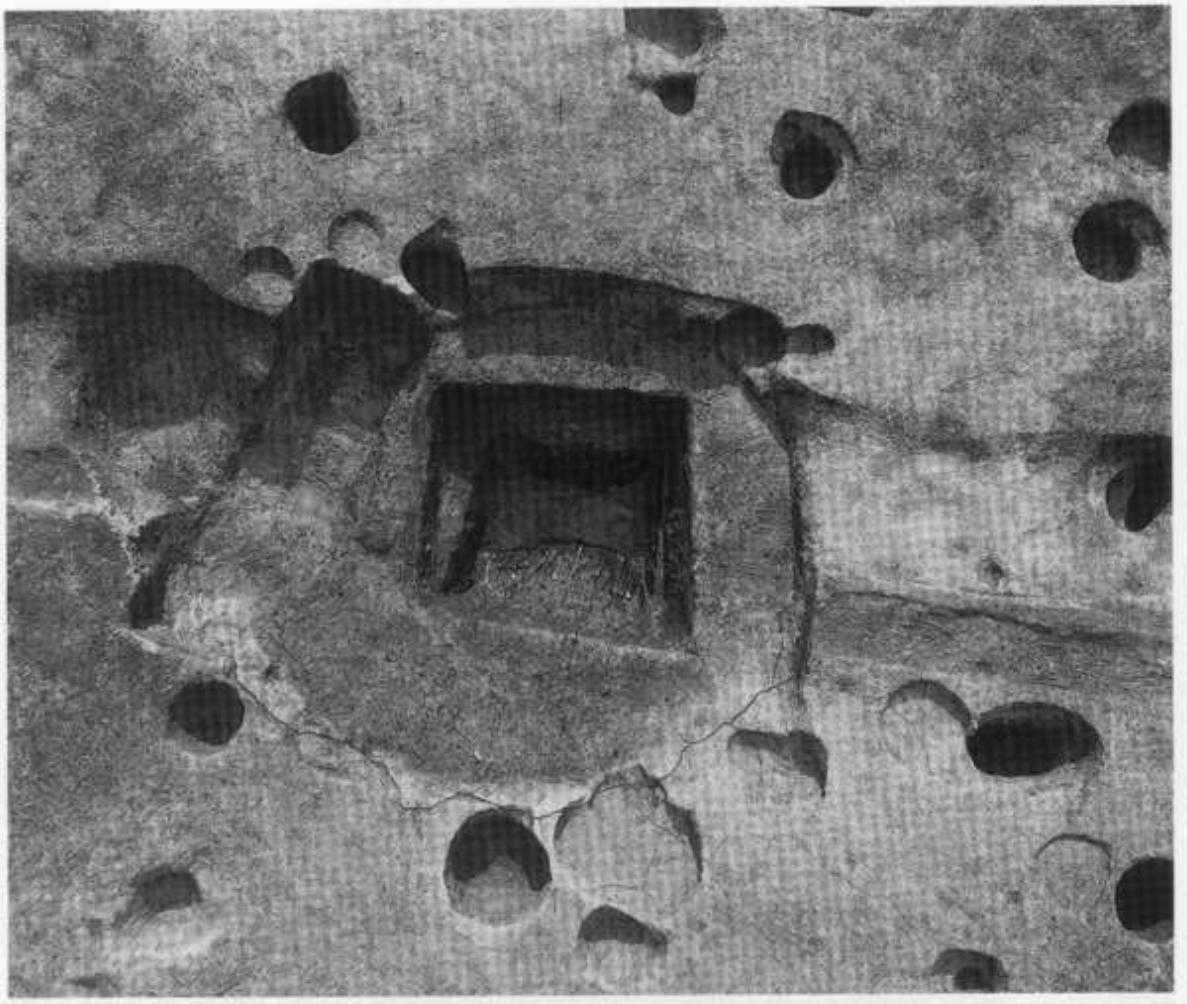
井戸SE3955近景（南から）

第138次調査区全景（空中写真）

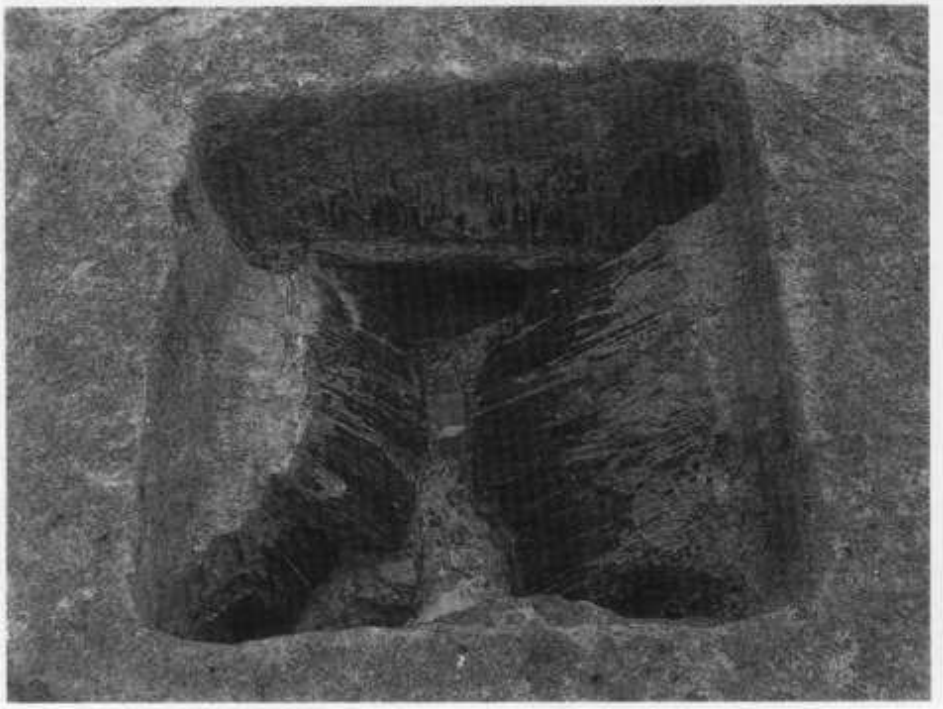
第138次調査区全景（西から）



第138次調査区全景（北から）

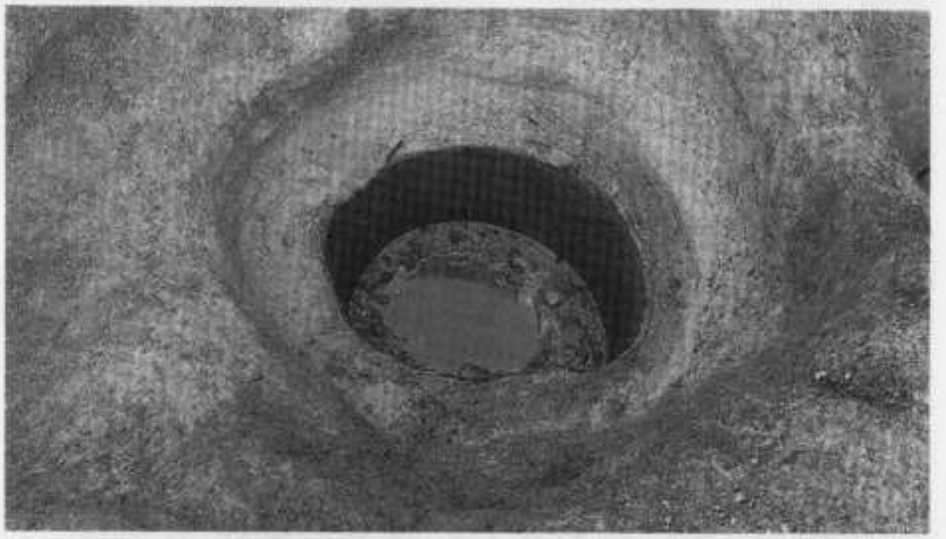


井戸SE3960
（北から）



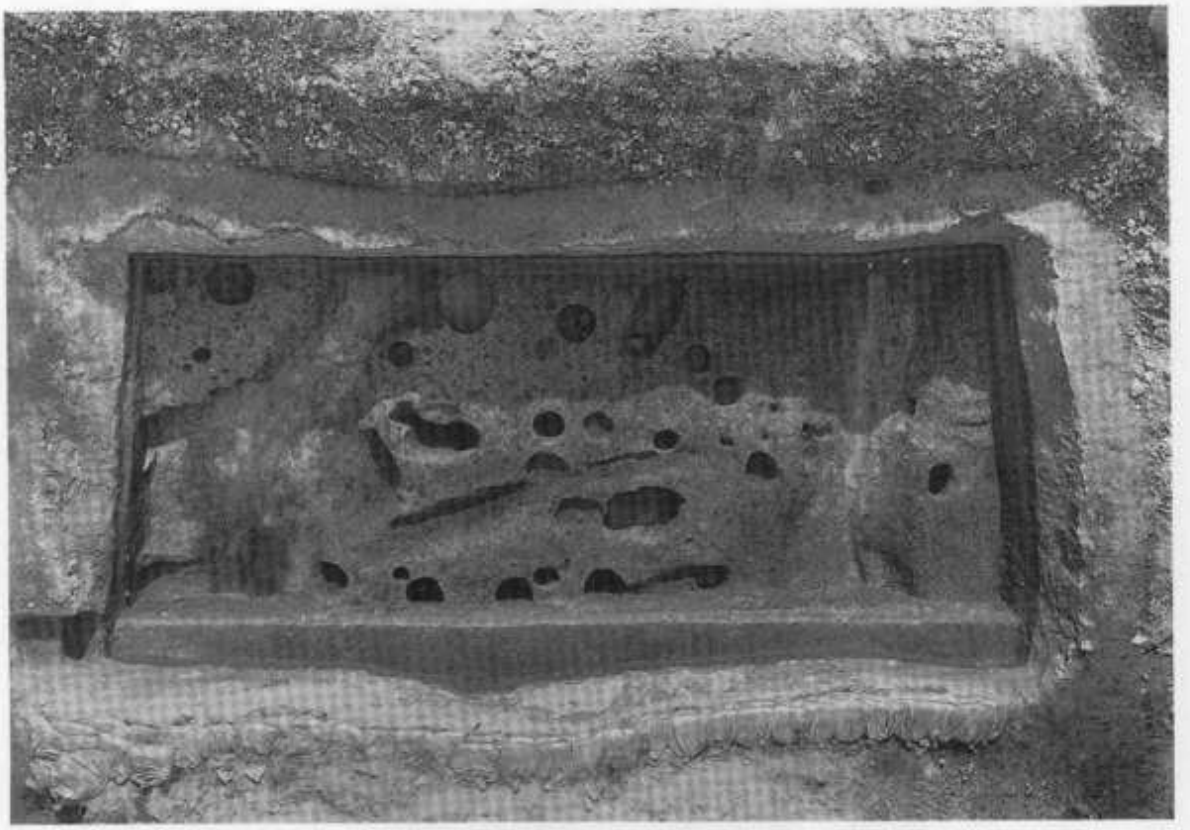
井戸SE3960近景
（西から）

井戸SE3960
（南から）



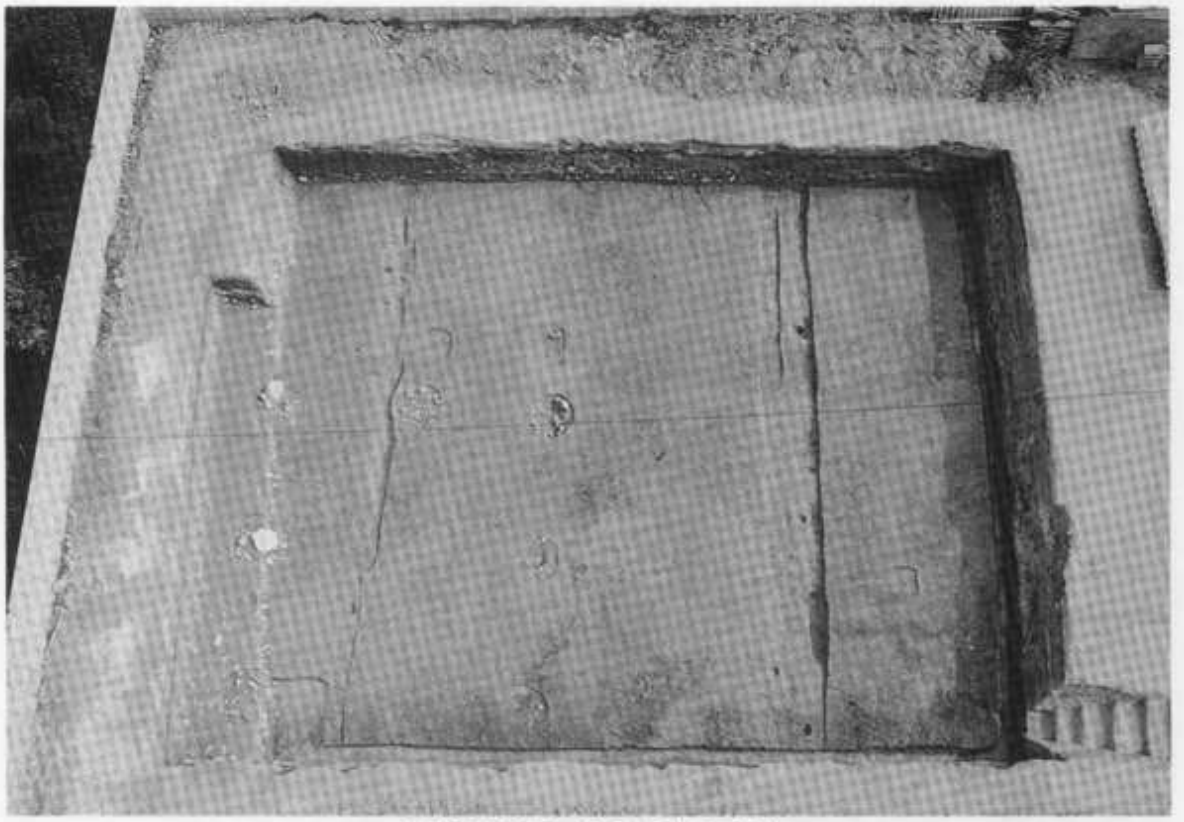
井戸SE3965
（南から）

井戸SE3975
（東から）

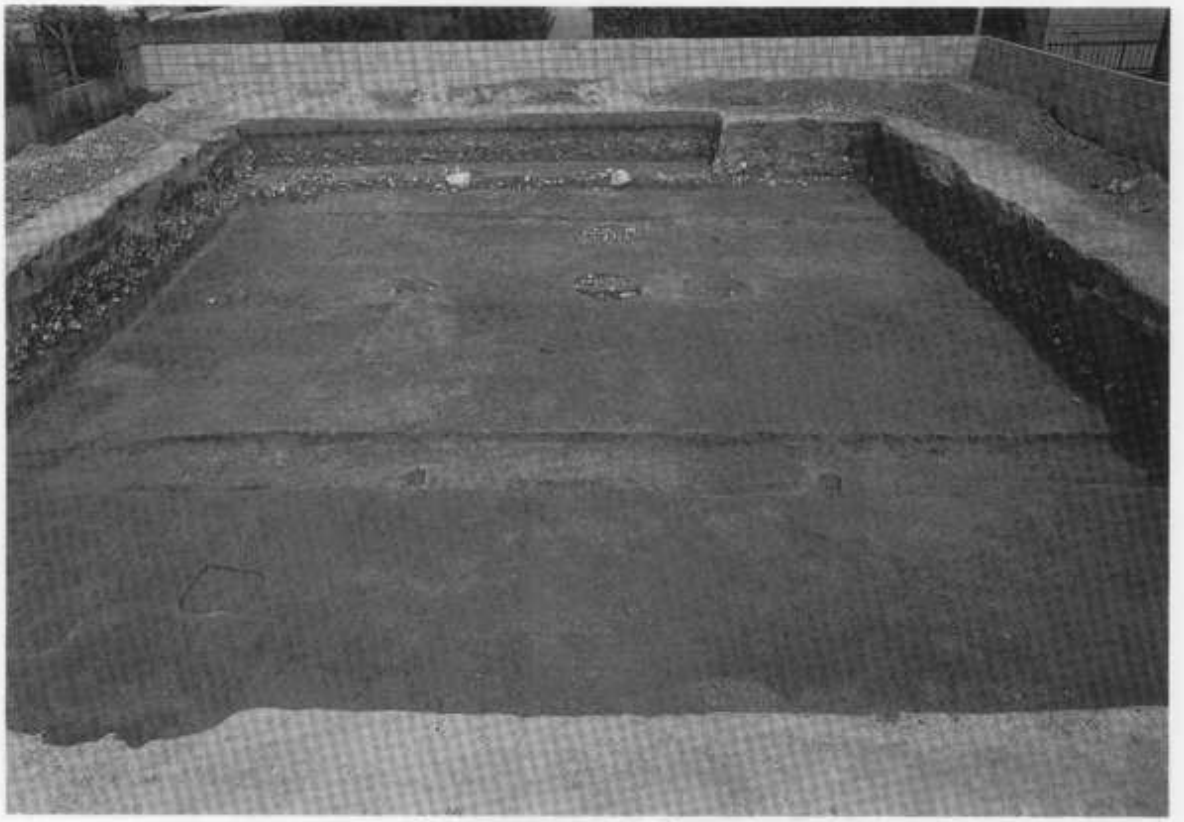


第139次調査区全景（空中写真）

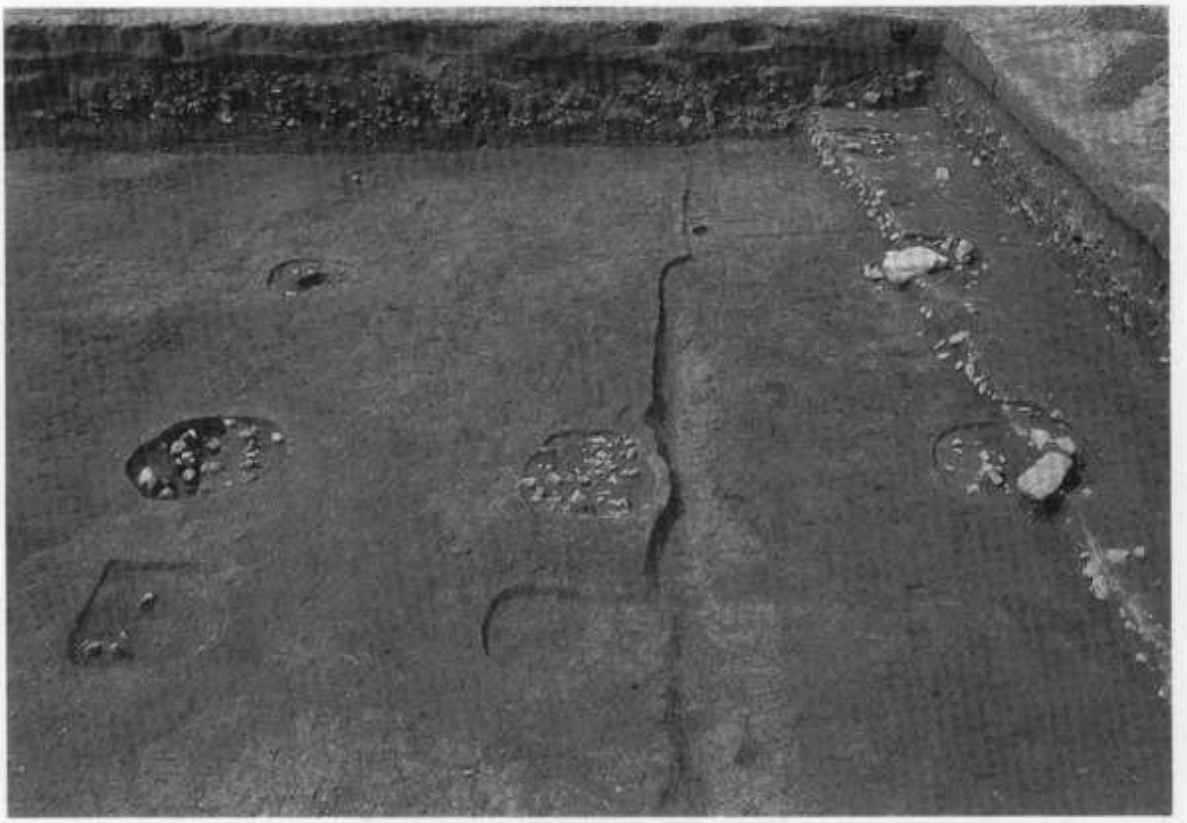
第139次調査区全景（東から）



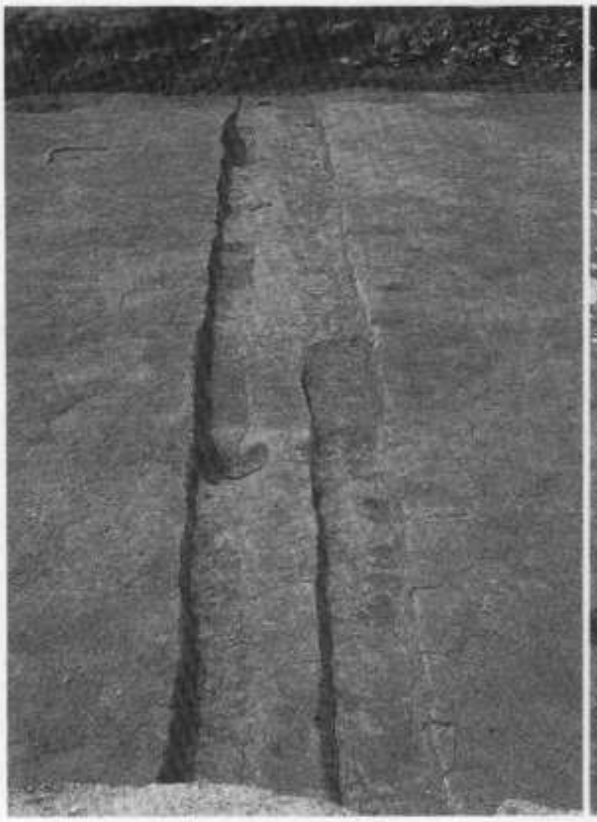
第140次調査区全景（空中写真）



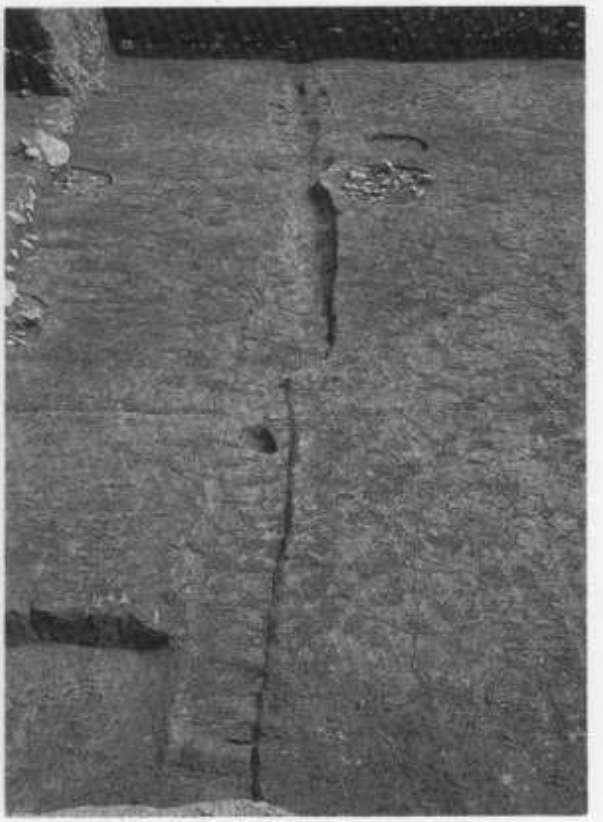
第140次調査区全景（西から）



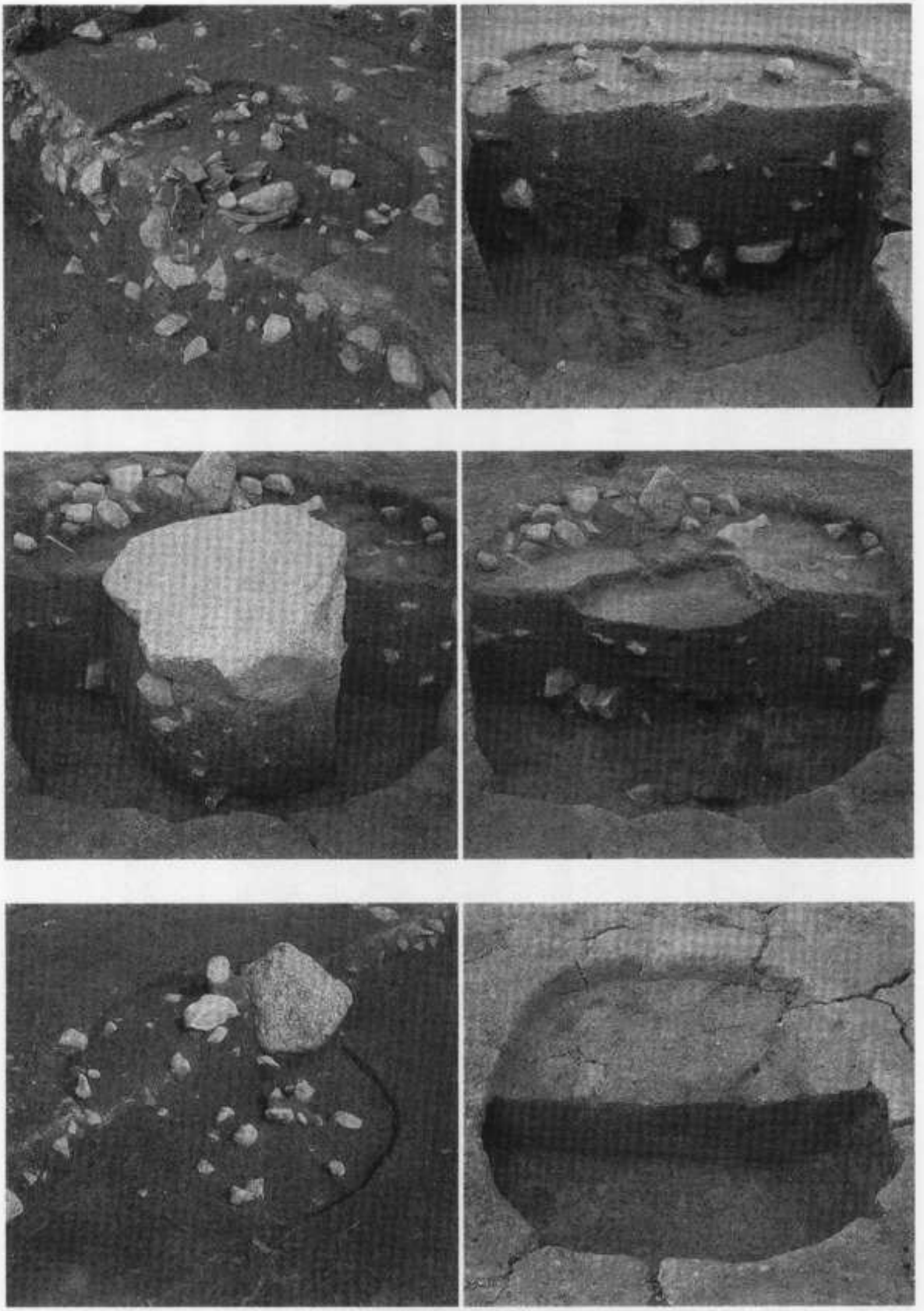
掘立柱建物SB3990、溝SD3986（南から）



溝SD3987（南から）

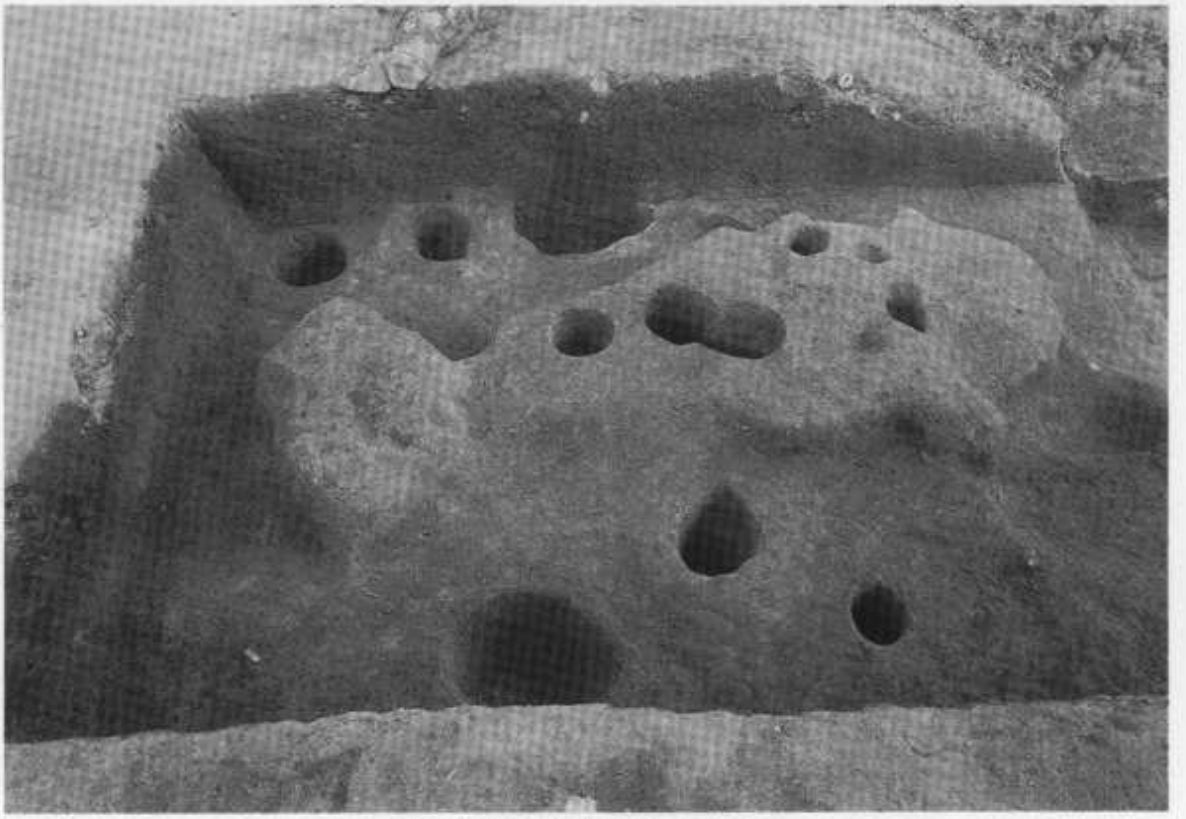


溝SD3986（北から）



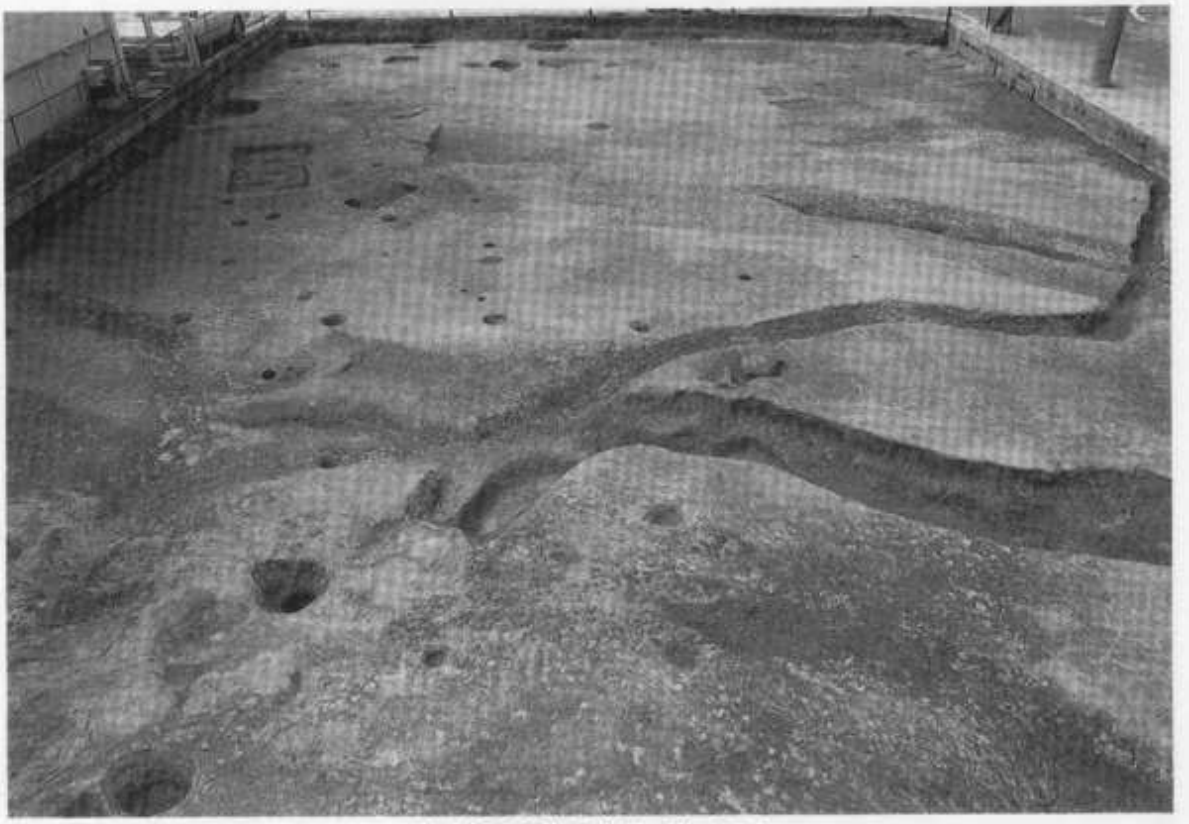
掘立柱建物SB3990柱掘形

第141次調査区全景（北東から）

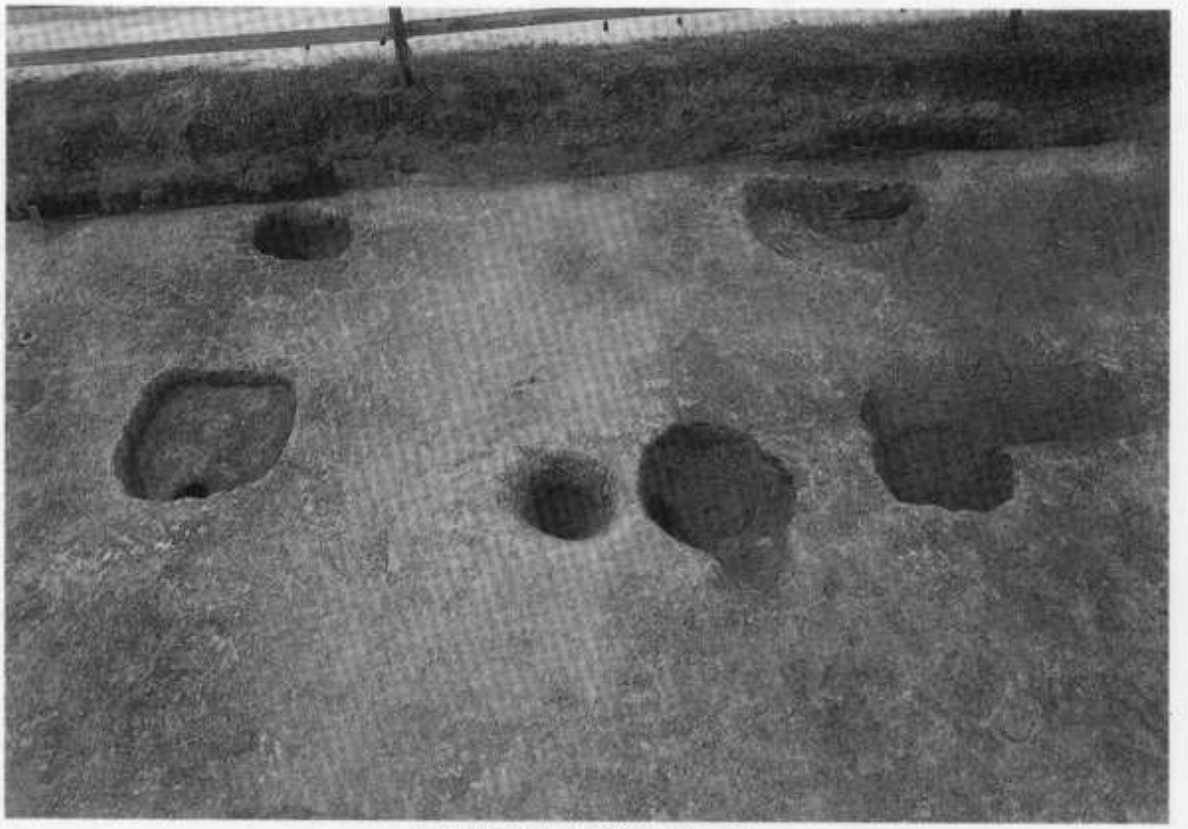


第141次調査区北半部（西から）

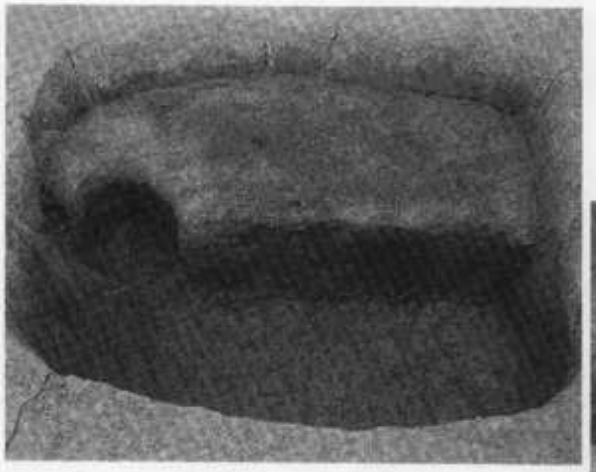
第142次調査区全景（空中写真）



第142次調査区全景（南から）

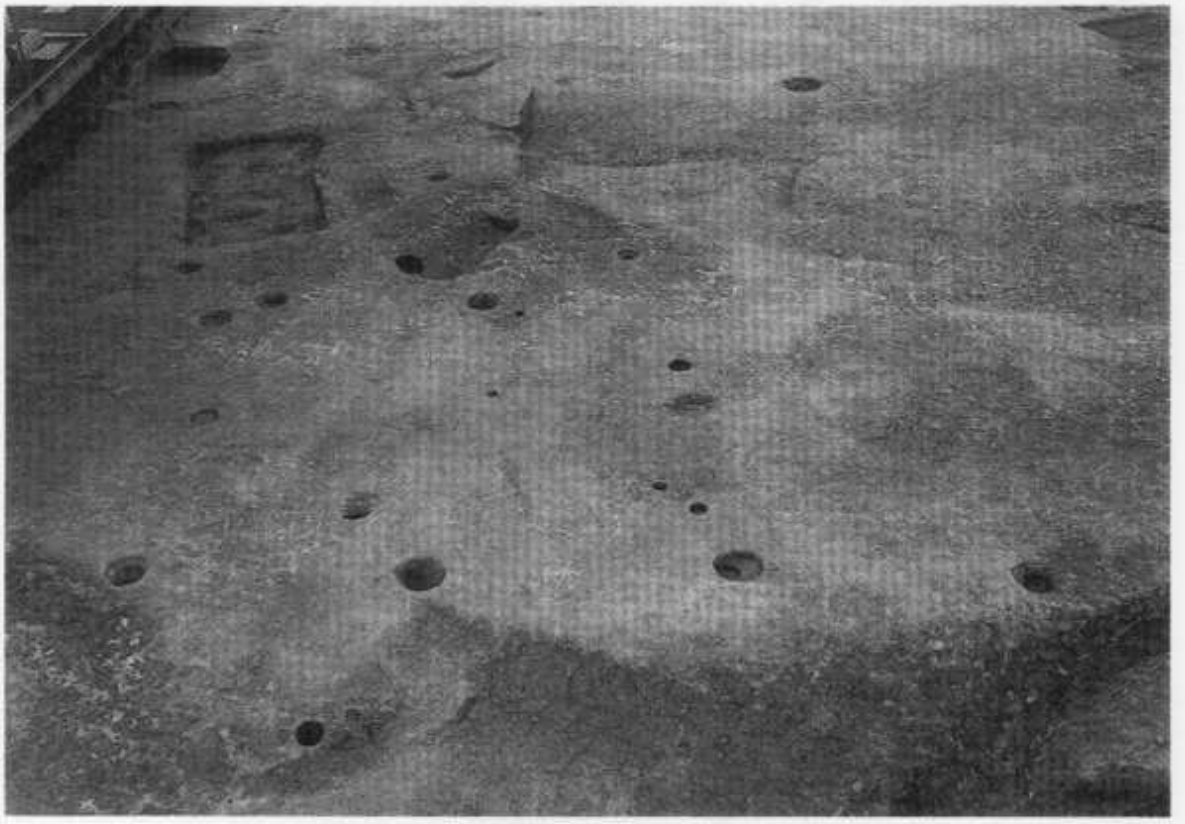


掘立柱建物SB4000（南から）

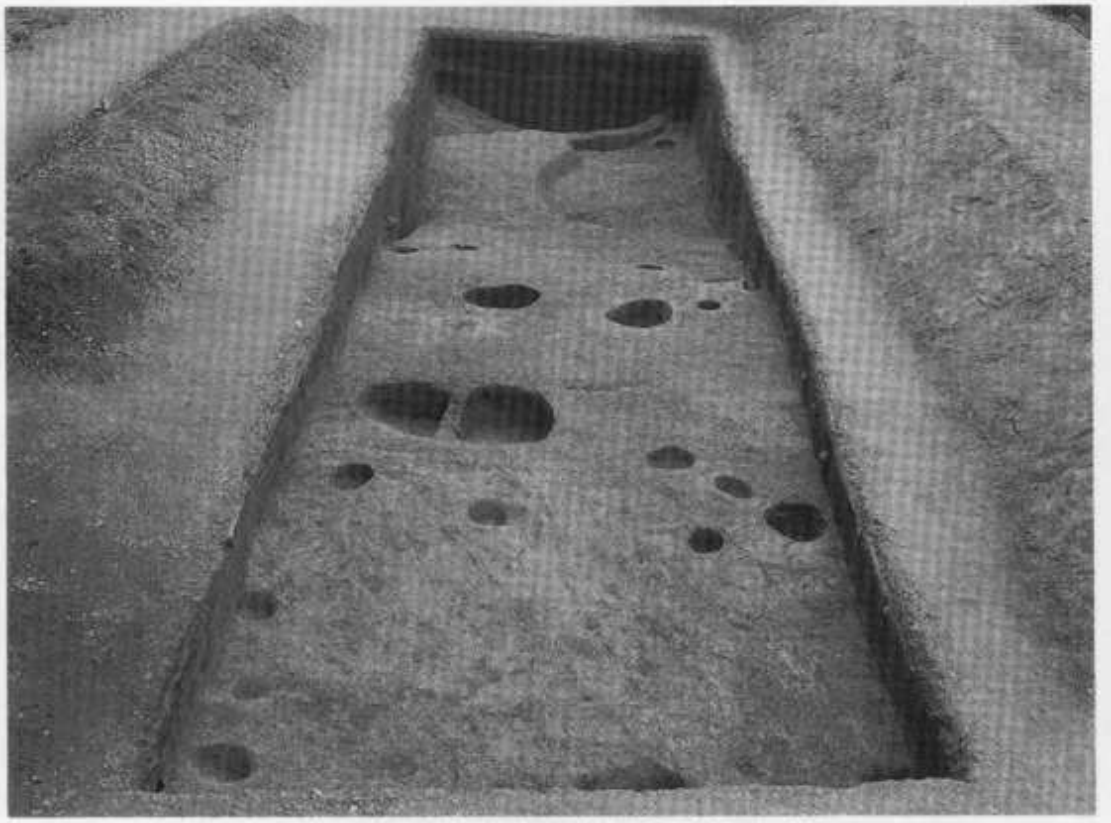


掘立柱建物SB4000柱掘形

掘立柱建物SB3996・3997（南から）

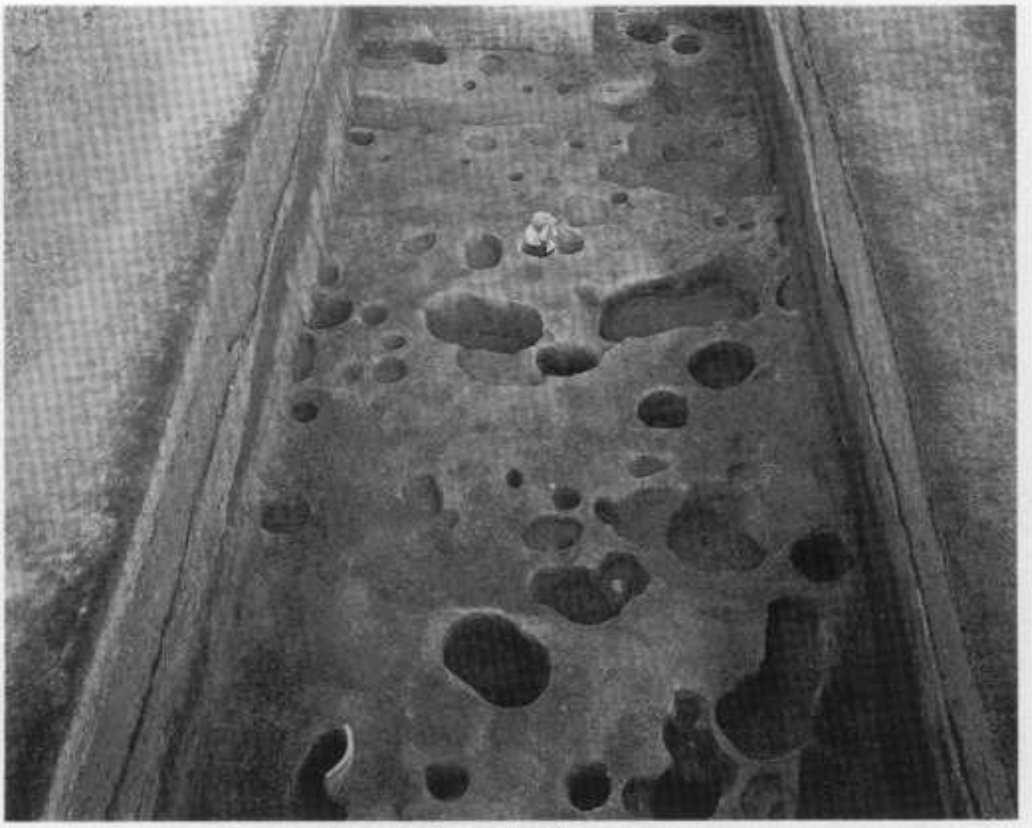


掘立柱建物SB3998・3999（南から）

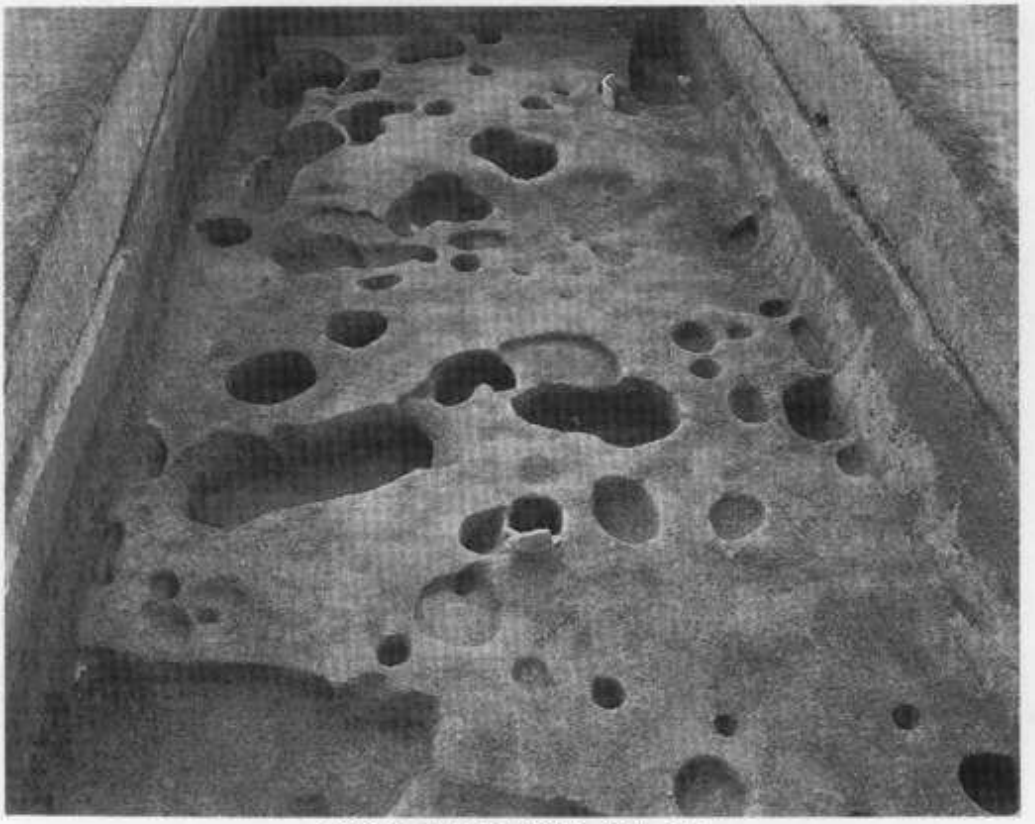


第144次調査区　上層遺構全景（東から）

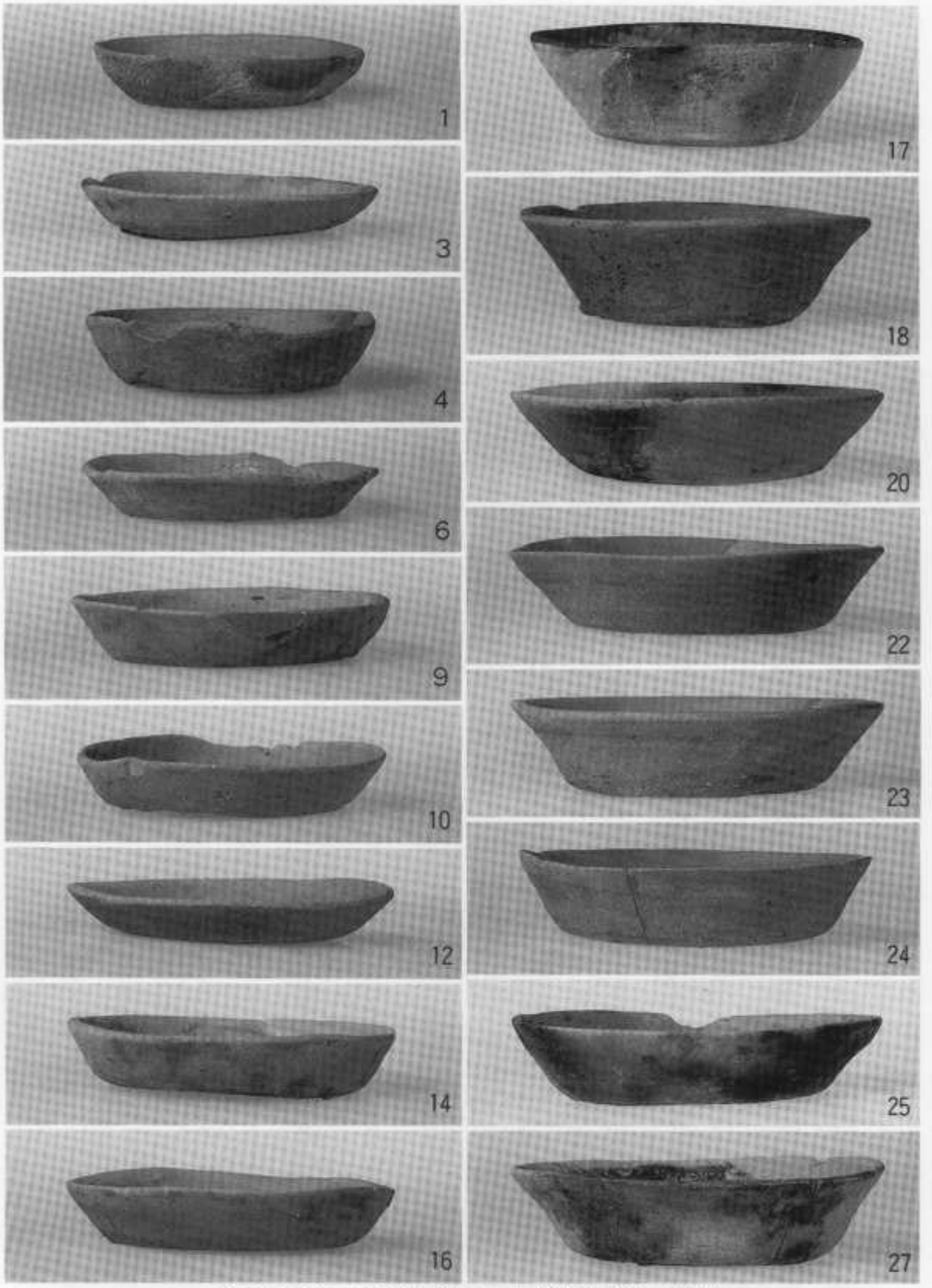
第144次調査区　下層遺構全景（東から）



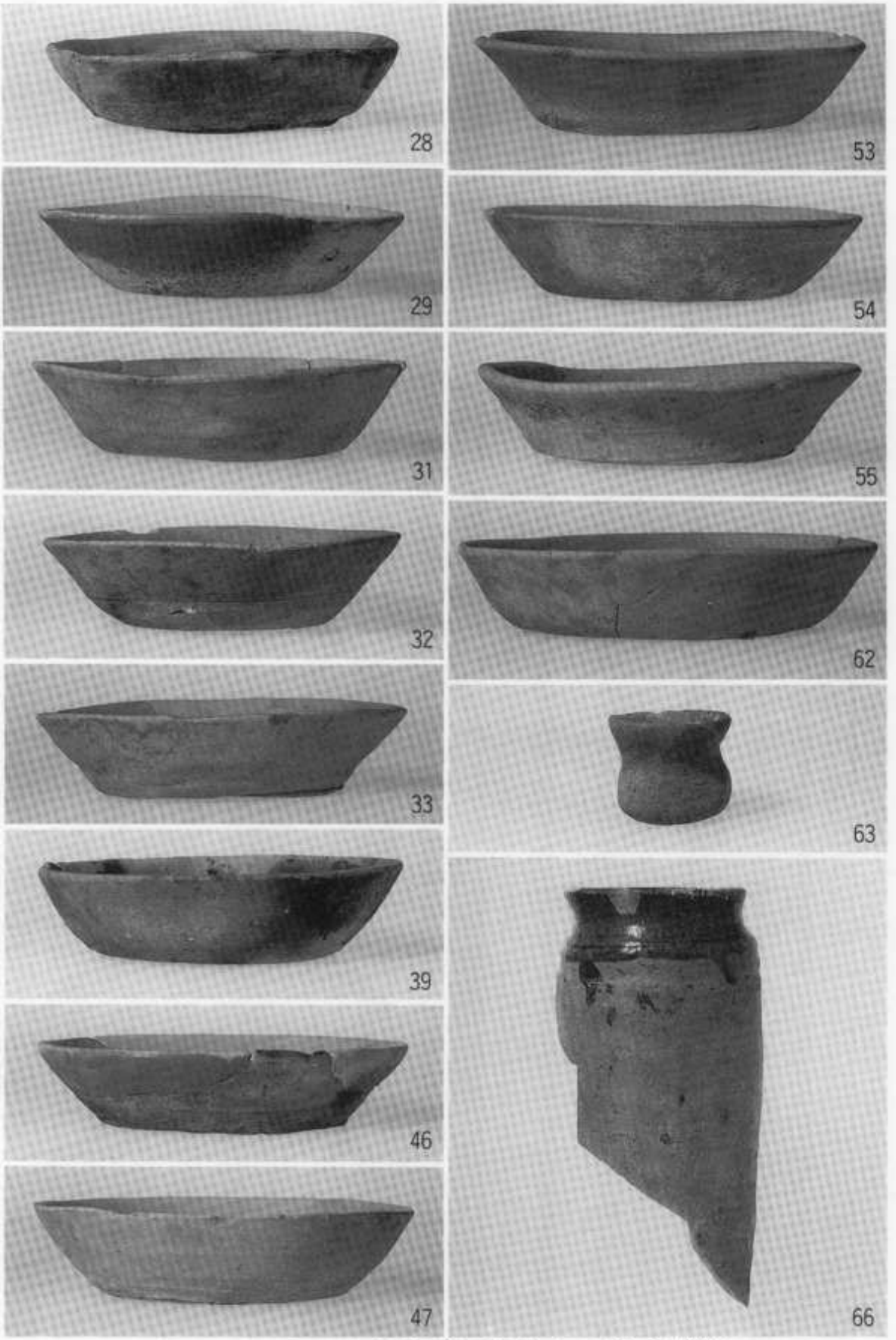
第146次調査区東半部（西から）



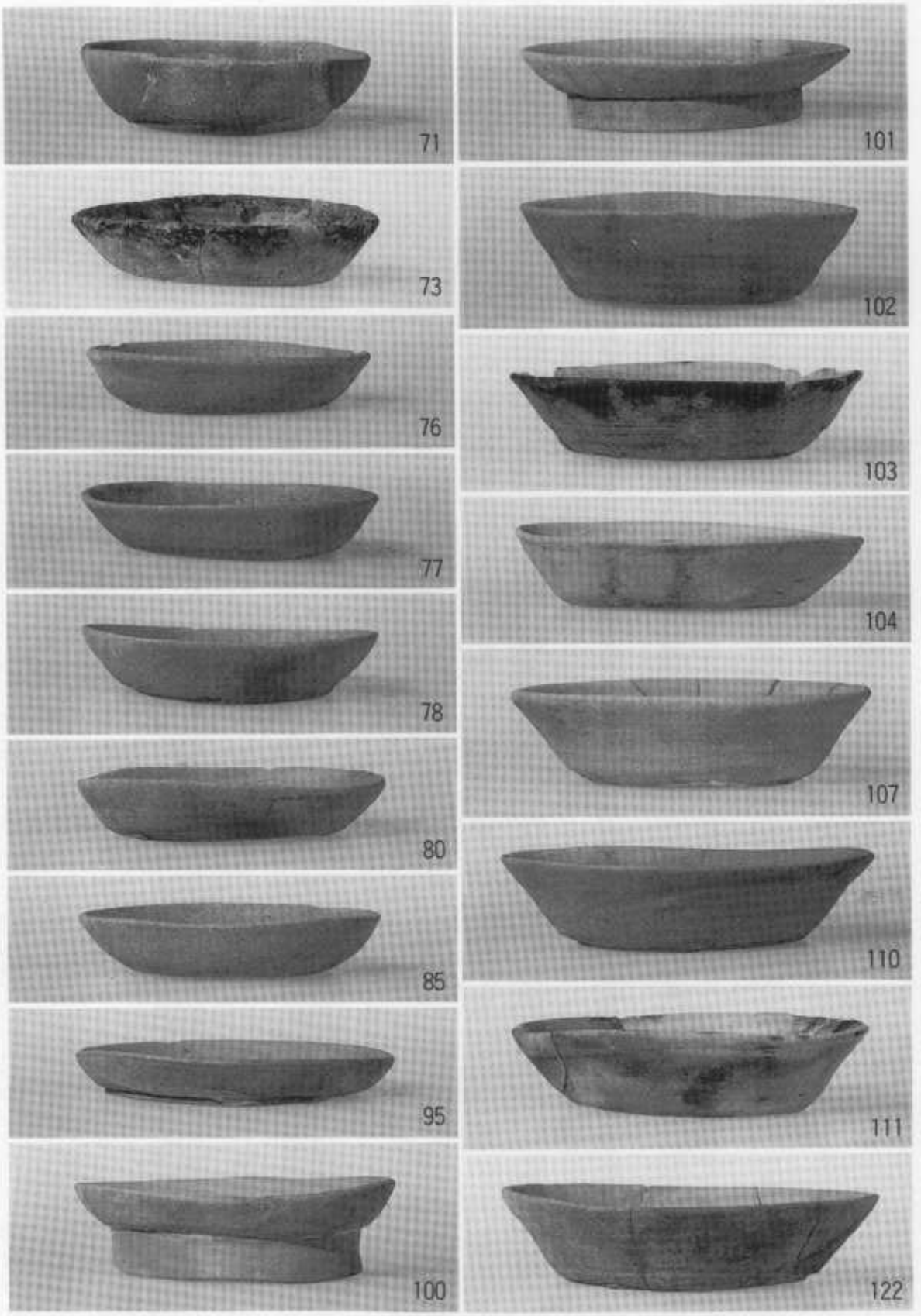
第146次調査区西半部（東から）



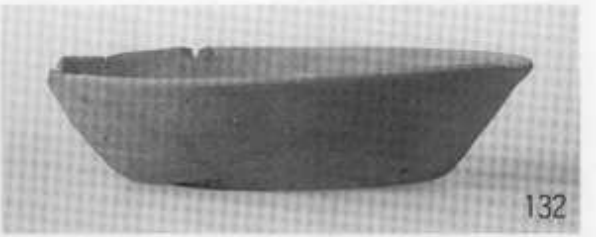
第130次調査　SD3840（墨書木札共伴層）出土土器(1)

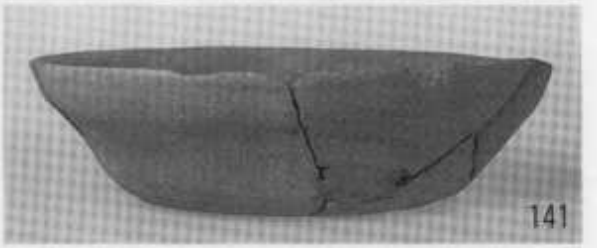


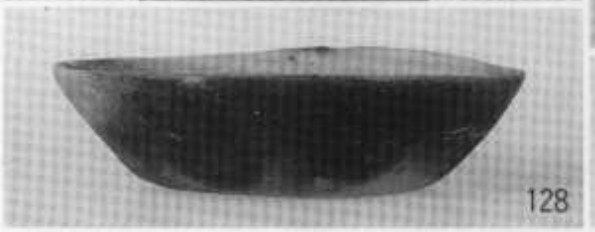
第130次調査　SD3840（墨書木札共伴層）出土土器・陶磁器(2)

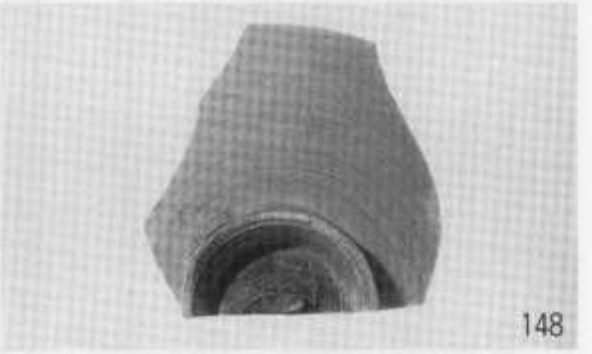


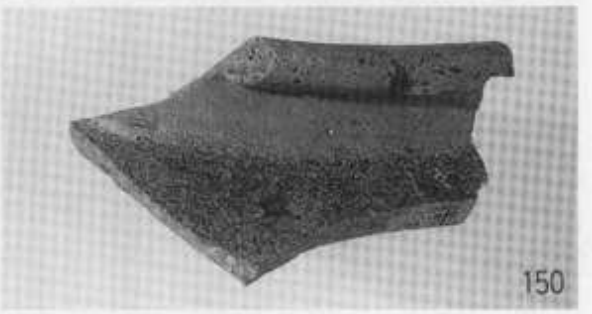
第130次調査　SD3840上層出土土器(3)



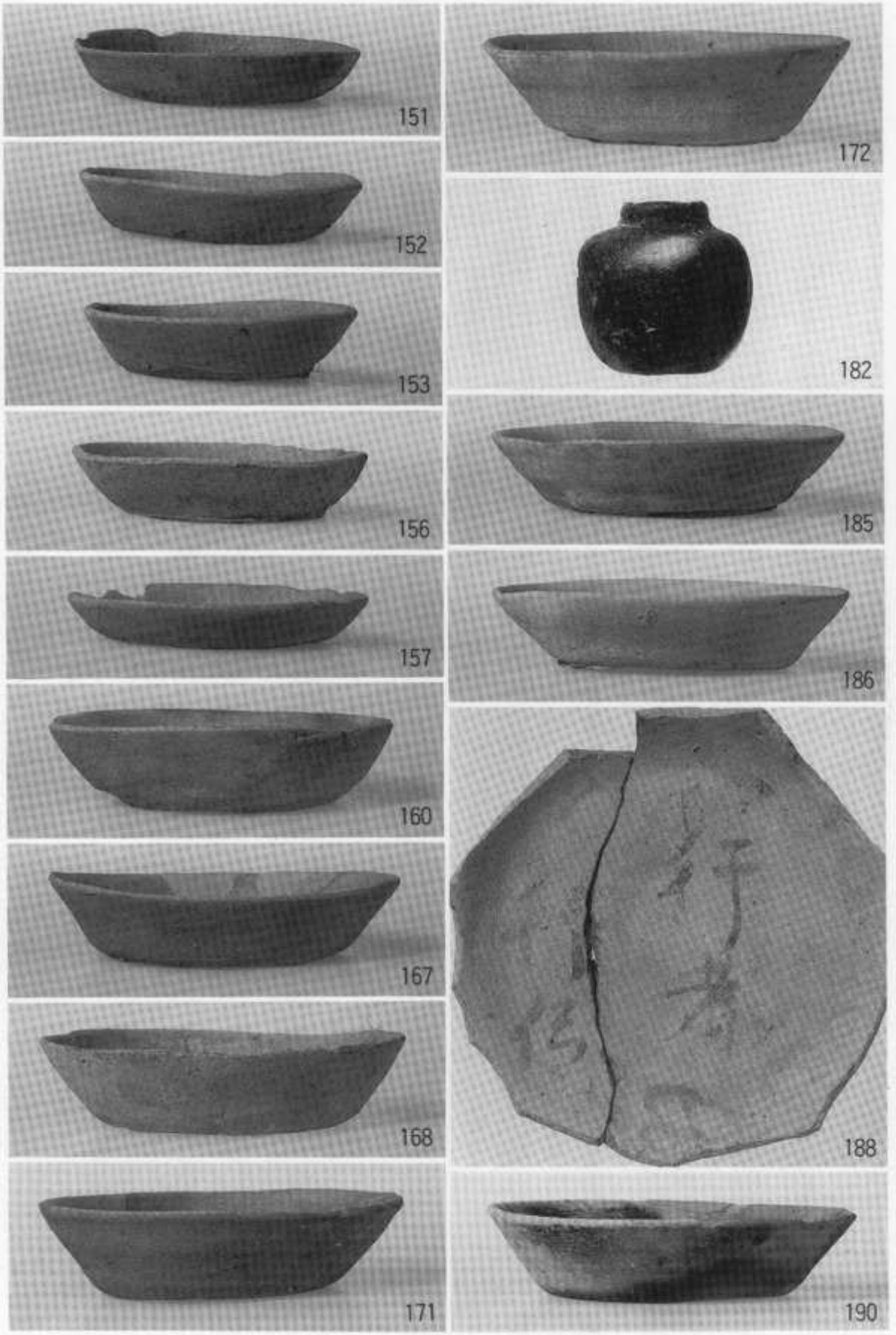




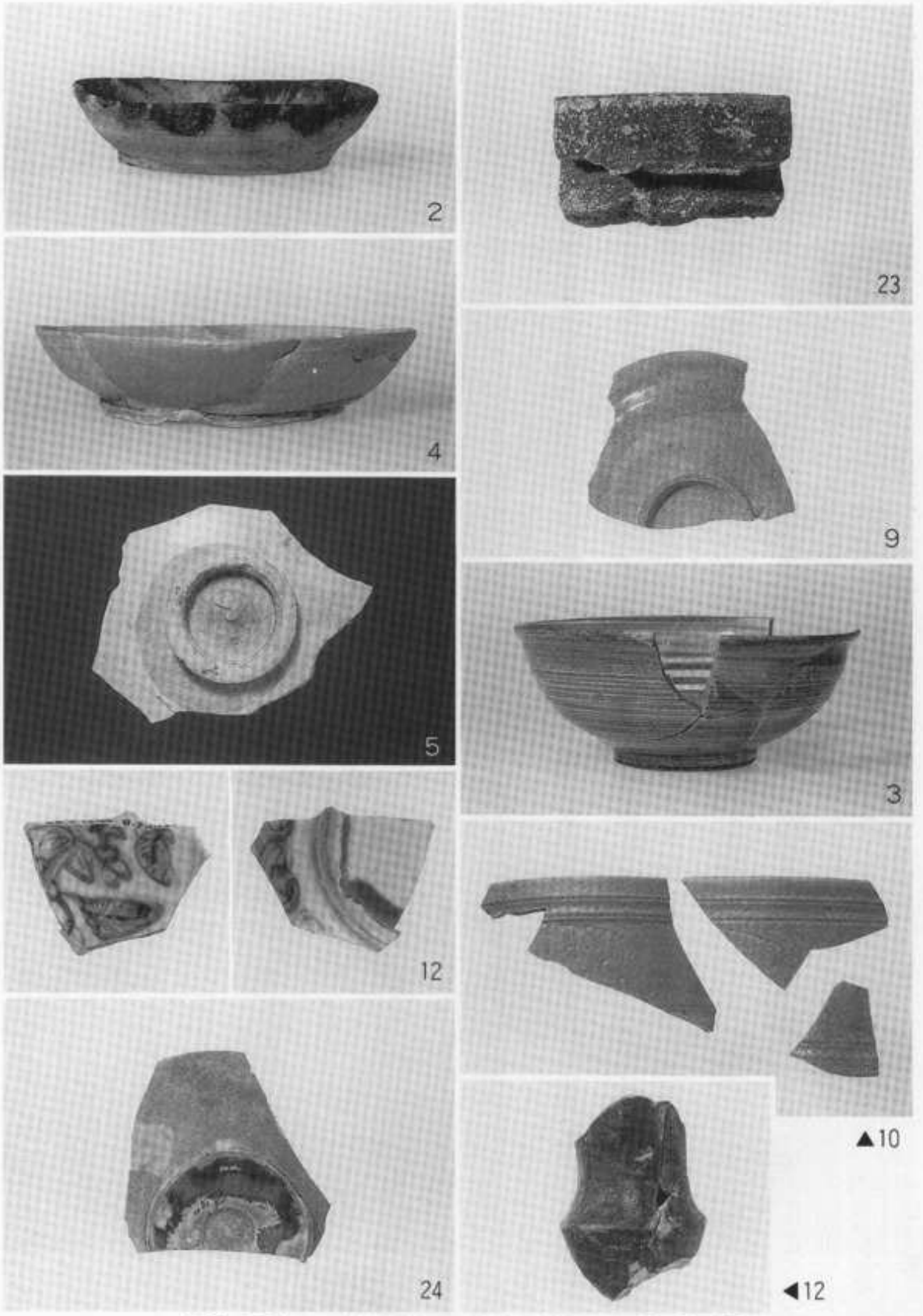




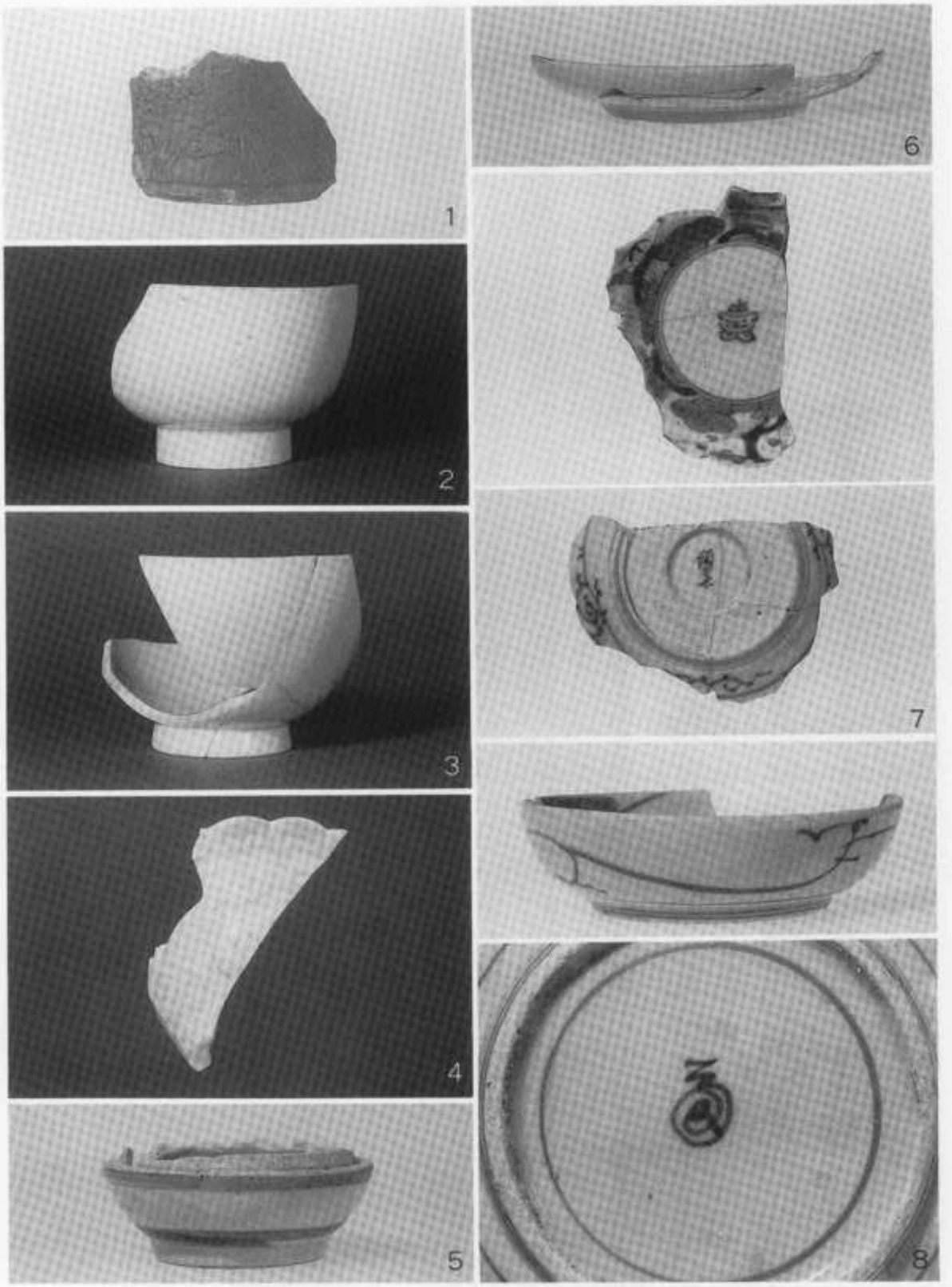
第130次調査　SD3840上層出土土器・陶磁器(4)



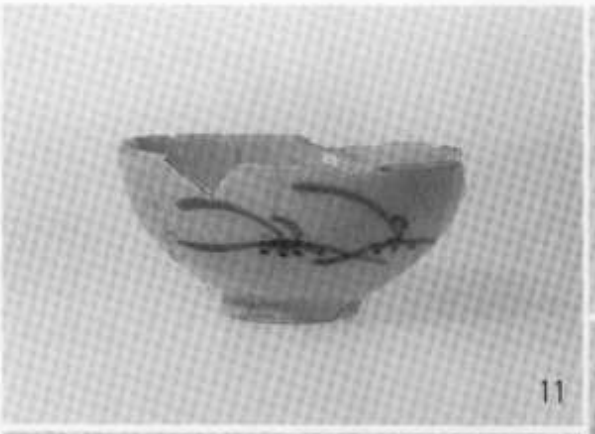
第130次調査　SD3840下層・最下層出土土器(5)

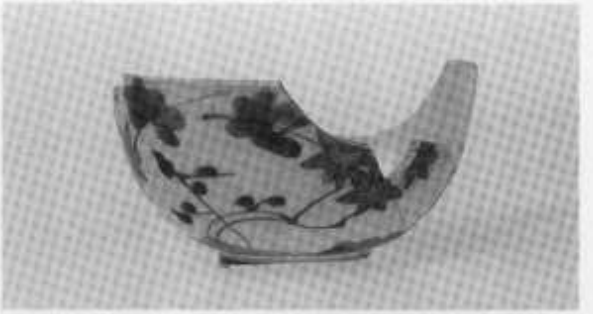


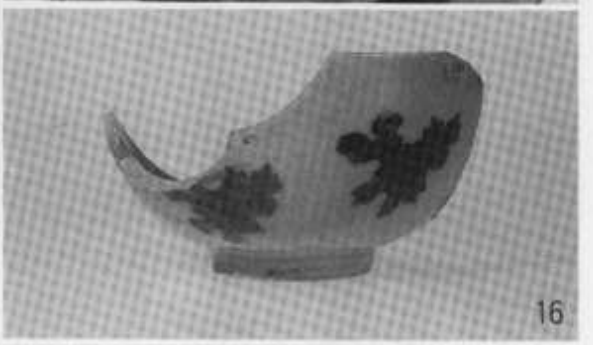
第130次調査　SD3842・3844・3846・3860出土土器・陶磁器

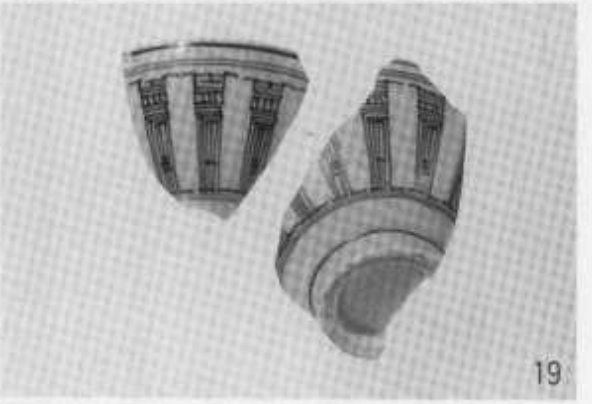


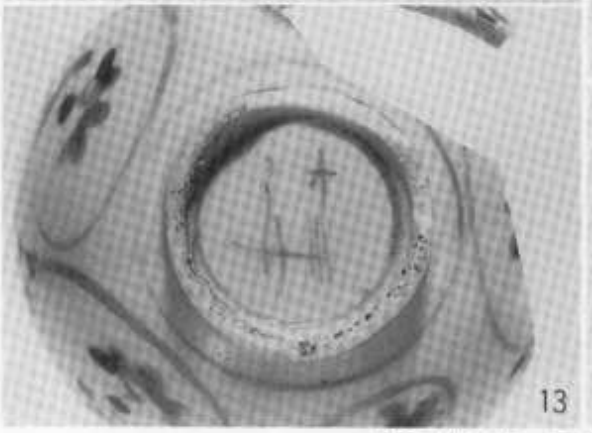
第130次調査　SD3865出土陶磁器(1)

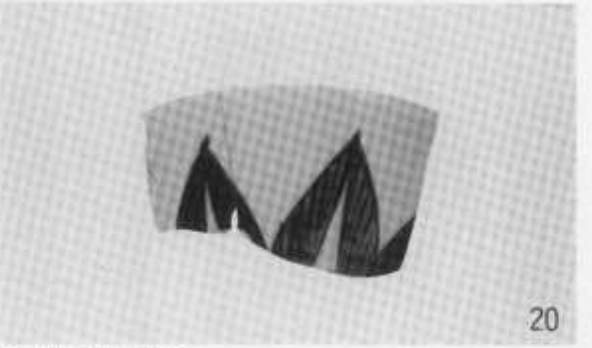




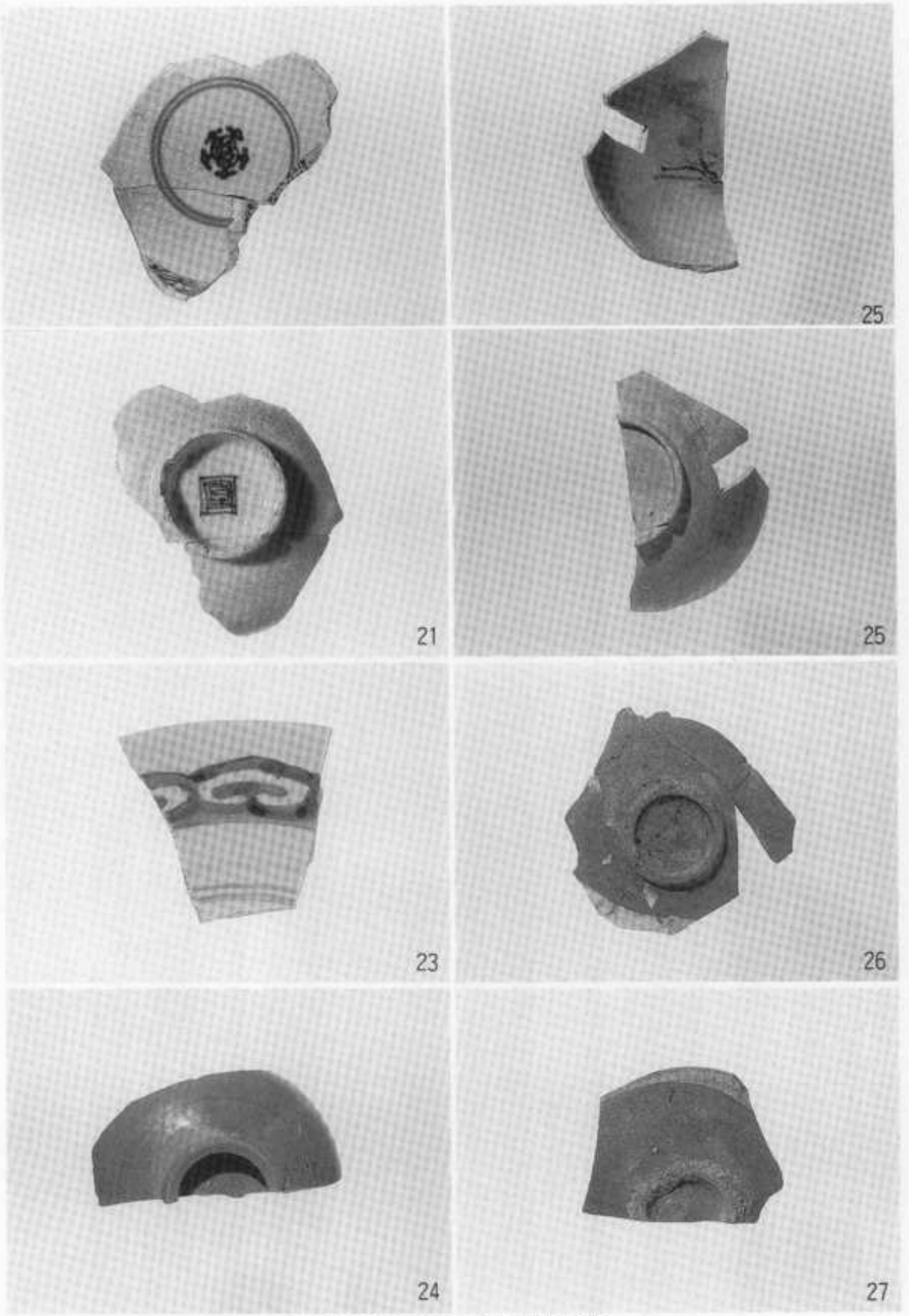




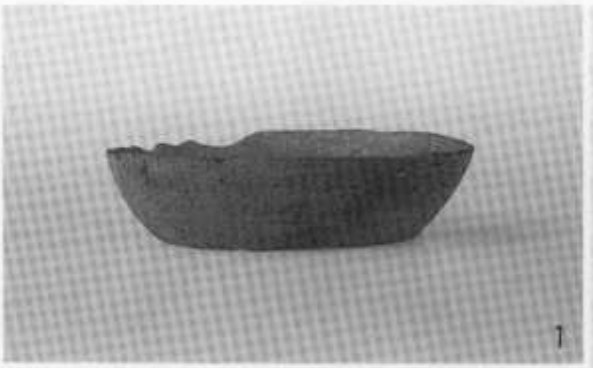


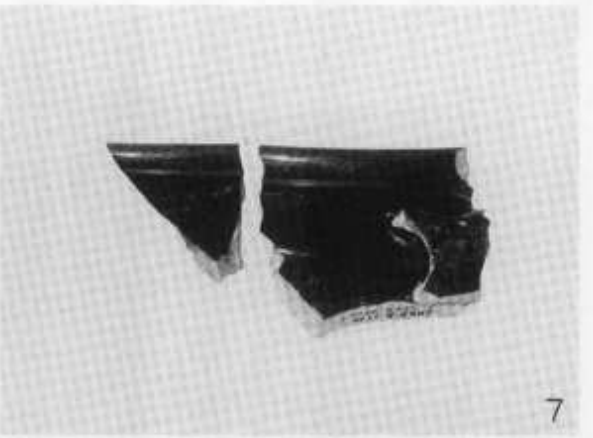


第130次調査　SD3865出土陶磁器(2)



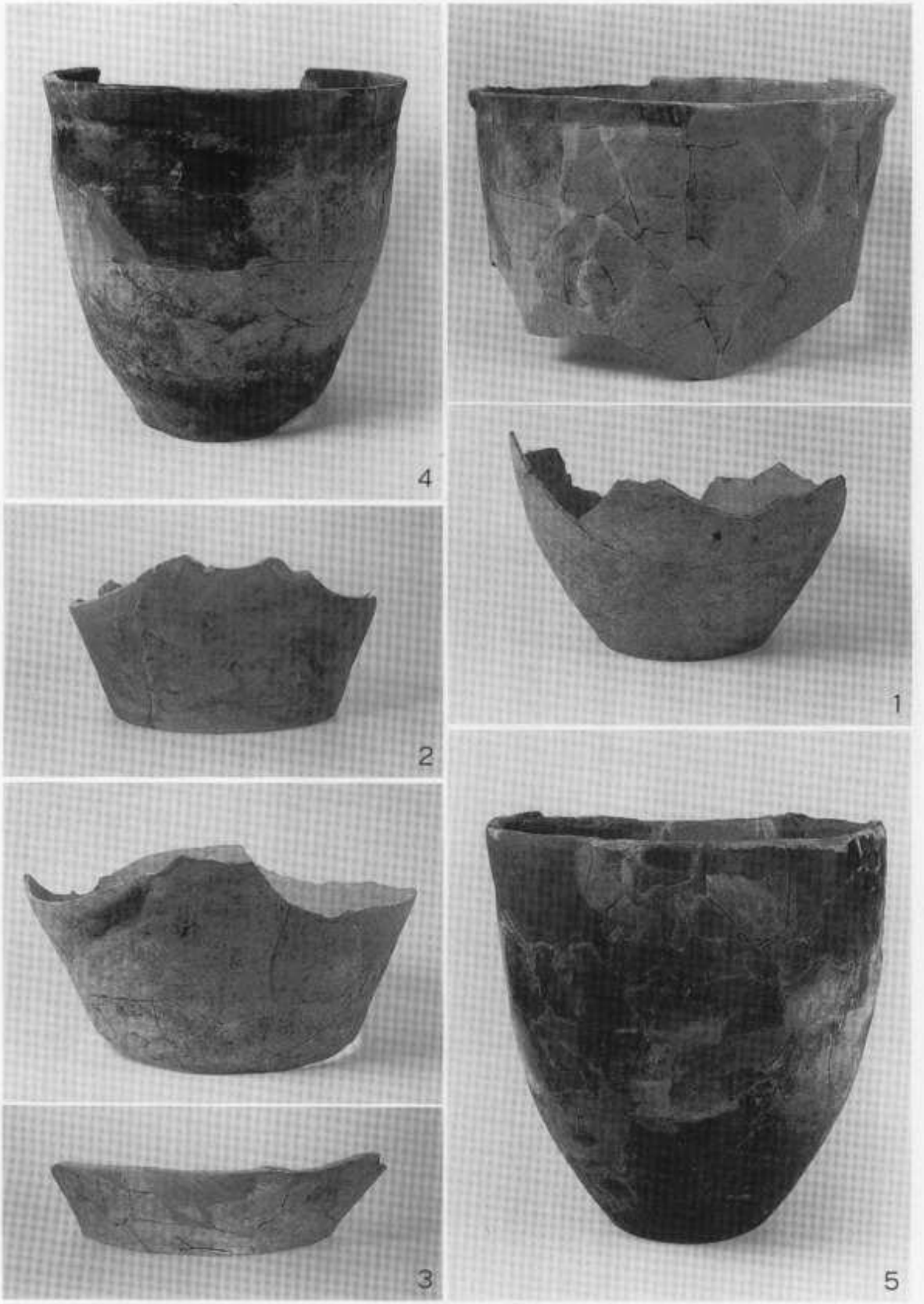
第130次調査　SD3865出土陶磁器(3)



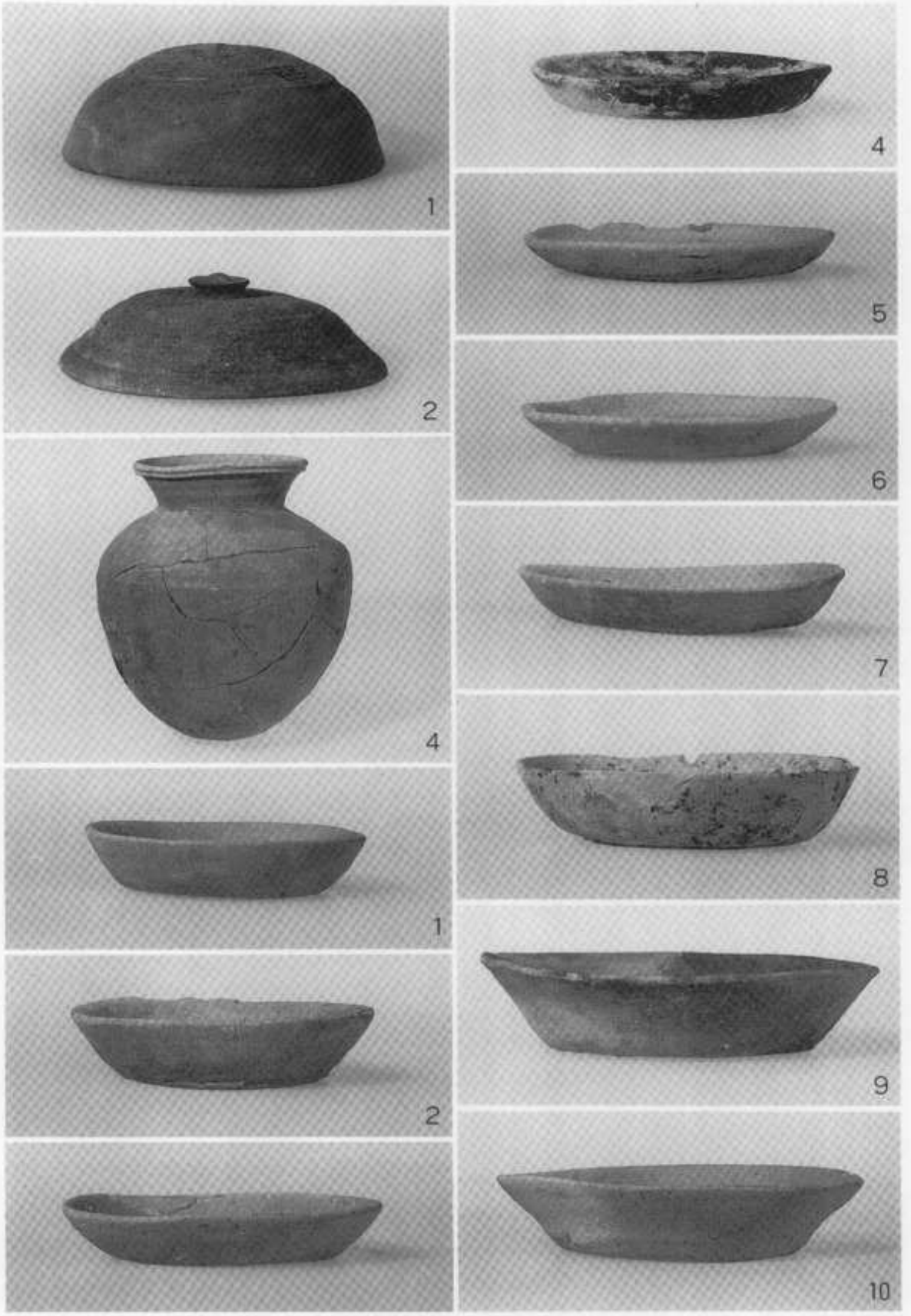


◀ 上9
下10

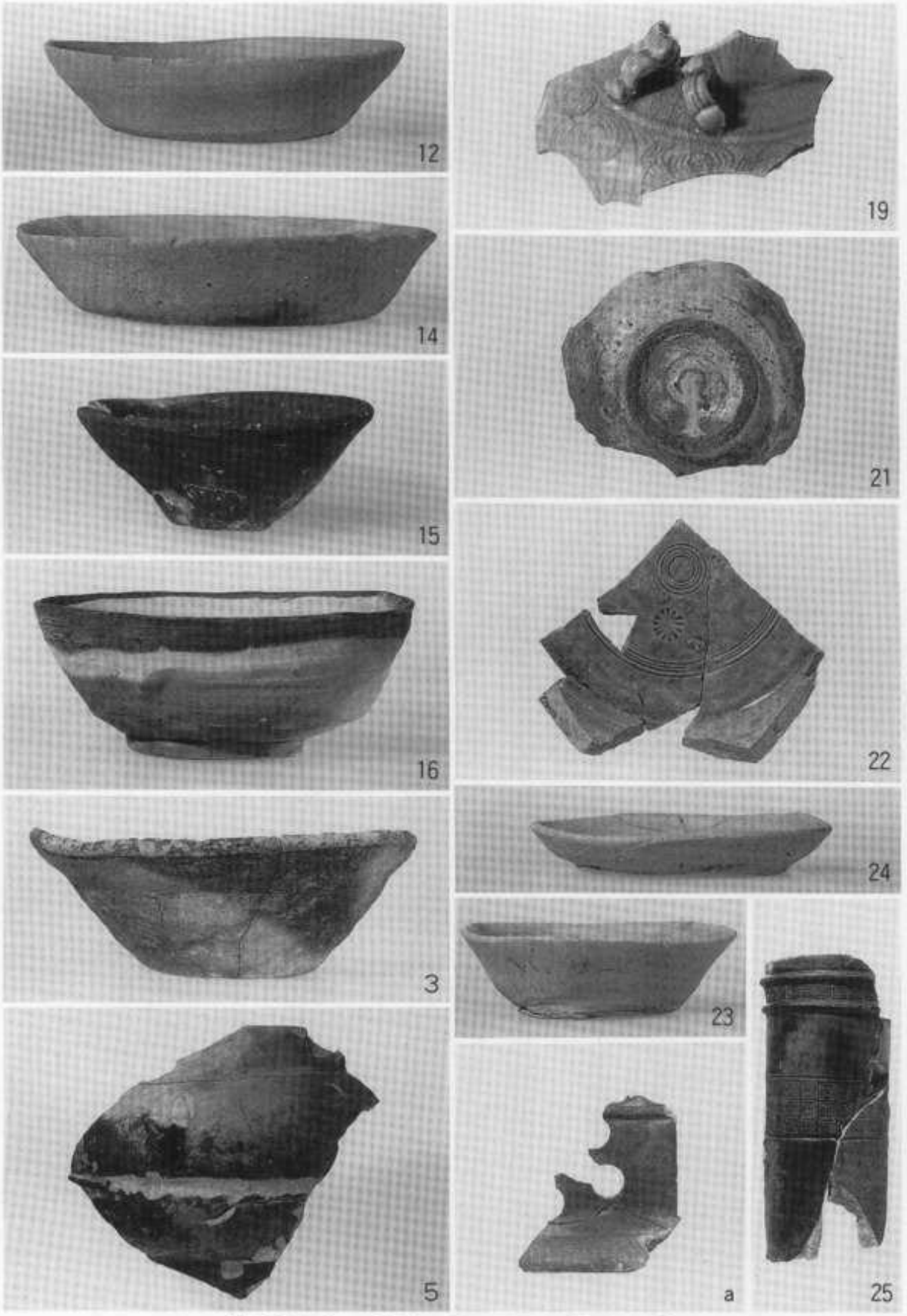
第130次調査　SK3863出土土器・陶磁器



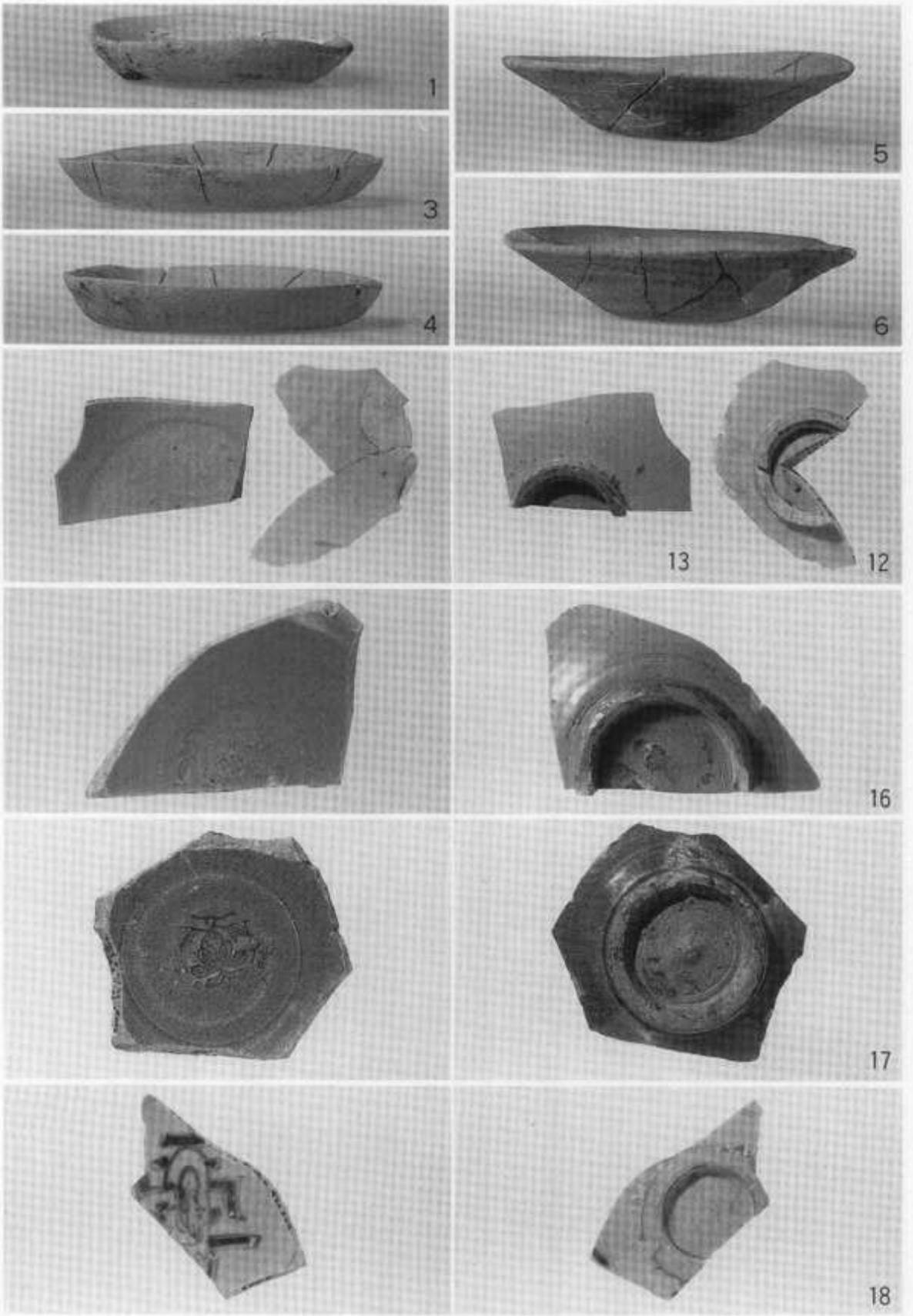
第130次調査　出土埋甕　SX3864・3867・3872・3866・3868



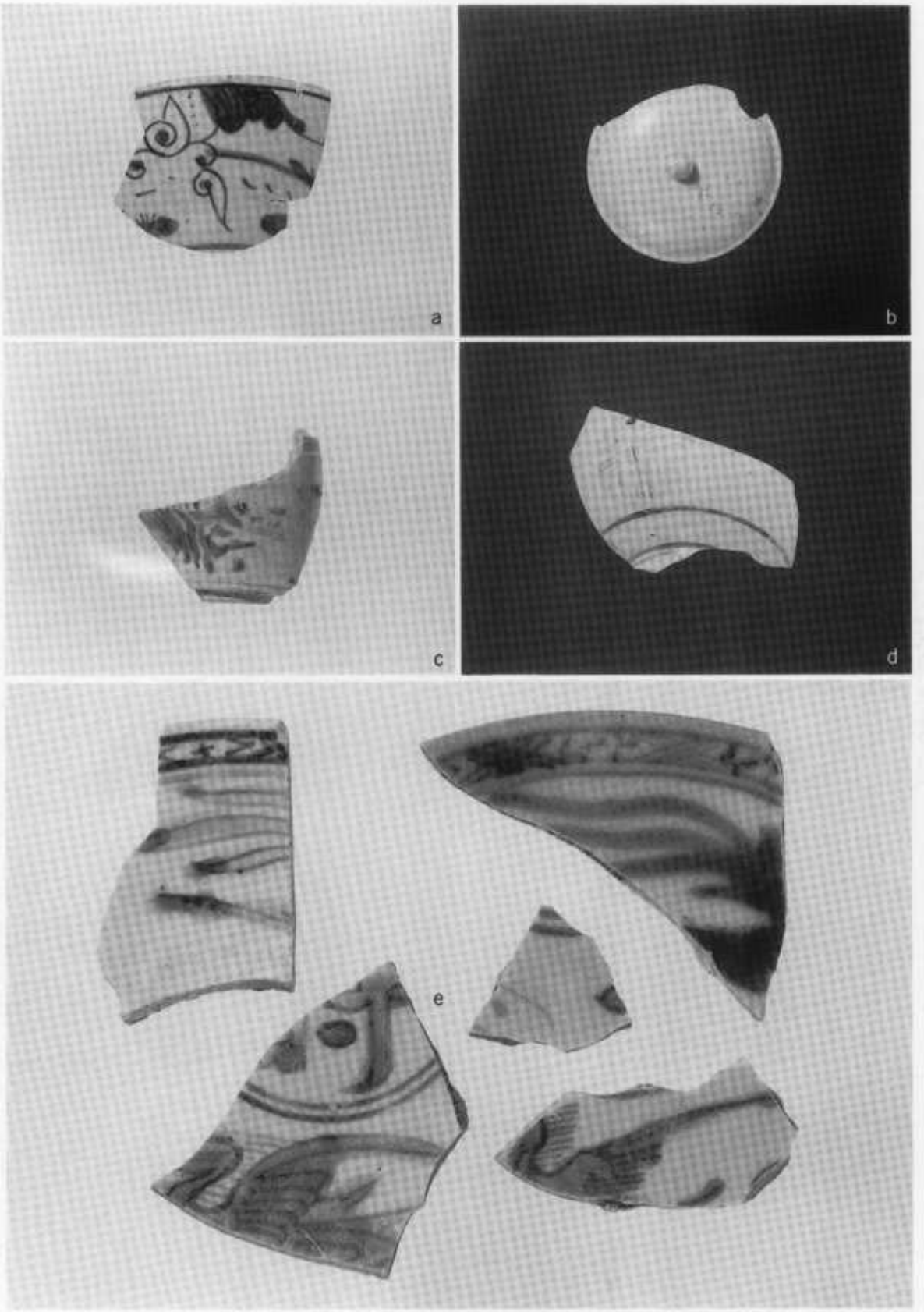
第130次調査　SX3841、暗茶色土層出土土器



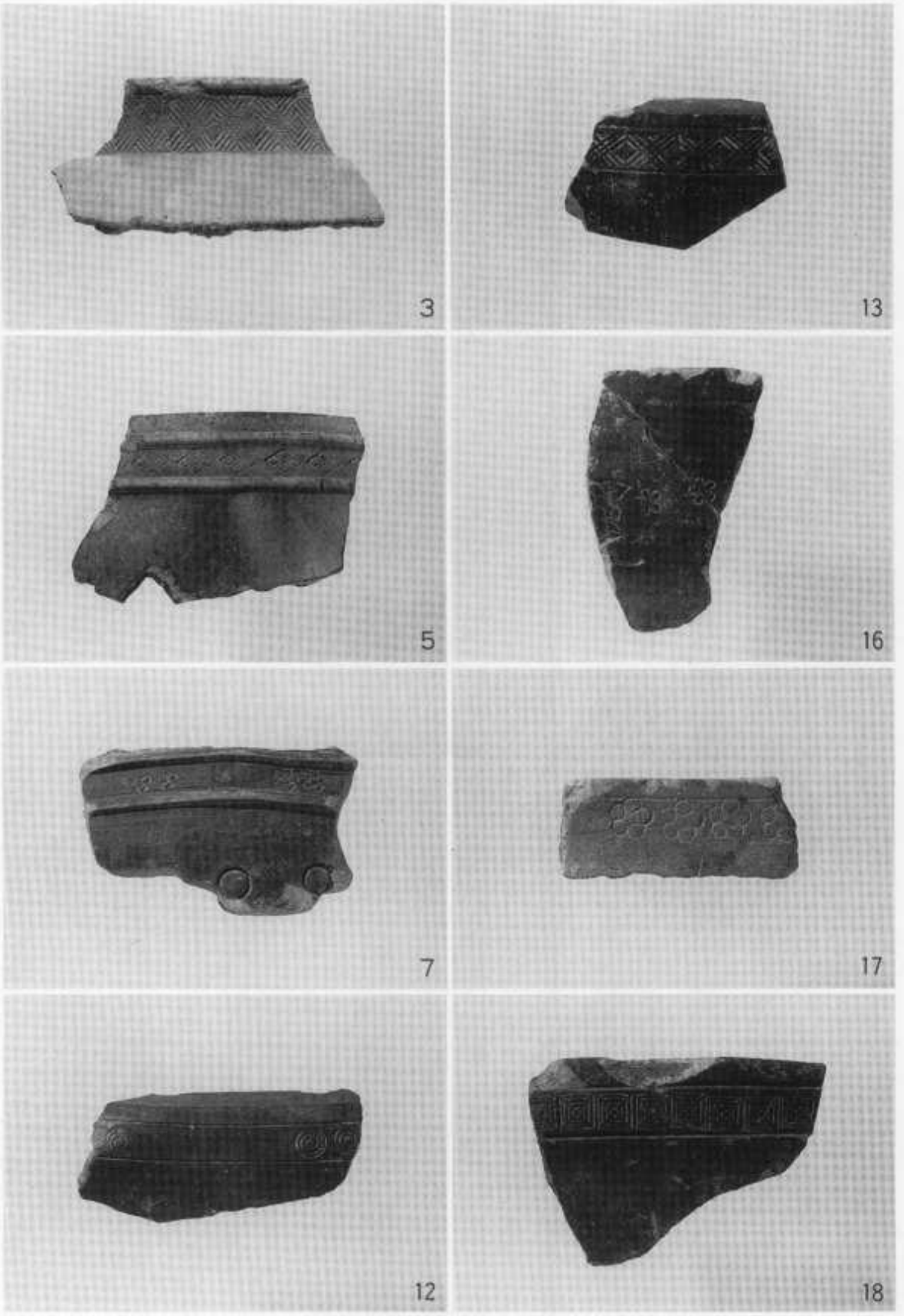
第130次調査　暗茶色土層、黒褐色土層出土土器



第130次調査　茶褐色土層出土土器

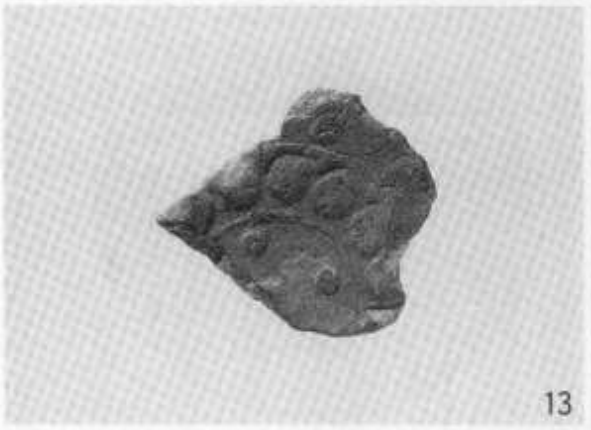


第130次調査　その他の遺構出土陶磁器

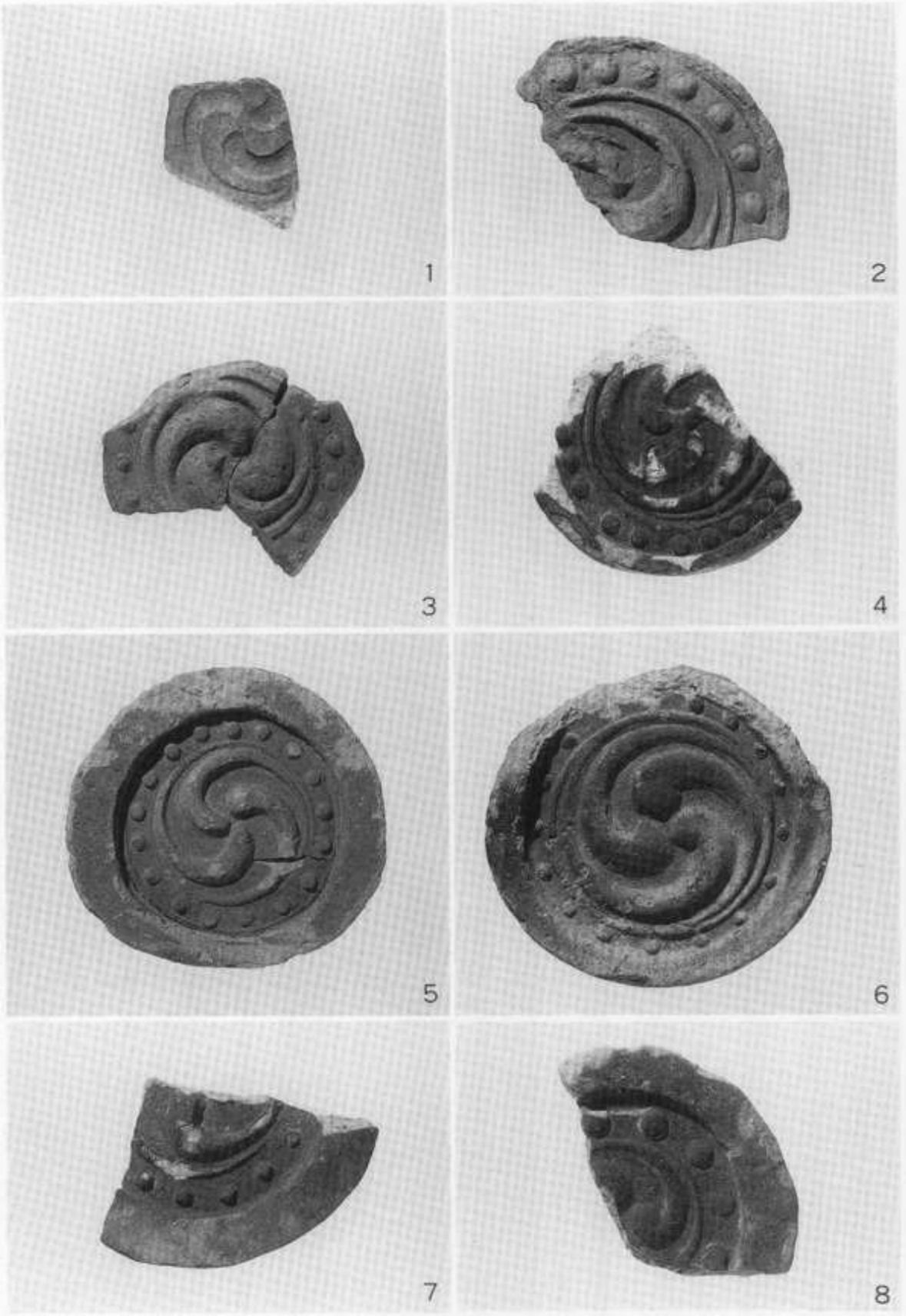


第130次調査　SD3843、暗茶色土層、茶褐色土層出土瓦質土器

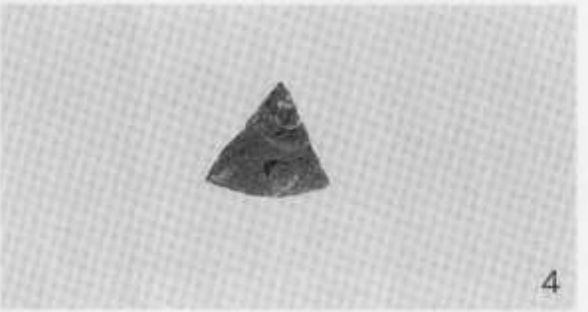
第130次調査　出土軒丸瓦(1)



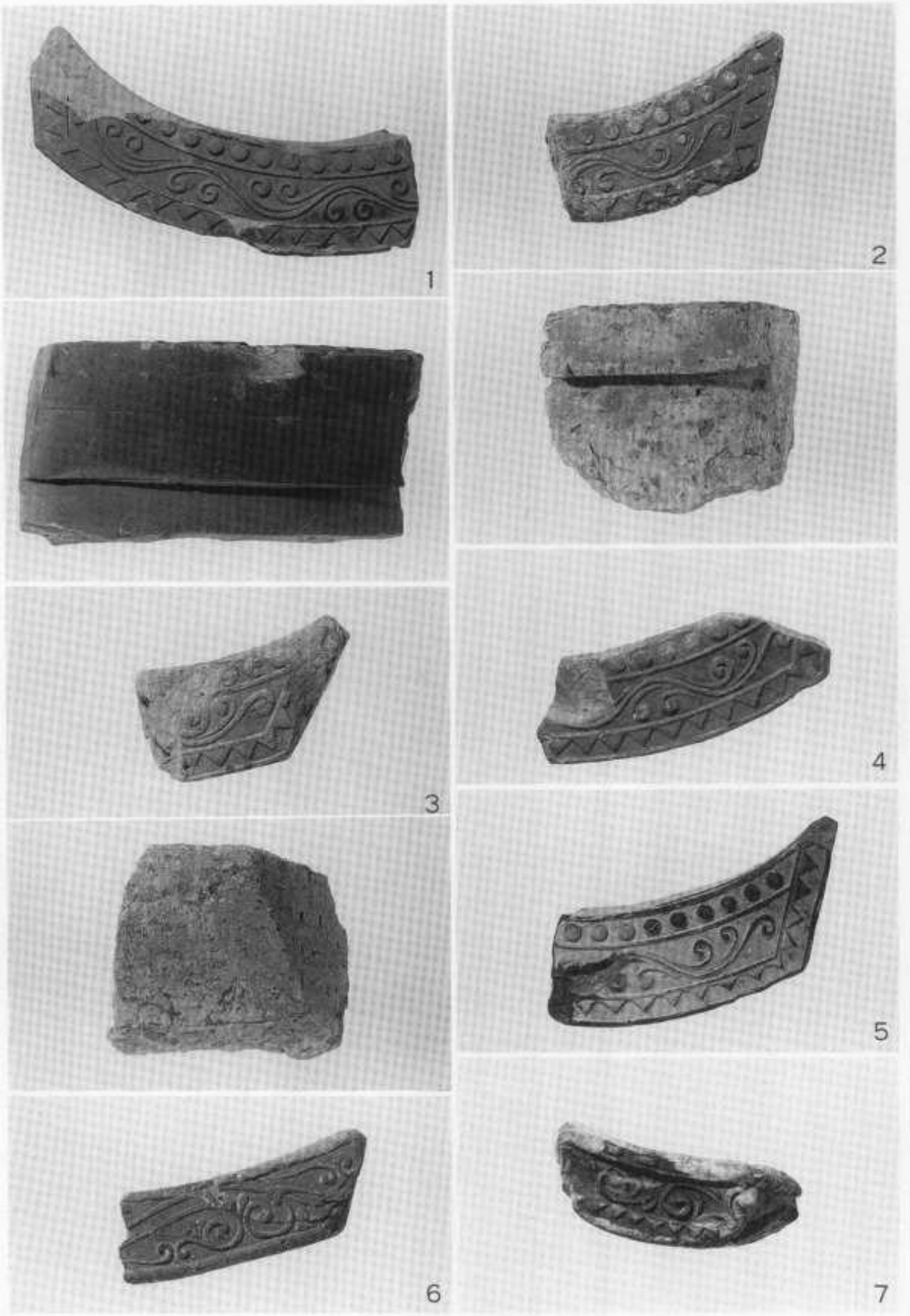
第130次調査　出土軒丸瓦(2)



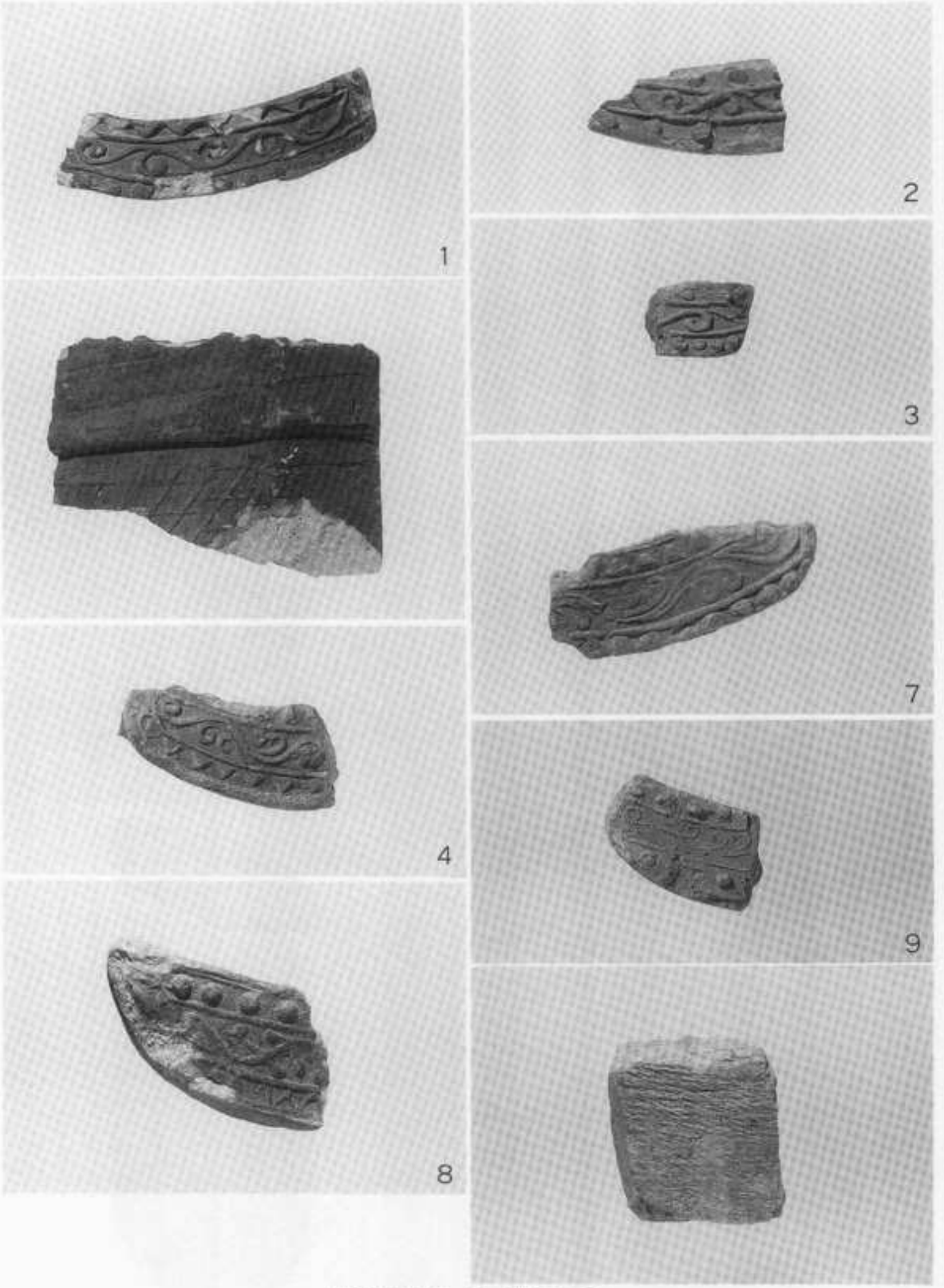
第130次調査　出土軒丸瓦(3)



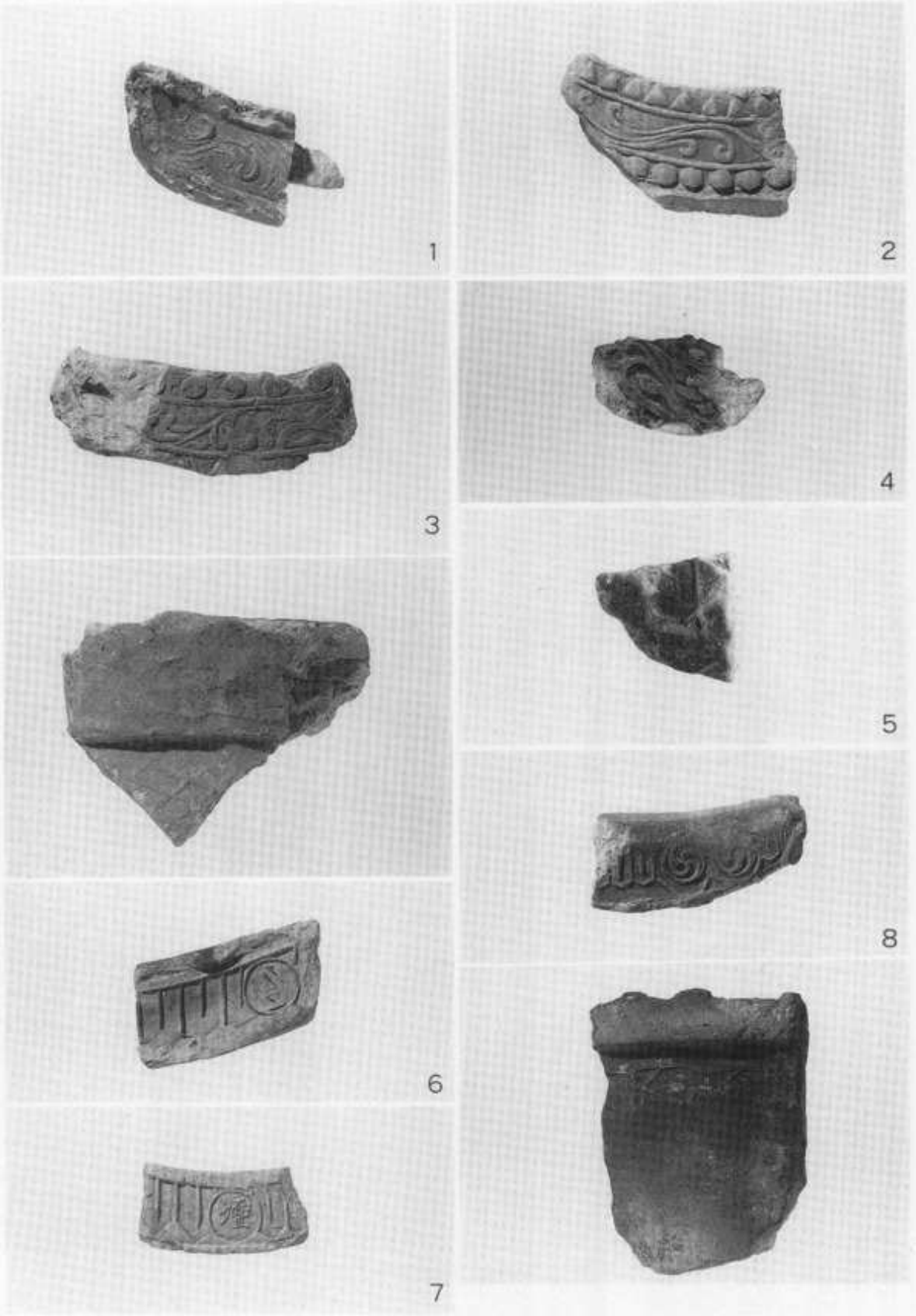
第130次調査　出土軒丸瓦(4)



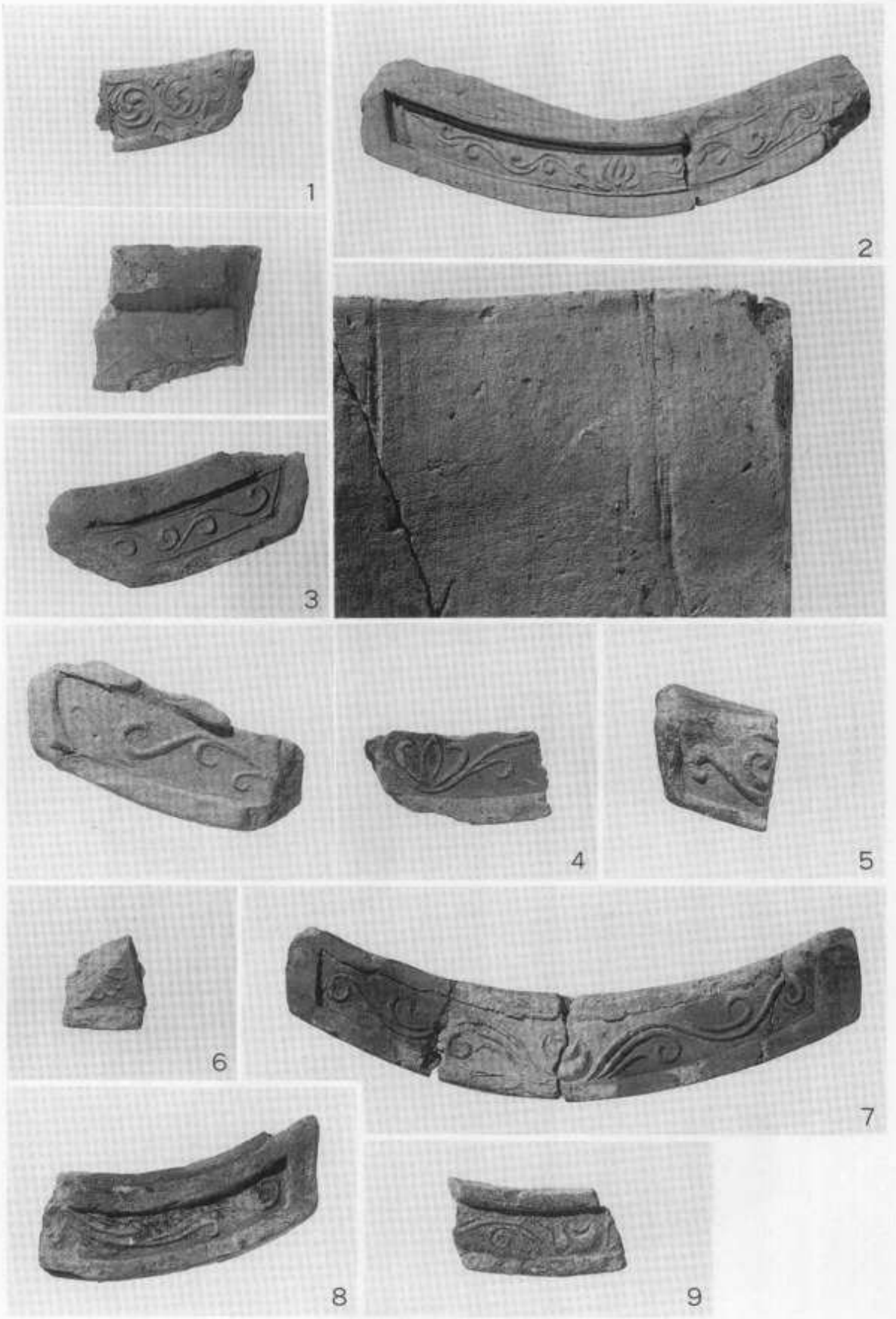
第130次調査　出土軒平瓦(1)



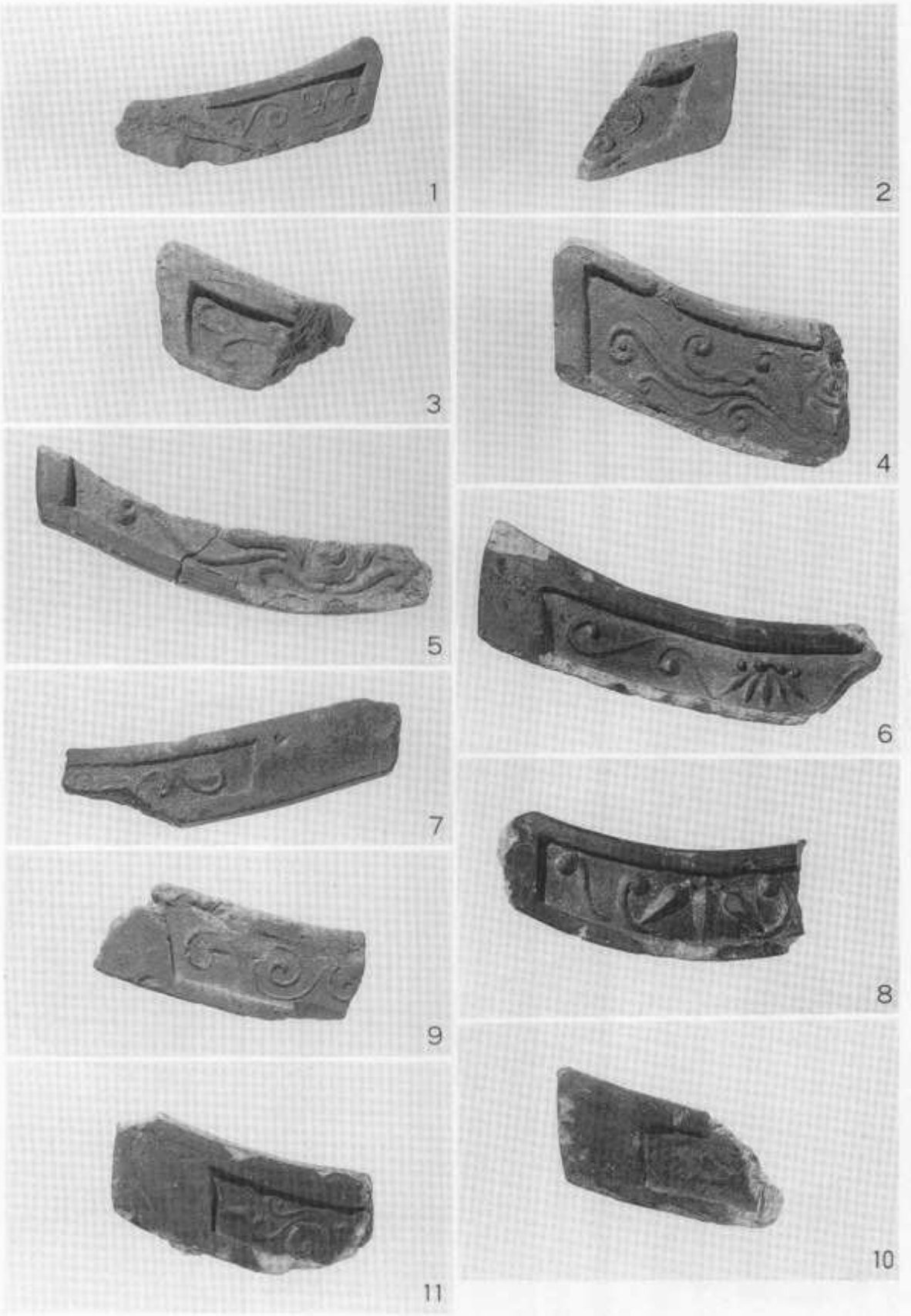
第130次調査　出土軒平瓦(2)



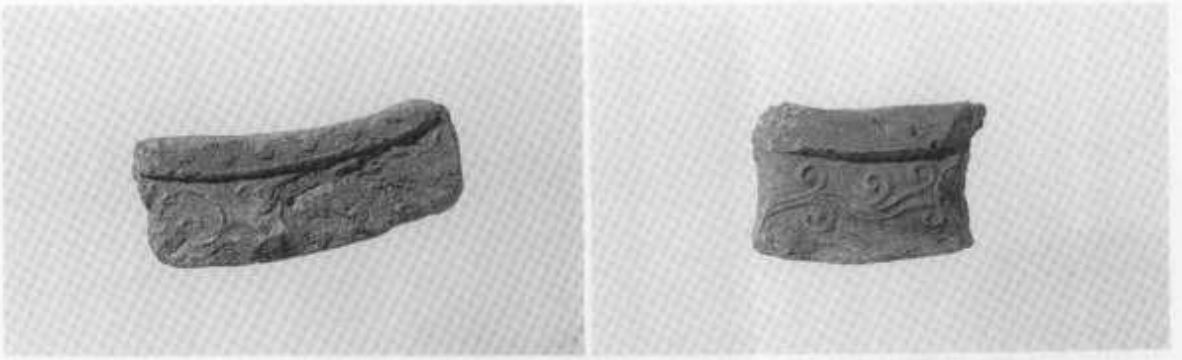
第130次調査　出土軒平瓦(3)



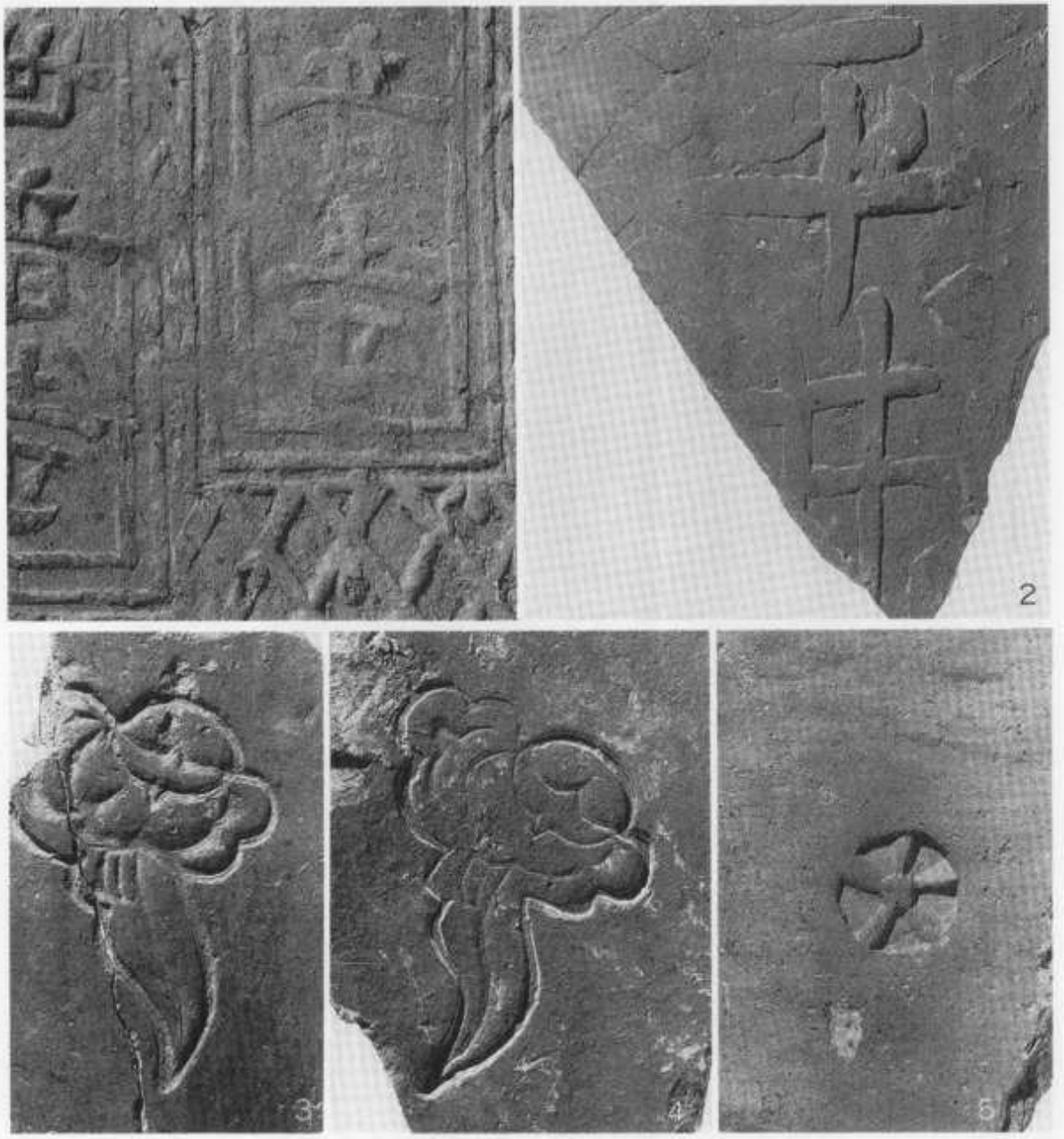
第130次調査　出土軒平瓦(4)



第130次調査　出土軒平瓦(5)



第130次調査　南門跡西半部出土軒瓦

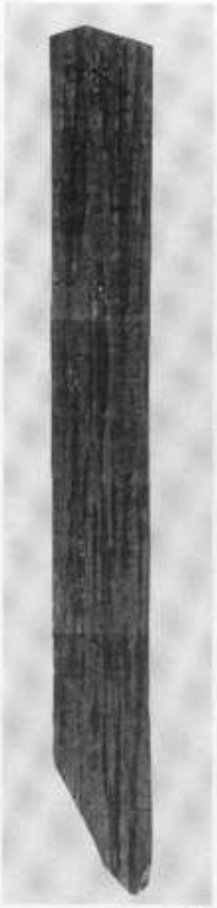


第130次調査　出土文字瓦・刻印(1)

第130次調査　出土文字瓦・刻印(2)

第130次調査　南門跡西半部出土文字瓦・回廊跡出土文字瓦

第130次調査　出土鬼瓦・塼など

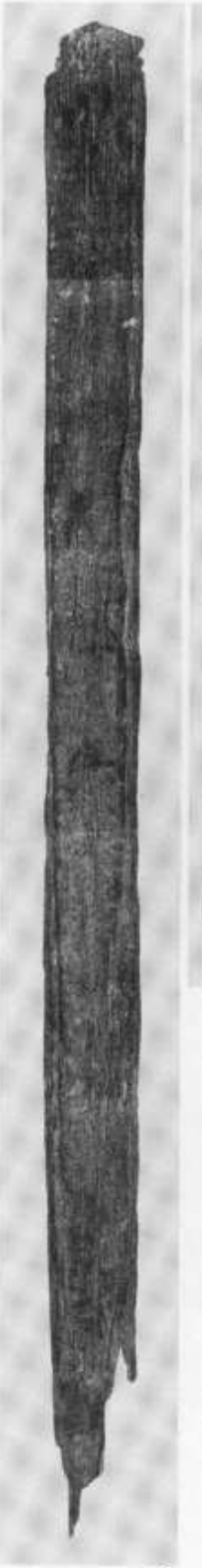


1

赤外写真

2

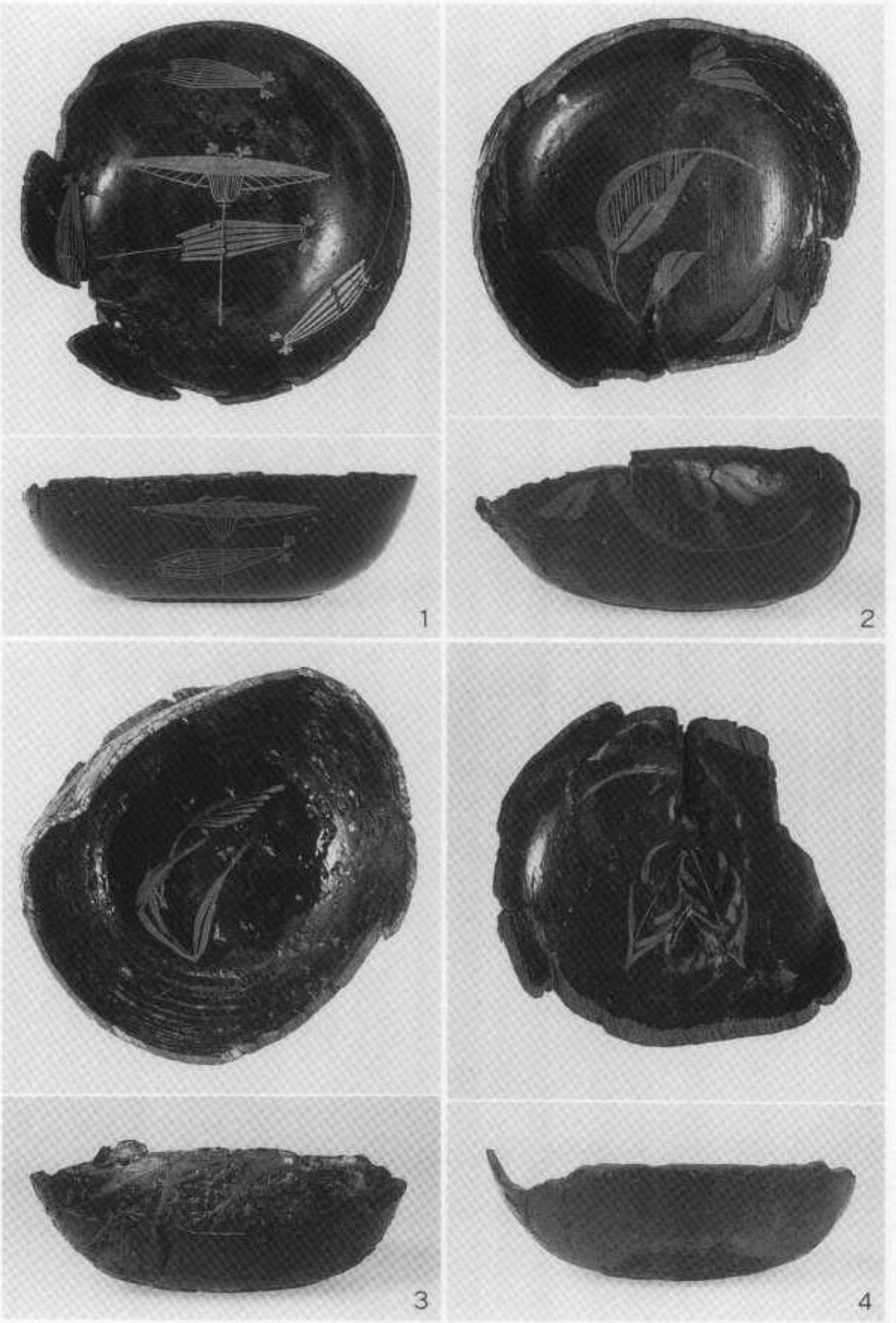
赤外写真



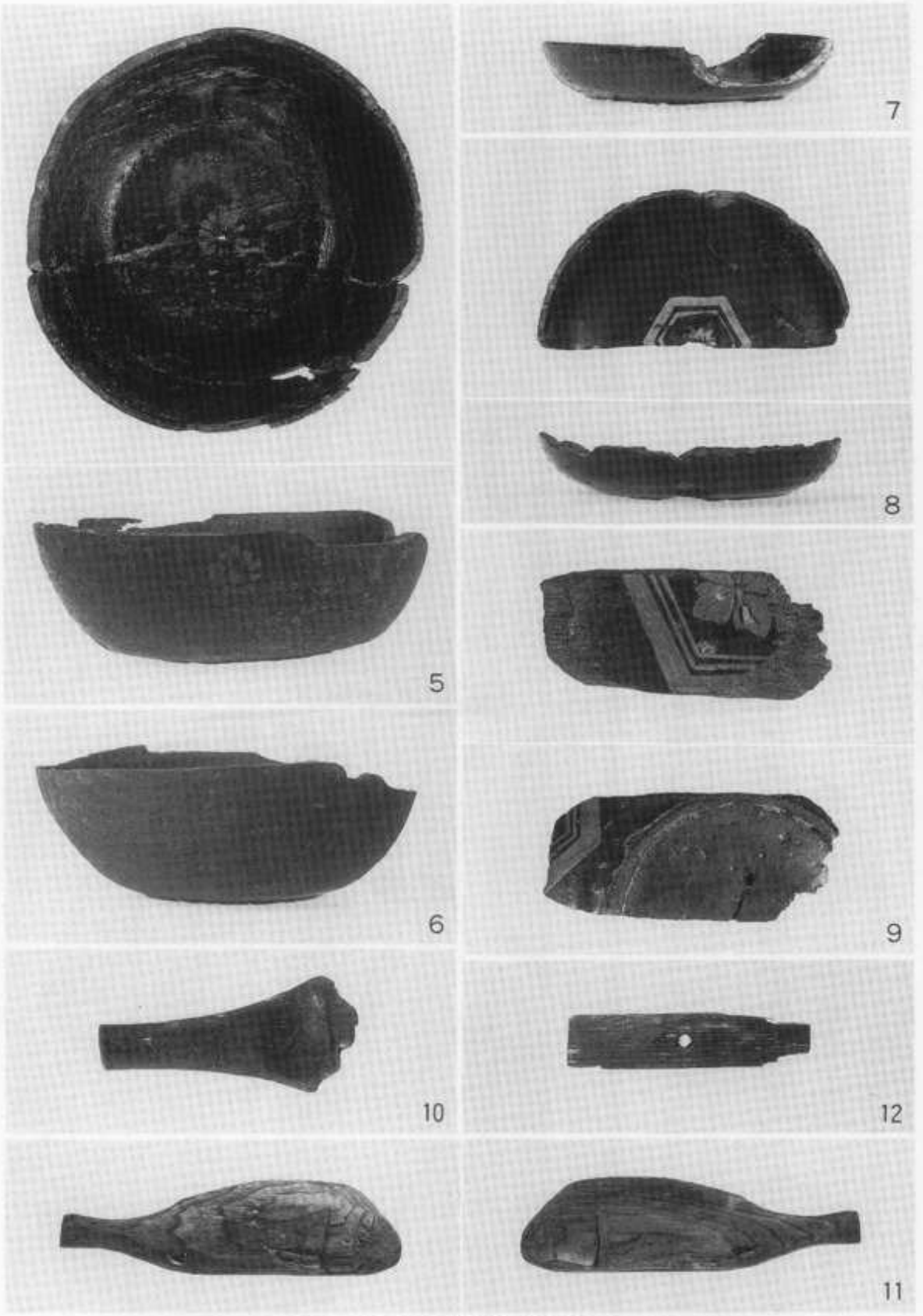
3

赤外写真

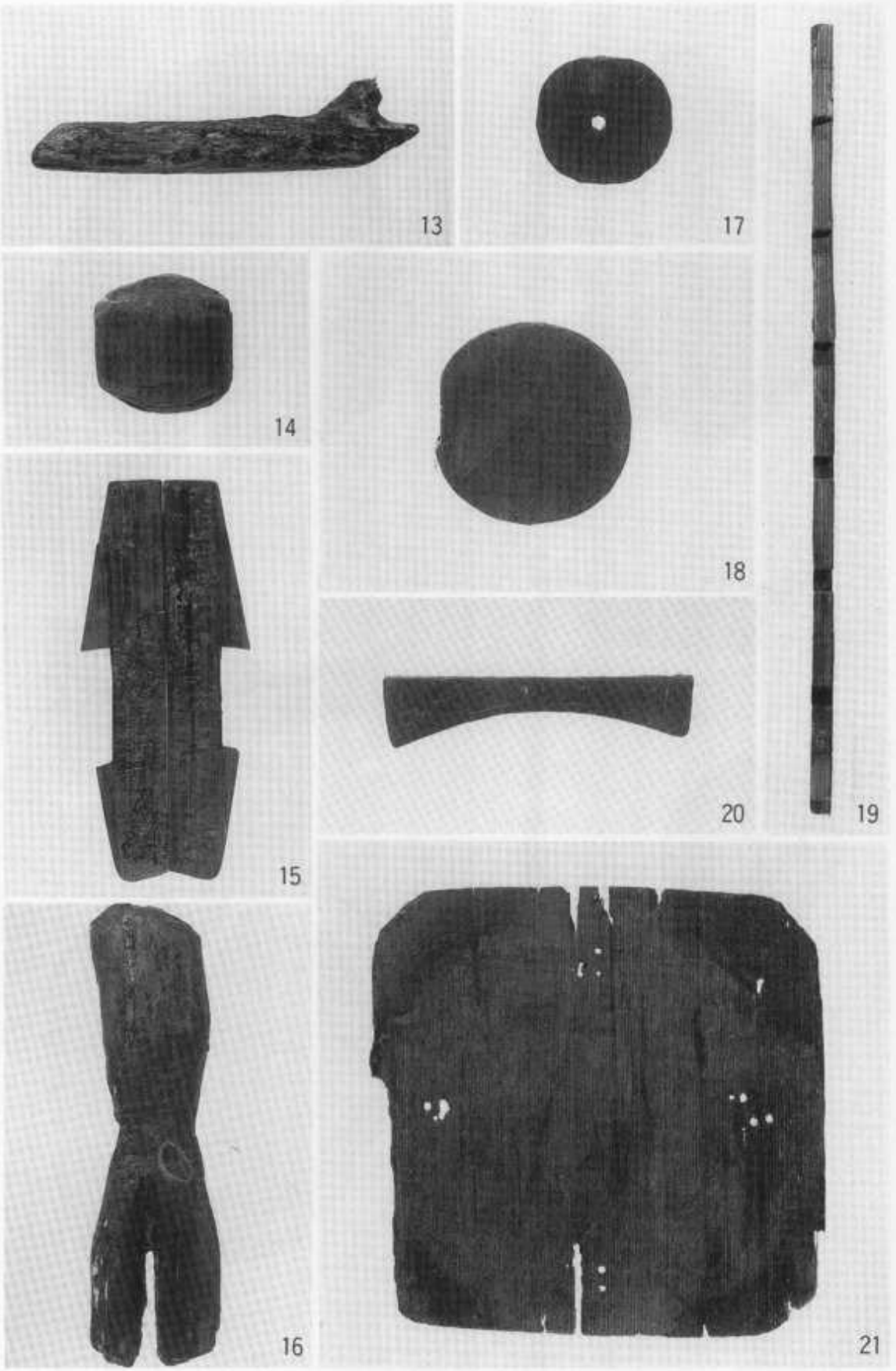
第130次調査　SD3840出土墨書木札



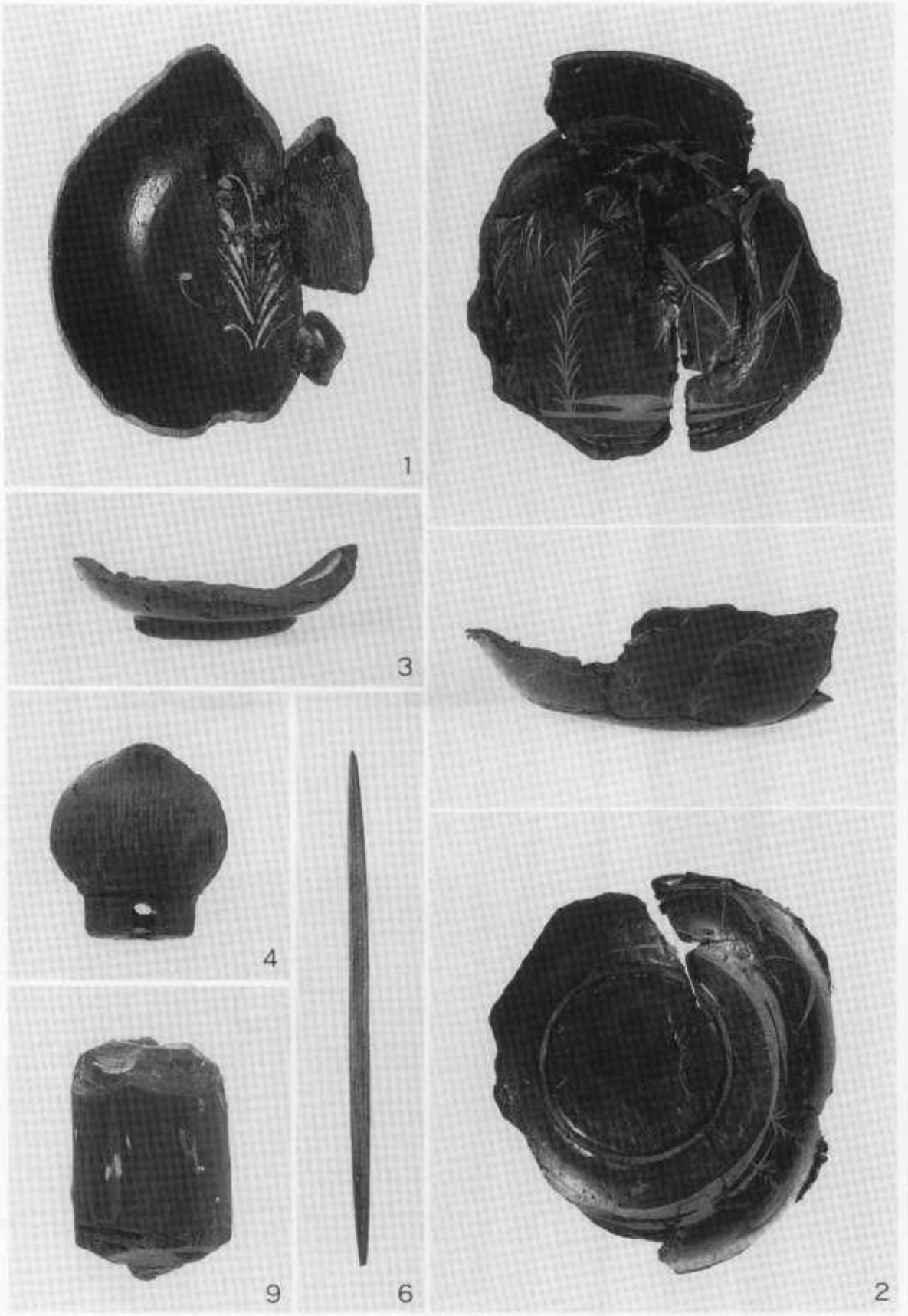
第130次調査　SD3840（墨書木札共伴層）出土木製品(1)



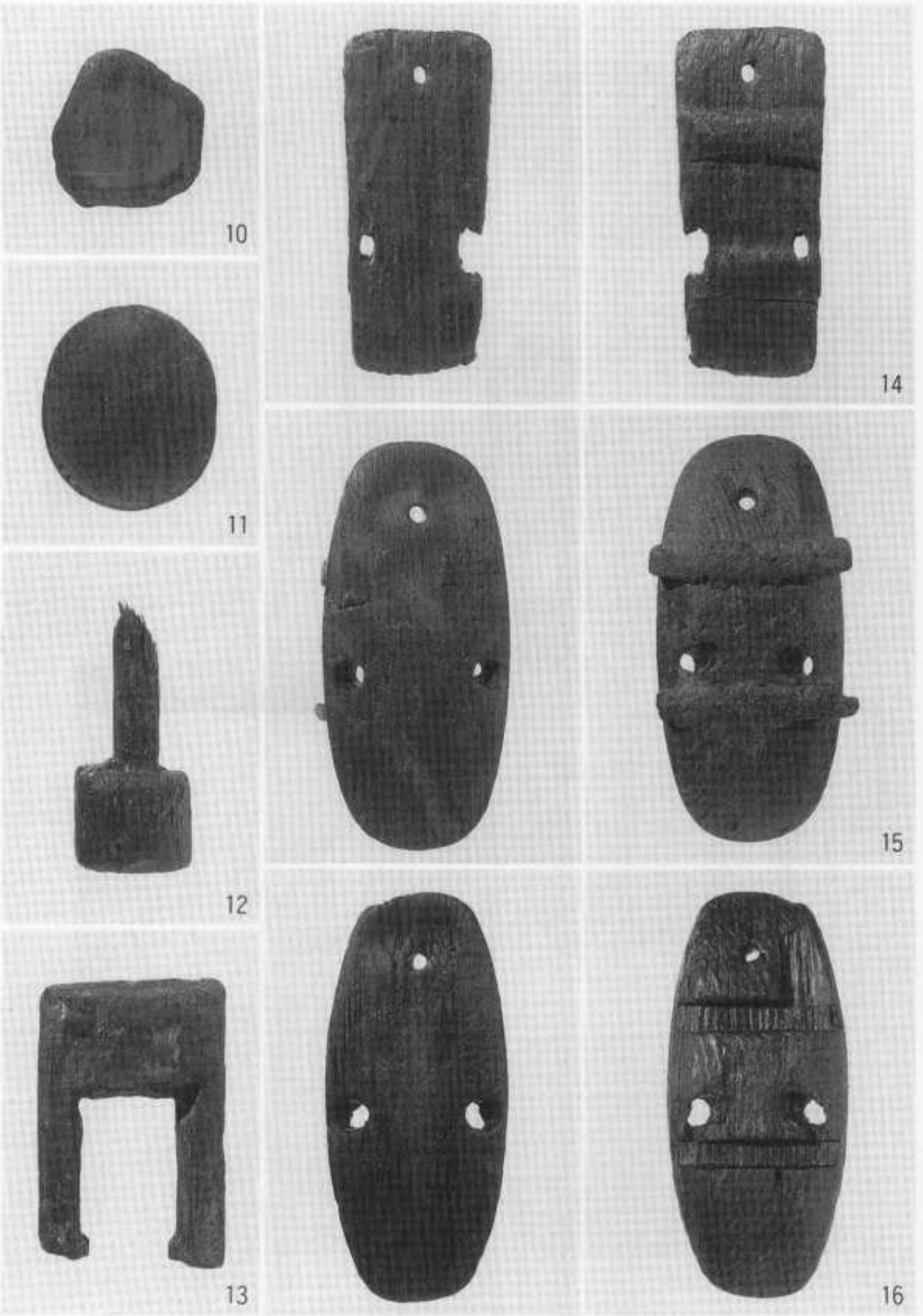
第130次調査　SD3840（墨書木札共伴層）出土木製品(2)



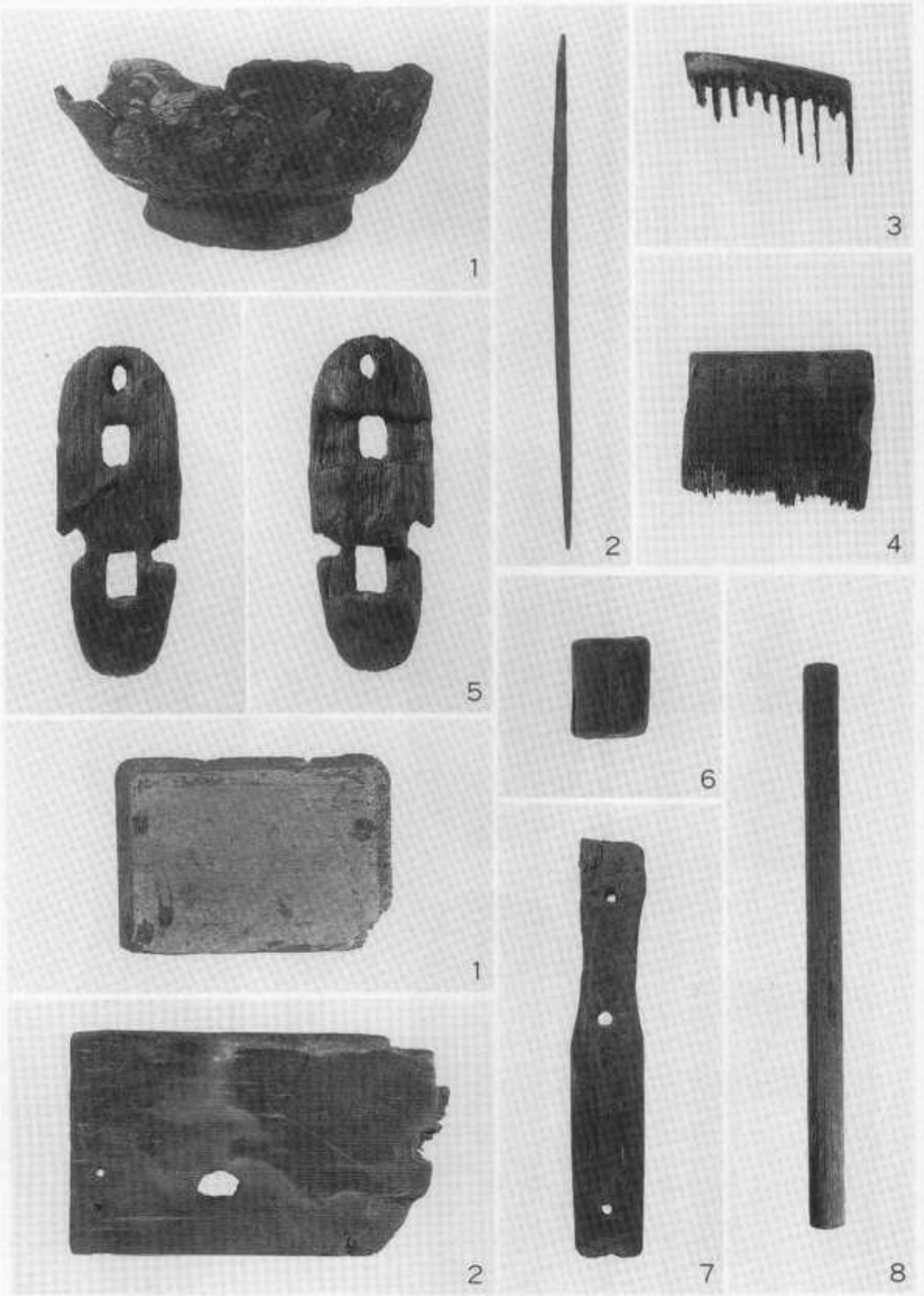
第130次調査　SD3840（墨書木札共伴層）出土木製品(3)



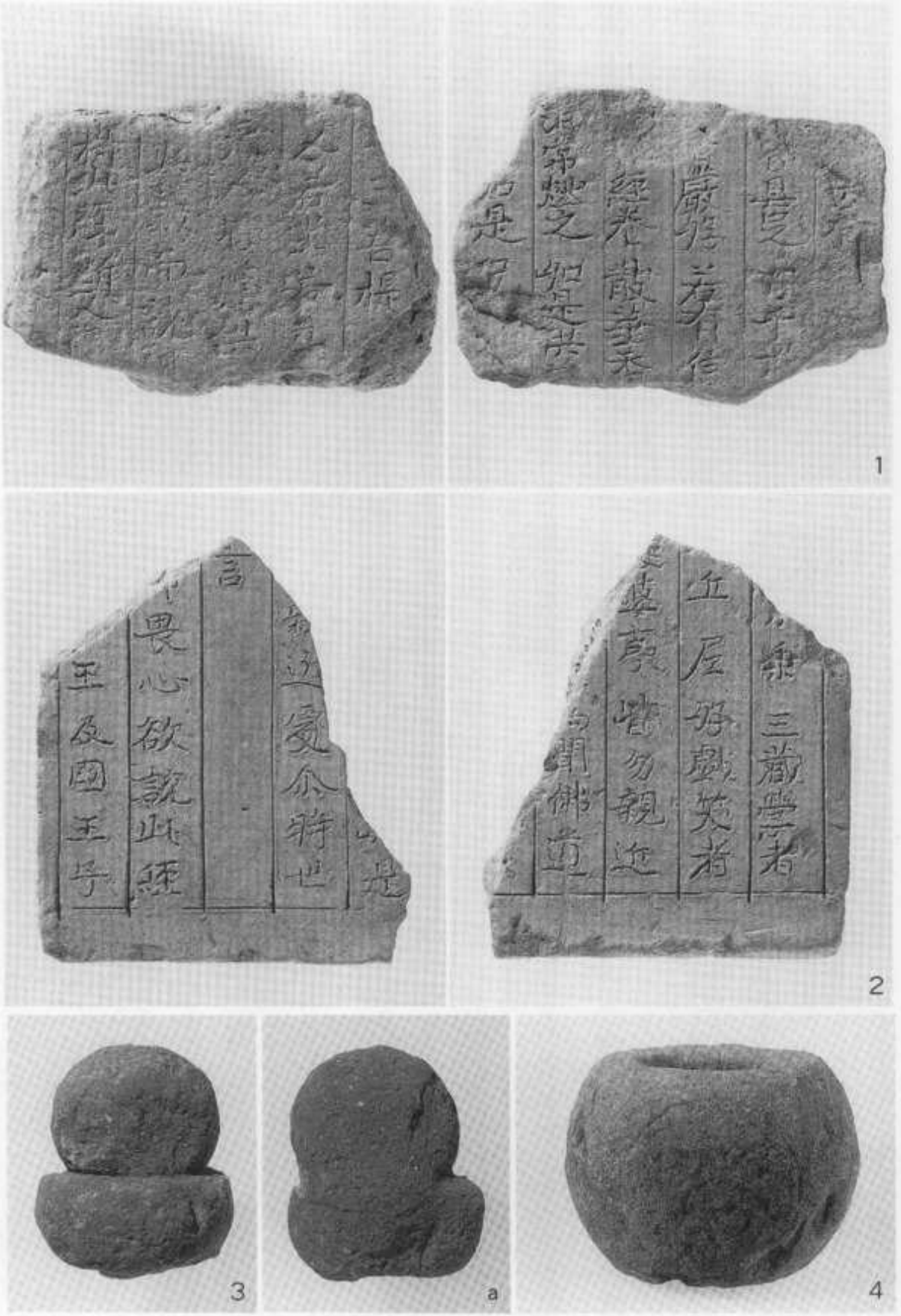
第130次調査　SD3840下層出土木製品(4)



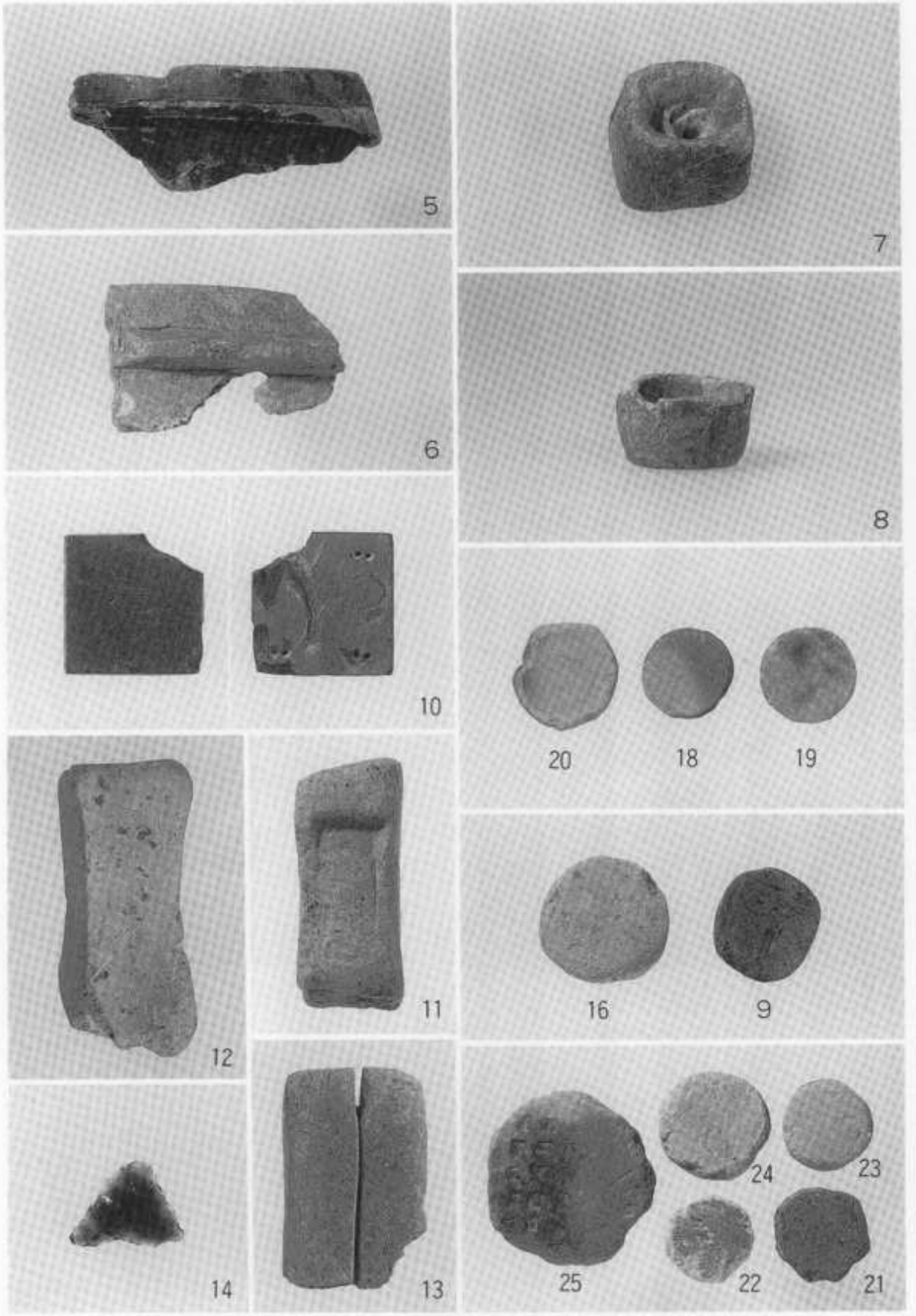
第130次調査　SD3840下層出土木製品(5)



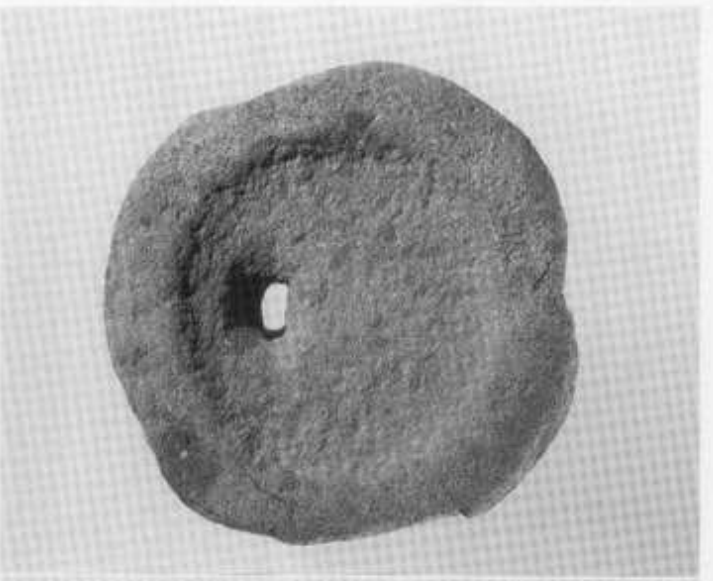
第130次調査　SD3840上層・SD3855・SK3863出土木製品(6)

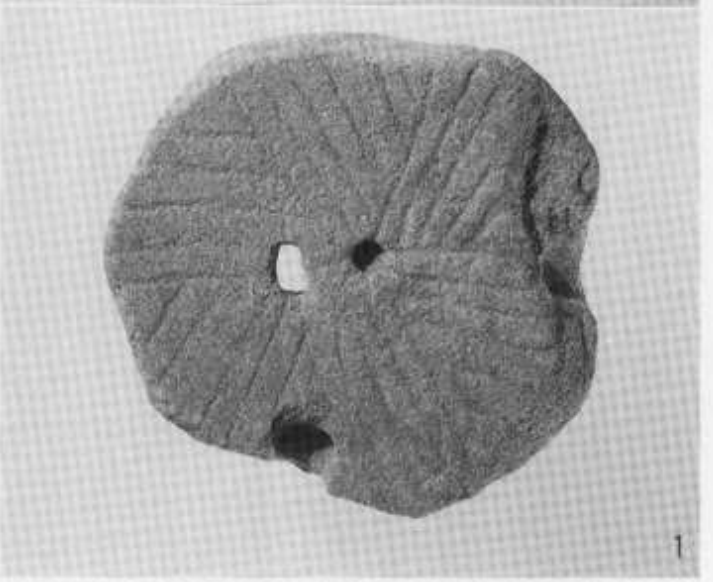


第130次調査　SD3860出土瓦経・五輪塔

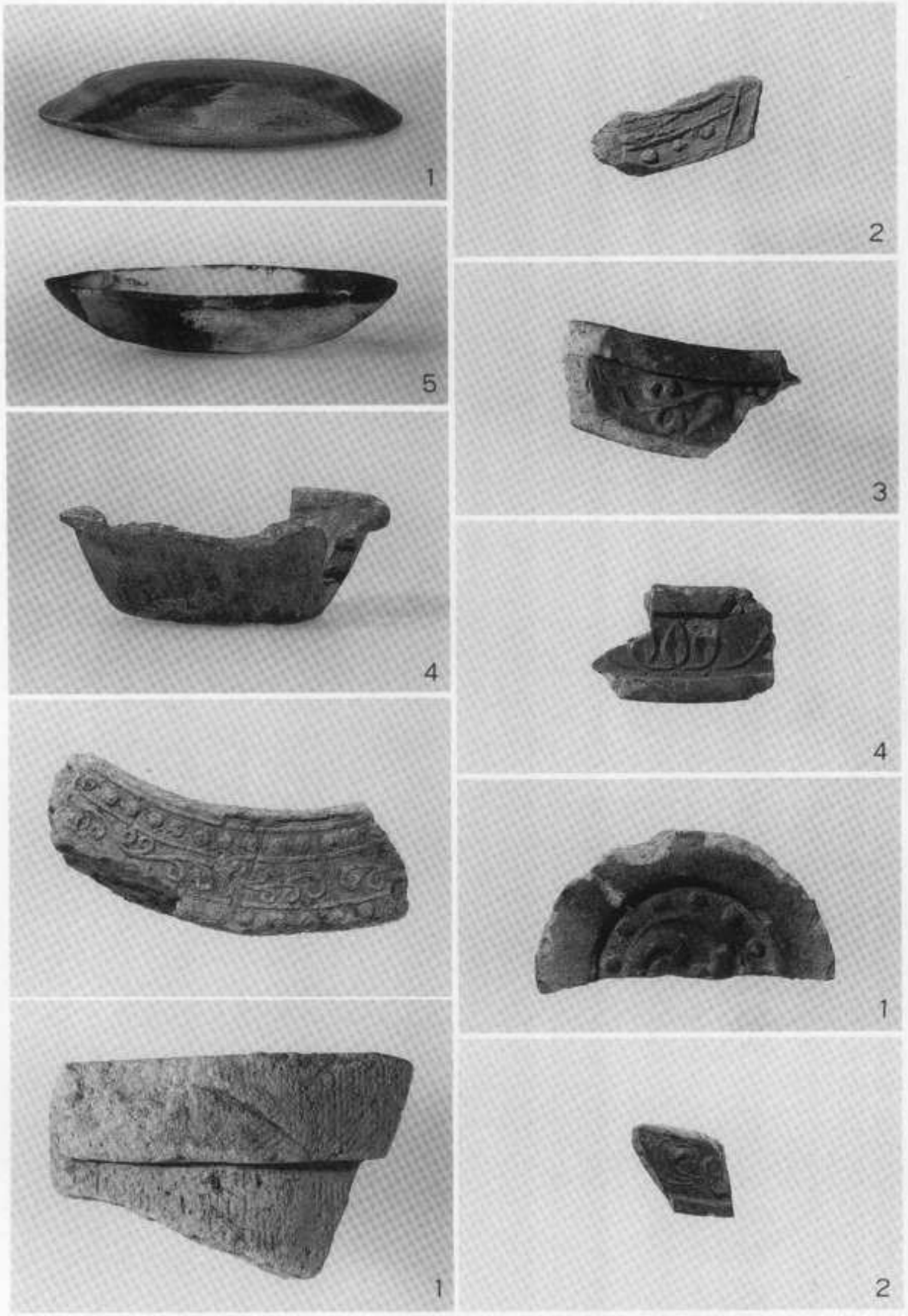


第130次調査　出土石製品・土製品(1)

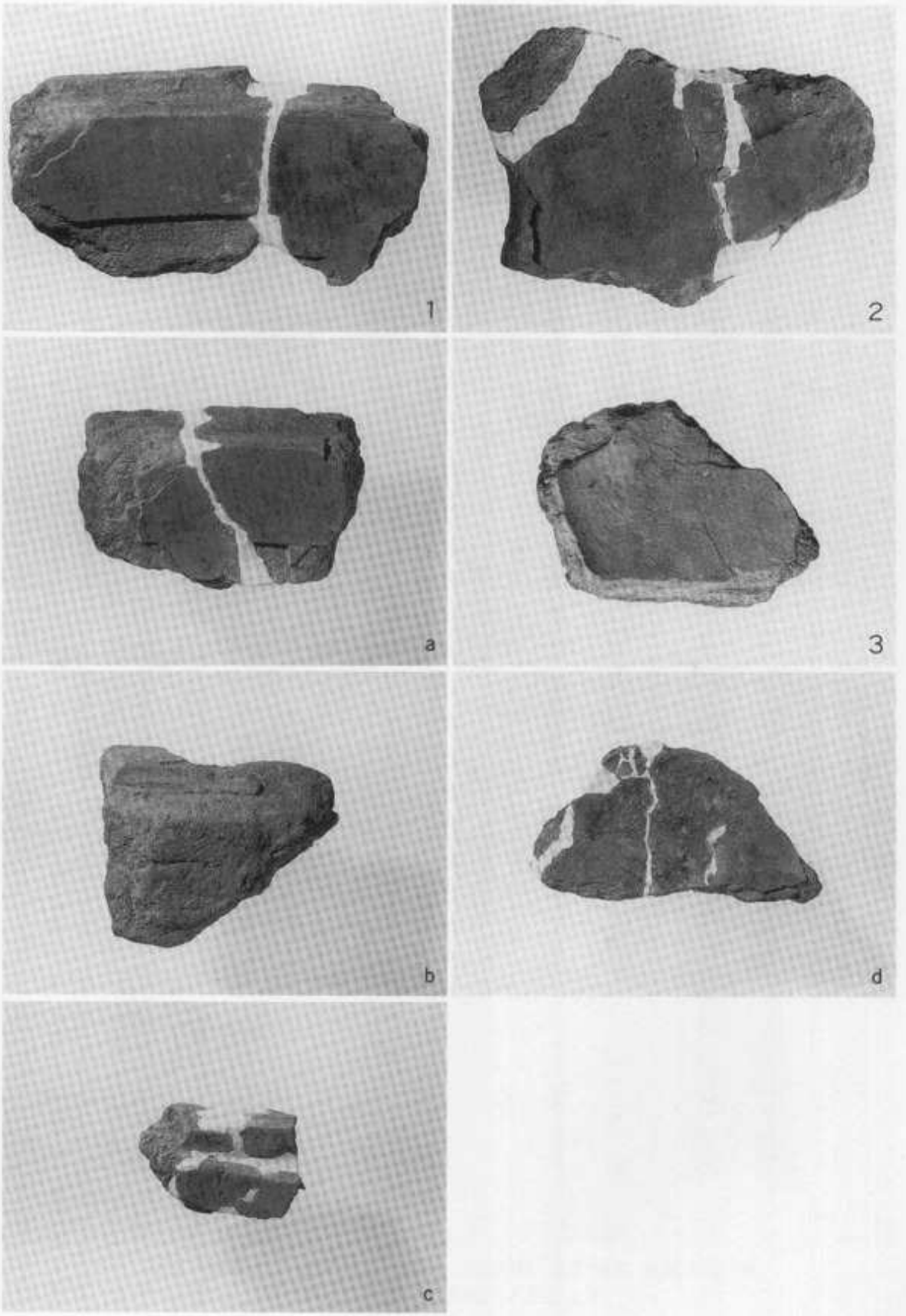




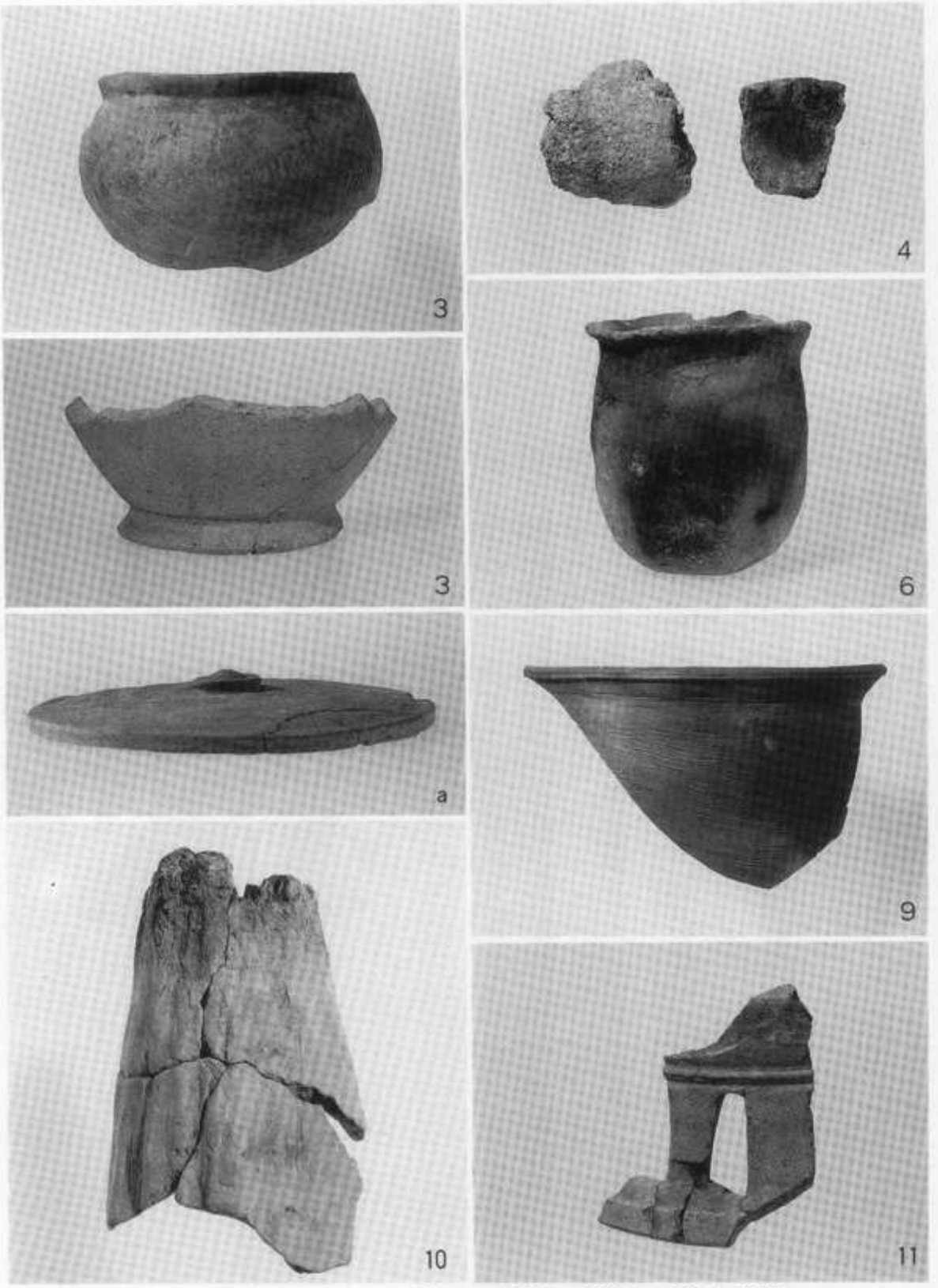
第130次調査　出土石製品・土製品(2)



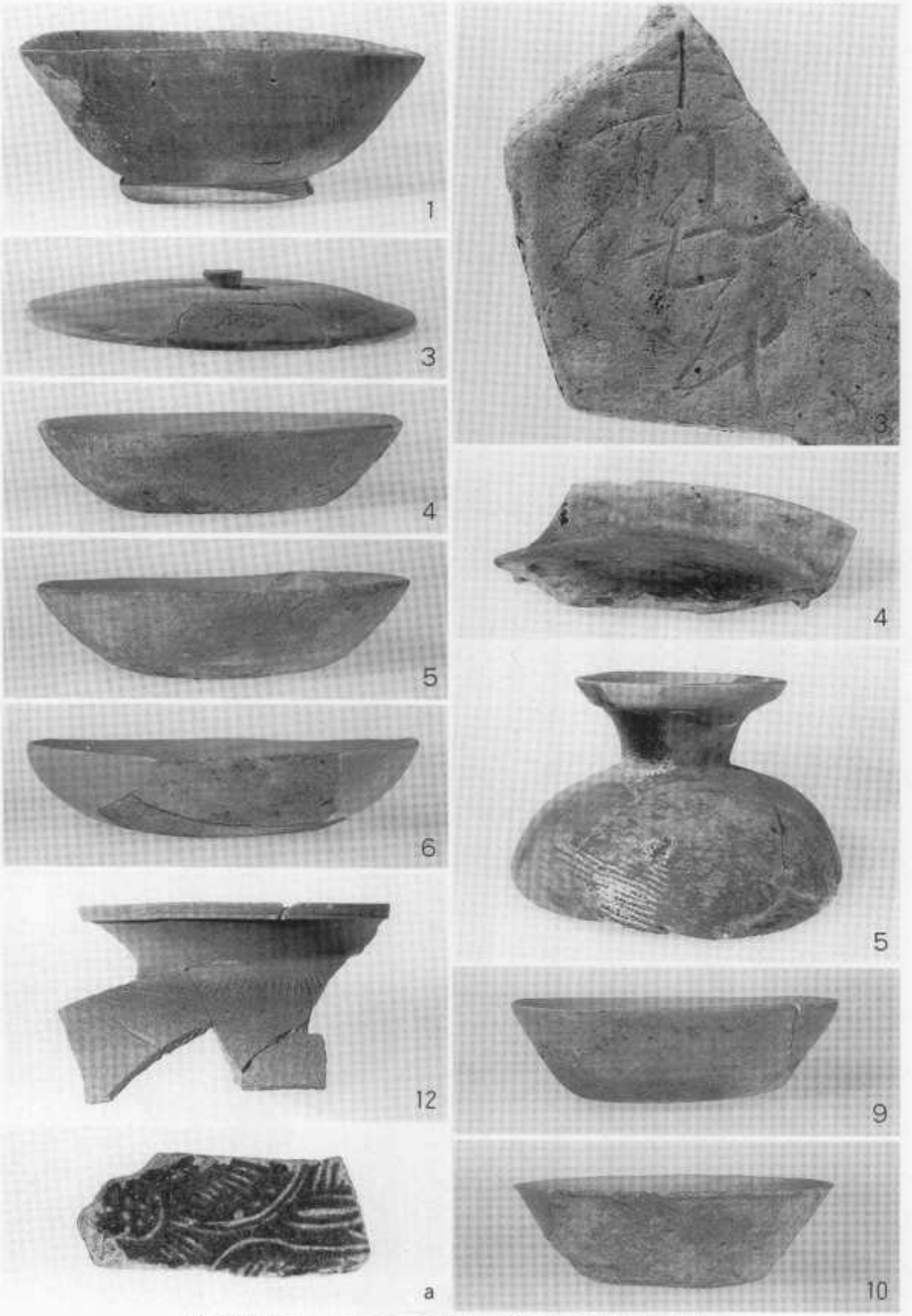
第130次調査　SA3880、SB3850、SC3890出土土器・石鍋・軒瓦



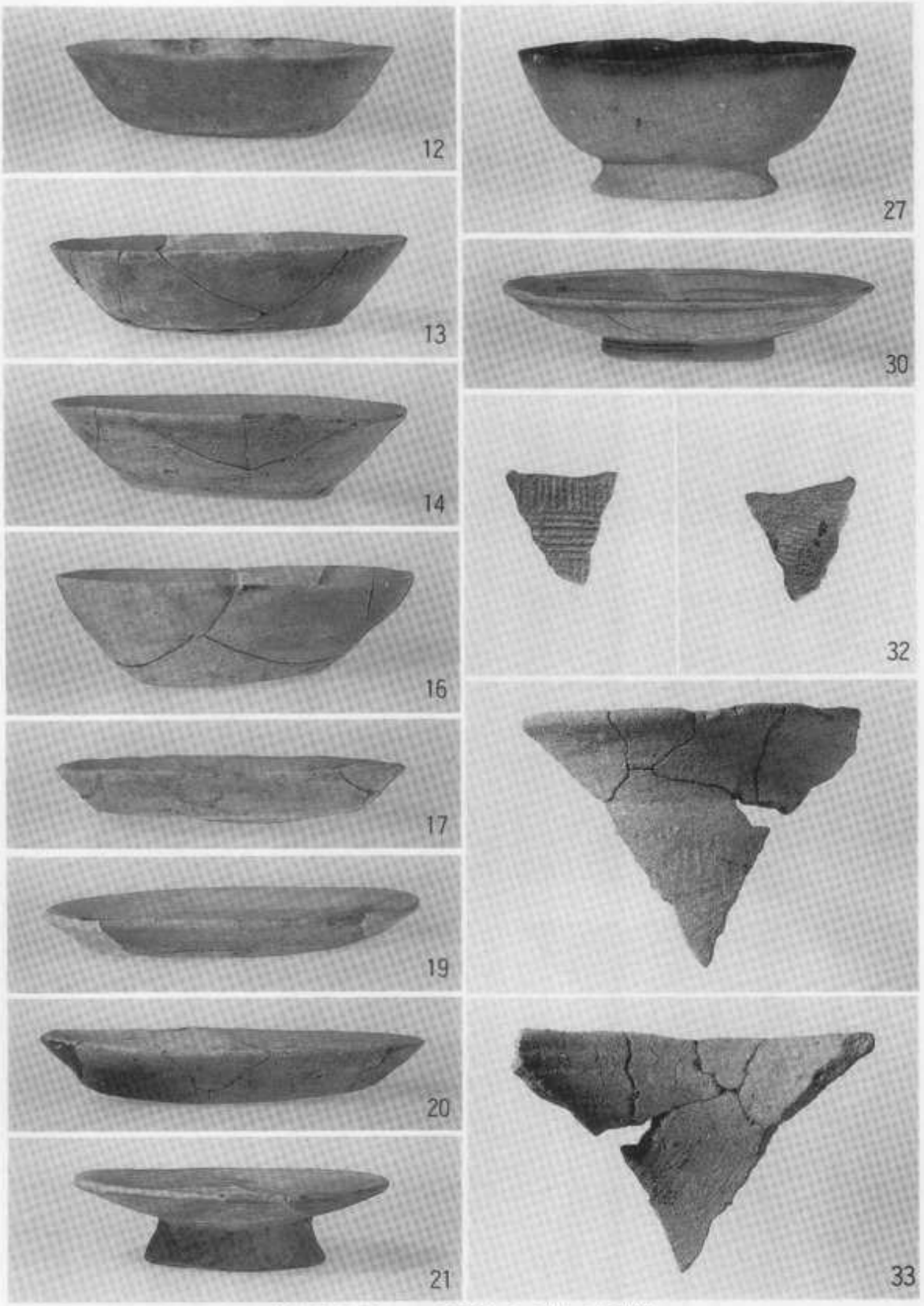
第130次調査　出土鋳型



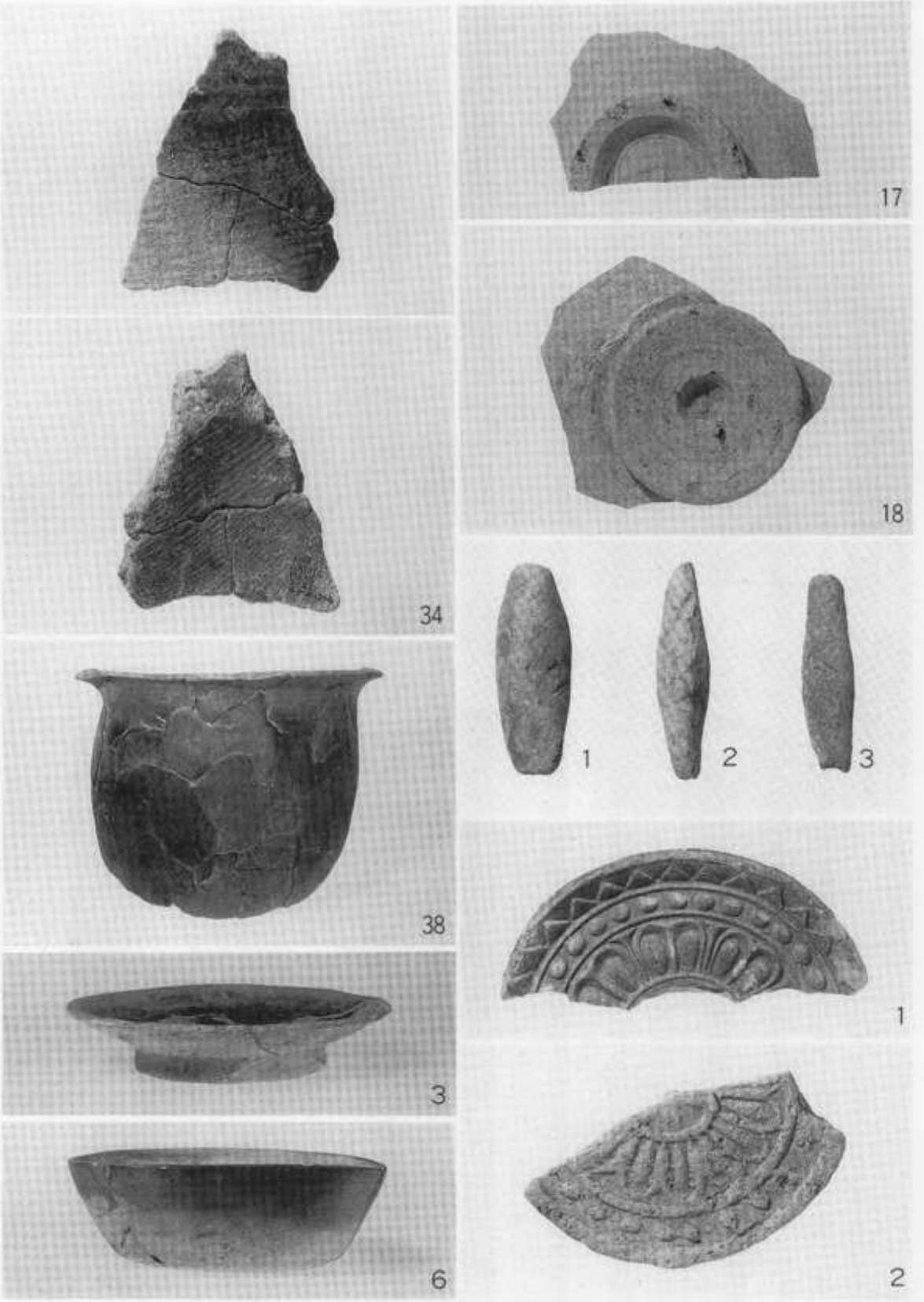
第137次調査　SB3940、SD3939、SE3955、SK3942、SX3944・3957
出土土器・土製品



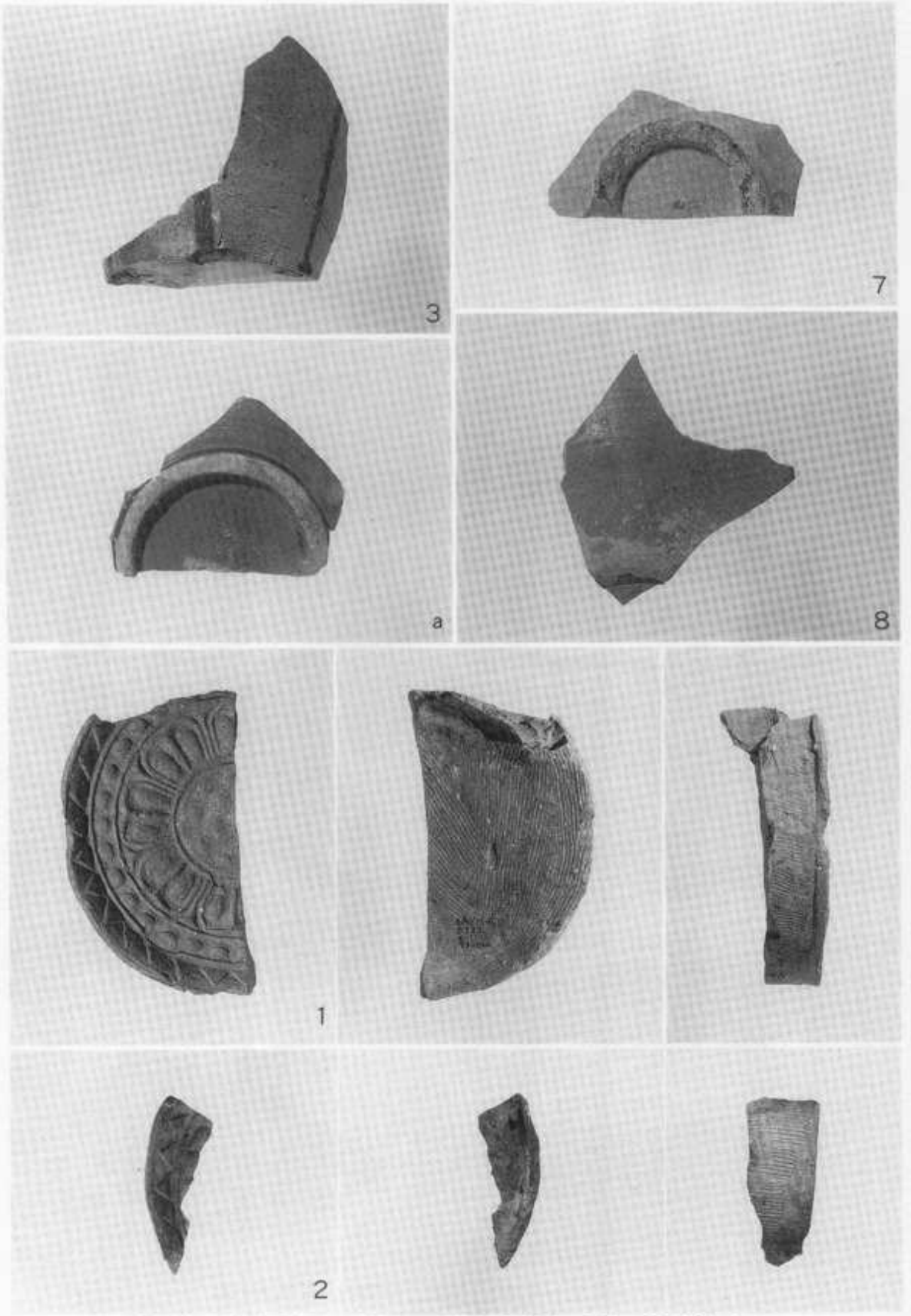
第138次調査　SD3962、SE3960・3970出土土器・陶磁器



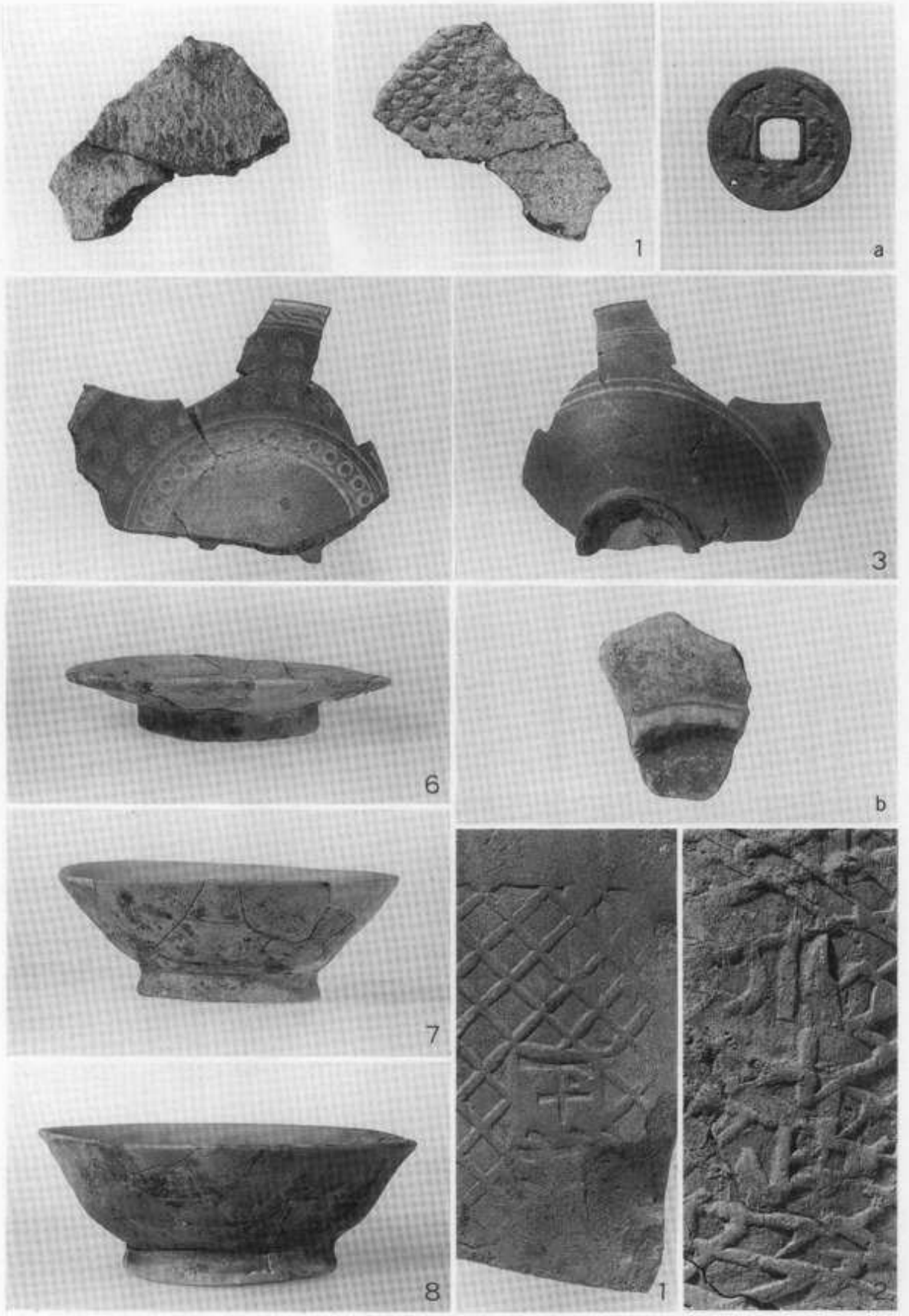
第138次調査　SE3970出土土器・陶磁器



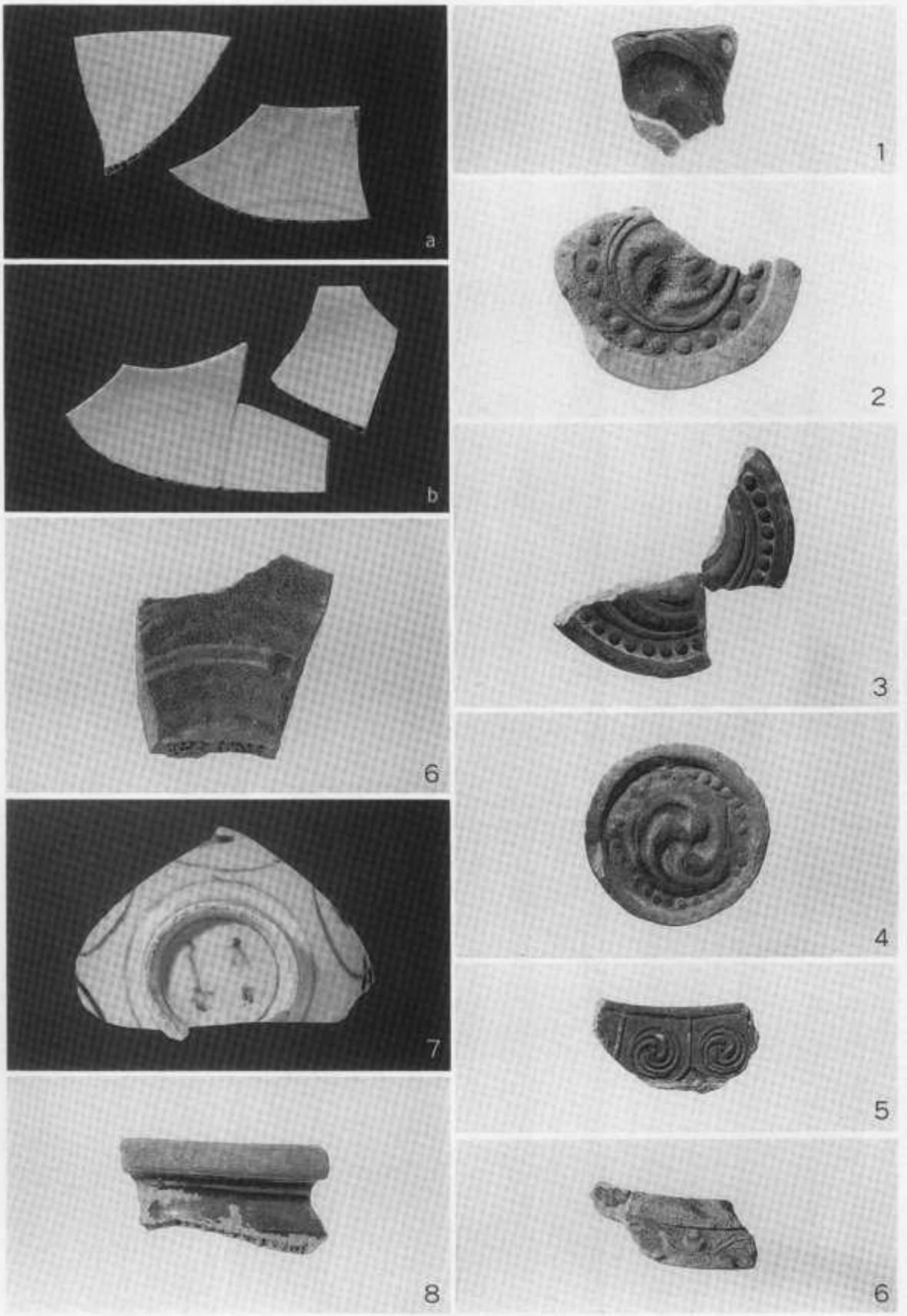
第138次調査　SE3965・3970、SX3969、茶褐色土層
出土土器・陶磁器・土製品・軒瓦



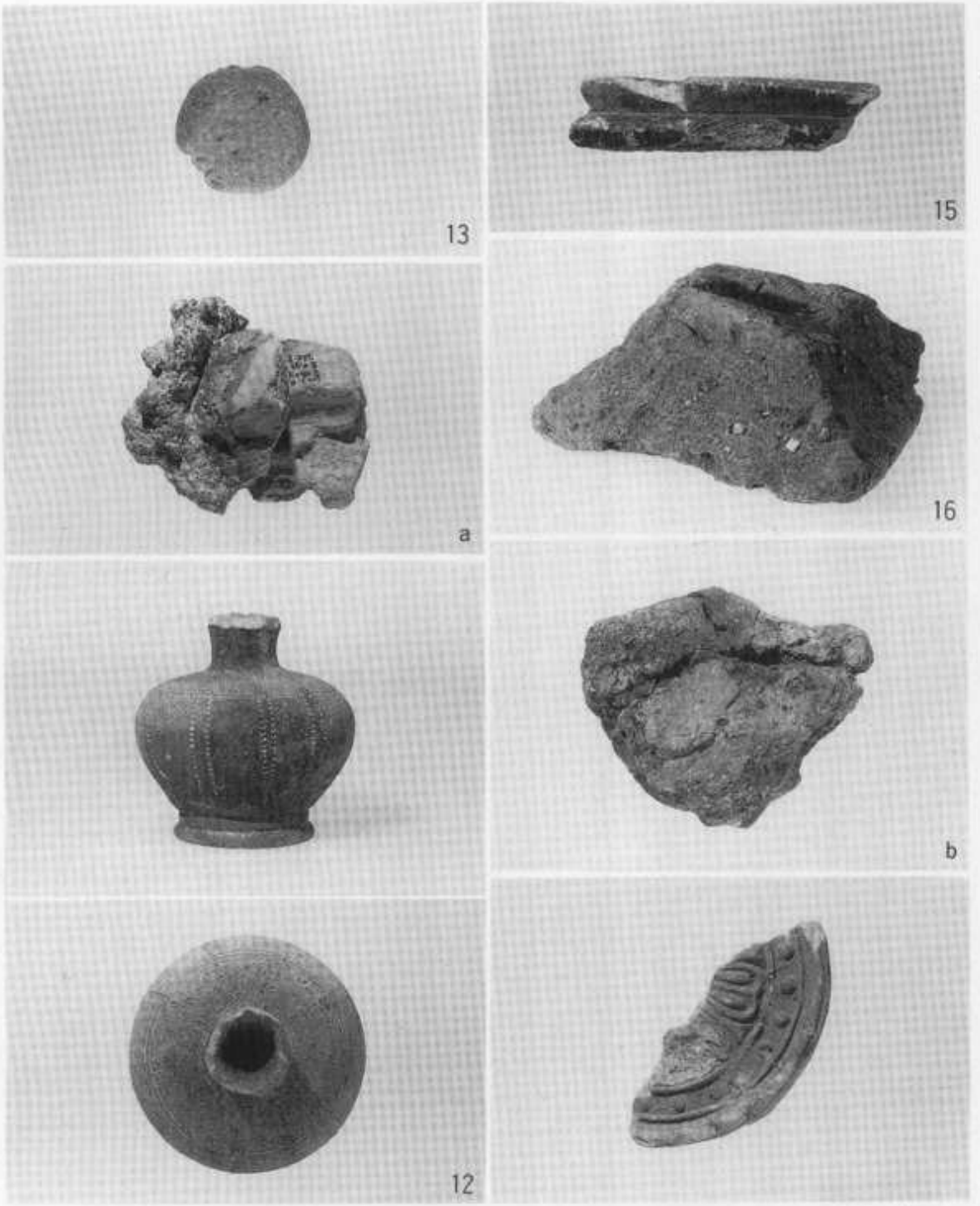
第139・140次調査　SD3987・SK3976、黒褐色土層出土陶磁器・軒瓦



第141・142次調査　出土土器・陶磁器・平瓦・銅銭



第144次調査　赤褐色土下層、赤褐色土層、茶褐色土層出土陶磁器・軒瓦



第144・146次調査　SK4010、赤褐色土下層、黒褐色土層出土土器・土製品・石製品・軒瓦

「大宰府史跡 ―平成４年度発掘調査概報―」

正　誤　表

頁	行	誤	正
目　次	最終行	出土遺物……145	出土遺物……147
挿図目次	第64図	……83	……85
1	7	史跡推定地内	史跡指定地内
〃	表１	基本底部	基底部
2	30	溝ＳＤ2480	溝ＳＤ2840
9	8	「元亨三年」（1332年）	「元亨三年」（1323年）
19	2	心礎	心礎（第14図、図版20）
25	31	「行□」	「行□」
28	11	６はいわゆる～明瞭でない。	９行目の最後に挿入
50	8	復原的に図示	復原的に図示（濃い部分が今回出土）
79	26	黒灰色土層出土	灰青色粘質砂土層出土
84	15	鼻花	鼻孔
87	21	後面築地	北面築地
88	10	Ⅳ期の溝　Ⅲ期の溝を	Ⅳ期の溝　溝ＳＤ3885はⅢ期の溝を
〃	21	17世紀中頃	18世紀後半
133	6	8.5尺・８尺	6.5尺・６尺
133	22	これより新しいこと	これより古いこと
図版70	2		赤外写真　天地逆

大　宰　府　史　跡
平成4年度発掘調査概報
平成5年3月
発行　九州歴史資料館
太宰府市石坂4丁目7番1号
印刷　赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8－34